

よげん なか 預言の中の

ヨーロッパとアメリカ

世界で最も偉大な国家が聖書の預言の中で無視されているのでしょうか？もしそうなら、それは正当な預言と言えるのでしょうか？もしアメリカ合衆国のことが何処にも述べられていないとすれば、その預言はどのような靈感を受けて書かれたのでしょうか？

聖書の中の預言が私たちの時代、今の時代に密接に関係しているならば、合衆国のことにも言及が必ずあるはずです！国際的にそれほど重要な役割をはたしていない多数の国家が預言には登場します。例えば、エチオピア、リビア、シリア、エジプト、などのです。預言の研究者たちは、多数の中東諸国が登場することを知っています。中には、現代の同じ名前の国家もあります。では、英国、カナダ、オーストラリア、英国連邦諸国のことは、どうなっているのでしょうか？さらに言えば、ヨーロッパ諸国のことは、どうなっているのでしょうか？

ガーナー・テッド・アームストロング著 (by Garner Ted Armstrong)

合衆国が偉大な力を有する大国に成長したという驚異的な事実は、人類史上に先例がありません！世界史の流れは、合衆国の台頭によってすっかり変わりました。

現在の合衆国は重要な超大国です。アメリカの宇宙飛行士たちは、月面を歩き月面車を運転しました。アメリカ人は、2つの世界大戦において、英国やフランスをはじめとする各国の同胞たちに決定的な支援を提供し、戦勝国になりました。そして、そのことが直接、合衆国が超大国の地位を得ることに結びつきました。

過去100年間の世界の歴史について考えてください！アメリカはどれくらい大きな影響を与えてきたのでしょうか？英国の貢献はどれくらい重要だったのでしょうか？

聖書における預言が合衆国や英国のことに言及していないとすれば、その預言が正確で、現代的で、私たちの時代である現在の出来事を描写していると信じるのは、不合理なことで

す！しかし、このような考えは正しくありません。聖書自体の信頼性そのものに意義を唱えるという甚だしい誤りです！

合衆国のことは、確かに、聖書の預言の中で述べられています — まさかと思われるでしょうが、他のどの国よりも多く預言に登場しているのです！

聖書の預言は、過ぎ去った時代の文学作品に過ぎないのでしょうか — 暖炉の傍で聞く過去の預言者や賢人の物語、あるいは怒れる預言者のすさまじい告知に過ぎないのでしょうか？ 聖書の預言は、現代に通用しない忘れ去られた民族の大昔の文学作品の断片集 — 過去の出来事、系図、神話 — に過ぎないのでしょうか？

それとも聖書の丸々三分の一を占める預言は、合衆国にも現実的な意味を持つのでしょうか — この現代の原子力時代における私たちの子供や孫たちにも、現実的な意味を持つのでしょうか？

一人の男の系図

いろんな意味で聖書は、「一人の男の系図」の物語と考えることも出来るでしょう。短い僅か数章の中に、世界の全歴史の六分の一に相当する時間が扱われています。つまり、天地創造からノアの洪水までの時間のことですが、これは約千年間に相当します。

その後、ノアの子孫たちが地上を覆うようになったという話、民族の融合の試みとバベルの塔の話、そして民族の分散と言語の混乱の話が続きます。これらすべてのことが、僅か数章の中で語られています。そして、聖書の最初の書である創世記の12章に進むまでに、主の召命により偉大な使命を授かった「アブラム」(アブラハムの旧名)という名前の男性が登場します。この非常に重要な12章を、注意してお読み下さい。

「主はアブラムに言われた。『あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、私が導く地に行きなさい。

『そうすれば、わたしは、あなたを偉大な国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を偉大なものにしよう。あなたは恩寵を受けることになる。あなたを祝福する人を私は祝福し、あなた

を呪う人を私は呪う。地上の民族はすべて、あなたによって祝福を受ける』（創世記 12:1-3）。

何と素晴らしい約束でしょうか！

これは、全能の神の証人を受けるという約束です。それは、アブラムが偉大な名を授かることを意味しています。無数の人々が、富を得るだけでなく、自己の存在を認められ、「名声」を得るために努力しているのではないのでしょうか？無数の人々が、「有名」になることを願っているのではないのでしょうか。ここでは、偉大な富と名声がアブラムに約束されています。それは、アブラムに感謝して祝福する人々自身が大きな祝福を受けるほどに偉大なものでした！

この後に続くのは、神に対する一人の男の恭順についての模範例です。アブラムは、意義を唱えることなく、言われた通りに行動します。彼は、神に従ったのです！

アブラムは後に（創世記17章から）アブラハムと呼ばれるようになるのですが、彼は、聖書全体を通して「信徒の父」と呼ばれています。彼は、神に対する恭順の模範です。彼は、それほど深く神を信じていたのです！神が語られる時、人は疑問や議論をさし挟むことなく直ちに従うということを、アブラハムは理解するようになっていたのです！偉大なこの人物が神の愛を受けるのは、この気質に拠るのです。これは、現代の人類に殆どまったく見られない気質です！

「主は、ロトがアブラムと別れた後、アブラムに言われた。『さあ、目を上げて、あなたがいる場所から北、南、東、そして西の方角を見渡しなさい。わたしは、見渡す限りこの土地をすべて、永久にあなたとあなたの子孫に与える。』

『わたしは、あなたの子孫[後に続くあなたの子孫]を大地の砂粒[無数を意味]のようにする。大地の砂粒が数え切れないように、あなたの子孫も数え切れないだろう』（創世記13: 14－16）

神は、アブラムの子孫が中東で苦闘するただの小国になるという約束されたものではありません！これは、この現代の「イスラエル」－敵対するアラブ諸国に囲まれて生存をかけた闘争をする国家－のことを述べているものではありません。

「大地の砂粒」のように多数の人々が四方八方に広がる広大な土地で暮らす大国家を、現代の

イスラエル^{こっか}国家のユダヤ人^{じん}が形成^{けいせい}している訳^{わけ}ではないでしょう。

神^{かみ}は後^{のち}に、アブラムに対するこの素晴^{すば}らしい約束^{やくそく}をさらに発展^{はってん}しておられます！神^{かみ}は、アブラハムの孫^{まご}ヤコブ（後^{のち}に「イスラエル」と改名^{かいてい}）に次^{つぎ}のように約束^{やくそく}されました：「あなたの子孫^{しそん}は大地^{だいち}の砂粒^{すなつぶ}のように多^{おほ}くなり、あなたは西^{にし}へ、東^{ひがし}へ、北^{きた}へ、南^{みなみ}へと遠^{とお}く広^{ひろ}がって行く。そして、地上^{ちじょう}のすべての民族^{みんぞく}は、あなたとあなたの子孫^{しそん}によって祝福^{しゅくふく}されることになる！」（創世記28:14）

この偉大^{いだい}な約束^{やくそく}は明^{あき}らかに、アブラハムの子孫^{しそん}が古代^{こだい}パレスチナの地^ちから「大^{おお}きく広^{ひろ}がって行く」こと、つまり、彼ら^{かれ}が最終^{さいしゅう}的にパレスチナから北^{きた}へ、東^{ひがし}へ、南^{みなみ}へ、西^{にし}へと遠^{とお}く広^{ひろ}がる土地^{とち}に存在^{そんざい}するようになるということを意味^{いみ}しています！彼ら^{かれ}の数^{かず}は、「大地^{だいち}の砂粒^{すなつぶ}」のように無^む数^{すう}になるのです！

この約束^{やくそく}は、古代^{こだい}パレスチナの狭^{せま}い国境^{こっきょう}を超越^{ちょうえつ}しています！この約束^{やくそく}は、地球^{ちきゅう}全体^{ぜんたい}のことを述^のべているのです！

無^む数^{すう}の子孫^{しそん}がアブラハムとその子孫^{しそん}たちに繰^くり返^{かえ}し約束^{やくそく}されていることを、皆様^{みなさま}は心^{こころ}に銘記^{めいき}して決^{けつ}して忘^{わす}れないで下^{くだ}さい！アブラハムの子孫^{しそん}によって世界^{せかい}が祝福^{しゅくふく}を受けるとい^うう約束^{やくそく}はキリストのことだけを意味^{いみ}しているのだと主張^{しゅちよう}して人^{ひと}を欺^{あざむ}き混乱^{こんらん}させようとする人々^{ひとびと}がいます！これから見るように、キリストを意味^{いみ}する「その一人^{ひとり}の子孫^{しそん}」についての明確^{めいかく}な言及^{げんきやう}があります。そして、「地上^{ちじょう}の諸国民^{しよこくみん}は、あなたの子孫^{しそん}によって祝福^{しゅくふく}される」（創世記22:18；26:4／使徒行伝3:25を参照^{さんしやう}）という約束^{やくそく}には意味^{いみ}の二重^{にじゅうせい}性^{せい}があることも真実^{しんじつ}です。しかし、何度^{なんど}も何度^{なんど}も、神^{かみ}がアブラハムと彼の息子^{かれ}と孫^{まご}に対して、「大地^{だいち}の砂粒^{すなつぶ}」のような無^む数^{すう}の子孫^{しそん}を約束^{やくそく}されたことを — その子孫^{しそん}たちが地上^{ちじょう}の四方^{しほう}八方^{はつぱう}に広^{ひろ}がって行くことになる^いると約束^{やくそく}されたことを、心^{こころ}に銘記^{めいき}して決^{けつ}して忘^{わす}れないで下^{くだ}さい！

アブラハムは、神^{かみ}が命^{めい}じられたとおりに実行^{じっこう}したのです。その結果^{けっか}、神^{かみ}はアブラハムに何度^{なんど}も何度^{なんど}も約束^{やくそく}を再確認^{さいかくにん}されたのです。神^{かみ}は次^{つぎ}のように言われま^いした：「…天^{てん}を見上げて、星^みを数^あえることができるなら数^ばえてみなさい」。そして言われ^いた。「あなたの子孫^{しそん}はこのようになるのです」。「彼^{かれ}は主^{しゅ}を信^{しん}じた。主^{しゅ}は、それを彼の義^ぎと認^{みと}められた」（創世記15：5-6）。

この無数の子孫の約束は、神とアブラハムとの最後の「契約」の前 — 「アブラム」から「諸国民の父」を意味する「アブラハム」へと名前が変わる前 — の2章に述べられています。

J.H.アレンは、現代の英国と合衆国の身元に関する聖書の預言を立証する多数の文献の中でも最も著名な作品の一つとみなされている作品の執筆者です。その著名な作品である『ユダの王権とヨセフの長子相続権』（*Judah's Sceptre and Joseph's Birthright*）の前書きの中で、アレンは次のように述べています：「神がアブラハムに2つの契約を結ばれたということ、もっと正確に言えば、アブラムに対する契約および名前をアブラハムと変えた後の彼に対する契約を結ばれたということは、一般的には知られていないことですが、それでも真実なのです。この改名は、新しい人格と秩序が付与されるこの契約当事者に相応しい名前にするためでした。最初のアブラムとの契約は、彼が90歳の時に結ばれています。しかし、二番目のアブラハムとの契約は、彼が生命の生け贄をささげるように命じられてから後に結ばれています」。

私たちは、もう少し先でアブラハムのこの大試練について考えることにします。

ここで、神が結ばれたこの二番目の「アブラハム」との契約に注目して下さい：「アブラムが90歳になった時、主はアブラムに現れて言われた。『わたしは全能の神である。あなたはわたしに従って歩み、全き者になりなさい。わたしは、あなたとの間にわたしの契約を立て、あなたをおびたたく増やそう。...わたしは、わたしの契約をあなたと結ぶ。あなたは、諸国民

の父となる！

『あなたは、もはやアブラムではなく、アブラハムと名乗りなさい。わたしが、あなたを諸国民の父とするからである。

『わたしは、あなたをおびたたく増やし、多くの国家とする【複数！一国のみではありません！

ません！】。王となる者たち【複数！多数の王たち！】が、あなたから出るだろう。

『わたしは、あなたとの間に、また後に続く代々の子孫【複数！多数の国家の子孫 — 大地の砂粒、星の数のように多数】の神となる。

『わたしは、あなたが滞在しているこのカナンのすべての土地をあなたとあなたの子孫に永久

の所有地として与える。わたしは彼らの神となる』

「神はまた、アブラハムに言われた。『だからあなたも、あなたの後の子孫とともに、代々にわたり、わたしの契約を守りなさい』(創世記17:1-9)。

これを読んで、神がアブラハムに無数の子孫を約束されたことについて何か疑問があるでしょうか？大地の砂粒はどれほどあるのでしょうか？天にはどれほどの数の星が存在するでしょうか？科学者たちは、私たちの銀河には2千億ほどの星が存在していると言っています。勿論、これは星の数を文字通り予測するというよりは、隠喩なのですが、神は明らかに、アブラハムの子孫がやがて多数の国家を形成すること — すべての王たちが彼の子孫に属すること — そして最終的に無数の人々がアブラハムの子孫になることを約束されています！

これらの事実がキリストを意味する「一人の子孫」のみに言及したものと解釈する人は、神聖な神の言葉と苦闘しているのです！以下のことに注目して、脳裏に焼き付けて下さい！

(1) アブラムの新しい名前である「アブラハム」は、「諸国民の父」を意味しています。

(2) 神の約束：「...わたしは、あなたを複数の国家にする...」

(3) 神の約束：「...王となる者たち [複数！一人だけではありません！] が、あなたから出るだろう」

(4) 神の約束：「わたしは、あなたとの間に、また後に続く代々の子孫 [複数] との間に、契約を立てる！」

(5) 神の約束：「わたしは、あなたの子孫 [複数！] に土地を与える...」

(6) 神の約束：「わたしは、彼ら [複数！] の神となる！」

(7) 神の約束：アブラハムが諸国民の父になるということ — すべての王が彼から出ること — 彼の子孫が最終的に「大地の砂粒」或いは「天の星」ほどの数に増えるということ。これは、神が繰り返し約束されていることです。

しかし、聖書の多くに、特に預言において多く見られるように、神の言葉にしばしば意味の二重性があります。後で見るように、ヤコブ(名前がイスラエルに変わります)の子孫は、明確に預言的な告知を受けています。ヤコブの12人の息子たち(全部で13人です; エフライムとマナセは、ヤコブのお気に入りの息子ヨセフの二人の息子です)はそれぞれ、具体的な国家的預言 — 国家の性格や各自が最終的に相続するものを示す未来図 — を与えられています。

無条件の約束

神は最初にアブラハムにこう言われました:「あなたはわたしに従って歩み、全き者になりなさい。わたしはあなたの神となる」。神は、アブラハムの恭順という条件付きで彼に約束されたのです。しかし、これからわたしたちが見るように、後になって、神はその約束を完全に無条件のものにされました。

創世記22章を読んで下さい。この章は、神がどのようにしてアブラハムにとっても考えられないような不可能とも思える事を命じられたか語っています！

アブラハムとサラは、大変老齢になるまで子供が生まれなかったのですが、神はアブラハムが父になること — 彼の息子を通して多くの国家の父になること — を繰り返し約束されています。

「神はアブラハムに言われた。『あなたの妻サラは、名前をサラではなくサラと呼びなさい。』

『わたしは彼女を祝福し、彼女によってあなたに男の子を与えよう。わたしは彼女を祝福し、諸国民の母とする。諸民族の王となる者たちが彼女から出る。』。

「アブラハムはひれ伏した。しかし笑って、心の中で言った。『百歳の男に子供が生まれるだろうか。90歳のサラに子供が生まれるだろうか』。

「アブラハムは神に言った。『どうか、イシュマエルが御前に生き永らえますように！』(イシュマエルは、アブラハムと彼の侍女ハガルとの間に生まれた息子です)。

「神は言われた。『いや、あなたの妻サラがあなたとの間に男の子を産む。その子をイサクと名付けなさい。わたしは彼と契約を立て、彼の子孫のために永久の契約とする。...わたしの契約は、来年の今ごろ、サラがあなたとの間に産むイサクと立てる』(創世記17:15-21)。

神は、創世記18章においてこの約束に再び言及されています。この章では、神の使者がサラとアブラハムが親になるという約束を再確認したこと、子供を産むには歳をとり過ぎていると考えてサラが信じられずに笑ったことが述べられています。

それから、ロトと彼の家族がソドムから救出されたという話、ソドムとゴモラが火災で滅びるという話(そして、同性愛に対する神の態度に関する力強い証言！)が続きます。

創世記21章では、イサクの誕生が次のように語られています:「主は約束されたとおり、サラを顧みて、約束されたとおりにサラに行われた」

「彼女は身ごもり、そして神がアブラハムに約束された時に、年老いたアブラハムに男の子を産んだ。

「アブラハムは、サラが産んだ自分の子供をイサク名付けた」(創世記21:1-3)。

ここで、アブラハムは神が約束を守られたことを知るのです！遂に、彼は自分の子供、愛する妻サラの子供を儲けたのです！イサクが生まれた時には100歳を超えていたアブラハムは、息子の誕生に大喜びしたことでしょう。彼は、息子の中に神の多くの約束が成就されていることを知りました。イサクが多くの王たち、諸国家、無数の人々の祖先になることを悟りました！

それから、厳しい試練がやってきました！

アブラハムは、神が自分の息子 — 神が約束されたまさにその息子 — を生け贄にするように命じられた時、啞然としたに違いありません。この時、アブラハムは既に、家庭のトラブル — サラとハガルとの間の嫉妬と反感 — を解決するためにハガルとイシュマエルを追い出していました。神は、アビメレクからサラを救い出されていました。アブラハムとアビメレクとの間に契約が結ばれています。アブラハムは、ベールシェバに井戸を掘らせて、二人の契約を意味する「7つの誓いの井戸」と名付けています。

それから、青天の霹靂のように、神はアブラハムに言われました:「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。わたしが命じる山の一つに登り、彼を燔祭の生け贄としてささげなさい」(創世記22:2)。

こんなことがあり得るのでしょうか？考えられるのでしょうか？神は、アブラハムに息子が生まれ、その息子の系図を通して、彼が無数の人々の父祖になること、歴代の王たちもその系図から出ることを繰り返し約束されていたのです。神は今や心変わりや心変わりや心変わりをされたかのようです！神は今、

イサクを^{い にえ}生け贄にするようにアブラハムに^{めい}命じられたのです。アブラハムが^{だれ}誰よりも — ^{じぶん}自分の命よりも — ^{あい むす こ ころ}愛する息子を殺すことを！

その後^ごに^{つづ}つづくのは、^{れきし ぜんれい}歴史に前例のない模範的な^{もはんてき しんこう}信仰と^{きょうじゆん}恭順の実例です！^{なんせいき あと}何世紀も後に、パウロは、こう述べています：「それでは、^{にく わたし}肉による私たちの父祖アブラハムの^{ばあい}場合はどうだったのでしょうか。もし、アブラハムが^{おこな}行いによって^{ぎ みと}義と認められたのなら、^{かれ ぼこ}彼は誇ることができません。しかし、^{かみ ごぜん}神の御前ではそうではありません。

「^{せいしょ}聖書では^{なん}何と言っていますか。アブラハムは^{かみ しん}神を信じ、それが^{かれ ぎ}彼の義とみなされました」(ローマ^{びと てがみ}人への手紙4:1-3)。

ローマ^{びと てがみ}人への手紙の4章^{しやう}には、^{きょうじゆん}恭順と^{いつたいか}一体化して^{きょうじゆん もはん}恭順の模範となる^{しんこうしん}信仰心について^{せいしょ}聖書が^{かた さいこう せつめい}語る最高の説明の一つがあります！^{かみ}神の^{ことば}言葉は^{つぎ}次のように述べています：「^{かれ ふしんこう}彼は、不信仰によって^{かみ やくそく うたが}神の約束を疑うようなことをせず、^{はんたい しんこう}反対に、信仰がますます強くなって、^{かみ さんび}神を賛美しました。

^{かみ やくそく}神は約束されたことを^{じやうじゆ}成就されると^{かた しん}堅く信じていたのです」(ローマ^{びと てがみ}人への手紙4:20-21)。

^{かみ}神は、アブラハムが^{おおく}多くの^{こっか}国家の父になること — ^{むすう}無数の人々や^{ひとびと}王の父祖になることを^{やくそく}約束されてきました！そして、^{かれ}彼にイサクを^{あた}与えられました。しかし今、^{かみ}神はイサクを^{い にえ}生け贄にささげるようにアブラハムに^{めい}命じられたのです！一体、^{いつたい かみ}神は、何をされるつもりだったのでしょうか？

^{にく こころ}肉の心、^{まおう}魔王サタンに^{えいきやう}影響された心なら、この時点で^{かみ うたが}神を疑うようになるでしょう！そのような心なら、^{いっけんふじやうり}一見不条理に^{おも}思える^{げんじつ}現実^{ちよくめん}に直面して^じ自己^{これんびん}憐憫^{ひた}に浸るでしょう！^{ふんがい ねん}憤慨の念に満たされることでしょうか！「^{かみ}神は何をされるつもりなのだろうか？」。肉の心なら、^じ自己^{これんびん}憐憫と^{ぎねん}疑念に^{つつ}包まれて、「このような^{こと}事は、^{こうせい}公正ではない。^{かみ}神は、^{あた}与えてから、その後で^{あと とつぜん}突然、^と取り上げてしまう」と^{おも}思うでしょう！

^{にく こころ}肉の心なら、こう^{かんが}考えるでしょう：「何故なのか、これは^{な ぜ}殺人ではないか！^{かみ}神は、ご^{じしん}自身の^{りっぽう}律法の中で『^{ころ}殺してはならない』と^い言われているではないか？でも、^{かみ いま}神は今、わたしの^{むすこ}息子を殺せと^{めい}命じられる」。肉の心なら — 「^{にく こころ}神は約束されたことを^{かみ やくそく}成就されると^{じやうじゆ}堅く信じる」ことのない心なら — ^{ふんがい}憤慨、^じ自己^{これんびん}憐憫、^{いか}怒り、^{はんかん}反感、^{てきい}敵意、^{かいぎ}懷疑といった^{かんじやう}感情が、^{しんちゆう}心中にほとばしり

で
出ることでしょう！

しかし、アブラハムはどうだったのでしょうか？^{かれ}彼は、^{なに}何を^{かんが}考えたのでしょうか？

^{わたし}私たちは、^{かれ}彼の^{こころ}心を^{かんぜん}完全には^り理解することは^{でき}出来ませんが、^{ごうりてき}合理的な^{すいそく}推測はできるでしょう！
^{かれ}彼は^{つぎ}次のように^{かんが}考えたに^{ちが}違いありません。

^{かみ}神はイサクを^{ただ}直ちに^{ふっかつ}復活させてくださるだろう！^{かみ}神は、^{じぶん}ご自分の^{やくそく}約束を^ほ反故にされることはないだろう。^{かみ}神は、^{やくそく}約束されたのだ。^{かみ}神だから、^ううそをつくことはできない。^{かみ}神は、^{ぜんげん}前言を^{ひるがえ}翻すようなことはされない。だから、^{かみ}神は、イサクを^{ふっかつ}復活させて、^{よみがえ}蘇らせて下さるだろう！

(2) もしそうでないなら、^{かみ}神はもう^{ひとり}一人の^{むすこ}息子を下さるつもりなのだ！ひょっとすると、^{ふたり}二人
— ^{さんにん}三人 — ^{ごにん}五人 — あるいは^{じゅうにん}十人^しかも知れない！^{かみ}神はきっと、^{わたし}私に^{たい}対する^{やくそく}約束を^{じょうじゆ}成就して下
さるだろう。^{やくそく}約束されていたように！

(3) それはさておき、わたしは^{かみ}神からどのような^{おんけい}恩恵を受けているだろうか？わたしの^{めい}命、わ
たしの持っている^{もの}物すべては、^{かみ}神のお^{かげ}陰だ。サラが^{かいほう}解放されたのは、^{かみ}神のお^{かげ}陰だ。わたしの^{つま}妻
は、わたしから^{うば}奪われていたかも知れない — ^{つま}妻が^いアビメレクの^いハーレムの^{いちいん}一員にされていた
ら^{ふたたび}再び^あ会うことができなかつただろう！しかし、^{かみ}神はわたしを^{たす}助けて下さった。サラを^{すく}救って
下さった。そしてサラはわたしにイサクを^う産んでくれた。サラは、まだ^{むすこ}息子を^{なんにん}何人も^う産むこと
ができる！

アブラハムが^{なに}何を^{かんが}考えたにしろ、^{せいしよ}聖書は^{つぎ}次のように述べています：「^{よくあきはや}翌朝早く、アブラハムは
ロバに^{くら}鞍を^お置き、^{ふたり}二人の^{わかもの}若者と^{むすこ}息子のイサクを^つ連れて^で出た。そして^{はんさい}燔祭のための^{たきぎ}薪を^わ割り、^{けつ}決意
して、^{かみ}神がお^つ告げになった^{ばしよ}場所へ^む向かって^い行った」(創世記22:3)。

まさに^{しんこう}信仰と^{きやうじゆん}恭順の^{もはん}模範です！^{かみ}神が^{さいしよ}最初に、アブラハムが^{じぶん}自分の^{くに}国にいた^{とき}時に^{かれ}彼を^{しやうめい}召命された
時のことを^{せいしよ}聖書は^{かんたん}簡単に^{つぎ}次のように述べています：「そこで、アブラハムは^{たびだ}旅立った」(創世記
12:4 を参照)。簡潔な表現です。^{かみ}神は^{めい}命じられた。アブラハムは^{したが}従った。アブラハムがイサク
を^い生け^{にえ}贄にささげようとした^{さいご}最後の^{どたんば}土壇場になって、^{かみ}神は^よ呼びかけるのです：「アブラハム！ア
ブラハム！」。アブラハムは^{こた}答えました：「はい、ここにおります」(創世記22:11)。

「御使いは言った。『その子に手をくだしてはいけない。その子に何もしてはいけない。今、わたしはあなたが神を恐れることがよく分かった。あなたは、自分の独り子である息子ですら、わたしに捧げることを惜しまなかった』。

「アブラハムが目を上げて見回すと、後ろの茂みに角をひっかけている一頭の雄羊がいた。アブラハムは行って、その雄羊を捕まえて、それを息子の代わりに燔祭の捧げものにした」(創世記22:12-13)。

ここには、その独り子であるイエスキリストを全世界の罪を償うために捧げること(ヨハネ書3:16を参照)を惜しまれなかった父なる神の謎めいたところがあります。

これに先立って、神はアブラハムに言われました:「あなたはわたしに従って歩み、全き者になりなさい。わたしが、あなたを諸国民の父とする...」(創世記17:1-5を参照)。今、アブラハムは最後で最大の試練を通過したのです! 神は、アブラハムが神を信じていることを確認されたのです! 今日、無数の人々がキリストに「ついて信じています」。彼らは、キリストが神の子であることを「信じています」。彼らは「キリストを信じています」。しかし、彼らは、

本当にキリストを信じているのではありません! 彼らは、キリストが言われたことを信じることを拒んでいます! キリストはこう言われました:「わたしが来たのは律法を廃止するためだと思っ

てはいけません...」(マタイ書5:17)。無数の人々は、主が律法を廃止するために来られたと信じています! キリストは、人の子も、三日三晩、墓場(地の中)にいることになる、と言われています(マタイ書12:40)。そして、無数の人々が、主は金曜日の日没から日曜日の夜明けまでの一日と二晩しか墓場に入っておられないと信じています! 主は言わ

れています:「もし命を得たいのなら、律法を守りなさい!」(マタイ書19:17)。しかし、無数の人々は、主が主の父の律法を廃止されたと信じています!

無数の人々が、キリストに「ついて」信じています。しかし、彼らは主の福音のメッセージ(良き知らせ) — 間もなく訪れる神の王国、即ちこの世におけるキリストの千年間の世界支配(黙示録20:4; 2:26; 3:21) についてのメッセージ — を信じていません!

アブラハムは、クリスチャンだと公言する無数の現代人のように、単なる「信仰」をしていたのではありません。アブラハムは、確信していたのです。彼らとアブラハムには、相違があります！

だから神は、アブラハムに言われたのです：『わたしは自らにかけて誓う、と主は言われる。あなたがこの事を行い、自分の独り子である息子すら惜しまなかったのので、あなたを豊かに祝福し、あなたの子孫を天の星のように、浜の真砂のように無数に増やそう。あなたの子孫は敵の城門を勝ち取る。地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を受ける。あなたがわたしの声に聞き従ったからである』(創世記22:16-18)。

ここで再び、アブラハムの子孫が無数になるという神の約束に注目して下さい！アブラハムの子孫は、繁栄と敵からの保護を保証する戦略的な土地と「海門」を領有することになっていました！

これらの途方もない約束は、イサク、さらにヤコブに対して再確認されています。この後、長子相続権の約束は、ヤコブの息子たちへ — 次に、死の床にある年老いたイサクを通して、ヤコブのお気に入りの息子であるヨセフの息子のエフライムマナセ(つまり、二人はヤコブの孫)へ — と受け継がれていきます。

しかし、これから見るように、神は言われました：「王権はユダを離れることはない」(創世記49：10)。神は、人間の本质や思考が神の偉大な目的を実現することを可能にされました。また、リベカとヤコブがイサクを騙して長子相続権をエサウではなくヤコブが相続するようにした事を許されました。しかし神は、「王権」 — つまりキリストを意味する「一人の子孫」の約束 — が、後にヤコブの12人の息子の一人として生まれて「ユダヤ人」の祖先となるユダから離れることはないことと決められています。ユダヤという言葉は、語源的には「ユダ」の「ニックネーム」に過ぎません。これから見るように、二重の意味を持つ契約には必然的な分割 — つ

まり、民族の契約と恩寵の契約との分割 — が生じることになります。歴史が流れ何世紀も

過ぎてから、13の部族が構成する2つの完全な国家が台頭した後、そして北の10部族がその土地から追い払われ歴史から消えた後、神に選ばれた使徒の一人が、信じようとしないう異邦人

たち^{たい}に対して、アブラハムに^{やくそく}約束された「^{しそん}子孫」としてキリストが^{しんにん}信任されていることの^{せいとう}正当性、^{かみ}神の^{おんちよう}恩寵の^{やくそく}約束、および「^{おうけん}王権はユダを^{はな}離れることはない」という^{かみ}神の^{よげん}預言の^{じようじゆ}成就について^{くわ}詳しく^{せつめい}説明しています。

^{おほ}多くの人々がこの^{よげん}預言に^と飛びついて、^{じようき}上記で^{わたし}私たちが^よ読んできたこと、つまり、^{むすう}無数の^{しそん}子孫

— ^{だい}大地の^{すなつぶ}砂粒や^{てん}天の^{ほし}星の^{かず}数のように^{むすう}無数の^{じゆうみん}住民、^{こっか}国家、^{おう}王 — ^{ぜんのう}を全能の^{かみ}神がアブラハムに^く繰返し^{かえ}約束されたことをすべて^{むし}無視したり^{ひてい}否定したりするのです！

ここで^{ちゆうもく}注目して下さい！使徒パウロは、^{くだ}異邦人であるガラテア人と^し神の^{おんちよう}恩寵の^{やくそく}約束（^{みんぞく}民族の

^{やくそく}約束ではありません）について^{ぎろん}議論していた^{とき}時、こう^い言いました：「ところで、アブラハムと

その^{しそん}子孫に対して^{たい}約束が^{やくそく}告げられました。その^{さい}際、^{かみ}神は^{たすう}多数を^さ指す子孫たちとは^い言われず、^{ひとり}一人を^さ指してあなたの^{しそん}子孫に^い言われています。この^{しそん}子孫とはキリストのことです」（ガラテア^{ひと}人への^{てがみ}手紙3：16）。

^{さら}更に、^{こっか}国家・^{みんぞく}民族・^{そうぞく}相続の^{やくそく}約束と^{おんちよう}恩寵の^{めぐ}恵みとの^{そうい}相違に^{ちゆうもく}注目しましょう。

「^{おうけん}王権はユダを^{はな}離れることはない...」（^{そうせいき}創世記49：10）。^{かみ}神はこう^{よげん}預言されています：「^{かれ}彼の^{きやうだい}兄弟の中で^{なか}最も^{もつと}勢力が^{せいりよく}あったのはユダで、^{しはいしや}支配者[^{くんしゆ}君主]もその^{しそん}子孫から^で出るが、^{ちやうし}長子^{そうぞくけん}相続権を得るのはヨセフである」（^{れきだいしじよう}歴代誌上5：2）。

^{ちやうし}長子^{そうぞくけん}相続権は、^{せいぞんけん}生存権によってヨセフが^{そうぞく}相続することになっていたものです（エフライムと

マセはヨセフの^{むすこ}息子ですが、^し死の^{とこ}床にあるヤコブ（イスラエル）は「^{わたし}私の^な名が^{かれ}彼らによって^{こうせい}後世に^{つた}伝えられますように」と^い言っています（^{そうせいき}創世記48：16を^{さんしやう}参照）。これは「^{かみ}神の^{おんちよう}恩寵」とは^{かんけい}関係

がありません。これは、^{しかく}資格によって^え得られるもの、つまりヨセフの^{せいとくけん}生得権（^{ちやうし}長子^{そうぞくけん}相続権）です。キリストによって^{ちやうてん}頂点を^{きわ}極める^{けいず}系図はユダから^で出ることになるのですが、^{むすう}無数の^{しそん}子孫 —

王たちや諸国民を含む無数の子孫 — はヨセフの系図から出ることを、神の言葉は明確に
されています！

王権は、王の公式のバトン、あるいは職杖とも言えるものです。王権という言葉には、王の職務
という意味が含まれています。キリストは、ユダの系図から出るようになっていました！
注目して下さい：「私たちの主がユダの系図から出られたことは明らかですが、モーゼは、ユ
ダ族については、祭司に関することは何も述べていません」（ヘブライ人への手紙7:14）。

ここで、「あなたによってすべての国が祝福される」(ガラテア人への手紙3:8)という表現に内在
する意味の二重性について、少し考えることにします。これからお分かりになるように、皆様
が世界の近代史を学ばれたことがあるのでしたら理解して頂けるように、全世界は、英国とア
メリカ合衆国という2つの国家によって多大な祝福を受けています！この事は非常に明白な
ので、大げさに説明する必要はないでしょう。

世界中の国々によって構成される国際社会、植民地を建設した英国、貿易を通じた低開発・貧困
国の発展について考えてください。英国や合衆国のような国家が存在しなかったとしたら、
世界はどうなっていたか考えて下さい！百以上もの国家がこの2つの国家を通して、精神的
にも物質的にも祝福されてきたのです！

では、「国家」(nation)という言葉の意味は何でしょうか？私たちは通常、国家を政治的存在
— 地図上に名前のある国と考えます。しかし今日、この言葉は、本来の意味とは異なる使い
方をされています。この言葉は本来、1つの政治的組織に結集した一族、つまり部族国家
(country)を意味していました。

この言葉(nation)は、「誕生」(“birth”や“nativity”)や「出生の」(“natal”や“native”)
という言葉と同じ語源をもちます。その意味は、誕生および一族(family)と関係があります。

しかし現代では、1つの国境の中に複数の民族が組み込まれていること、— つまり、系図に
共通の祖先を有する「民族」が複数集まって1つの国を構成していることもあります。例えば、
現代のベルギーは「国家」と呼ばれる1つの政治的存在です。しかし、現代のベルギー国内に
は、2つの明確に異なる民族が存在しています：つまり、フラマン人とワロン人です。今日の他
の多くの国家の場合と同様に、これらの2つの民族は必ずしも良好な状態にある訳ではあり
ません。ユーゴスラビア、旧チェコスロバキア(今日のチェコ共和国とスロバキア)、および旧
ソビエト連邦(モンゴル人、グルジア人、ウクライナ人、アゼルバイジャン人、ウズベク族、

ロシア人、等々の10以上の民族で構成)についても、同じことが言えます。スイスは、ドイツ、フランス、イタリアの3つの異文化で構成されています。

現代では多数の国家が多民族国家になっているからといって、アブラハムから出てくることになっていた多数の「国家」についての神の約束が棚上げにされた訳ではありません。政治的な国境が混乱している場合があっても、また多数の国家が民族間の交配により事実上の「人種のるつぼ」になっているとしても、神の約束の成就が妨げられた訳ではありません！神の約束は依然として存在しているのです！

売られ譲渡された長子相続権

さてここで、救い主イエスキリストの再臨で成就されることになる王権の約束と長子相続権の約束との大きな違いについて説明します。

長子相続権の祝福がヨセフから彼の息子のエフライムとマナセに譲渡されたことを述べている興味深い話が、創世記48章に見られます。

「イスラエル（ヤコブ）は、ヨセフの息子たちを見ながら、『これは誰か』と尋ねた。ヨセフが父に、『神がここで授けて下さったわたしの息子たちです』と答えると、父は、『ここへ連れてきなさい。彼らを祝福しよう』と言った。

「イスラエルの目は老齢のためかすんでよく見えなかったもので、ヨセフが二人の息子を父のもとに近寄らせると、父は彼らに口づけをして抱き締めた。

「イスラエルはヨセフに言った。『お前の顔さえ見ることができようとは思わなかったのに、なんと神はお前の息子たちも見せてくださった』。

「ヨセフは彼らを父の膝からはなし、地にひれ伏して拝した。

「ヨセフは二人の息子のうち、エフライムを自分の右手でイスラエルの左手に向かわせ、マナセを自分の左手でイスラエルの右手に向かわせ、二人を近寄らせた。

「イスラエルは右手を伸ばして、弟であるエフライムの頭の上におき、左手をマナセの頭の上に置いた。つまり、マナセが長男であるのに、[意図的に]彼は両手を交差して置いたのです。

「そして、ヨセフを祝福して言った。『わたしの祖先アブラハムとイサクがその御前に歩んだ神よ。わたしの生涯を今日まで養って下さった神よ。私をすべての悪から救われた天使[ヘブラ

イ語で使者]よ。どうか、この若者に祝福を与えてください。どうか、わたしの名とわたしの

祖先アブラハム、イサクの名が彼らによって継承されますように。どうか、彼らがこの地上に数多く増え続けられますように。

「ヨセフは、父が右手をエフライムの頭の上に置いているのを見て、不満に思い、父の手を取ってエフライムの頭からマナセの頭へ移そうとした。

「ヨセフは父に言った。『父上、そうではありません。これが長男ですから、右手をこれの上に置いてください』。

「ところが、父はそれを拒んで言った。『いや、分かっている。わたしの子よ。私には分かっている。この子も一つの民となり、大きくなるであろう。しかし、弟の方が彼よりも大きくなり、その子孫は多数の国家となる』」（創世記48:8-19）。

何という約束でしょう！

これらのヨセフの二人の息子は、2つの大いなる国家 — 兄のマナセは単一の大国家、そして弟のエフライムは大国家団（多数の国家の集団） — に成長します。

では、歴史が流れて、誰がイスラエルの名前を継承することになっていたのでしょうか？

聖書を読めば容易に理解できます！年老いたイスラエル（ヤコブ）は言っています：「私の名

が彼らによって継承されますように」。彼はまた、アブラハムとイサクの名前も彼らによって継承されますように、と言っています。

無数のアメリカ人と英国人が、おめでたい事に、彼らの古代ルーツに気づいていないのです。彼らは、英国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカを含む英連邦諸国と呼ばれる大国家団がエフライム族の人々で構成されていることを全く認識していません。また、合衆国の無数の人々も、聖書の歴史 — 聖書の預言 — におけるマナセ族の人々であることを全く認識していません！

反対に、無数の人々が「イスラエル人」と「ユダヤ人」という呼称が同義語であると誤解しています。これは、とんでもない誤り、完全に間違った憶測です。この点については、無数の人々が無知なのです。これについては、後ほどまた触れますが、ここでは、イスラエルと名前が変わったヤコブが死の床で、彼の名前がエフライムとマナセに永遠に結びつくという事を明言していることを心に銘記しておいて下さい！

世界の多くの人々が認識しているたった2つの部族は、ユダ族とレビ族です。一般的に「ユダヤ人」と呼ばれる人々の名前の中には、実に多数のレビ族の人々の名前があります。古代ヘブライ語では、「コーエン」(Cohen)という名前は「祭司」即ち「レビ人」を意味します。リーヴァイ(Levi)、レヴァイン／レビン(Levine)、レヴィンソン(Levinson)、リーヴィー(Levy)、カーン(Kahn)、クーン(Kuhn)、コーハン(Cohan)、4 コーヘイン(Kohane)、コーアン(Cohen)、コーン(Kohn)、レヴィッツ(Levitz)、ルウィッツ(Lewitz)、ルイス(Lewis)ルーイソン(Lewison)、リーボフ(Liebov)、リーボウィッツ(Liebowitz)、等々の非常に多くの名前が、「レビ」や「コーエン」 — 即ち「祭司」 — から派生しているのです。イッサカル族、ダン族、セブルン族、ナフタリ族、ルベン族、等の部族がどこに位置していたのか、ユダヤ人でさえ何人の人が知っているのでしょうか？ほとんどの人々が、見当もつかないでしょう！無数の人々が「ユダヤ」と「イスラエル」を同義語だと考えています！何たる誤解！何たる無知！

ヨセフの二人の息子は兄弟です。この二人の兄弟国家はやがて、偉大な単一国家と「国家集団」になるのです。現代の世界では、これらの記述 — 長く永続的な関係(兄弟たちが時には戦うこともあり、常に意見が一致するとは限らないとしても) — 互いに世界の富の多くを所有する2つの偉大な国民 — に相当する国家はどこにあるのでしょうか？

歴史を尋ね、民俗学、地理学、地政学を学ぶのも良いでしょう。そうすれば、この聖書の記述に

当てはまる唯一の国民がアメリカ合衆国と英連邦諸国の国民であることを発見するでしょう！

「敵の城門」

英国は、植民地を建設し、開発し、世界中に広がって行き、遂に大国家団(帝国)の地位を獲得します。第二次世界大戦前の世界地図を見て下さい。この時期の世界地図は大抵、英連邦を赤で、統治領と保護領をピンクで色付けしています。

世界のどの地域を見ても、英国の領有権・支配権・影響力が及んでいることに気づかれるでしょう。

まず、イギリス諸島を見ましょう。それはまるで、ヨーロッパの沖に威厳を持って横たわるライオンの如くです。有名なイギリス海峡の背後に難攻不落の如く堅固に横たわり、ヨーロッパへの海路 — （デンマークとスウェーデンの間の）カテガット海峡／（デンマークとノルウェーの間）スカゲラク海峡／オランダやフランスの港湾都市 — を守っています。イギリス諸島の位置は、歴史の流れの中で決定的な役割を果たしてきました。例えば、第一次と第二次の世界大戦を始めとして数多くの戦争の結果に劇的な影響を与えています！

次に、カナダの広大な領土、天然資源、物質的な富、「地球の下側」と呼ばれる大陸のオーストラリア、島国のニュージーランドについて考えてみましょう。更に、鉱物資源（中には、世界最大の埋蔵量に匹敵するものもあります）を始めとする天然資源に恵まれた南アフリカにも注目しましょう。

19世紀後半と20世紀の大部分において、英国は、インド、エジプト、英国・エジプト共同管理スーダン（当時はこう呼ばれていました）、東アフリカの諸国家（ベルサイユ条約によりドイツに奪われた国を含む）、等々の非常に多くの国々を支配していました。英国は、世界中に領土を有していました！例えば、以下の諸国もそうでした：

パレスチナ、トランスヨルダン、ジブラルタル、マルタ島、クレタ島、スエズ運河、カイバル峠（アフガニスタンからパキスタンに通じる山道）、アンダマン・ニコバル諸島（ミャンマー南西部のベンガル湾の沖に位置する2つの群島）、セイロン（スリランカの旧称）、ローデシア（現在は、ザンビアとジンバブエの2つの独立国）、ケニア、タンガニーカ（現在は、ザンジバルとともにタンザニア連合共和国を構成） — シンガポール、マラッカ海峡 — 香港 — ブルネイ、ギルバート諸島、ソロモン諸島、ニュージョージア諸島、ニューギニア — サンタクルス。大西洋では、ヘブリディーズ諸島、フォークランド諸島、バーミューダ諸島、バハマ諸島、バーブーダ島、アンティグア島、セントヴィンセント島、セントルシア島、バルバドス、ケイマン諸島、英領ホンジュラス、英領ギアナ。

世界の主要な海と陸の門は、ほとんどすべて英国と合衆国が領有していました。

わたし がっしゅうこく ば あい こうだい たいせいよう たいへいよう
私たちは合衆国の場合、広大な大西洋と太平洋によってヨーロッパでの戦争から守られていたとい
いう戦略的位置が、私たちの国における自由の維持に極めて重要な役割を果たしてきました。
わたし じじつじょう うんが しよとう とう
私たちは事実上、パナマ運河、グアンタナモ（キューバ）、ハワイ諸島、グアム島、ウェーク島
における重要な海門を領有し、戦略的な島を防衛しました。私たちは、ダッチハーバーのア
リューシャン列島という厳寒の諸島を領有していました。歴史の深い知識がなくとも、これら
の地域の極めて戦略的価値を理解して頂けるでしょう。

えいこく は、ジブラルタルとスエズを領有し、エジプトのアレクサンドリアは言うに及ばず、マ
ルタ島、クレタ島、キプロス島を海軍基地として利用することで地中海を支配しました。また、
ヨーロッパ側トルコとアナトリア半島を隔てるボスポラス海峡・ダータネルス海峡を掌中に
おさ ことかい ふう こ えいこく せ かい もつと じゅうよう かいじょうこうつうろ しはい
収めることで黒海を封じ込めました。英国は、世界の最も重要な海上交通路を支配していた
のです。

それに、シンガポール、マラッカ海峡、中国の沿岸に位置する香港、さらにブルネイが加わり
ます。これで、英国が東インド諸島を領有したオランダ（いわゆる「失われた10部族」の一
つのセブロン族の子孫と共に、どうして極東で強大な陸海の軍勢力を維持できたかその理由を
お分かり頂けるでしょう。

これは、イサクの妻リベカの両親や兄弟によって語られた預言の成就です。これは、神がア
ブラハムに与え、イサクとヤコブを通して後世に伝えられた約束の一つの再確認であり、また
その約束の拡大でもあります。イサクの嫁探しの物語は、聖書を扱った文学作品の中でよくロ
マンチックに扱われています。また、子供のバイブルクラスでもお気に入りの話題になって
います。しかし、真実は決してロマンチックなものではありません。この点に注意して下さい。

「アブラハムは年を重ねて、老人になっていた。主は何事においてもアブラハムに祝福を与え
ておられた。

「そのころ、アブラハムは、家の全財産を任せている最年長の僕に言った。『手をわたしの腿の
間に入れなさい。

『そして、天の神、地の神である主にかけて誓いなさい。あなたは、わたしの息子の嫁をわた
しが今住んでいるカナン人の娘から取ってはならない。

『あなたは私の一族のいる故郷に行って、息子イサクのために嫁を連れてきなさい』。

「僕は尋ねた。『もしかすると、その娘が私に従ってこの土地へ来たくないと言うかもしれません。その場合には、ご子息をあなたの故郷にお連れしてよいでしょうか』。

「アブラハムは答えた。『決して、息子をあちらへ行かせてはなりません。

『天の神である主は、わたしを父の家、生まれ故郷から連れ出し、あなたの子孫にこの土地を与えと言われて、私に誓い、約束してくださった。その方があなたの行く手に死者を遣わして、そこから息子に嫁を連れて来ることができるようにしてくださる。

『もしその女性があなたに従ってこちらへ来たくないと言うならば、あなたは、私に対するこの誓いを解かれる。ただ、わたしの息子をあちらへ行かせることだけはしてはいけません』
(創世記24:1-8)。

イサクがパレスチナの土地を離れてアブラハムの祖先の土地へ戻るようなことを僕がさせないように、アブラハムは僕に真剣に言い聞かせています。それは、神との約束を無効にしないためでした。彼はさらに、遠戚であっても彼自身の属する部族の中からイサクの嫁を迎える決心をしていました。

この物語は創世記24章全体を通して続きます。

僕はメソポタミアに到着して、水を必要としていました。ナホル（アブラハムの弟）の息子ベトエルの娘リベカ（つまり、彼女はイサクの従兄弟の娘ということになります）が、水がめを肩に載せて井戸にやって来て、アブラハムの僕に飲み水を与え、僕のラクダのためにも井戸から水を汲んでやります。

僕は、この出会いが神の配慮によるものであることを理解し、彼女に高価な贈り物（おそらく婚約の記念品も含まれていたでしょう）を与え、彼女の両親の家に行き泊めてもらうことになります。そして彼は、自分の身元を明かし、彼女の両親に語りかけます。リベカは、イサクと結婚するために彼と一緒にいくことに同意します。ここで、神が彼女の両親に言わせた不思議な預言に注目しましょう！

「彼らはリベカを祝福して言った。『わたしたちの妹よ、あなたが無数の民の母となりますように。』

あなたの^{しそん}子孫が^{てき}敵の^{じょうもん}城門を^か勝ち^と取りますように』(創世記^{そうせいき}24:60)。

リベカは、エサウとヤコブの^{はは}母となりますが、^{ちようしそんぞくけん}長子相続権の^{やくそく}約束が^{ちようなん}長男エサウではなくヤコブに^{けいしやう}継承されることに^{ちから}力を貸しています。^{かみ}神は^{にんげんてき}人間的な^{ほんせい}本性が^{かみ}神の^{もくてき}目的を^{かな}適えるようにされたのですが、エサウが^{まめ}レンズ豆の^{もの}煮物と^ひ引き換えに^か長子相続権を^{ちようしそんぞくけん}売ったことが、この上なく^{うえ}貴重なものをエサウが^{はな}鼻であしらって^{むし}無視したことの^{れい}霊として^{かた}語られることが^た多々あります。しかし、^{かみ}神はエサウではなくヤコブが^{ちようしそんぞくけん}長子相続権を^{けいしやう}継承することを^い意図されていたのです。

^{としお}年老いたイサクは、ヤコブとリベカの^{ふたり}二人に^{だま}騙されて、ヤコブをエサウだと思い込んで^{しゆくふく}祝福します。^{かれ}彼はこう言いました:「どうか、^{かみ}神が^{てん}天の^{つゆ}露[^{きせつ}しかるべき^{あめ}季節の^ち雨]と^ち地の^{ひよく}肥沃[^{ゆた}豊かな^{しゆくかく}収穫]、^{ゆた}豊かな^{こくもつ}穀物と^{しゆ}ぶどう酒をおまえに^{あた}与えてくださるよう。諸^{しよこく}国の^{たみ}民がおまえに^{つか}仕え、^{おお}多くの^こ国家がおまえを^{すうはい}崇拜するよう。おまえの^{きやうだい}兄弟たちの^{しゆじん}主人となり、おまえの^{はは}母の^こ子らもおまえを^{すうはい}崇拜するよう。おまえを^{のろ}呪う^{しや}者は^{のろ}呪われ、おまえを^{しゆくふく}祝福する^{もの}者は^{しゆくふく}祝福されるよう」(創世記27:28,29)。

^{かみ}神は、このことを^{にんげんてき}人間的な^{とお}ごまかしを通して^{おこな}行われることを^{ゆる}許されましたが、ヤコブは^{いま}今や^{ちようしそんぞくけん}長子相続権と^{しゆくふく}祝福の^{りやうほう}両方の^{しよゆうしや}所有者になったのです。

^{つづ}続く^{すうしやう}数章は、ラバンのためにヤコブが^{はたら}働いたこと、ラバンの^{さくりやく}策略のこと、ヤコブの^{つま}妻たちと^{こども}子供たちのこと、^{など}等のヤコブの^{じんせい}人生の^で出来事を^{かた}語っています。ここで、^{かみ}神が^{むじやうけん}アブラハムに^{むじやうけん}無条件で^{あた}与えられた^{やくそく}約束を^い如何にして^{さいかくにん}再確認されたか、という^{てん}点に^{ちゆうもく}注目しましょう。^{かみ}神は、ヤコブが^{いま}今や^{せいとう}正当な^{そうぞくにん}相続人であることを^{あき}明らかにされます:「^{かみ}神は^{かれ}彼に^い言われた。『あなたの^な名はヤコブである。しかし、あなたの^な名はもはやヤコブとは^よ呼ばれない。イスラエルがあなたの^な名となる』。^{かみ}神はこうして、^{かれ}彼をイスラエルと^{なづ}名付けられた。

「^{かみ}神は、また^{かれ}彼に^い言われた。『わたしは^{ぜんのう}全能の^{かみ}神である。産めよ、^う増えよ。あなたから^{ひと}一つの^{こっか}国家、

いや^{たすう}多数の^{こっか}国家が^お起^{おう}こり、^{しそん}王^でたちがあなたの^{ふくすう}子孫から^{ひとり}出る[^{ふくすう}複数！一人ではありません！

^{たすう}多数の^{こっか}国家を^{しはい}支配する^{しよおう}諸王の^{おうちやう}王朝！これはあの「^いキリストを^{ひとり}意味する^{しそん}一人の子孫」の^{げんきゆう}ことを^{げんきゆう}言及しているのではありません。また、^{みんぞく}民族と^{おんちやう}恩寵という^{にじゅう}二重の^{やくそく}約束の^{おうけん}王権の^{ぶぶん}部分に^{げんきゆう}言及しているものでもありません。これは、^{ちようしそんぞくけん}長子相続権のこと、^{みんぞく}民族・^{こっか}国家としての^{いだいせい}偉大性を^{やくそく}約束

されたことについて言及されているのです。

『わたしは、アブラハムとイサクに与えた土地をあなたに与える。また、あなたに続く子孫にこの土地を与える』（創世記35:10-12）。

ヤコブは、有名な「石の柱」を立て、それに油を注いで聖別し、その場所を「神の家」を意味する「ベテル」と名付けました。この場所は後に、古代パレスチナの重要な都市になります。

ヤコブの柱石（枕石）

イサクは、父アブラハムが示した模範に従って、息子ヤコブがカナン人と結婚することを禁じました。彼は「...ヤコブを呼んで祝福して、命じた。『おまえは、カナンの娘の中から妻を迎えてはならない。

『ここをたつて、パダン・アラムにあるおまえのお爺さんのベトエルの家に行き、ラバン伯父さんの娘の中から妻を見つけなさい。

『どうか、全能の神がおまえを祝福して繁栄させ、おまえを増やして多くの民の群れとしてくださるよう。どうか、アブラハムの祝福がおまえとその子孫に及び、神がアブラハムに与えられた土地、おまえが寄留しているこの土地を受け継ぐことができるように』（創世記28:1-4）。

エサウもまた、父を立腹させることが分かっていたので、カナン人と結婚することを善としませんでした（創世記28:6-9を参照）。

「ヤコブはベールシェバを立てハランへ向かった。ある場所に来たとき、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。ヤコブは、その場所にあった石を一つ取って枕にして、寝ようとしてその場所に横たわった。

「すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の使者たちがそれを上ったり下ったりしていた。

「見よ、主が傍らに立って言われた。『わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわっているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える』（創世記28:10-13）。

神はヤコブにパレスチナの土地のみを約束されたという解釈 — 神は「あなたが横たわっている土地のみ」を意図されていたのであって、地球全体に広がることになる子孫の約束をヤコブに与える意図はなかった — という解釈を押し付ける人がいます！

しかし、これは何という馬鹿げた解釈でしょうか！神は、縦6 フィート、横2.5 フィートほどの石ころだらけの狭い土地だけしか約束されなかったのでしょうか？「あなたが横たわっている土地」とは、ヤコブの身体が実際に接触していた石ころだらけの狭い一画の土地だけであった — このような仮定は、愚の骨頂です！神がアブラハム、イサク、そしてここではヤコブに再確認された約束を否定しようとして、この一節のみを引用する人は、ひどい「視野狭窄」を患っているのでしょうか。注意して以下の一節を読んで下さい！

「あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、あなたは西へ、東へ、北へ、南へと大きく広がっていく。そして、地上のすべての民族は、あなたとあなたの子孫によって祝福されることになる！」（創世記28:14）。

地上のすべての民族が祝福を受けることになるのは、ヤコブの子孫が最終的に世界中に広がって至るところで彼らと共に生活するようになるからです！

その子孫が最終的に何億・何十億と無数に増えること — 彼らがパレスチナの地から世界に広がっていくこと — パレスチナから広がるあらゆる方向に存在するようになることを、神がアブラハムに約束されたことは、ここでも完全に明らかです。

ヤコブは、このありありとした夢から覚めて言いました：『まことに主は、この場所におられる。しかし、わたしはそれを知らなかった。...ここは、何と畏れ多い場所だろう[恐怖心ではなく、荘厳な畏怖の念に圧倒されているのです]。これはまさしく神の家だ。そうだ、ここは天の門だ』。

「ヤコブは翌朝早く起きて、枕にした石を取り、それを記念柱として立て[記念碑または標識として立て]、先端に油を注いだ。

「そして、彼はその場所を「ベテル」[神の家]と名付けた。その町[後に町になる]の名は、

以前はルズと呼ばれていた。ヤコブはまた誓願を立てて言った。『神がわたしと共におられ、わたしが歩むこの旅路を守り、食べ物、着る物を与え、無事に父の家に帰らせてくださり、主がわたしの神となられるなら、

『わたしが記念柱として立てたこの石を神の家とし、あなたがわたしに与えられるすべてのなかから、その十分の一をささげます』(創世記28:16-22)。

至高の神の祭司であったメルキセデクに十分の一税を収めていた祖父のアブラハムと同じく、ヤコブも十分の一税の掟のを知っていました。彼は、神が神に従う者に惜しげなく与える収入の最初の十分の一に対して神が優先権を持つことを認識していました！十分の一税に

関する神の掟の言及がレビ族の祭司制が確立するよりも遙か以前 — モーゼの誕生よりも遙か以前 — シナイ山で与えられた律法よりも遙か以前 — に聖書に出てくることに注目してください。

アブラハム、イサク、そしてヤコブも神に従いました。彼らは、神について「素晴らしい考え」を抱いたに過ぎないというわけではありません。彼らは、神にリップサービスを提供したのではありません。彼らの人格の質は、単なる「態度が立派」であるというものではありません。

彼らは、自己の行いによって神への愛と恭順を証明したのです！ヤコブ(「ヤコブの手紙」

の作者)はこう述べています：「信仰もこれと同じです。行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです。『あなたには信仰があり、わたしには行いがある。行いの伴わないあなたの信仰を見せなさい。そうすれば、わたしは行いによって、自分の信仰を見せましょう』と人が言うかもしれません。あなたは、唯一の神が存在する〔或いは、神は唯一だ〕と信じています。結構なことです。悪霊どももそう信じて、おののいています！」(ヤコブの手紙2:17-19)。

魔王サタンは偉大な信仰者です！彼は神が存在することを知っています。何故ならば、彼は

神を見たことがあるからです！「悪霊」と呼ばれる魔王サタンの墮天使たちもまた、「信仰しています」！クリスチャンだと公言する無数の人々と同様に、彼らもキリストに「ついて信じて」います。そして、イエスがキリストであるということを知っており、このことについて一瞬たりとも疑ってはいません！彼らは、イエスがこの世の罪のために死なれたこと — イ

エスが人類の救世主であること — を知っています！キリストを裏切ったユダ・イスカリ
オテの心中には、魔王サタン本人が存在していたのではありませんか？

「信仰心」だけでは十分ではありません！

注目しましょう：「ああ、愚かな者よ、行いの伴わない信仰が役に立たない、ということを知
りたいのですか。神がわたしたちの父アブラハムを義とされたのは、息子のイサクを祭壇に献
げるという行いによってではなかったですか。

「アブラハムの信仰がその行いと共に働き、信仰が行い〔行為—実行！〕によって完成され
たことが、これで分かるでしょう。

「『アブラハムは神を信じた〔かれは単に神「について信じた」のではありません — 彼は
本当に神を信じた〕という聖書の言葉が行為によって成就されたのです。そして、それが彼
の義と認められ、彼は神の友と呼ばれたのです」(ヤコブの手紙2:20-23)。

ヤコブが恭順を誓ったことで、神は彼の長い人生を通して彼を祝福し続けるのです。彼の有名
な「柱石」については、後でもう少し詳しく説明します。

私たちは今、聖書の余りにも単純でしかも真実に到達したのですが、驚くべきことに、クリ
スチャンだと公言して教会に通う無数の人々がこのことを理解していないのです！それは、
「イスラエルの家」と「ユダの家」の身元証明に関係しています。

すべてのイスラエル人がユダヤ人であるわけではないという事を理解している人は少数で
す！

すべてのアメリカ人がテキサス人ではないがすべてのテキサス人(合法的居住者)はアメリカ人
であるのと同様に、すべてのユダヤ人はイスラエル人であることは真実です！しかし、すべて
のイスラエル人がユダヤ人であるわけではありません！

「ユダヤ」という言葉は、ユダ族の父祖である「ユダ」のニックネームです。ユダは、イスラ
エルと名前を変えたヤコブの息子の一人です。

ソロモンの死に続く部族の分裂により、ソロモンの息子レハベアムがエルサレムを首都として
国の南部を支配しました。レビ族は、他の部族の中に分散して行きましたが、彼らには土地の

相続権^{そうぞくけん}はありませんでした。「ユダの家^{いえ}」には、ユダ族^{ぞく}を中心^{ちゅうしん}にしてレビ族^{ぞく}とシメオン族^{ぞく}の人々^{ひとびと}が混ざっていました。また、若干^{じゃっかん}のベニヤミン族^{ぞく}の人々^{ひとびと}もいました。ユダ族^{ぞく}は、このベニヤミン族^{ぞく}とエルサレムの北方^{ほつぽう}の国境^{こっきょう}を共有^{きょうゆう}していました。

それ以外^{いがい}のイスラエルの全部族^{ぜんぶぞく}の人々^{ひとびと}(全部^{ぜんぶ}で 10部族^{ぶぞく})は、サマリアを首都^{しゅと}として、完全^{かんぜん}に別個^{べっこ}の王朝^{おうちよう}の下^{もと}で北王国^{きたおうこく}を形成^{けいせい}していました！

教会^{きょうかい}に通^{かよ}う自称^{じしよう}「クリスチャン」の多数^{たすう}が、2つの独立^{ふた}した国家^{どくりつ}、2つの別個^{べっこ}の首都^{しゅと}、2つの独立^{どくりつ}した王朝^{おうちよう}が存在^{そんざい}したこと — 聖書^{せいしょ}の中^{なか}の 4 つの書^{しょ}がこれらの 2 つの国家^{ふた}の住民^{こっか}の歴史^{じゅうみん}を主題^{れきし}として扱^{あつか}っていること — 1つは「イスラエルの家^{いえ}」そして他^たの 1 つは「ユダの家^{いえ}」と呼ばれたこと — を認識^{にんしき}していないのはなぜでしょうか？

ヤコブには、12人^{にん}の子供^{こども}がいました。

ヤコブの二人^{ふたり}の妻^{つま}であるレアとラケルの物語^{ものがたり}は、創世記^{そうせいき}の 28 章^{しやう}から 31 章^{しやう}に描^{えが}かれています。

レアは、次^{つぎ}の子供^{こども}の母^{はは}です：ディナ、ルベン、シメオン、レビ、ユダ、イッサカル、セブルン。

ラケルの侍女^{じじよ}ビルハは、ヤコブにダンとナフタリの二人^{ふたり}の息子^{むすこ}を儲^{もう}けています。

レアの侍女^{じじよ}ジルパは、ガドとアシェルを儲^{もう}けています。

最後^{さいご}に、ヤコブが愛^{あい}して選^{えら}び、そのために長^{なが}く働^{はたら}いたラケルは、ヤコブにヨセフとベニヤミンの二人^{ふたり}の息子^{むすこ}を儲^{もう}けています。

ヤコブと叔父^{おじ}ラバンとの出^で会^あい、ラバンの娘^{むすめ}(レアとラケルの姉妹^{しまい})とヤコブの結婚^{けっこん}、多数^{たすう}の子供^この誕生^{たんじよう}、および長い歳^{なが}月^{げい}の経^{けい}過^かを語^たる大河^{たいが}物語^{ものがたり}に続^{つづ}いて、聖書^{せいしょ}は、ヤコブが物質^{ぶつしつてき}的にどれほど大^{おお}きく繁^{はん}栄^{えい}し祝^{しゅく}福^{ふく}されたか記^{しる}しています。

双子^{ふたご}の兄^{あに}のエサウを恐^{おそ}れていたヤコブは、祈^{いの}りの中^{なか}でこう言^いいました：「どうか、兄^{あに}エサウの手^てから救^{すく}ってください。わたしは、兄^{あに}が恐^{おそ}ろしいのです。兄^{あに}は攻^せめて来^きて、わたしをはじめ母^{はは}も子供^{こども}も殺^{ころ}すかもしれません。

「あなたはかつて、『わたしは必ずあなたに幸いを与え、あなたの子孫を浜の真砂のように数え切れないほど多くする』と言われました」(創世記32:11, 12)。

どのようにしてヤコブは「イスラエル」になったのでしょうか

ここで、聖書全体の中で最も不思議な記述の一つを読むことにします。

「ヤコブは独り後に残った。そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。

「ところが、その人は、ヤコブに勝てないとみて、ヤコブの腿の関節に触れた[打った: 古代ヘブライ語]ので、格闘しているうちに腿の関節がはずれた。

「その人は『もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから』と言ったが、ヤコブは答えた。『いいえ、祝福してくださるまでは離しません』。

「その人が『あなたの名はなんと言うのか』と尋ねたので、ヤコブですと答えると、その人は言った。『あなたの名はもうヤコブではなく、これからはイスラエル[神と戦う、神に屈しない、神に勝利する者]と呼ばれる。あなたは神と戦い、人と戦って勝ったからだ』

「ヤコブが『どうか、あなたのお名前を教えてください』と尋ねると、その人は『どうして、わたしはの名を尋ねるのか』と言って、ヤコブをその場で祝福した。

「そこでヤコブは、『わたしは顔と顔を合わせて神を見たのに、なお生きている』と言って、その場所をペヌエル(神の顔)と名付けた。

「ヤコブがペヌエルを過ぎたとき、太陽が彼の上に昇った。ヤコブは腿を痛めて立ち止まった[びっこを引いていた]」(創世記32:24-31)。

この謎めいた記述は、ヤコブがほとんど一晩中、彼が後で神と呼ぶ人と格闘していたことを示すものです。

恐らく、ヤコブは何とはなしに、この人に挑戦したことが長子相続権に関係していると気づいたのでしょう。忍耐、体力、武勇を試すこの厳しい個人的な試練に耐え、頑張り続け、克服し、勝利すれば、大きな報酬を勝ち取ることができると考えていたのかも知れません。

ヤコブにすれば、格闘に挑んだこの実在者に屈することなく勝ることができれば、それは、ア

ラジンの魔法のランプの発見、黄金の卵を産むガチョウを手に入れること、王の財宝に満ちた城の急襲、素晴らしい賞の獲得などに匹敵するような機会を得たのと同じことだったのかも知れません！

格闘はまるで何時間も続いたかのようです。ヤコブが「神」と言った実在者は肉体を供えた人間としてヤコブの前に現れたのですが、ヤコブが非常に粘り強かったことから、このペルソナ(三位一体における人格)がヤコブに勝つ唯一の方法は、空手チャンピオンのそれとは違って、ヤコブの体の一部を損なってびっこにする一撃を加えることでした！

いずれにしても、神がヤコブの名前をイスラエルに変えられたのは、この不思議な出来事の後のことです！

その後、神は再びヤコブに現れて言われています：「神は彼に言われた。『あなたの名はヤコブである。しかし、あなたの名はもはやヤコブとは呼ばれない。イスラエルがあなたの名となる』。神はこうして、彼をイスラエルと名付けられた。

「神は、また彼に言われた。『わたしは全能の神である。産めよ、増えよ。あなたから一つの国家[単数]、いや多数の国家[国家の集団]が起こり、あなたの子孫から王たち[複数]が出る！

『わたしは、アブラハムとイサクに与えた土地をあなたに与える。また、あなたに続く子孫[多数の子孫 — 無数！]にこの土地を与える』(創世記35:10-12)。

アブラハムに無条件で与えられた約束が今、イスラエルと名前を変えたヤコブに継承されたのです！この後の創世記の大部分は、嫉妬深い兄弟たちがイスラエルのお気に入りの息子であるヨセフをエジプトに売ったという話 — ヨセフがエジプトに売られることを神が許されたのは、イスラエルの一族がパレスチナで何千人もの命を奪った大干ばつを凌ぐ場所を確保するためであったという話 — そして最後には、捕らわれの地で新国家が誕生したという話 — で占められています。

創世記の最終章の前の49章には、「イスラエルの家」の多数の部族の現代の身元について、大きな手がかりを与える非常に興味深い記述があります。

その前の章(48章)では、如何にしてイスラエルの名がヨセフの二人の息子のエフライムとマナセに継承されたかという非常に重要な記述があります！

中でも最も重要な箇所は、16節です。ここで、もう一度読むことにします！

「わたしをすべての悪から救われた天使〔使者〕よ。どうか、この若者に祝福を与えてください。どうか、わたしの名とわたしの祖先アブラハム、イサクの名が彼らによって継承されますように。どうか、彼らがこの地上に数多く増え続けられますように」。

皆様の聖書では、どの部族がイスラエルの名を継承することになっていますか？ユダ族でしょうか？それとも、シメオン族、或いはレビ族でしょうか？そうではないでしょう。

イスラエルの家の名前は、極めて明確に、ヨセフの二人の息子のエフライムとマナセ(この順序です)に継承されています！

エフライム(族)は国家の集団に、兄のマナセ(族)は偉大な単一国家になると預言されています！

これらの二人の兄弟は、アブラハム、イサク、そしてヤコブ(即ちイスラエル)の名前を継承することになります！

ヤコブの子供たちの中であって、彼らが「イスラエル」の名を継承することになるのです！

しかし、アブラハム、イサク、ヤコブの子孫に約束された民族・国家としての偉大性を継承することになると聖書で預言されている「失われた10部族」或いは「契約の民」の身元を明確に証しているこれらの重要な聖句については、無数の自称クリスチャンたちが、おめでたいことに無知なのです！

ユダ族とイスラエル族が戦争することになった理由

前にも言いましたが、「ユダヤ」という言葉はユダの家の人々に対するニックネームに過ぎません。この言葉は列王記下16章6節に初めて聖書に登場します。

次の重要な聖句に注目してください:「このとき、シリアの王レツィンはエイラト〔シナイ半島東のアカバ湾に臨む港町〕をシリアに取り戻して、ユダ族の人々をエイラトから追い出した。そして、シリア人がエイラトに来て住み着き、今日に至っている」。列王記下の16章全体を正しい文脈の中で読むことにしましょう。

二十歳で王になったアハズ(16:2)は、南の王国の「ユダの家」がイスラエルの王たちと同じ罪を犯すようにしたとして非難されています(16:3)。彼は、自分自身の息子に「火の中を通る」ようにさせています。更に、偶像崇拝に陥っています。

この時のイスラエルの王は、レマルヤの息子ペカでした。

ユダ族が偶像崇拝に陥った結果、神は、イスラエルとその同盟国のシリアを使ってユダ族の人々(ユダヤ人)を攻撃させておられます。

5節に注目しましょう:「そのころ、シリアの王レツィンと、イスラエルの王レマルヤ息子ペカがエルサレムを攻めようとして上って来た。彼らはアハズを包囲したが、彼に勝つことはできなかった」。

この記述では、イスラエルの10部族から成る北の王国がシリアと同盟を結んで、エルサレムのアハズ王が支配する「ユダの家」に対して戦争をしかけています。

ここでは、イスラエルの人々とユダの人々との戦争が明瞭に記述されています！

これは、「ユダヤ人」という言葉と「イスラエル人」という言葉が完全に同義語ではないということを示す聖書の確かな証拠です。

歴史書である列王記上下と歴代誌上下の4書を読めば、聖書をそれほど熱心に読まれていない方も、これらの旧約の4書が、10部族から成る北の「イスラエルの家」と南の「ユダの家」(ユダヤ人)の歴史を、独立した別個の国家史として扱っていることを理解されるでしょう。

この状況は、何世代にもわたって続いています。

神のダビデとの契約

アメリカ人と英国人の国家的な身元に関する極めて重要な物語の筋道が、神のダビデとの契約に見られます。

その理由をお尋ねですか？ 思い起こして下さい！ 神は「王権ユダを離れることはない」と約束されています。南のユダ王国の長い支配者の系図の中で初代の王になったレハベアムの祖父にあたるダビデは、神から無条件の約束を与えられています。

ダビデとの契約は、長子相続権の約束 — 民族の約束 — とは関係がありません。それよりも、

王権の約束 — 神の恩寵の約束 — キリストが誕生することになる家系に関係しています。

神のダビデとの契約について十分理解するには、サムエル記下7章を読んで下さい。

特に、12章から17章に注目して下さい：「あなたが生涯を終え、先祖と共に眠るとき、あなたの身から出る子孫に跡を継がせ、彼の王国を樹立する。

「彼はわたしの名のために家を建て、わたしは彼の王国の主座をとこしえに堅く据える。

「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。彼が過ちを犯すときは人間の杖、人の子らの鞭をもって彼を懲らしめよう。

「わたしは、慈しみを彼から取り去りはしない。あなたの前から退けたサウルから慈しみをとり去ったが、そのようなことはしない。

「あなたの家、あなたの王国は、あなたの行く手にとこしえに続き、あなたの王座はとこしえに堅く据えられる。

「ナタンは、これらの言葉をすべてそのまま、主の言葉のとおりダビデに告げた」。

イエスキリストの系図は、如何にして神がダビデとの約束を守られたかということを証しています。ルカ書3章23-38節を読むと、養父ヨセフからアダムまで遡るイエスの「正式」の系図が分かります。31節と32節には、ダビデの父エッサイとダビデ自身が含まれています。

毎年、「クリスマス」の時期になると、幼い子供たちは、天使によるイエスキリスト生誕の告知

を復唱することを教えられます。無数の人々が毎年、この告知の言葉が復唱されるのを耳にします。しかし、その意味を本当に理解している人はいないようです。

天使は聖母マリアに言いました：「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。

「あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。

「その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼はヤコブの家をとこしえに治め、彼の王国は終わることがない」(ルカ書1:30-33)。

この聖句は私たちに何を語っているのでしょうか？

これは、靈感に満ちた神の言葉による明白で絶対的なメッセージを通して、キリストが再臨されるその時まで、国家支配の地位を意味するダビデの王権が依然として有効な王権であり続けることを告知しているのです！

注目して下さい！：「見よ、このような日が来る、と主は言われる。わたしはダビデの系図から

正義の若枝を起こす。一人の王が治め、栄え、この世で裁きと正義の業を行う。

「彼の代にあって、ユダは救われ、イスラエル〔異なる国〕は平安に暮らす。彼は『主は私

たちの正義』という名前と呼ばれる」(エレミヤ書23:5,6)。

エレミヤ書の預言は、この世の千年支配のためにイエスキリストが再臨されることを記述しています。その言葉は、明らかに、主の父ダビデの王座を継承されるイエスのことを述べています。

それは、ダビデからイエスキリストに至るまでの系図を強調し、そして、キリスト再臨によってやっと訪れるユダヤ人の救済に関するパウロの預言〔ローマ人への手紙11章〕の成就について語っています。

エレミヤ 30章の8節から 11章を読みましょう！

神は、ここで、捕らわれのイスラエルの首から「くびきを砕く」という約束をされ、そして復活の預言をされています。

「彼らの首からくびきを砕き、縄目を解く。再び異邦人が彼らを奴隷にすることはない。

「彼らは、神である主と、わたしが立てる王ダビデに仕えるようになる。

「わたしの僕ヤコブよ、恐れるな、と主は言われる。イスラエル(ヤコブ)よ、おののくな。見よ、わたしはあなたを遠い地から、あなたの子孫を捕囚の地から救い出す。ヤコブは帰って来て、安らかに住む。彼らを脅かす者はいない。

「わたしがあなたと共にいて救う、と主は言われる。あなたが散らされていた国々を、わたしは滅ぼし尽くす。しかし、あなたを滅ぼし尽くすことはない…」(エレミヤ書30:8-11)。

ダビデの王権、キリストが再臨される時に依然として存在しているのです。ダビデ自身も、その時には復活して、王の王、主の主であるイエスキリストの権威の下でイスラエルの12部族を支配する王座に就いているでしょう。

イエスキリストは、「父ダビデの王権を継承する」ために再臨されることが預言されています。これは、王権が依然として存在することを証しています。

追放されたイスラエルの10部族

何世代にもわたって、神は、頑固で反抗的なイスラエルの10部族に律法を諭しておられます。神は、週ごとの安息日を神とその民と永久のしるしとされてきました(出エジプト記31章)。神は、彼らに、厳粛な過ぎ越しの祝いで始まる年ごとの安息日についても明らかにされています(レビ記23章)。この過ぎ越しの祝いは、イスラエルの人々がエジプトでの隷属から脱出して故郷の土地に戻り国家となった時に定められた祝日です。

神は、安息日を人のために定められたということを明らかにされています — 「ユダヤ人」のためではありません(マルコ書2:26-27)。安息日は、神が7日目に休まれて、それを聖なる日とされた(聖なる目的のために聖別された)ことにより定められたのです(創世記2:1-3)。それは、

試金石的な掟であり(出エジプト記16:28)、シナイ山で十戒が与えられるよりも遥か以前にイスラエルの人々に啓示されて課せられた掟です！

だからこそ、神は言われたのです：「安息日を忘れずに、これを神聖なものとして守りなさい…」

(出エジプト記20:8-11)。安息日は、神聖な時でした。神は、その日に休まれた時に、その日を

聖別され、その日を大いなる祝福としてイスラエルの人々に与えられたのです。それは、7日

ごとの完全なる安息の1日 — 神のことを喜び、祈り、学び、礼拝し、そしてくつろいで英気

を養う1日 — 平日の仕事を休止し、創造主としての神に感謝する1日です！

神は安息日は天地創造を顧みて、キリストの千年支配の未来を展望する日であることを示され

ています。それは、神の7千年計画の図面です：その6千年間は、人間の苦しみ、混乱、卑劣さ、

貧困、病気、戦争による教訓を記録し — 人間は神から離れては自己を律することが完全に

不可能であるという永遠の教訓を人間の心に刻み込むために、人間に与えられているので

す！神は、罪深い人類に、神が7番目の千年間をどのように支配するか示してくださるでしょ

う。それは、一種の安息日とも言えるキリストの千年支配です(黙示録20:4)！

一般的には悪の支配者が最初にすることは、神の安息日を拒否し、年ごとの神の神聖な日、つ

まり年ごとの安息日を無視することでした。この年ごとの安息日は、全部で7日ですが、偉大な

神の計画 — この世で神が成し遂げようとされている偉大な目的 — を象徴しています！

神がイスラエルの人々に過ぎ越しの祝いを啓示されたのは、エジプトが大きな疫病が襲われて

いる最中の事でした！神は、この世で経済的・軍事的に最も偉大な国家の力を弱められまし

た。エジプトは、古代のこの時代以降は決して大国家ではありません。これは、偶像崇拜に走り、

神から離れ魔王サタンやその悪を受け入れた人々に近づき、幼児を生け贄の犠牲にし、あらゆる

倒錯に陥ったすべての国家に起こることです。それを神が示されたのです。

神の律法に従うことで、神は、その民を病気や負債から守ることを保証されるのです！彼らは、

ビジネスに成功し、良い職に就き、健康を維持し、幸せな結婚をし、豊作に恵まれ、しかる

べき時期には雨が降り、健康な赤ん坊に恵まれるのです！彼らは、その土地で平安に暮らし、

貪欲な隣人や攻撃を企む者を恐れ心配することがありません！申命記28章とレビ記26章を

読んで下さい。ここには、神への恭順に対する大きな祝福と反抗に対する大きな呪いという

正反対の2つの事が、はっきりと記されています！

神の新国家の歴史については、イスラエルの人々が約束の地に入った時のことを記したヨシュア記、および神の下における神権政治に似た神の裁きを司る士師たちの時代を記した士師記に説明があります。この時代は、サムエル記上下に記述されているように、他国と同じように、自分たちを支配する王を求めるといふ反抗によって最後を迎えます。その王がサウルです！

サウルの下で、イスラエルの人々は、重税を課せられます。若者は徴兵され、戦争が起こり、人々には真の平和がありませんでした。

サムエル記上下には、サウルの支配、彼の不道徳な性格のことが記述されています。サウルは、魔女はすべて死刑にするか国外追放するという国王令を発しながら、一方では、その時には死んでいたサムエルからメッセージを受け取ろうとして悪名高いエンドルの魔女(霊媒)に頼るのです。サウルは常に、ダビデの軍事力名声に嫉妬して彼を殺そうとしています。

やがて、ダビデ王が王位に就き、王国は拡大します。ダビデの後には、息子のソロモンが続き、神殿が建立されます。そして、王国はさらに拡大し、全盛期を迎えます。それは、当時の世界では、豊かな繁栄と活気に満ちた最も偉大な国家でした。

ソロモンの治世には、遠く離れたイングランドで金属が採掘されています。ソロモンの船は、大西洋を航海し、アフリカ海岸を周航しています。そして、インドやアフリカから孔雀のような始めて見る珍しい鳥や動物を持ち帰っています。エジプトのハトシェプスト(エジプト第18王朝の女王:1512?-1482b.c.)と思われるシバの女王は、エルサレムで、テラス状の庭、噴水、荘厳な神殿などの建造物、豪華な家屋、金銀宝石などのすごい宝物を見て圧倒されています。

しかし、ソロモンは、老齢になってから墮落します。彼は、多数の妻と側室が信じる多神教の神々を祭る神殿を建立し、政務を顧みず、他の勢力を優勢にしていきました。その結果、ソロモンの臣下の一人であったヤロブアムによって、北の10部族は、ユダ族およびエルサレム周辺でユダ族と連合関係にあった(国境を接していた)レビ族、シメオン族、ベニヤミン族の一部と内戦寸前になります。

王国は分裂し、ヤロブアムが北のサマリアに臨時政府を樹立します。一方、ソロモンの息子レハベアムは、ユダ族の王としてエルサレムで王権を維持します。

この時点で、はっきりと異なる2つの国家が形成されたのです。北の「イスラエルの家」はヤロブアムの下でサマリアを首都としユダ族の大部分は多数のレビ族とシメオン族と共に「ユダの家」を構成してエルサレムを首都としました。北の10部族の人々は、決してユダヤとは呼ばれたことはありません！「ユダヤ」とは、ユダ族の人々のことです。ユダヤという言葉の語源は、ユダです。

ここで、イスラエルの人々がレハバアムの悪意の支配に反逆した直後に起こったことに注目しましょう：「ヤロブアムは心に思った。この王国は、再びダビデの家〔神が王権の契約を通して

て約束した系図；民族ではなく、神の恩寵の約束〕のものになるだろう。この民が生け贄を献げるためにエルサレムの主の神殿に上るなら、この民の心は再び彼らの主に、そしてユダの王レハバアムにさえ向かうだろう。そして彼らは、わたしを殺して、再びユダの王レハバアムのもとへ帰ってしまうだろう」（列王記上12:26-27）。

エルサレムは、以前の国家の文化的・経済的・精神的な首都でした！そこには、世界中で最も壮麗な建造物である神殿がありました！何十万もの人々が、この神殿を訪れ、神に生け贄を献げ、神を礼拝することを、生涯の思い出になる真の巡礼の旅であると考えていました。では

何時、彼らはそのような巡礼を行ったのでしょうか？それは年ごとの安息日です。この時、

彼らは祝祭のため蓄える収入の十分の一(人々が自分自身のため、家族のために蓄えて

いた「第二の十分の一税」のようなもの — 彼らがこの特別な目的のために蓄えること

を命じられていた年間所得の10パーセント！)を使うことが出来たのです(申命記

14:22-26を参照)。

ヤロブアムは、人々の精神的・社会的・文化的・経済的な結びつきがエルサレムにあることを認識

していました。そこで、彼はどうしたのでしょうか？彼は意図的に、偶像崇拝に頼ったので

す！ペテン師的な「精神的」指導者らしく、ヤロブアム王は相談して、2体の黄金の子牛を造り、人々に言いました：「エルサレムに上ることは、あなたたちにとって余りにも大変なこと

だ。見よ、イスラエルの人々よ、これらは、あなたたちをエジプトから導き出したあなたたちの神々である。

「彼は、一体をベテル(創世記28:19を参照;古代パレスチナ中部の都市)に、もう一体をダン(古代パレスチナ北端の都市)に置いた。

「この事は罪となった。人々はその一体の子牛を礼拝しに行きました。ダンにまで行きました。

そして彼は、高台に神殿を設け、レビではない最も資格のない民の中から祭司を任命した。

[この神殿は、アスタルテ(フェニキアの豊穡・性愛の女神)とイシュタル(アッシリアとバビロニアの豊穡・性愛の女神:アスタルテと同一)の偶像の下で礼拝するための神殿です;一般的には、木の幹、石、または金属のオベリスクを用いた男根象徴の「アシュラ像」を配した神殿]。

「ヤロブアムは、第8の月に祭りをを行うように定めた」(列王記上12:28-32)。

ヤロブアムは何をするにしても、それは政治的な便宜主義によるものでした。ここには、冷笑的な男ー真の神に従うことを一瞬たりとも信じることも願うこともしない男ーがいたのです！何故だったのでしょうか？

そもそも、ヤロブアムが担ぎ出されたのは、ソロモンの罪の故でした。彼は、北の10部族を受け継ぐようになると言われるのです！これについては、列王記上11章を読んで下さい。神の預言者が、着ていた外套を12切れに引き裂き、ヤロブアムにその10切れを渡して言うのです：「わたしはソロモンの手から王国を裂いて取り上げ、十の部族をあなたに与える。(しかし、一部族だけは、わが僕ダビデのゆえに、またわたしが全部族の中から選んだ都エルサレムのゆえに、ソロモンのものとする)。わたしがこうするのは、彼らがわたしを捨て、女神アシュトレト[異教の豊穡・性愛の女神でイシュタルやアシュタルテと同一]を拝み、...わたしの道を歩まず、わたしの目にかなう正しいことを行わず、父ダビデのように、わたしの律法や裁きを守らなかったからである。...わたしは彼の息子[ソロモン]の手から王権を取り上げ、それを十部族と共にあなたに与える。...あなたがわたしの命じるすべてのことに聞き従い、わたしの道を歩み、わたしの目にかなう正しいことを行い、わが僕ダビデと同じように律法や裁きを守らなれば、わたしはあなたと共におり、ダビデのために家を建てたように、あなたのためにも堅固な家を建て、イスラエルをあなたのものである」(列王記上11:31-38)。

ここでは再び、契約は条件付きです。ヤロブアムが神の律法に忠実で、神が選ばれたイスラエルの人々の正義にかなった模範になるならば、彼は、神の祝福を受けることになるでしょう！彼の子孫は、王権を維持することができるでしょう。

しかし彼は、そうしないで、人間的な思考をして政治に頼ったのです。彼は、アブラハムのようには真に神を信じていませんでした。彼は、権力、地位、金銭的なこと、要するに物質的なことしか考えていなかったのです！彼は、自己に執着して、自我や虚栄心の虜になっていました！

ひとりよがりの独裁者と同じように、彼もまた偏執的な人間だったのです！自分と自分の地位に脅威となる可能性のある理性的な人間を「権限」のある地位に就けることを恐れて、まったく非理知的で最も資質に欠けた人物を祭司に仕立てています！

今や、10部族で構成されるイスラエルの人々は完全に、不誠実な権力狂で利己的な政治家の掌中に握られたのです！今や、その凡庸さ — 教養・人格・資質を欠如した野蛮性 — のゆえに選ばれた「ヤロブアムの家来たち」が、イスラエルの人々の指導者たちになっていました。人々が精神的にエルサレムを慕っている状態が続くと自分が、権力を失うと考えて、彼は、あらゆる巡礼の理由を否定しようとします。彼は、黄金の子牛を造って、ダンとベセルに置きますが、これは、神が忌み嫌う偶像崇拜です。それでも、彼は満足しませんでした。人々が第7の月に仮庵の祭りを祝う習慣が定着したと判断して、この神の掟さえ変更しようとしています。彼は、代わりの祭り — 第8の月に現存する神ではなくアシュトレトを祝う祭日を設けています。

それから間もなく、神は、その極悪な罪について強力な証人をヤロブアムに遣わされます。神は、預言者を送り、ヤロブアムに警告します。彼はその時、偶像崇拜の祭壇に立って香をたいていました。預言者は、ヤロブアムと祭壇を非難して言いました：「...祭壇よ、祭壇よ、主はこう言われる。『見よ、ダビデの家に男の子が生まれる。その名はヨシアという。彼は、あなたのために香をたく高台の祭司たちを、あなたに生け贄としてささげ、人の骨をあなたのために焼く』(列王記上13:2)。

この列王記上第3章を読んで下さい！ヤロブアムは、尊大に手を伸ばして預言者を指し示し彼を捕らえるように召使たちに命じた時、彼の手は干からびた木の枝のように萎びてしまうので

す！彼は仰天して悲鳴を上げます！突然、祭壇が裂け、灰があたりに飛び散ります！祭壇は、神業により破壊されたのです！

ヤロブアムは、衝撃を受けて、恐れ、怯えます！彼は懇願しました：「どうか、あなたの神、主にお願いをして、手が元に戻るようにわたしのために祈ってください」(列王記上13:6)

多くの罪びと同様に、彼も、神について知っていたのです！自分の罪で困難に直面した時、彼は、必死で神に救いを求めています！彼は、完全に自己憐憫の情を持ち合わせています！

ここで、彼が預言者に向かって「主なる私の神」とは言わずに「あなたの」神と言っていることに、注意して下さい。

彼の手は元に戻ります。しかし、うそに騙されて神の声に逆らったことで、この預言者がライオンに殺された後でさえ、ヤロブアムは聖書に述べられている通りでした：「この出来事の後でも、ヤロブアムは悪の道を離れて立ち返ることがなく、引き続いて最も資格の無い民の中から高台の祭司たちを任命した。誰でも志願する者を聖別し、高台の祭司の一人にした。このことが、ヤロブアムの家の罪になり、その家は切断され地の面から滅ぼされることになった」(列王記上13:33-34)。

想像して下さい！神が、内乱に近い状態になったことを許され、ヤロブアムに北の10部族を与えられることを預言され、神に従い神の律法の道を歩むように警告されたにもかかわらず、更に、神がその背信行為を警告する預言者を遣わされたにもかかわらず — 依然として、彼は悔い改めることを拒んでいるのです！

こうして、神は、彼を滅ぼすことを決意されたのです。これとは正反対に、神は、アブラハム、イサク、そしてヤコブとの約束は成就されるでしょう！神は、ダビデへの約束を成就されるでしょう！イスラエルの王座に座る資格を有するダビデ王の後継者は、決して躓くことはないでしょう！

ヤロブアムの硬直した政策は、浪費家、放浪者、やくざ者、社会のくずを祭司職に任命しています！いまや、イスラエルの人々は完全に腐敗した指導者たちに支配されていました！

ヤロブアムは、22年間支配した後、息子^{むすこ}のナタブが跡^{あと}を継ぎましたが、彼も偶像崇拝^{ぐうぞうすうはい}を続けました。イスラエルの歴史^{れきし}は、神^{かみ}の律法^{りっぽう}に立ち返ること — 人々が神^{かみ}の掟^{おきて}を守り、彼らもその子孫^{しそん}も正しく歩むこと — を絶えず求める神^{かみ}の願いに満ちています。中には、少数^{せうすう}の正しい支配者^{しはいしや}もいます。たとえば、ヨシアは、偶像^{ぐうぞう}を崇拝^{すうはい}するバール神^{しん}の預言者^{よげんしや}たちを滅ぼし、そのことを主に祝福^{しゅくふく}されています。しかし、彼はダンとベセルの黄金^{おうごん}の子牛^{こうし}を破壊^{はかい}することはしませんでした。

神^{かみ}は何度も何度も、罪深い頑固^{つみぶか がんこ}なイスラエルの人々^{ひとびと}を完全に滅ぼすこともできたでしょう！
何故^{なぜ}、神^{かみ}はそうされなかったのでしょうか？

その理由^{りゆう}は、次の通りです：「シリアの王^{おう}ハザエルはエホアハズの時代^{しだい}に、絶えずイスラエルに圧迫^{あっぱく}を加えた。

「しかし、主^{しゅ}はアブラハム、イサク、ヤコブと結んだ契約^{むす けいやく}のゆえに、彼ら^{かれら}を恵み^{めぐ}、憐れみ^{あわれ}み、顧みて、彼ら^{かれら}を滅ぼそうとはされず、この時まで、主^{しゅ}の御前^{ごぜん}から捨てることはなさなかった！」（列王記下13:22,23）。

神^{かみ}は、アブラハムに無条件^{むじょうけん}で約束^{やくそく}をされていたのです！イスラエルの人々^{ひとびと}を彼らの土地^{とち}から追

放^{ほう}することを「この時まで」容赦^{ようしや}されてきた神^{かみ}の恵み^{めぐ}は、彼らに義^ぎがあるからという理由^{りゆう}によるものではなく、神^{かみ}がアブラハムに与えられた約束^{やくそく}を守るためでした！

しかし最終^{さいしゅうてき}的には、神^{かみ}は、罪深く、反抗^{つみぶか}的で、傲慢^{はんこうてき}なイスラエルの人々^{ひとびと}に対する神^{かみ}の裁き^{さば} — 本^{ほん}当^{とう}に幾世代^{いくせだい}にもわたって預言者^{よげんしや}を通して繰り返し彼らに警告^{けいこく}されていた裁き^{さば} — を実行^{じっこう}されます。

神^{かみ}はこのように警告^{けいこく}されていました：「しかし、わたしの言葉^{ことば}を聞かず、これらすべての律法^{りっぽう} [彼ら^{かれら}の幸福^{こうふく}のために与えられた戒め^{いまし}] を守らないならば、また、わたしの律法^{りっぽう}を拒否^{きよひ}したり嫌悪^{けんお}したりして、わたしの律法^{りっぽう}をすべて実行^{じっこう}せず、わたしの契約^{けいやく}を破るならば、

「わたしは必ずあなたたちにこうする。すなわち、あなたたちに恐怖^{きょうふ} [不安^{ふあん}、心配^{しんぱい}、悩み^{なや} — 心^{こころ}の平静^{へいせい}・安定^{あんてい}の欠如^{けつじょ}]、肺病^{はいびょう} [肺炎^{はいえん}、インフルエンザ^{けつかく}、肺気腫^{はいきしゅ}、肺がん等の病氣^{びょうき}]、視力^{しりよく}を衰えさせる熱病^{ねつびょう} [失明^{しつめい}の原因^{げんいん}に] にもなる天然痘^{てんねんとう}、水疱瘡^{みずぼうそう}、特^{とく}にはしか等の様々^{さまざま}な病氣^{びょうき}] をもた

らす。あなたたちは種を蒔いても空しい。敵がそれを食べ尽くすからだ。

「わたしは断固としてあなたたちを攻める。それゆえ、あなたたちは敵に滅ぼされ、あなたたちを憎む者に支配され、追撃する者もないのに逃げ去ることになる。

「このような目に遭ってもまだ、わたしの言葉を聞かないならば、あなたたちの罪に七倍の罰を加えて懲らしめる」（レビ記26:14-18）。

神は、この厳粛な警告 — イスラエルの国家的な犯罪に対して 7倍の罰を加えるという警告 — を 4回も繰り返しておられます！この 26章を全体を読んで下さい！更に、同様の記述の

ある申命記28章も一読して下さい。ここでは、神はまず、イスラエルの人々が義の報酬が得

られるように生きるなら、彼らにとって良き事である神の律法に従って生きるなら、神が惜し

みなく彼らに与えてくださることになる素晴らしい祝福の数々について語っておられます！

神は、豊かな収穫を約束されています。畑は耕すと直ぐに豊作となり、健康で幸福な赤ん坊、

健全で愛情豊かな婚姻、仕事での成功に恵まれます。また、徴税や徴兵もなく、平和で、敵や

戦争の恐怖もありません！

神は、神の律法がこれらの信じ難い出来事をすべて実現する鍵であることを示されています。

律法は、実行することで、これらの素晴らしい祝福の成果をもたらす生きた法律であり、決定的

に重要な原則なのです！ある意味で、律法は自律的です。それでも神は、積極的に介在する

こと — 恭順な人々に対して約束された偉大な祝福を直接与えられること — を約束されています！

人間だれしも望むことは成功、繁栄、幸福、充実感、安寧、満足 — 愛情、喜び、刺激、

健康、これらを享受する長寿 — でしょう。神は、イスラエルの人々に、こうしたこと —

分別のある人なら本心から欲しいと願うこと — をすべてすべて約束されたのです。

しかし、もしイスラエルの人々が神の律法を捨てた場合 — 主の安息日を破り、律法に背き、異教の偶像を立て、周囲の異教の嫌悪すべき習慣に従う場合 — 神はその罪に対して7倍の罰を加えると言われました！

聖書における「時間」について

神は、イスラエルの人々が約束の地を得るためにヨルダン川を渡るのに先立って、約束の地に偵察隊を遣わされました。そして、彼らは、40日間偵察しました。

それから、神が、約束の地に入ることをモーゼに拒まれた後、 — 不満や不平を口にする反抗的なイスラエルの年長者たちが約束の地に入ることを拒まれた後、 — 神は、約束の相続を40年間遅らせることを告知されます！

神は、偵察に遣わしたものがその土地でさまよった各一日を一年とすることを説明されました：

「しかし、あなたたちは死体となってこの荒れ野で倒れる。

「あの土地を偵察した四十日という日数に応じて、一日を一年とする四十年間、あなたたちの罪を負わねばならない。あなたたちは、私に対する違反[反抗、離反]の意味を知ることになるだろう！」（民数記14:32-34）。

神は明らかに、苦い教訓を与えるために、更に40年間の苦難 — 約束の地を相続するという特権を奪われて放浪すること — をイスラエルの人々に課せられたのです！

ここで注目して下さい！神は、預言者エゼキエルに1枚の粘土板の上に包圍するエルサレムを描くように言われた時、さらにこう言われました：「自ら鉄の板をとり、それを自分と都との間の壁とし、あなたの顔をしっかりと都に向けなさい。こうして都は包圍される。あなたがそれを包圍するのだ。これはイスラエルの家のしるしとなる！

「左脇を下にして横たわり、イスラエルの家の罪を負いなさい。あなたは、彼らの罪に応じた日数の間、横たわってかれらの罪を負わなければならない。

「わたしは彼らの罪の年数を日数にして、三百九十日と定めた。あなたは、このイスラエルの家の罪を負わなければならない」（エゼキエル書4:3-5）。

神は更に、ユダの家についても言われています：「...ユダの家[イスラエルの家とは異なる独立国家！]の罪を四十日負わねばならない。各一日を一年として、それをあなたに課す」（エゼキエル書4:6）。

預言を年代順に理解する鍵は、神の使用されているカレンダーです。神は、異教徒は異なるカレンダーで計算されていることを私たちに教えておられます。黙示録12章6節、14節および13章5節を読んで下さい。ここには、次の3つの数値がでています：「千二百六十日」（1260）；「一年、二年、半年」；「四十二ヶ月」。

これらの数字は、古代史における1,260年という時の長さ、その時にはまだ未来である文字通りの3年半のことを述べています！簡単な計算をすると、神は預言における時間を以下のようにして計算されていることがわかります。

- (1) 預言における一年は正確に360日に相当
- (2) 預言における一ヶ月は30日に相当
- (3) 預言における一日は預言の成就における一年を象徴

42ヶ月、1,260日、および3年半はすべて、同じ時の長さということになります。

これは、イスラエルの家の罪を負うこと — 国家的偉大さ、神がアブラハムの子孫に約束された豊かな相続財産を奪われたこと — に関する「7倍」の意味を理解する鍵になります！

あとで見るように、これらの不思議な国家に対する7倍の懲罰は、見事に実現しているのです。それも、その多くがごく最近の世界史において実現しているのです！

ここで、神がイスラエルの人々を約束の地から追い出された理由に戻りましょう！

正しい見方をするには、列王記下17章全体を読む必要があります。ここに、その一部を引用します：「ユダの王アハズの治世第12年に、エラの子ホシェアがサマリア[北の10部族が構成するイスラエルの首都]でイスラエルの王となり、九年間統治した。

「彼は主の目に悪とされることを行ったが、彼以前のイスラエルの王たちほどではなかった。

「アッシリアの王シャルマネセルが攻め上って来たとき、ホシェアは彼に服従して[アッシリア帝国の圧倒的な軍事力にあっさりと降伏して、「衛星国家」の臣下のようになります]、貢ぎ物

を納めた[莫大な身代金を支払い、国家財源を空にし、国家の経済力を放棄したのです！]（列王記下17:1-3）。

この時、ホシェアは、主なる神以外に考えられるあらゆる救済手段に頼ろうとしています！

彼は、必死で、（当然のことながら、合衆国や英国がするのと同じように）外国の同盟国を見出そうとします：アッシリアによる恐ろしいイスラエルの搾取を何とか食い止めることのできる協定、相互援助条約、不可侵条約、複数の国家で構成する機構、等を求めています。

「しかし、アッシリアの主は、ホシュアが謀反を企てて、エジプトの主ソに使節を派遣し、アッシリア王に年ごと贈り物[金銭の強要；貢ぎ物]を納めなくなったのを知るに至り、彼を捕らえて牢につないだ！」（列王記下17:4）。

想像して下さい！5千人の中の5人を除いてすべてを逃げ去るようになる力があると神が言われた国家 — 神がアブラハム、イサク、ヤコブに約束された偉大な国家である「イスラエルの家」 — が今や、弱小国に成り果てたのです。臆病で、震えおののき、恐れる彼らは、アッシリアの軍事力の前にひれ伏したのです！彼らの王は、（神ではなく）多神教の異教徒エジプト人に弱々しい援助を求めた後、牢につながれるのです！何たる不名誉！何たる不面目！

これはすべて、紀元前721年に起こった出来事です。それから3年間の紀元前721～718年にかけて、アッシリア軍がサマリアを包囲しています。

ホシュアの治世第9年（718 B.C.）には、アッシリアの侵略軍が連続的に侵攻してますます多くのイスラエルの領土を征服し、大量の捕虜をアッシリアに連れ帰りました。それは、現在の黒海とカスピ海に挟まれた地帯です。こうして、北の10部族のイスラエルの首都サマリアは崩壊しました。

「ホシュアの治世第9年に、アッシリアの王がサマリアを占領した。彼は、イスラエルの人々を捕らえてアッシリアに連れて行き、ゴサン川の畔にあるヘラとハボルの町、およびメデスの町々に住ませた。

「こうなったのは、イスラエルの人々が、彼らをエジプトの地から導き出し、エジプトの王ファラオの支配から解放した彼らの神である主に対して罪を犯し、他の神々を畏れ敬い、主がイスラエルの人々の前から追い払われた異教の悪習と、イスラエルの王たちがもたらした悪習に

したが 従^{あゆ}って歩んだからである。

「イスラエルの人々は、自分たちの神が、主に対して正しくないことをひそかに 行い、見張りの塔から要塞都市にいたるまで、すべての町に聖なる高台を建てた[男根象徴のアシェラ像を 拝む場所;現代的な教会の尖塔に見られるような直立したオベリスクや棒状の形をしたもの]。

「どの小高い丘にも、どの茂った木の下にも、偶像[イスラエルの周辺諸国の異教のセックスシンボルのアシェラ像]や柱[古代ヘブライ語では、男根象徴としての棒くいの林立を含意]を立て、主が彼らの前から連れ去られた異教の民と同じように、すべての高台で香をたき、悪を行って主の怒りを招いた。

「主が『このようなことをしてはならない』と言っておられたのに、彼らは偶像に仕えたのである。

『主は、すべての預言者、すなわち先見者を通して、イスラエル[北の10部族のイスラエル]にもユダ[エルサレムを首都とする南のユダヤ人の国]にもこう警告されていた。『あなたたちは、悪の道を離れて立ち返らなければならない[悔い改めること!]。わたしがあなたたちの祖先に授け、またわたしの僕である預言者たちを通してあなたたちに伝えたすべての律法に従って、わたしの戒めと掟を守らなければならない』。

「しかし彼らは聞き従うことなく、自分たちの神である主を信じようとしなかった祖先たちと同じようにかたくなであった。...そして、彼らは息子や娘に火の中を通らせ[幼児の生け贄! 憎むべき風習]、占い[霊界との交信、悪霊・魔女・悪魔の探求、タロットカード・水晶球・てそう手相による占い、占い杖による水脈探査、星占い、等々のあらゆる種類の降霊術や悪魔の風習]やまじないを行い、自らを売り渡して主の目に悪とされることを行い、主の怒りを招いた。

「主はイスラエルに対して激しく 憤り、彼らを御前から 退け、ユダの部族しか残されなかった」(列王記下17:6-18)。

どれほどの人々がこのことをご存知でしょうか？まさかと思われるでしょうが、無数の「叙任された聖職者」が、「イエス」や「救済」のことを語る彼らが、合衆国や英連邦諸国の身元について 完全に無知なのです。イスラエルと「ユダヤ」とは同じではなく、イスラエルの家は

捕らわれの身となり彼らの土地から完全に追放されたこと — キリスト誕生700以上も前

の紀元前718年の昔にはユダヤ人であるユダ族の人々がパレスチナの土地に残る唯一の部族であったこと — を知らないのです！

何千人もの人々が、聖書の歴史に**完全に無知**なのです。それ故、彼らは**預言**に無知なのです！

彼らは、聖書の預言を理解するために最も重要な**鍵**となる — 世界で最も偉大な国家のアメリカ合衆国の身元に関する知識 — を持たないのです！

多数のベストセラー本が、予想される未来の出来事について無数の人々に情報を提供していると主張しています。無数の人々が、「世界の終末」、「黙示の書」、「ハルマゲドン」或いは「獣の像と刻印」などの書名がついた本を読んでいます。

無数の人々が、未来が何をもたらすか知っていると信じています。「獣」が合衆国であると信じている人々もいます(ばかばかしくて、嘆かわしい誤解！)。無数の人々が、アメリカ人は異邦人の「ゴメル族」であると信じています！

イスラエルの家とユダの家のそれぞれ**独立**した国家史、イスラエルの人々が追放されて捕われの身になったこと、その後かれらの身元が歴史の中で失われたこと、彼らが国家の相続権を剥奪されている間に**7倍**の罰の期間が過ぎること — こうしたことについて知っている聖職者は、1パーセントもいません。

それ故に、無数の聖職者が、聖書における英国と合衆国の本当の身元を知ることが出来ないのです。**神**がアメリカ人に対して繰り返された警告を知ることが出来ないのです。

この極めて重要な知識に**無知**のままでは、**神の言葉の真のメッセージ**を伝道することは出来ません。**神の民を見守る番人の職務に就くことはできません！**

無数の聖職者が「イエスについて」伝道しています。彼らは、クリスチャンの生活、様々な教義についての考え方、哲学、社会的価値観、などについて雄弁に説教することが出来ます。彼らは、過去の素晴らしい伝道者の説教を引用し、素晴らしい言葉で聴衆を感動させることが出来ます。彼らの多くは、著名な伝道者となり、「成功」について語り、「プラス思考」の考え方

を強調しています。彼らの説教の幾分か、あるいは多くは、日常生活のレベルでは役にたちます。しかし、聖書のすべての預言を解き明かす最も重要な鍵について無知でいるならば、将来起こる事を人々に警告することは出来ません！彼らは殆ど、何が罪であるのかということとは説教しません — 罪とは神の十戒に背くこと（1ヨハネの手紙3:4）であり、罪の報酬は永遠の死であると説教しません！

いずれにしても、神は今、皆様の心に失われた知識 — 無数の人々に隠された情報 — をもたされているのです！聞いていただけますか？耳を傾けていただけますか？ご自身で聖書を探求し、神が命じられたように「すべてのことを検証」（テサロニケ人への手紙5:21）して、最後に理解に達していただけますか？

列王記下17章は、上記で見てきたように、イスラエル国家の腐敗した指導者たちに対する恐ろしい告発です。神は、彼らが絶えず悪事をする以外に何もしなかったと言われています：「...主はついに、その僕であるすべての預言者を通してお告げになっていたとおり、イスラエルを御前から退けられた。イスラエルは、彼らの土地からアッシリアに移され、今日に至っている。「アッシリアの王は、バビロン、クト、アワ、ハマト、セファルワイムの人々を連れて来て、イスラエルの人々に代えてサマリアの町々に住ませた。こうして、彼らがサマリアを占拠し、その町々に住むことになった」（列王記下17:23-24）。

アッシリア人は、大規模な国外退去を実行しました。更に、追放された人々が結束力のあるゲリラ勢力や地下組織を形成できないようにするため、また、アッシリアが内部から脅威を受けることがないようにするために、大規模な再定住化を実施しました。従って、誰が現代のアッシリア人なのかということを理解すると、近代史や未来について非常に視野の広いイメージが掴めるようになります。

さて何故、神は罪深いイスラエルの人々を追放されたのでしょうか？

神は、文字通り幾世代にもわたって、彼らに主の預言者を遣わされていましたが、神は、彼らが神の律法、掟、裁き — 人々の大きな幸福のために与えられている人生の原則 — 顧みるように説得されたのです！

反対に、彼らは絶えず、周囲の異教の国々の偶像崇拜の悪習に走りました！彼らの崩壊する国家は、造反者・浪費家・完全な無資格者で構成される偽りの祭司たちを基盤にしていたのです！彼らの初代の王ヤロブアムは、2体の黄金の子牛（ケルビム）を偶像として据え、神の年ごとの祝祭日を変更し、第7の月に代わって第8の月に祭日を設けたのです！

彼らは、太陽神を崇拜し、冬至（12月25日；タンムズ神の誕生日で、異教の性愛と豊穡を象徴

する宝珠で飾った小さな木を用いた）、イシュタルにちなんで名付けられた春分（異教徒がセックスシンボルのように見えていたユリの花、ウサギ、卵のような性愛と豊穡を象徴するものを用いた）のような自然現象を祝いました。

彼らは、主の存在 — 主が偉大な創造主であること — を心に留める日である神の安息

日を捨てたのです。彼らは、「荒れ野での集会」（使徒行伝7:38）に与えられた主の年ごとの祝祭を捨てたのです！神が意図されている偉大な目的や計画、この世における人間の生命の意味を伝える年ごとの祝祭を捨てたのです！

彼らは、不道德な忌むべき悪習を喜んで受け入れ、アナルセックスや同性愛だけでなく、あらゆる放蕩を許し、助長したのです。彼らの夫婦生活は破壊され、家庭は崩壊しました。家庭を守り、夫婦生活を維持する神の律法が捨てられたのです！いつの間にか、彼らは、幼児を生け贄にすることすらしていました。

最後には、彼らは完全に常軌を逸脱し、邪道に陥ったために、神は彼らを土地から追放されました。彼らの犯罪的習慣が、生活必需品の欠乏、苦難、貧困、不潔、疾病をもたらしたのです！神は、祝福を取り去られました。神は、加護を撤回されました。

彼らは今や、王国としては崩壊したのです。彼らは、国家としては壊滅し、捕らわれの身になり、奴隷として追放されました。

彷徨えるイスラエル — どのようにして彼らは歴史から「失われた」のでしょうか

何十年も過ぎる間に、イスラエルの家を構成していた北の10部族 — ゼブルン族、ダン族、ガド族、ナフタリ族、ベニヤミン族、アセル族、イッサカル族、エフライム族、ルベン族、マナセ族 — がかつて所有していた彼らの土地は荒廃し、アッシリアから強制移住させられた異教のならず者が占拠するようになっていました。

しかし、古代バビロニアの平原では、台頭してきた強国が勢力を拡大し発展していました。チグリス川とユーフラテス川に挟まれた肥沃な大地は、今や日の出の勢いにあるバビロニア帝国の人々が占拠していました。遂に、アッシリア帝国が征服され、混ざり合ったイスラエルの10部族の人々は、昔彼らを捕囚の身にした人々と共に、巨大なバビロニアの勢力から逃れるために遙か北方へと逃げて行っただけです。

オムリ王(在位876-869 B.C.)がサマリアでイスラエルの王位に就いていた時、彼は、北方の多数の異教の王国と通商を拡大しました。彼の名前は、これらの北方の王国の多くで、「フムリ」とか「クムリ」と発音されていました。オムリの「人々」または「家」を意味する名称は、ヘブライ語で「ベト - オムリ」ですが、アッシリア人は、誤って「ビト - クムリ」と発音していました。

多くの人々が、首都サマリアにちなんで彼らを「サマリア人」と呼び始めていました。これが、なまって「シミリア人」とか「シメリア人」(キムメリオス人)とか発音されました。

ダン族の人々は、都市、山、川、半島などの地理的に重要な場所を、彼らの祖先ダンにちなんで名付けることで有名でした。例えば、パレスチナの歴史のごく初期には、ダン族の人々は、北にある「ライシュ」という都市を自分たちの住む土地にしました。この都市は、イスラエルの人々が約束の地に最初に定住した時にダン族の人々が相続した財産の一部でした。彼らは直ちに、そこを「ダン」に改名しました。その後、このダンという名前が歴史の中で定着しました。ソロモンの家臣で北のイスラエル王国の初代の王になったヤロブアムが「ダン」に黄金の子牛の一体を置いたことは、既にお話した通りです。

ダン族の人々は、どこに行っても彼らの名前を残しました。J.H.アレンは、その多くについて詳述しています。中には重要なものもあります。黒海とカスピ海に挟まれた地域を流れる2つの大河に、ドウネイスタ川とドネプル川がありますが、これらの川は、ポーランドと西ロシアの広大な平原を流れて黒海に注いでいます。東に流れて黒海に注ぐヨーロッパの重要な水系

に**ダニューブ**川^{がわ}（別名^{べつめい}、ドナウ川^{がわ}）がありますが、これはラテン語で「**ダ**ンの川^{かわ}」を意味します。ウドン川^{がわ}とドン川^{がわ}もあります。

黒海^{こっかい}の一部^{いちぶ}でもあるアゾフ海^{かい}の北^{きた}の沿岸^{えんがんちか}近くに**ドンエック**（ドネツク）という都市^{とし}があります。「クリミア」半島^{はんとう}は、多分^{たぶん}「シミア」または「サマリア」のなまったものだと考え^{かんが}られます。

ダン族^{ぞく}の人々^{ひとびと}は、重^{じゅう}要^{よう}な河川^{かせん}や地形^{ちけい}を命名^{めいめい}しただけでなく、彼^{かれ}らの古代^{こだい}の祖先^{そせん}の名前^{なまえ}である「エベル」（「ヘブライ」の語源^{ごげん}）と「**ダン**」という名称^{めいしやう}を、中東^{ちゅうとう}からスペインやポルトガル、さらにイギリス諸島^{しやうとう}とアイルランドに至^{いた}る各地^{かくち}に残^{のこ}しています。ダン族^{ぞく}の人々^{ひとびと}の半数^{はんすう}は船乗^{ふなの}りで、パレスチナ^{えんがんち}の沿岸^{えんがんち}地帯^{たい}に住^すんでいました。神^{かみ}による救済^{きゆうさい}の後^{あと}でデボラとバラクが歌^{うた}う勝利^{しょうり}の歌^{うた}の中で、イスラエル諸部族^{しよぶぞく}の歴史^{れきし}が詩的^{してき}物語^{ものがたり}として描写^{びやうしや}されていますが、ダン族^{ぞく}の人々^{ひとびと}については、「...ダンは、なぜ舟^{ふね}で暮^くらしたのか」（士師記5:17）と歌^{うた}われています。

ダン族^{ぞく}の人々^{ひとびと}は、アイルランドに最初^{さいしよ}に到着^{とうちやく}して定住^{ていじゆう}した人々^{ひとびと}の中^{なか}に入^{はい}っています。トゥアーハ・デ・ダナーン（「ダンの部族^{ぶぞく}」という意味^{いみ}）と呼ば^よれる人々^{ひとびと}が最^も初期^{しよき}にアイルランドを開拓^{かいたく}しています。「エブロ」川^{がわ}（「ヘブライ」のスペイン語^{ごはつおん}発音^{はつおん}は「エブレオ」です — 音声学的^{おんせいがくてき}には、「エッ - ブラヒ - オ」です：「エブロ」は「エッ - ブロ」と発音^{はつおん}されます）は、バルセロナ^{なんぽう}の南方^{ちちゆうかい}で地中海^{そそ}に注^いいでいます。スペイン半島^{はんとう}は、古代^{こだい}には「イベリアン」と呼ば^よれていました（これもまた明^{あき}らかに、音声的^{おんせい}に「ヘベル」または「エベル」から派生^{はせい}した名称^{めいしやう}でしょう）。

現代^{げんだい}のスカンジナビア（スカン - **ディン** - アビアン）諸国^{しよこく}の一つに「デンマーク」（**ダン** - マーク）がありますが、この国名^{こくめい}は「**ダン**のマーク」を意味^いします。船乗^{ふなの}りのダン族^{ぞく}の人々^{ひとびと}が各地^{かくち}に移住^{いじゆう}して多^{おお}くの「道標^{みちしるべ}」を^{のこ}残^{のこ}しているのですが、ダン族^{ぞく}の人々^{ひとびと}が今日^{こんにち}の**アイルランド**になつたと信^{しん}じる有^{ゆう}力^{りよく}な根拠^{こんきよ}が存在^{そんざい}します。そうであるならば、（英国^{えいこく}、多数^{たすう}の北西^{ほくせい}ヨーロッパ諸国^{しよこく}、および合衆国^{がっしゆうこく}とは異^{こと}なり、ほぼ 100%カトリック教徒^{きやうと}として残^{のこ}ってきた）アイルランドとイギリスとの間^{あいだ}の長引^{ながび}く対立^{たいりつ} — 過^か去^こ、現^{げん}在^{ざい}、未^み来^{らい}の政治^{せいじ}情勢^{じやうせい} — が、ダン族^{ぞく}が^{おお}大^{だい}きな試練^{しれん}の^{とき}に神^{かみ}の靈^{れい}で刻印^{こくいん}された 144,00人^{にん}（黙示録^{もくしやく}17章^{しやう}を参^{さん}照^{しやう}）に含^{ふく}まれていない理由^{りゆう}を説明^{せつめい}するの^{やくだ}に役立^{やくだ}つかも^しれ^ません。ダン族^{ぞく}の分^{ぶん}は、「ヨセフ」つまりエフライムとマナセに与^{あた}えられているのです。

古代^{こだい}バビロニア王国^{おうこく}が勢力^{せいりよく}を拡大^{かくだい}するにつれて、アッシリア^{あしりあ}の人々^{ひとびと}および彼^{かれ}らに混^まじっている

捕囚の身のイスラエルの10部族の人々は彷徨いながら北方や西方に追いやられて行きました。アッシリアの最有力部族は「ハルマンニ」と呼ばれていました。古代ローマ人たちは、ドイツの地を「アレマンニア」と呼んでいます。今日、メキシコ人やスペイン人は、ドイツを「アレマン」と呼んでいます。単数のドイツ人は、「ウン・アレマン」（ウナレマン）です。

「チュートン」（チュートン人）という言葉は、「槍兵士」という意味に過ぎないのですが、これは古代ローマ人がゲルマン民族の人々に付けた名前です。「ドイツラント」（ドイツ）は、「チュートン」のゲルマン語の発音からきているもので、民族的な起源があるわけではありません。チュートンは、古代ローマ人が中央ヨーロッパや北ヨーロッパで遭遇した戦闘的な人々に付けた大昔の名称です。

最終的には、北のイスラエルの10部族が捕囚の身として去ってから — アッシリアに征服され世界の強国でなくなり、追放されてから — 何十年も何十年も（百年以上も）過ぎてから、南のユダの家は、バビロニアの王ネブカドネザル2世（630?-562 B.C.;紀元前586年にエルサレムを破壊して王と住民をバビロニアに幽閉）に征服されます。これから、「ユダヤ人」は70年の捕囚生活を耐えることになるのです！しかし、今や歴史から失われたイスラエルの

家の10部族と異なり、ユダヤ人たちはパレスチナの地に帰還することが預言されていました。実際、彼らは、ペルシア王キュロクの命令により、エズラ、ネヘミヤ、ゼルバベルに導かれて帰還しています。

最終的には、ごく少数のイスラエルの家の諸部族の人々もパレスチナに帰還したに違いありません。人々は、部族の境界線や国境を越えて往来するのが常ですから、それは当然のことでしょう。更に、イスラエルの家の人々の中にもバビロニア人に捕えられた人々がいて、彼らが70年間バビロニアで捕囚の身にあったユダの家の人々と混ざり合っていたことは、十分に考えられることです。

いずれにしても、失われた10部族の中の誰一人としてパレスチナに帰還しなかったと主張するのは誤りです。何故ならば、ハンナは「アセル族の女性預言者」ですが、パウロは、彼女はベニヤミン族の一人だとはっきりと主張しているからです。しかし、少数の例外は、やはり例外

です。10部族の圧倒的多数は、歴史から失われたのです。今日でさえ、彼らが存在していた地理的な場所や身元は、ほとんど知られていません。

ところで、神のアブラハムへの約束をどうなったのでしょうか？神が約束された絶えることのない王朝は、どうなったのでしょうか？神は、約束を撤回されるのでしょうか？イスラエルは、永遠に失われてしまうのでしょうか？或いは、神が言われたように、7倍の罰の 때가過ぎ去るまで、預言された彼らの国家の継承権が剥奪されることになるのでしょうか？この点について、これから検討することにします。

エレミヤに託された不思議な任務

神がエレミヤを呼ばれた時、神は彼を召された特別な意味を明らかにされました。

「主の言葉がわたしに臨んだ。『わたしはあなたを母の胎内に造る前から、あなたを知っていた。母の胎から生まれる前に、わたしはあなたを聖別し、諸国民の預言者となる運命を定めた』」（エレミヤ書1:4,5）。

神はそれからエレミヤに次の言葉をもって委任されたのです：「見よ、今日、あなたに諸国家および諸王国の上に立つように任命する。根こそぎにし、解体し、滅ぼし、倒し、そして建て、植えるために」（エレミヤ書1:10）。

エゼキエルの場合と同じように、神はエレミヤに、迫害を恐れることなく神のメッセージに忠実であるように命じます。

エレミヤの個人的な歴史の中で最も興味をそそる部分の一つは、36章から38章に見られます。

ここでは、エレミヤは、ユダの国に対する神の預言を巻物に忠実に記しています。彼の書記バルクが書き留めたものです。如何にしてエホヤキムがエレミヤの預言の言葉を焼いたか、如何にして神がバルクに靈感を与えて元の預言だけでなく「同じような預言の言葉を数多く」を書き留めるようにされたか、ということが記されています（エレミヤ書36:32を参照）。

時がながれて、ゼデキヤがエホヤキムの息子エホヤキン（コニヤ）の跡を継いで王位に就きました。エレミヤは、警告のメッセージに忠実であり続けました。そして、破壊活動的で、「カルディア人に投降しようとしている」として非難されています（エレミヤ書37:13を参照）。

エレミヤは、自分の国に警告を発するように神に召された愛国者だと主張したために、打たれて監禁されることになります（エレミヤ書37:15を参照）。

その後、ゼデキヤが密かに、主から何か新しい言葉があるかとエレミヤに尋ねています（エレミヤ書37:17を参照）。エレミヤと会って話した結果、ゼデキヤは：「エレミヤを監視の庭に拘留し、都からパンが無くならない限りパン屋街から毎日パン一枚を届けさせて与えるように命じました。こうして、エレミヤは監視の庭に留め置かれたのです」（エレミヤ書37：21）。

更に時がながれて、都の王子たちの中には、エレミヤを殺すことをゼデキヤ王に進言する者も出てきました。王は完全に彼らの意に逆らうことも出来ず、エレミヤを地下牢に入れることを許可することで妥協しました（エレミヤ38：6を参照）。

宦官の一人であったエベドメレクは、状況を耳にして、王を説得し、エレミヤを地下牢から救い出しています（エレミヤ書38:7-13を参照）。

その結果：「エレミヤは、エルサレムが占領される日まで、監視の庭に留め置かれた。彼は、エルサレムが占領された時、そこにいた」（エレミヤ書38:28）。

エレミヤの預言の通り、ゼデキヤは盲目になり、捕囚の身としてバビロニアに連れて行かれたのです（エレミヤ書39:7を参照）。

エレミヤは、バビロニア軍の親衛隊の隊長によって自由の身にされ、外交的な特権も与えられました（エレミヤ書40:4を参照）。

ここで、エレミヤに委任されたことが成就する第二段階に入ります！

エレミヤは今まで、ユダの家を根こそぎにし、破壊し、滅ぼすという警告を伝える役割を果た

してきました。

神は、ダビデの永久の王位に就くダビデの子孫は絶えることがないと約束されていました。そして今、エレミヤが「建て、植える」時がきたのです。

これは、如何にして行われるのでしょうか？エレミヤ書40 - 41章を読んで下さい。アヒカムの息子ゲダルヤが、ミツバに臨時政府を樹立します。エレミヤは、彼のところに身を寄せます（エレミヤ書40:6を参照）。

間もなく、アンモン人の王がヨハンナを暗殺することをイシュマエルと共に企めます。この陰謀を知ったゲダルヤは、それを信じようとしませんでした。

しかし、それから間もなく、イシュマエルと彼の歩兵隊が、総督、その場に居合わせた何人かのバビロニア人、数人のユダヤ人を含む多数の人々を暗殺します。

明らかに、ゲダルヤは、残された難民を捕虜としてアンモンに連れて行き、アンモン人の勢力を増強することを願っていたのです。

この陰謀の加担者は誰も知らなかったのですが、全能の神は、彼らにそのことを許していました。それは、「建て、植える」という神に託された不思議な任務を成就する手段をエレミヤに与えるためでした。

注目して下さい：「ネタンヤの息子イシュマエルは、王の娘たちをも含めて、ミツバにいた民の残留者をすべて捕虜として連れ去った。それは、親衛隊隊長ネブザルアダンがアヒカムの息子ゲダルヤに任せていた人々であった。イシュマエルが、彼らを捕虜として連れ出し、アンモン人のもとに逃れようと出発したのである」（エレミヤ書41:10）。

よく注意して下さい！

全能の神は、ダビデの子孫が代々ずっとダビデの王権を継承することを無条件でダビデに約束されていました。

いま、ゼデキヤは死んでいました。また、バビロニアの王は、愕然とするゼデキヤ自身の目の前で彼の息子たちを殺していました。それからゼデキヤを盲目にして、バビロンに連れて行ったのです。そしてその後、彼はそこで亡くなりました。

いま、王族の子孫の中では王の娘たちだけが残された状態でした。

神のダビデに対する約束は、撤回されることになるのでしょうか？

そんな事はまったくありません！思い起こして下さい。エレミヤは、根こそぎにして破壊するだけでなく「建て、植える」ことも委任されていたのです。

今、彼に委任された「建て、植える」役割が始まったのです。

バルクは、エレミヤの個人的な書記でしたが、また気の合った友人でもありました。歴史的な証拠は、バルクも王の娘と血縁関係にあったことを示唆しています。多分、叔父だったのでしょう。

何故に、エレミヤ書で一番短い章の不思議な預言が与えられたのでしょうか？45章を読んで下さい！この簡潔な預言で、神は、バルクが自分の国に降りかかった災難のことで嘆き悲しんでいることを明らかにされてから、意気消沈した彼を元気づけるために、彼自身の命は助かることを約束されます。

「...見よ、わたしはすべての肉なるものに災いをくだそうとしているからだ、と主は言われる。ただ、あなたの命だけは、なたたがどこへ行っても守り、あなたに与える」(エレミヤ書45:5)。

ここで、以下に少し長くなりますが、『ユダの王権とヨセフの長子相続権』(J.H.アレン著)から引用をしなければなりません。

「それ故に、預言は次のように続くのです：『見よ、わたしは彼らに災いをくだそうとして見張っている。幸いを与えるためではない。エジプトにいるユダの人々は、ひとり残らず剣と飢饉に襲われて滅びる。しかし、剣を逃れる少数の者がエジプトの地からユダの国へ帰還する』(エレミヤ書44:27-28)。

「ユダの家の人々、つまりユダヤ人の民衆は捕虜としてバビロニアにいたことを思い出して下さい。ここで、彼らは、70年間留まることになりました。また、エジプトにやって来た彼らの少数の残存者は、ぼろを纏った人々、つまり貧しい人々と僅かばかりの小規模軍隊の隊長だけだったことも思い出して下さい。今や、主は、このぼろを纏った残存者を滅ぼすことを考えておられるのです。それから逃れることが出来るのは、一握りの人々だけです。ここで、再確認することにしましょう。

1. ユダの家の人々の中でエジプトに下ってきたこの一行に、「王の娘たち」がいます。複数形が使用されているので少なくとも二人はいたことになります。－ 歴史は三人いたと教えています。彼らは、ダビデの家の王族の子孫で、父であるユダの家の最後の王ゼデキヤの殺害者や兄弟たち（ゼデキヤの息子たちとユダの王子たち）の殺害者から逃れてきたのです。

2. これらの王女たちの一行には、エレミヤ、そして主が建て、植える仕事をするために選ばれた彼女たちの祖父がいます。王女は、預言にある「建て、植える」ために王族の血筋ということになります。

3. エレミヤと彼の忠実な信者の一行には、系図学者が王族の子孫の叔父であることを証明しているエレミヤの忠実な書記バルキがいます。

4. 神は、この「少数者」（せいぜい 5, 6 人）の命は、彼らがどこに行ってもそのすべての土地で守ると約束されています。

5. これに先立ち、エレミヤが大変心を痛めていた時、窮地に立たされて苦悩していた時、彼は主に向かって叫んでいます：「主よ、わたしを思い起こし、わたしを顧み、わたしを迫害する者に復讐してください」（エレミヤ書 15: 15）。主はこう言われました：「あなたの残存者は幸福になる。わたしは必ず、わがわいの時、苦難の時に、敵があなたに懇願するようにさせる。…わたしは、あなたをあなたの知らない土地であなたの敵と暮らすようにする」（エレミヤ書 15: 11－14）。

「あなたの残存者」、即ちエレミヤの残存者という表現に注意して下さい。王族の子孫を建て、植えることをしなければならないのは彼です。また、エレミヤと彼の少数の残存者はエジプト

の事情に精通していたということも理解しておいて下さい。彼らはエジプトのことをよく知っていましたから、エジプトは彼らの最終的な目的地にはなり得なかったでしょう。従って、この逃れいく王族の残存者は、ユダヤ（古代パレスチナの南部）に戻る旅をしなければなりません。そして、それから何処に行くのでしょうか？

「見知らぬ地へ！」どうしてでしょうか？「エルサレムから残った者が」（王族の住居があった）シオンの山から難を免れた者が、現れ出る。万軍の主の情熱がこれを成就する。ユダの家の中で難を免れ、残った者たち（王族の系図）は再び根を下ろし、上には実を結ぶ」（イザヤ書37:31-32）。

「聞いて下さい！聞いて下さい！この世の人よ、聞いて下さい！」「再び根を下ろし」 — 植えられ！「上には実を結ぶ」 — 建てられる！それは何処でしょうか？神は、神の言葉の中で何処であるのか私たちに教えておられるはずです。そうです、神は教えておられます」（『ユダの王権とヨセフの長子相続権』197-198頁）

10部族で構成されサマリアを首都とする北のイスラエル王国がアッシリア軍の連続的な信仰によって完全に征服され、人々が捕虜として連れ去られた事は、歴史に記録されています。

アッシリア帝国は、最終的にはバビロニア帝国に征服されます。神は、ネブカドネザル 2世を使って、エルサレムを首都としていたユダの国を征服され、エレミヤの預言通りゼデキヤ王の息子たちは殺され、ゼデキヤ王は目を抜かれバビロンに捕囚として連れ去られ、衰弱して遂に死に絶えるのです。

しかし、お待ち下さい！

神は、ダビデ自身の系図の王族の子孫のだれか一人がキリスト再臨の時まで王座に就くことになると言う無条件の約束をダビデにさせていました！

神は、王族の子孫の「残存者」が逃れるように配慮されています！

エレミヤは、証人となりゼデキヤ王に警告する任務を与えられていました。神は、彼が神の使いとしてこの古代王国が滅ぼされるのを目撃するように命じられていますが、更に、新しい地で建て、植えることもしなければならないのです！

王族の子孫の残存者が本当にイギリス諸島に到着し、婚礼が行われ、子供たちが生まれたという歴史的な証拠があります — 王座に就く者がダビデの系図から常に一人出てくるという神のダビデへの約束（王権はユダを離れることはない）は履行されているのです。

不和とその修復

J.H.アレンは、その有名な『ユダの王権とヨセフの長子相続権』の中で、「緋の糸」と「王族の残存者」にかなりのスペースを費やしています（6章と7章をご覧ください）。

ヤコブ（イスラエル）に無条件で約束され、ダビデに再確認された絶えることのない王朝を象徴する王権（王笏）は明確にダビデの系図に属するものであることを思い起こして下さい。

アレンは、ユダヤ - ダビデ族と「ユダ」（今日のユダヤという名称はユダが訛ったものです）という名前の王国との区別を正しく指摘しています。

上記著書（6章と7章）で、アレンは、この約束された王権（王座）の最初の「崩壊」物語を詳述し、ペレツとゼラの不和の修復だけでなく、ヒマラヤスギの最も高い枝と大鷲の「謎と比喻」についても説明しています。

まず、エゼキエル書21章25-27節を読むことにしましょう。

「悪に汚れたイスラエル君主よ、不正が終わりを迎える日がきた。主なる神はこう言われる。王冠をはずし、髪飾りを取りなさい。これまでとは同じではない。低い者は高くされ、高い者は低くされる。わたしは、イスラエルを崩壊させる、崩壊させる、崩壊させる。そして、イスラエルはそれ以上[崩壊すること]はない。最後には、王冠の権利を有する者が到来する。わたしは王冠を彼に与える」（エゼキエル書21:25-27）。

この預言には、聖書の他の多数の預言と同様に、事実上、意味の二重性があります。

まず、これは確かに、エゼキエルの預言の時代に王座に就いていた「イスラエルの君主」ゼデキヤに向かって言われています。

神は明らかに、「王冠をはずす」つもりです。つまり、統治者としての地位がゼデキヤから取り去られることを意味します（王冠をはずしなさい — 「これまでとは同じではない」）。

神は次に、「低い者は高く、高い者は低くされます」。ゼデキヤは、イスラエルを支配する王座についている「高い者」であることから、低くされるでしょう。

神は言われています：「わたしは、イスラエルを崩壊させる、崩壊させる、崩壊させる。そして、イスラエルはそれ以上はない、最後には、王冠の権利を有する者が到来する。わたしは、王冠を彼に与える」！

従って明らかに、「イスラエルはそれ以上はない」という表現は、(アレンが正しく推論するように)イスラエルが存在しなくなるということ、つまり「権利を有する者」が到来するまで存在し続けることは出来ない」ということを含意しているのではなく、それ以上の崩壊はないということを含意しているのです！

3回繰り返される王権（王座）の「崩壊」は、起きることが預言されていました！

パレスチナのエルサレムから王の系図が遠くの地に取り去られることで、最初の崩壊、つまり王権の移譲が完成することになります。

アレンは次のように言っています：「更に、「これまでとは同じではない」という表現については、崩壊に関する預言と合わせて検討すると、私たちは、少なくとも男系については王朝の変更が、また領土的・地理的な状況にも変更が行われるという考えに達するのです。崩壊が3回起きることになっており、3回目の崩壊の後、ある人物が到来するまで、それ以上の崩壊はないということに注目すれば、このことは一層明白になります。また、最初の崩壊の時にイスラエ

ルの君主の頭上にあった王冠が外されて、「低い者」の頭上に置かれた後、この人物またはこの人物の家系の者も主によって退位され、「王冠の権利を有する者」に与えられる、ということにも注目する必要があります」『ユダの王権とヨセフの長子相続権』202-203頁）。

「王権の継承は誰の権利なのか」および「低い者とは誰のことか」という質問に対する考えを見出すために、創世記38章の物語に注目しましょう。ここでは、ユダが自分の息子シェラの妻にタマルがなることを拒んだことに怒ったタマルが、子供を生むことを決意し、ユダに娼婦だと思わせてユダの子供を妊娠しています。

助産婦は、どういうわけか(多分、神の摂理によって)双子が生まれようとしていることを知ります。

思い起こして下さい。神はこう言われました：「王権はユダを離れることはない」(王権は、王の系図の象徴であり、後にダビデに対してなされる約束の象徴です)。

人間的な企みやごまかしにも関わらず、生まれようとしている二人の赤ん坊は君主の系図から出てくるのです。

アレンはこう言っています：「生まれた子供たちが自分の子供であり母が自分よりも道義的に正しいことをユダに認めさせた忘れ難い企ては、この子供たちが王族の系図の継承者であるという事実を動かし難いものにしています。

「母が産気づいて、助産婦が来た時には、一人の子の片手が出ていました。その時、人間的な理由か或いは神の摂理によるかして、助産婦はお腹の中に双子がいることを知ります。そこで、どちらの子が先に生まれたか分かるように、先に出て来た片手に緋の糸を結びました。ユダの家族はイスラエルの王族であり、また長子相続権が彼らの間で認められた慣習であったために、どちらが先かを区別して、時期が来れば最初に生まれた子つまり長子が王座に就くようにしなければなりませんでした。

「緋の糸を小さな手にしっかりと結び、その子は手を引っ込めて、もう一人の子が先に生まれました。助産婦は、これを見て「どうして突然でできたの?」と言ってから、預言的な霊に満

たされたように、「あなたは違反です」と言っています。この預言的な言葉の故に、その子はペレツ（違反・不和を意味）と名付けられました。その後で、手に緋の糸を結ばれた彼の兄が生まれ、ゼラ（子孫を意味）と名付けられました」（J.H.アレン著『ユダの王権とヨセフの長子相続権』203-204頁）。

その後の歴史を見ると、ダビデはユダ族の中のペレツの系図から出ていたことが分かります。ゼデキヤもそうです。聖書の系図学者は、イエスキリストさえも（養父ヨセフの系図を通して考えた時）ユダ族のペレツの系図の子孫であるとしています。

ゼラの系図には誰もいないことに注意して下さい。

神は、最終的に、「高い」者（つまり、ダビデとゼデキヤを含むペレツの系図）を「低くし」、「低い」者（ゼラの系図）を「高く」することで、違反・不和を「和解」させることを考えておられました。

この違反・不和は、どのようにして和解されることになるのでしょうか？

考えて下さい！

神は、王権（王笏：王の職務の象徴）は、ユダから離れることはないと言約されてきました。それはこの時、ペレツの系図に属するダビデの一族が確かに所有していました。神のダビデへの契約は、必ず彼の子孫の誰かが王座に就いている — それは永久の契約である — ことを保証しています。

「違反・不和」は、ペレツ（ダビデの子孫）から王権を取り去って、ゼラ（「低い」者）に与えるだけでは和解されることにはならないでしょう。何故ならば、これは不和を永続させるだけだからです。

婚姻を通してユダ族の両者を合体させて、両者を一つにすることで和解を図ることができるでしょう

如何にしてこれを実現したかという物語がエゼキセル書17章にある「謎」と「たとえ話」の中

に見られます。

アレンは、エゼキエル書から次の引用をしています：「主の言葉が私に臨んだ。『人の子よ、イスラエルの家に向かって謎をかけ、たとえを語り、神である主はこう言われると言いなさい。...』」（エゼキエル書17:1-3）。

「ここで謎と英訳されている古代ヘブライ語は、トリック、とんち問答、意味が隠された表現、難問、などと同義語です。従って、英語的発想の「神秘的・謎的」という意味に対応しています。つまり、推量、とんち問答、或いは両義的な説明を通して説くべき事柄なのです。これに比べると、寓話は、人間の生活や思考において現実的な事柄をたとえ話で間接的に表現する物語だと言えるでしょう」（『ユダの王権とヨセフの長子相続権』7章207頁）。

いずれにしても、エゼキエル書17章全体を、特に22節と24節に注意しながら読み終えることにしましょう！

「謎かけ」や「たとえ話」のことに触れましたが、J.H.アレンを含む著者たちがこの謎かけやたとえ話を重視していることにも注目しましょう。

アレンは、レバノンスギは王権を象徴していると指摘しています。彼はまた、こう言っています：「小枝が成長して実を結ぶには、接木をするか、移植する必要があります...」

エゼキエル書17章全体を注意して読みましょう。これは、ユダ族の人々、つまり今日のユダヤの人々に対する預言ではなくて — 「イスラエルの家」に対する預言であることに注意してください。

謎かけの最初の部分は、その後続く内容からかなり容易に説明できます。レバノン山脈にやってきてレバノンスギの最も高い枝を奪っていく「大鷲」は明らかに、ネブカドネザル2世の包囲攻撃、エルサレムの滅亡、ゼデキヤ王の捕囚を象徴しています。

恐らく、大鷲がスギの「若い小枝」（複数）を折って、「商業の地」に運んでいったことは、王の息子たちが捕らわれの身として連れ去られたことに関係しているでしょう。

しかし、覚えておられますか、エレミヤの任務は**2つの部分**で構成されていました！前半では、「倒すこと」を委任されていました。つまり、彼は、当時の国家指導者に証言と警告のメッセージを伝える神の預言者で、その預言が聞き入れられない場合には、（その通りでした）、国家の崩壊を目撃することになります。

エレミヤの任務の後半は、「**建て、植える**」ことでした！ここで、極めて重要な最後の3節を読むことにします！

神は、異なる表現を用いて言われています：「...わたしは、若枝の先端の柔らかい梢を摘み取り、それを高く聳え立つ山に植える」（エゼキエル書17:22）

聖書は、山を国家の象徴として使用しています。小高い丘は小国を、「高い山」や「聳え立つ山」は、確実に神の国家イスラエルを意味しています！

「若枝」がゼデキヤの息子たちを意味しているのなら、「柔らかい梢」は、娘または娘たちを意味することになります！

謎かけは更に続いて、この「柔らかい梢」がイスラエル国家を意味するこの高く聳え立つ山に植えられると言っています！

アレンは、次のように言っています：「彼女は何処に植えられたのでしょうか？イスラエルの高い山に（エゼキエル書17：23）、というのが神の答えです。『何ですって、イスラエル？』。そうです、イスラエル、国家としてのイスラエルです。しかし、ユダヤイスラエルではありません。この王国は崩壊しています。人々は、バビロンの捕囚の民になっています。王は、目をくりぬかれて、バビロニアの牢獄に繋がれて死ぬ運命にあります。王子たちは死んでいます。王の娘たちはエルサレムから逃れています。そして、これらの柔らかい梢の中で最高のものが、ここイスラエルの山々の高きところが象徴する王座に植えられるのです」（『ユダの王権とヨセフの長子相続権』213頁）。

「イスラエルの家」と「ユダの家」との区別を忘れないで下さい！

「イスラエルの家」は常に、10部族の北の王国を意味します。その首都はサマリアで、ユダ族の人々（ユダヤ人）の王国では決してありません！

ここで少し考えて下さい！この世界の何処に、また歴史の何処に、2つの兄弟国家を見出すことができるでしょうか。――とてもよく似ていて、同じ言葉を話し、一般的な人生観が同じで、宗教的・歴史的・社会的・文化的な信条がほぼ同じで、両者で全世界の富の多くを所有している兄弟国家を何処で見出すことができるのでしょうか？

実際、「緋の糸の王子」と「違反・不和」という謎めいた物語は、如何にして神はヨセフ（長子

相続権は彼に与えられています）とダビデの両者にされた神の偉大な約束を成就されることになるか、ということを興味深く洞察することに他なりません。自分の系図が常に王座に留まる（王権はユダを離れることはない）ことを、ダビデは約束されていました。

その王権の最初の崩壊は、エルサレムの滅亡、ゼデキヤ王の娘たちの捕囚と逃亡（つまり、聖書が「イスラエルの高い山」[エゼキエル書17:23;20:40を参照]と述べている新しい地に彼女たちが連れて行かれること）でした。

アレンの著書の第3部第1章（228-229頁）には、以下の事実が述べられています。

(1)紀元前585年ころ、「傑出した人物」、「重要人物」、長老、聖人、極めて重要な人、などと様々な呼ばれ方をしている人がアイルランド最北のアルスター地方に、東方の王女を連れてやってきました。この王族の一行には、サイモン・ブラチ（このブラチは、ブレック、バレク、ベラク、とか様々なつづり方をされています）と言う名前の人もいました。また、この一行は、多数の注目すべき所持品も持ってきました。その中には、ハーブ、聖櫃、ファールの石（運命の石）、などがありました。なお、このファールの石については、後で触れることにします。

(2)この東方の王女は、この傑出した長老が作成した条件付きで、ヘールモン王と結婚します。その条件とは、王がこれまでの宗教を捨てて、預言者のために修道院を建てるというものでした。ヘールモン王はそうしました。この修道院の名称はムール オラムでしたが、これは古代ヘブライ語とアイルランド語で預言者の学校という意味です。彼はまた、ローサー（コセア・クロフィンと呼ばれることもありました）という首都の名前をタラという名前に変えています。

(3)この東方の王女の名前はティー・テフィとされています。アイルランド王室の紋章はハーブですが、2500年前からそうであったということは、有名な事実です。（『ユダの王権とヨセフの長子相続権』228－229頁）

「ブリティッシュ＝イスラエリット」説（英国人はイスラエルの失われた10部族の子孫であるとする説）を提起する多数の人々は、ウェストミンスター寺院の即位の椅子の下に置かれて石が「ファールの石」だと信じています。ファールの石は、先ほどの古代の長老が王女の書記の「ブラック」を連れてアルスターにやって来た時に一緒に持ってきたものだと言われています。この石は現在、スコットランドにあります。将来、戴冠式が挙行される時には、ウェストミンスター寺院に返されることになるでしょう。

この一行は、エレミヤ、ティー・テフィ、およびバルチだったのでしょうか？

戴冠式の石は「ヤコブの枕石」だと思われるが、伝説的に有名な「ファールの石」ではあり得ない、という人もいます。「ファールの石」は、古代の王が戴冠式で使った「就任の石」のようなもので、戴冠式の時には「叫び声」や「うなり声」のような声が聞こえたという言い伝えられています！

イギリス諸島には、古代の石碑が何十もあります。その多くは、その起源や目的がはっきりしないか、また完全に謎に包まれています。

最も有名なものの1つは、勿論、「ストーンヘンジ」です。その建設者目的については、あらゆる説が提起されています。詳細については、『ブリタニカ百科事典』（第11版）に紹介されている興味深い解説をご覧ください。

石に油を注いだこと（創世記28:18を参照）に関する靈感に満ちた歴史のことは、僅か1回言及

されているだけです。

意義深いことに、聖油でこの石を聖別することが行われたのは、鮮明な夢を通して神がヤコブ(取って代わる人)に出現された時のことです。ヤコブはイスラエル(打ち勝つ者；神と共に打ち勝つ者)と名前が変わるようになっていたのです。

私たちは、このヤコブと神との格闘については、既に読みました。

J.H.アレン著『ユダの王権とヨセフの長子相続権』(Judah's Sceptre and Joseph's Birthright) を是非一読下さい。その中の「ヤコブの枕 — 柱石」(230頁)は、特に興味深い章です。

彼は、この同じ石がエジプトに持ち込まれたという説を強く支持していますが、一読の価値があります。

例えば、彼はこのように言っています:「このことは、目下の話題に関してきわめて重要な点です。つまり、町また場所としてのベテルだけでなく、柱石としてのベテルも長子相続権を持つ家族に与えられたということ、そして、イスラエル(ヤコブ)一族はその石をエジプトに、そして更にその後の荒れ野への旅にも持参したということです。

「証拠: ヤコブはエジプトで亡くなりました。その時、彼の子孫もエジプトにいました。死の床で

「ヤコブは息子たちを呼び寄せて言った。『集まりなさい、わたしは最後の日にお前たちに起こることを話しておきたい』(創世記49:1)。息子たちが枕元に集まると、ヤコブは、息子たちの各々の子孫が最後の日にどうなるかという事を預言しています。しかし、彼が長子相続権を与えたヨセフ(ヤコブの第11子)とその家について預言している時、途中で預言の言葉を止めて、次の括弧内の表現を用いています:「(そこから、イスラエルの指導者(羊飼)い)となりイスラエルの石となる)」。

「ここで使用されている「そこ」というのは名詞的に使用された副詞で、意味はその場所とということです。つまり、言及している場所という事になります。「そこから」という言い方は、「その場所から外へ」とか、「自分のいる位置から外へ」という意味です。したがって、死の床

にあるヤコブがああ**の**ベテルの石についてこのような言葉を用いたという**事実**そのものが、明らかに、この石がその時点で元**の**場所にあるのではなくエジプトにいる彼らの元**に**あり、ヨセフの家の管理に任せられていたという**事実**の証拠を提供しています」。

アレンはまた、モーゼを含むイスラエルの人々(ヤコブの子孫)が明らかに特別な石(岩)を所持していたことを示す出来事に言及しています。例えば、彼は次のような出来事に注目しています：「主はモーゼに言われた。『杖を取り、皆を集めて彼らの目の前**で**あの石(岩)に向**か**って語りかけなさい。そうすれば、あ**の**石は水を出す。あなたは、会衆と彼らの家畜にその水を飲ませなさい。モーゼは、命じられたとお**り**、主の前**か**ら杖を取**っ**た。そして、モーゼとアロンは、石の前**で**会衆を集めて、彼らに言**い**ました。『反抗するあなた**方**、よく聞**き**なさい。あなたがたのために、この石**か**ら水を取り出さなくては**い**けないと**い**うのか？』。モーゼは手**を**上げて、杖で石**を** 2度打**っ**た。すると、た**く**さんの水**が**出**て**きて、会衆も家畜もその水**を**飲**ん**だ」(民数記 20:7-11)。

アレンは更に、約束された王朝**の**後の王**た**ちが厳**肅**な宣**誓**や宣**言**だけでなく**戴冠式**の際**に**も「柱」石の傍**ら**に立**っ**ていたことを証明する出来事を幾**つ**か紹**介**しています(例えば、列王記下11:13-14 を取**り**上**げ**ています)。

アダム・クラーク博士は、ここを次のように英訳しています：「アタリヤが近衛兵と民が騒がしくしているのを耳**に**して、主の神**殿**にいる人々**の**ところ**に**来**た**。彼女**が**見**と**ると、なんと見よ！王**が**柱の傍**ら**に立**っ**ていた」(列王記下11:13,14)。クラークは続**け**て、これは「王**を**即位させる時**に**慣例的に王**を**立**た**せた場所**ま**たは玉座**だ**った」と説明しています。改訂版では、次のようになっています：「柱の傍**ら**に立**つ**のは彼らの慣例**であ**った」。

ここで、列王記下23章3節に注**目**しましょう：「それから王**は**柱の傍**ら**に立**っ**て、主の御前**で**契約を結**び**、...」。ここで柱**に**は不定冠詞“a”が付**い**ていますが、これは定冠詞“the”としても差**し**支**え**ありません。つまり、これは特定の柱-石**の**ことで、この柱石は通例、戴冠式の場合や指導者や国家**が**布告／法律制定／勅令／祈願**な**どを行**う**場合**に**使用されて**い**ました。

アレンは、さらに筆を進めて、「ティー・テフィ」という王女の名前の由来と彼女がアイルランドへ逃れた事について深く掘り下げて考えています。

「この小さな一行はエジプトから消えましたが、確かにアイルランドで再び現れています。驚嘆すべきことに！彼らは、柱石を持ってきていたのです。そして、この柱石はそれ以来、王国の即位の石として使用されてきました。

「後に、ティー・テフィ自身もこの柱によって王位に就任しています。そして、エリン(アイルランドの雅名)の首都名もキャセア・クロフィンからタラに変わっていますが、このタラという名前も古代ヘブライ語です。この時点で、歴史は絶対的な権威をもって、私たちに援助の手を差し伸べてくれます。つまり、その時から今日に至るまで、アイルランド、スコットランド、或いはイングランドを統治した王や女王はすべて、そのまったく同じ柱石、言い換えると即位の石に誓って王位に就任しているのです。ビクトリア女王(1819-1901)は2回 — 最初はイングランドの女王として、2回目はインドの女帝として — この柱石に誓って戴冠しています。

「1838年6月28日に挙行されたビクトリア女王の戴冠式については、ロンドンで発行されていた新聞のサン紙に記事が掲載されていますが、このサン紙は、即位の石について次のように描写しています：この椅子は、一般にセント・エドワード(1003?-66)の椅子と呼ばれていますが、頑丈な堅木材で作られた大昔の椅子で、その横にも裏側にも様々な絵が描かれています。かつてスコットランドの王は必ずこの椅子に座って戴冠したのですが、この椅子は、エドワード1世(1239-1307)がスコットランド王ベリオル(1249-1315)を打ち倒した後の1296年に、スコットランド王国から持ち出して以来、ウェストミンスター寺院に置かれ、イングランド王国の王や王女の戴冠式で使用されてきました。この椅子のサイズは、高さ6フィート7インチ、座席の横幅28インチ、奥行18インチあります。下から9インチのところには、板が差し込まれており、その4隅をライオン像が支えています。座席とこの板の間には、一般にはヤコブの石と呼ばれている運命の石 — ところどころに赤い石目の混ざる鋼色をした大理石(長さ約22インチ、幅13インチ、高さ11インチの直方体に近い形) — がはめ込まれています。これが、族長ヤコブがバルズ(ベセルの旧名)の平原で枕にした石(創世記28:18-19)であることは、歴史が教えています。

この記事^{きじ}を掲載^{けいさい}した新聞^{しんぶん}は、ご存知^{ぞんじ}の通り、アングロサクソン人^{じん}は神^{かみ}が父祖^{ふそ}のアブラハム、イサク、ヤコブに与^{あた}えられた長子相続権^{ちやうしそうぞくけん}の祝福^{しゆくふく}の相続人^{そうぞくにん}のヨセフの子孫^{しそん}である可能性^{かのうせい}があると考^{かんが}えられるよりも60年^{ねん}も前^{まえ}(今^{いま}から164年^{ねん}も前^{まえ}！)に発行^{はつこう}されているのです。

「この記事^{きじ}は更^{さら}にこのように述^のべています:この石^{いし}は、紀元前^{きげんぜん}700年頃^{ねんごろ}にスペインを経由^{けいゆ}してアイルランドに運^{はこ}ばれました。それから約370年^{やくねんご}後、そこから、ファergus王^{おう}によってスコットランドに持ち込まれ、更^{さら}に紀元前^{きげんぜん}350年^{ねん}に、ケネス王^{おう}によってスクーン寺院^{じいんおさ}に収められました。ケネス王^{おう}は、この石^{いし}に預言^{よげん}的な一編^{いつぺん}の詩^しを刻^{きざ}んでいます、この詩^しは次^{つぎ}のように訳^{やく}されています:運命^{うんめい}の見捨^{みす}てことあらずは、この石^{いし}の御前^{ごぜん}で、スコットランド国王^{こくおう}は王冠^{おうかん}を戴^{いた}く」。

アレンの指摘^{してき}によると、ケネス王^{おう}がこの詩^しを即位^{そくい}の石^{いし}に刻^{きざ}むよりも更^{さら}に前^{まえ}にも、預言^{よげん}的な一編^{いつぺん}の詩^しがこの石^{いし}に刻^{きざ}まれており、スコットランドの小説家・詩人^{しょうせつかしじん}サー・ウォルター・スコット(1771-1832)がその詩^しを次^{つぎ}のように訳^{やく}しているということです:

運命^{うんめい}の
背^{そむ}く

こと
あらずば、

預言者^{よげんしゃ}の
声^{こゑ}の空虚^{くうきょ}

なること
あらずば
この聖^{せい}なる

石^{いし}の
御前^{ごぜん}で

このさすらいの

民族^{みんぞく}は
君臨^{くんりん}する

アレンは続けて言っています:「考えて下さい!もう700年以上も、この石はウェストミンスター寺院に安置されてきたのです。ウェストミンスター教区司祭スタンリー(1815-1881)は、『ウェストミンスター寺院収蔵の歴史的記念物』(*Historical Memorials of Westminster Abbey*)と題する彼の著書の中で — この大聖堂を今まで訪れた無数の参詣人にとって一番のお目当ては、多分、即位の石と呼ばれている古代アイルランド帝国の記念碑であったと思われます — と記しています。主席司祭スタンリーは、これを「貴重な遺物」と呼んで、エドワード1世が「これは、全帝国を統合する唯一の古代記念碑である」と語ったと述べています。彼は更にこう述べています — 鉄輪、表面の凹凸、この堅固な石の塊をバラバラにしそうな亀裂は、この石が長い距離を移動してきたことを証しています。斯くして、この石はイングランド王国の心に深く浸透しており、異教時代の族長制の詩的な香りが...現在ではほとんど歴史の彼方に消えた民族や習慣 — イングランド王国とタラ(ダブリンの北西約35kmに位置)とアイオナ島(スコットランド西岸沖に位置)を結びつける関係 — 私たちの複雑な文明の魅力と母なる大地、未開の無情な人々を結びつける関係 — に私たちの思索を誘います。キリスト教徒であれ、愚か者であれ、国家的な心情の立場から言えば、ヤコブの柱石は300世代の歴史を通して、それを得るためには戦いで死ぬことも覚悟する価値のあるものとみなされていたのです。私たちには、そのように感じられます」(『ユダの王権とヨセフの長子相続権』251-255頁)。

まさにその通りです — このことをよく考えて下さい!

この有名な石は確かに、私が、1956年頃に始めてイングランドを訪れた時、一番見たかったものです!イングランドに戻った時に、始めてロンドンを訪れた人を案内する機会があれば、いつも真っ直ぐに即位の椅子のところに行き、石の表面に残された有名な痕跡を見せてあげました。

ご存知の通り、その後、この石は盗賊に持ち逃げされ、スコットランドヤード(ロンドン警視庁)が再発見し、元の場所に戻されています。現在、即位の椅子と石は従来よりも厳重に保管されているということです、訪れる人が見ることが可能かどうかは分かりません。

それは大昔の新聞記事が記述している通りです。凝視していると、これが本当に古代の遺物であるこの即位の椅子の下に何百年も横たわっていたのか、どうして取っ手がそんなに擦り減っているのか、とかあれこれ考えさせられます。

明らかに、この石は相当な時間を時間をかけて恐らく遠距離を幾度となく運ばれたのでしょう。石の両側に取り付けられている金属製の取っ手がこれほど擦り減っている理由は、それ以外に考えられません。

ここで幾つかの疑問について考えることにします。

何故、宇宙時代の国家、いわゆる「キリスト教文明」の揺りかごそのものであり、西洋世界の英語圏諸国すべての母なる国家の女王が古代の石に腰掛けて戴冠するのでしょうか？

ユダ族の古代の王たちが、王として王冠を戴く時、或いは布告する時に、石の上または「柱石の傍らに立って」いたように、現代の国家である英国の女王も、多くの人々が「ヤコブの柱石」だと熱烈に信じているものを下に収めた有名な即位の椅子に腰掛けて戴冠するのです！

偶然の一致でしょうか？神話でしょうか？

王座の継承者であるチャールズ皇太子は、恐らくそう遠くない将来、英国王として戴冠するでしょう。その時は間違いなく、この石の上に座って王冠を戴くことになるでしょう！

事実、神はダビデに与えられた契約を成就されています — 王座に就くダビデの系図の子孫が絶えたことはありません。これは、西洋世界の「いずれかの国家」とか、現代のイスラエル国家とか、というのではありません！その国家とは、エフライム族の国家、つまり英国のことです。この国家に、古代の石を下にはめ込んだ大変古い神聖な即位の椅子があるのです。

何十世紀も前にヤコブが枕にした石 — そしてイスラエル部族の子孫たちがエジプトから

運び出した石 — モーゼがホレブで水を出すために打った石 — 何世紀にもわたりユダ族の王の戴冠式の際に傍らに直立して置かれていたか、王がその上に立った石 — エレミヤ、彼の書記官バルク、王の娘の一行がアイルランドに運んでいった石 — スコットランドやイングランドの王たちがその上で王冠を戴いた石 — そして、何世紀もウェストミンスター寺院に安置され現在はスコットランドにある石 — はすべて同一の石である可能性が極めて高いのです。

歴史を注意深く学んだ人なら、西暦1800年には合衆国は苦闘する弱小国であったことを理解しています。

世界の大帝國は、ヨーロッパと封建制アジアにありました。植民地主義的な大帝國（英國、オランダ、スペイン、ポルトガル、フランス）が、東インド諸島からアフリカにかけて、中南米からマカオやインドにかけて、続いて東南アジアから北米にかけての地域で覇権を争っていました。英國は、ナポレオン・ボナパルトから自國を防衛するために、フランスとその同盟國を相手にして開戦していました。そして、ナポレオンは最後に、ワテルローの戦い（1815年）で敗れています。英國は、フランスの同盟國や屬國などのヨーロッパのほぼすべてを相手にして、自由を守るために悪戦苦闘していました。

ワテルローの戦いに先立つ3年前、合衆國は、母國の英國との2回目の戦争となる「1812年戦争」を戦っていますが、この結果、英國は北米大陸で失った植民地を奪還しようとして、これまでに激しい攻撃を仕掛けてきました。

19世紀の興味深い歴史は、合衆國が初期の入植者やヨーロッパ移民の粗野な國から、やがて世界に例の無い最も偉大な単一國家として台頭してきたことを教えています！

意義深いことに、合衆國の歴史において単一では最大の領土が獲得されたのは、預言されていた國家に対する「7倍」の罰（レビ記16:14-18を参照）が調度終わった時点です。預言されていた長子相続権の遺贈は現代の時代までかなり延期されていたのです！

18世紀も残り僅か10年となった1790年、合衆國の全国土は888,862平方マイルでした。

フランスは、大英帝国との戦いが長引き、経済的に疲弊したことから、ミシシッピー川の河口からカナダとの国境にかけて領有していた 827,192 平方マイルもの広大な土地を売却することを、合衆国政府に申し出ています。

これにより 1803 年には、合衆国の全国土はほぼ 2 倍の 1,716,054 平方マイルになりました。

忘れないで下さい — 聖書の預言はすべて二面性を持つことを！

マタイ書 24 章の有名な「オリーブ山」の預言について検証することで、キリストが語られたすべての言葉を西暦 70 年に実際に起きた出来事に当てはめてみることにします。この時、エルサレムは、ローマ皇帝ティトウス（39-81）の軍隊に包囲攻撃されて崩壊しています。

この預言はキリストの再臨に直接つながるものですが、キリストは、この時には再臨されていません！

ローマ軍の兵士たちは、本当に、神殿を取り囲む石の建造物や壁をこじ開けて破壊し、下の谷底に投げ落とし、エルサレムの都市は大きな混乱に落とし、何万人も殺害し、都市を崩壊させたのですが、現代の考古学的発掘は、「一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない」という預言はまだ成就されなかったという事をはっきりと証明しています。

西暦 70 年にエルサレムに起こった出来事は前兆でした。キリスト再臨の直前に起きることが依然として預言されている、エルサレムの将来の崩壊に関する歴史的「類型」の 1 つです。

預言には、二面性があります。

同様に、レビ記 26 章の厳粛な預言で、神は、エフライム族とマナセ族の人々に恐ろしい国家的な災難と罰の時が（将来）訪れることについて語られています！

ヤコブ（イスラエル）の子孫に約束されていた偉大な長子相続権の祝福は、年老いたヤコブ（イスラエル）が「イスラエル」の名が継承されるようにと願った 2 つの国家 — 即ち、エフライム族（英国）とマナセ族（合衆国） — に対して、続く幾世代にも渡り留保されていたのです。

ここで、注目すべきレビ記26章の二面性のある預言を読むことにしましょう！

この章は、人々が、神の律法や掟に忠実ならば、神が彼らに与えて下さることになる素晴らしい祝福で始まっています。

この世の偉大な神意のたに神に選ばれた人々が神に従うならば、－ 多大な国家の富、諸資源、鉱物、貴金属、持続的エネルギー供給、豊かな作物、健康に良い気候、健全な子供、戦争・徴兵・重税・疾病の無い生活、良好な健康状態（誰もが心から切望するもので、しかもお金で買えないもの）－ 等だけでなく、更にその他の驚くべき祝福が恭順の報酬として約束されているのです。

そして、そのあと直ぐに、大ハンマーの一撃のような警告が轟きわたります－ 人々が唯一の真実の神に背を向けて、神の与える律法や生き方を見下し、異教の偶像崇拜に走るなら、ショッキングな罰が彼らに降りかかるという警告が轟きわたります。

26章の最初の数節には、大きな祝福が列挙されています。人々が神の律法－ 特に「試金石的な戒律」である偉大な第4の戒律（週ごとの安息日を守ること）－ に従うならば、神は祝福を惜しまれないでしょう。そのような人々に与えられる神の賜物は、それを受け取る十分な場所もないほどすごいのです！

逆に、イスラエルの人々が従わない場合、神はこう言われています：「しかし、わたしの言葉を聞かず、これらすべての律法にしたがわないならば、... あなたたちは、恐怖、消耗性疾患[肺結核などの肺病]、目を衰弱させる熱病[インフルエンザ、肺炎、風邪、高熱性疾患、はしか等の失明の原因になる病気]に襲われることになる。あなたたちは、種を蒔いても空しい。敵がそれを食べつくす。[ショッキングなことに、この預言は特に穀物を敵に売ることについて暗示している訳ではないのですが、合衆国は、核武装した敵のロシアと貿易をしています。そして、何百万トンもの小麦やとうもろこし等の重要な主要産品を諸外国に送っているのです]。そして、わたしたちはあなたたちに敵対する。あなたたちは、敵に殺害され、あなたたちを憎む者があなたたちを支配することになる。...」（レビ記26:14-17）。

旧約聖書きゅうやくせいしょの中の歴史書なかのれきししょ、特に列王記上下れつおうきじょうげと歴代誌上下れきだいしじょうげには、イスラエルの人々ひとびとが繰り返しかえ悪しあき偶像崇拜ぐうざうすうはいに走る様子はしが描えがかれています！

出エジプト記しゅつ(主として、出エジプト記しゅつ、民数記き、申命記しんめい)の物語ものがたりは、「頑固がんこな」イスラエルの人々ひとびとの敵意てきい、恨みうら、反抗はんこう、偶像崇拜ぐうざうすうはいについて信じられないような話はなしを列挙れつきよしています。彼らかれらは絶えず、モーゼの律法りっぽうを見下しみくだ(つまり、文句・批判・不満・非難もんく・ひはん・ふまん・ひなんを口くちにすること)、神かみに従したがって神かみが彼らかれらのために用意よういしておられる素晴らしい祝福すばを経験しゆくふくするよりも、エジプトでの奴隷どれい生活せいかつに戻ることを願ねがうのです！

恐らく、すべての聖書せいしょの中で最も血なまぐさい書しよの1つが士師記ししきでしょう。この信じられないような戦争せんそう、殺人さつじん、反乱はんらんに関する歴史書れきししょを読むと、これらの流血惨事りゅうけつさんじのすべてに対して神かみがその理由りゆうを啓示けいじされていることがわかります:「そのころ、イスラエルには王おうがなく、それぞれ自分の考えじぶんかんがで正しいとすることを行おこなっていた」(士師記21:25)。

神かみは、サムエル(イスラエルの士師・預言者よげんしゃ)の統治とうちが終わる時に、「士師たち」による統治とうちに終止符しゅうしふを打たれました。イスラエルの人々ひとびとはサムエルにこう言いました:「...ほかの国々くにぐにと同じように[異教いきょうの国々くにぐにのように]、わたしたちを裁く王おうを選んで下ください」(サムエル記上8:5)。

サムエルはひどく立腹りっぶくしましたが、神かみは彼かれに言われました:「民たみがあなたに言うままに、彼らかれらの声こゑに従したがうがよい。彼らかれらはあなたを退しりぞけたのではない。わたしが彼らかれらを支配しはいすることがないようにするために、わたしを退しりぞけているのだ」！(サムエル記上8:7)。

サムエルは、彼らかれを支配しはいする王おうが選ばれ、その王おうは彼らかれの幸福こうふくには完全かんぜんに関心むかんしんで独裁どくさい的な横暴者おうぼうしゃになると警告けいこくしています！

サムエルは、徴兵制ちょうへいせい、戦争せんそう、重税じゅうぜい、私有財産しりゆうざいさんの没収ぼつしゅう、補助的任務ほじょてきにんむへの女性じょせいの徴兵ちょうへいさえ実施じっしされると預言よげんしましたが、こうした警告けいこくにも係わらず、人々ひとびとは言いました:「...いいえ、私わたしたちには、どうしても王おうが必要ひつようなのです。私わたしたちもまた、他のすべての国くにと同じようになり、...」(サムエル記上8:19-20)。

こうして、イスラエルの初代の王サウルが統治する歴史になります。彼の傲慢で不名誉な行動は王として失格でした。そして、ダビデがイスラエル第2代の王として任命されることになります。

ダビデの統治する時代から旧約聖書の最後の時代に至るまで、イスラエルの国がどのようにして王に従ったか、ということが聖書に記述されています。王と国家は、同じ運命を辿るのです。

王が正しい人であれば、それが多少のことであっても(例えば、偶像崇拜の「聖なる高台を打ち壊す」ことがなくても、基本的に神の道を歩んでおれば)、その国はその歩みに応じて祝福を受けていました、

王が(マナセ王のように)決定的に悪人であれば、その国は大いに苦しみました。

最終的には、紀元前 721～718年にかけて、神は、イスラエル国家の罪(エゼキエル書16章、23章に列挙)が余りに大きいと判断され、「主の御前から彼らを退けられる」決心をされます。

サマリアを首都とする北のイスラエルの 10部族が完全に破壊され、完全に打ち負かされ、王国が崩壊し、住民の大多数が捕虜として連れ去られたことは歴史の事実です！

これから私たちが読むことについては、正しい視点を持つことが大切です！

預言における合衆国と英連邦の身元の全体像について頭に入れておいて下さい！

聖書の「木の幹」にとっては不可欠ではない — 「小枝」に過ぎないような物語の断片を扱って、その小枝をねじ曲げたり、切り取ったり、捨てたりすることで、木の幹をすべて破壊したと考えることは、とても簡単なことです！

この場合、この揺るぎない木の幹とは、アブラハムに与えられ、イサクに再確認され、ヤコブには完全に無条件にされ、そしてヤコブ(イスラエル)の名前を継承する二人の孫のエフラムとマナセに譲渡された無条件の約束の事です！

要するに、現時点のこの世のどこかで、何とかして、「国家団」、言い換えると、同一民族と
思われる識別可能な兄弟国家の集団を発見しなければなりません。かくして、兄よりも
「偉大になる」とされたエフライムに関する神聖な預言が成就されるのです！

そしてまた、世界史の中で最も偉大な単一国家と考えられるある一つの国が、この「国家団」
と密接に関係していることを発見しなければなりません（何故ならば、その国民は民族的に
兄弟であるからです）！

ヨセフ（エフライムとマナセの父）に関する創世記49章の預言に見られる雄弁な言葉による惜
しめない約束を読めば、必ずこれらの偉大な祝福が、ガラリヤ湖とエルサレム周辺の山々と
に挟まれた細長い土地のみを対象にしているのではない、という理解に達するでしょう！

この預言を再読して下さい：「ヨセフは豊かに実る大枝、泉のほとりで豊かに実る大枝。その
幾本もの小枝は塀を越えて伸びる[神が繰り返しイサクとヤコブの子孫に約束されたように、
四方八方に広がっていくことを暗示]。

「弓を射る者たちが、彼を深く悲しませる。彼らは、憎しみを込めて彼に向かって矢を放つ。
「しかし、ヨセフの弓はぐらつくことがない。ヤコブの全能の神が彼の手と腕を強くしている
からだ。（それ故、彼は牧者となり、イスラエルの石となる）。
「あなた（ヨセフ）を助けるあなたの父（ヤコブ）の神、乳房と胎の祝福をもってあなたを祝福
する全能の神により、あなたは強くされている。

「あなたの父の祝福は、果てしない山々の彼方に至るまで、祖先の祝福にまさる。これらの
祝福は、ヨセフの頭、兄弟たちから選ばれたヨセフの頭の上にある」（創世記49:22-26）。

最後の26節については、オックスフォード聖書の脚注が次のように正しく言い換えています：
「...ヨセフの頭、兄弟たちの中の王子である彼の頭の上にある」。

ヨセフの二人の息子に対する偉大な祝福は、神聖な神の言葉によって詳細に記録されていま
す。

神の約束が不履行にならないのなら — 文章として残る永遠の創造主なる神の言葉を信じ

ることができるなら — それなら、ヨセフの系図から出る 2部族(エフライム族とマナセ族)に約束された豊かな祝福を経験する偉大なと単一国家、およびもう 1つの国家「集団」 — その偉大な単一国家と共に世界の富の多くを共有する兄弟国 — を、この現在のこの世において発見しなければなりません。

「小枝」を引きちぎろうとして幾ら議論や推論をしても、またこの問題を扱っているアレン等の著者の誤りを幾ら指摘しても、木の幹 — 神のアブラハム、イサク、ヤコブとの約束 — を切り倒すには十分ではありません！

勿論、「Dan」(ダン族)の文字の DN を含む名前 — 例えば、コロラド州 デンバーやイリノイ州 ダンビルなどの都市や町 — 等のイスラエル 12部族とのつながりを示す世界各地の名前を列挙しても、冷笑する人もいます。

しかし、こうした類の冷笑はさておき — 半数が船で暮らす船乗りの民であった古代ダン族の人々(士師記5:17 を参照)が彼らの父祖の名前ダンに因んで重要な土地に名前を付ける(或いは、改名する)習慣を守っていたことが神聖な神の言葉で明らかにされていることは、やはり事実です。

重要な北欧諸国の1つであるデンマークを例にすると、この国には2つの意義深い名前が付けられています。

ここで再度、触れることにしますが、「デンマーク」というスペリングは、英語化されたものです。デンマーク人(Danes:この名前になる“Dan”に注意して下さい)は、彼らの北方の半島を「デンマーク」と呼んでいます、この名前はまさに「ダンのマーク」を意味しています。

しかし、古代には、デンマーク人が現在領有している半島はユトランドと呼ばれていました。

私たちが今まで見てきたように、アブラハムの多数の子孫は、四方に — 東に、西に、北に、南に — 散らばって行くことが運命付けられていました。、両者合わせて世界の富の三分の二を所有することになった2つの偉大な兄弟国家のアメリカ合衆国と英国も血縁関係のある

くに であるという事実を よく かんが えて くだ さい！

この両国は、ヨセフの二人の息子であるエフライムとマナセの部族で構成されています。ヤコブ（イスラエル）が死の床でこの二人の孫のエフライムとマナセの頭に手を置いて、「私の名が彼らによって後世に伝えられますように」（創世記48:16を参照）と言っています。(1)この世で最も偉大な単一国家と(2)偉大な国家団つまり連邦諸国になる運命にあった二人の兄弟国家が、イスラエルの名前を伝える運命になっていたのです！

「謎かけやたとえ話」および「緋の系」（ペレツとゼラの、両者の家系の間における有名な「不和」）の謎から、私たちは、神がダビデの系図を意味する王族の木の「柔らかい梢」を切り取ることを意図されていたこと — そして、この柔らかい梢が（エレミヤに委任された任務によって）新しい土地に「植えられる」ことになっていた王の娘たちの一人を意味していたこと — を学びました。

こうして、全能の神は、二つの家系の不和を癒し、イエスキリストの再臨の時まで、即ち「その権威をもつ者が来るまで」に、神のダビデへの約束を成就されることを意図されていました（エゼキエル書21:25-27を参照）！

また、私たちは、シメオン族もレビ族も土地の相続権はもたなかったことを知っています。エルサレムを首都とした南の「ユダの家」を構成している間に、彼らが他の部族の間に分散していったことも知っています。

ユダ族の人々（ユダヤ人）は、世界に分散した人々で、人類の中でユニークな存在です！今日でさえ、彼らは世界各地 — 合衆国、カナダ、ヨーロッパ諸国の全域、そして勿論、中東 — で暮らしています。

ユダヤ人の最初の大きな国外追放の1つは南のユダ王国が最終的に崩壊する前 — ユダヤ人のバビロン捕囚よりも前 — であったことを認識している人はごく少数です。

注目して下さい：「ヒゼキヤ王の治世第14年に、アッシリアのセナケリブ王（704-681 B.C.）

がユダのすべての砦の町を攻めて、ことごとく占領した」(列王記下18:13)。

この節の少し前には、その前のアッシリア王であったシャルマネセル(在位858-824 B.C.)がサマリアを包圍して最終的に占領したことが述べられています:「アッシリアの王は、イスラエル[北のイスラエルの家]の人々を捕らえてアッシリアに連れて行き、ゴザン川の畔にあるヘラとハボルの町、およびメデスの町々に住ませた。こうなったのは、彼らか自分たちの神、主の聲に従わず、その契約と、主の僕 モーゼが命じたすべてのことを破ったからである。彼らは聞き従わず、実行しなかった」(列王記下18:11,12)。

古代の記念碑からエルサレムだけでなくフェニキアの諸都市に対するセナケリブ王の軍事作戦の詳細が明らかになっています。

セナケリブの率いるアッシリア軍は、シドン(地中海沿岸に位置する海港、現在はレバノンのサイダ)を始めとする多数のフェニキアの都市を占領しました。テュロス(シドンと共に当時最大の海港、現在はレバノンのスル)は抵抗しましたが、その王のルリア(エルラエウス)はキプロスに逃亡しています。アシュドドの町、アンモン国、モアブ国はアッシリアに服従しましたが、ユダのヒゼキヤ王は、アシュケロン(都市)やエクロン(町)にいるペリシテ人の援助やエジプトの援助を当てにしていたこと、またエルサレムを要塞化していたこともあり、アッシリア軍の攻撃に耐えられると考え、降伏するのを拒否しました。

セナケリブによって 46 の要塞化した都市や町が奪われると狂乱したヒゼキヤは、アッシリアの侵略者たちを必死に買収しようとして、セナケリブに30タラントの黄金、800タラントの銀、宝石、フェルト毛布、儀式用の装飾品だけでなく、象牙をはめ込んだ幾つものの王冠、多数の側室や宦官を差し出しています。ここで、注意して下さい。200,150名のユダヤ人が連れ去られて捕虜になっているのです。

10部族で構成された「イスラエルの家」から最後のイスラエル人が追放されてから17年後に、ユダの家から連れ去られた200,000人以上のユダヤ人は、どうなったのでしょうか?

恐らく、アッシリアの町や都市に強制移住させられたり、北方の近隣諸国に奴隷として売られ

たりした 10部族のイスラエルの家の難民の場合と同じように、ユダヤ人たちも、アッシリアの町や都市で混ざり合ったのです。

従って、黒海とカスピ海に挟まれた一帯から北歐やイギリス諸島にかけての北方の地域にダンの名前を発見するだけでなく（後で、他のイスラエル人の名前についても、検討します）、ユトランド（Jutland）と呼ばれる半島が「ジュートのランド」（Jutes' land）、つまり「ジュー（ユダヤ人）のランド」（土地）であることを発見することも不思議なことではありません。

古代の探検家と商人

ソロモン（紀元前10世紀のイスラエル王）の王国時代に既に、「ヘーラクレースの関門」（ジブラルタル海峡）を超えた遠い国々との交易が活発に行われていたことを理解している人はあまりいません。ソロモンの船団は、インドが唯一の原産国である孔雀をパレスチナの地に持ち帰っています。ソロモンの時代には、異国情緒溢れる交易が栄え、遠くイギリス諸島から天然資源などが運ばれて来ました。例えば、コーンウォール（イギリス最西端の地方）からは現地で採掘された錫、インドやパキスタンや東アフリカの高地地方からは大型のサル、象牙、孔雀などが運ばれてきました。ソロモン王は、こうした異国の地に素晴らしい鉱山を所有していたと伝えられています。

ソロモン王は、エジオン・ゲベル（紅海北方のアカバ湾の北端に位置する現在のエイラト）だけでなく、地中海にもヨッパ（現在のヤッファ）を中心に幾つかの海港を維持していました。

ヨナ（預言者：ヨナ書の主人公）がヨッパに行ったのは紀元前860年もの昔のことだということをおぼえておいて下さい。このヨッパは地中海沿岸の最も重要な港町の1つでした（因みに、ダン族は当時、地中海を自由に往来していました）。ヨナは、ヨッパから船でタルシシに行こうとしています。タルシシ（スペイン南西部の大西洋に臨む港町カディス付近にあったと伝えられる古代国家）は、非常に遠方にあつたので、ヨナは神の存在から逃れることができると考えたのです！

タルシシの船がパレスチナの海港と交易を始めたのは、何時のことでしょうか？歴史家は、それを紀元前900年もの昔のことだとしています！この神経質な預言者が簡単にタルシシの船に

の乗ってイスラエルの神の領土と彼が考えたところから遙かに離れた遠いイギリス諸島や地中海沿岸地方に行けるのなら、この当時には、他の一般の旅人も船に乗って自分たちの国家を支える交易に重要な遠い植民都市に出かけることが出来たでしょう！

ここでアレンの著書から重要な引用をすることにします。アレンは、『ユダの王権とヨセフの長子相続権』(267-269頁)で、ユダの家の王子には、「...イスラエルの人々に先行して、遠い島々に出かけ、紀元前721年にアッシリアへ長子相続権が行ってしまうよりも以前に(これは、シャルマネルによる「長子相続権を有する人々」の国外追放のことを指しています)、大きな植民都市を有する十分な時間があった。実際、王子の一人がイスラエルの人々よりも前に、海の島々に出かけたという証拠があります。第一に、神の言葉がそう語っています。第二に、ティー・テフィが結婚した王子ヘレモンは「トゥアーハ・デ・ダナーン」(アイルランド伝説のダーナ神族)の王子であったということがアイルランドのミレシア人の記録に残されています。」

「このことに注目して下さい！もし、この王子がダン族の王子であったなら — 正史はそうであったと断言しています — 彼は、ユダ族の王子ということになります。何故ならば、ダン族

が属する民族の王族の王子以外に、ダン族だけの王子は存在しなかったからです。そして、

その王族は、ヤコブ(イスラエル)とレアとの第4子で、王権の祝福を受けたユダを唯一の起源にしているからです。

「しかし、この解釈に二面性があります。というのは、ユダ族の家紋はライオンで、その子供[若いライオン]の一人はダン族と共に北方の島に行った訳ですから、当然、王族の家紋も彼と共にいったことになります。その結果、この家紋が、ダン族である「トゥアーハ・デ・ダナーン」と結びついて、やがて彼らの民族の紋章になったのでしょう。

「紋章の像(イラストを参照して下さい)は、「ライオンの子と蛇の尾」として描かれています。この中で一番大きなものは、デンマークを表し、他の2つはノルウェーとスウェーデンを表しています。当時、この2国はデンマークの支配下にありました」。

不思議な名前

注目して下さい！列王記下18章においてさえ全能の神は、主の律法を破った、契約を破った

— 特に、偶像崇拜に走り、しかも週ごと・年ごとの神の安息日を捨てた — ということでイスラエルの人々を追放しています！

神は、神とその民を結びつける偉大なしるしは安息日であると言われています(出エジプト記31章を参照)！

主の民がそのしるしを失うということは、最終的に自分たちの国家的な身元を失うことを意味します。

彼らは、全能の神に代わって、パール神(古代フェニキア人・カナン人の神)を選んだのです！

パールという名前は古代パレスチナの地図のいたるところに書かれています。聖書にも、「パール・ペオル」や「パール・ツェフォン」といった名前が出てきます。また、この邪神に因んだ「バーラム」(これは、パールの複数形で「多数のパール」を意味)等の人名さえあります。

以下に紹介するように、アイルランドには、信じられないようなパールを含む人名があります！

パール・イ・バイ、パール・イ・ゴーアン、パール・イ・ナヒンシュ、パール・イ・カースル、バーリー・モーニ、パール・イ・ネル、パール・イ・ガライ、パール・イ・ナ、パール・イ・コン・エル、パール・イ・ハイ、パール・イ・ハル・イッシュ、パール・ナ・ブラチ、パール・アティ、パール・ダゴン

19世紀のアイルランドの司祭であったハウレットは、次のように述べています:「これらは、確かに、かつてアイルランドに流行っていたパール神信仰の記念物です。こうした名前には、パールと他の古代ヘブライ語が合体しています。これについては、フェニキアやパレスチナから来た移民がこうした名前で呼ばれていたという事以外に、どのように説明すれば良いのでしょうか？」。

ケルト族の人々

その大多数がヨーロッパの中部と西部に住んでいたと歴史が語っている古代ケルト族は、実際はイスラエルの人々で、その起源はヨーロッパのダニューブ(ダン・ウーブ)川流域と中東に

さかのぼ
遡ります。

英語の「ケルト」と言う言葉はヨーロッパの北部と中部に住んでいた古代人を総称した名称に過ぎません。彼らは「アルプスの北側に住む金髪の人々」と見なされていたと言う事が、古代の著書に記されています。「ケルト」と言う名前は、ギリシャ語に由来します。ギリシャ人は、彼らをケルトイと呼んでいました。ケルト族は、大雑把に2つのグループに分類されていますが、それも遡れば互いに1つになります。1つのグループの特徴としては、「長い頭、長い顔、細いワシ鼻、青い眼、金髪、長身」であるということですが、これらの皮膚の色の白い「ケルト族の人々」は一般的に、昔の著述家たちに「チュートン人」と記されています。

もう1つのグループは、「丸い顔、横長の顔、大きな鼻、灰色がかった薄茶色の目、淡い栗色の髪をしており、ずんぐりした中背」であったと記されています。

一般に「ドイツ人」を指す古代のチュートン人がキンブリ族と共に歴史に登場することは、興味深いことです。このキンブリ族は、ケルト族だと一般的に考えられていますが、グトン族(ゴート族:ローマ人が彼らをこう呼んだのです)と同じバルト海と北海の沿岸地域から来ています。

北フランスのベルガエ族は、キンブリ族でした。歴史によれば、ライン川の東からこの地域に移住してきたとされています。

北西ヨーロッパとイギリス諸島におけるケルト族の優勢は、よく知られているところです。

古代の著述家は、ガリア人(現在のフランスはガリア人とも呼ばれます)をキンブリ族の人々であると語っています。そして、ホメロス(紀元前10世紀ごろのギリシャの詩人)の詩に歌われている古代キムメリオス族の人々と同じだと見なしています。

彼らは、ダニューブ川の河口から移住していきことが明らかになっています。初期のケルト族は、「絶えず西方に移動していた」と言われています。「ベルガエ族」も起源はキンブリ族にあります。彼らは、ライン川を越えて広がり、自分たちの名前を「すべての北フランスとベルギー」に与えたのです(『ブリタニカ百科事典』第11版第5巻612頁を参照)。

言語的にも、古代ケルト族は中東の出身であることが確認されています。

1881年、ジェイムズ・プリチャードは、その著書『ケルト国家の東方起源』(Eastern Origin of the Celtic Nations)で、ケルト族の人々の真の関係を証明した最初の一人になっています。ババリア人の著名な歴史家J.C.ゼウス(1806-1856)は、ケルト語の諸方言がインドヨーロッパ語族を起源にすることを決定的に証明しています。彼は、古代アイルランド語の写本を再発見して、『ケルト古典の研究』(Grammatical Celtic)と題するケルト哲学に関する素晴らしい研究を1853年に発表しています。

しかしそれにしても、カフカス山脈やカルパチア山脈を流れる河川の流域に沿って移住してきたキンブリ族(別名、クンメー族)は、誰だったのでしょうか？

オムリは、紀元前929年にその治世は始めていますが、彼は、ダンにあったレビ族の都市ギベトンが包囲攻撃された時に、軍隊によって王位に就けられたのです。

イスラエル王のエラが家臣ジムリに殺され、ジムリが王位を奪ったために、軍隊が彼らの司令官オムリをイスラエル王にしたのです。オムリの「...主要業績は、サマリアの建設でした。その時から、サマリアはイスラエル王国の首都になりました」(『聖書文献百科事典』ジョン・キッター編 第3巻 365頁)。

オムリは、聖書の中でイスラエルの二流の王の一人として登場していますが、パレスチナの北と東に位置するアッシリア人やモアブ人などの諸王国にとっては最も重要な王の一人になっています。

ハasting編『聖書辞書』のオムリの項を見ると、オムリは、アッシリア語のスペリングではフムリまたはフムリアになっています。そして、ヘブライ語ーカナン語の“y”はアッシリア語の“h”に相当することがシュレーダーによって例証されているとの注釈が添えられています。(Cot2ip.179)。

他の例も紹介されています。例えば、アンミ - ラビ（アムラフェル）はハンムラビのことで、
"h"を"k"のように発音する言語もあれば、無音にする言語もあることを例証しています。

上記の『聖書辞書』（第3巻 621頁）は、モアブ人（モアブ：死海の東方にあった古代王国）
が石に刻んで残した大量の碑文について紹介していますが、その一部を引用します：「オムリ
はイスラエルの王で、ケモシュ（モアブ人の神）が彼の地で怒っていたために、モアブ国を長
い間（文字通りには、何日もとなっています）抑圧していた。そして、オムリの息子が彼の跡
を継いだ、彼も「私の時代（つまり、メシャの時代）にはモアブ国を抑圧する」と言った。
しかし、私は（私の願望）、彼と彼の家とイスラエルが永久に破滅するのを見た」。（実際は、
最終的にオムリの息子のアハブがモアブ国の支配を放棄せざるを得なくなったと言うだけの
ことで、この碑文には誇張があります）。

「そこで、オムリはメデバ（メヘデバ）の地を占領し、彼の時代と彼の息子の時代の半分を合
わせた40年間、その地に住んだ。…」。

『聖書辞書』はまた、こう解説しています：「これらの日付（オムリの治世に関する年表作成の
困難性について説明した後続く文章です）は、優れた軍事的手腕でオムリが西アジアに残し
た痕跡を研究したアッシリア学の研究成果とよく一致しています」。この痕跡は、つかの間の
ものではなく、大変長期間に及んでいます。これについては、シャルマネセル 2世の時代の
紀元前860年からサルゴンの時代（722-705 B.C.）に至るまで、パレスチナはビト・フムリ、
つまり「オムリ家の土地」と呼ばれていたという事実によっても裏付けられています。「王位
強奪者エヒウ」は、シャルマネセルの黒いオベリスクに「オムリの息子エヒウ」と刻まれてい
ます。イスラエルとユダの地にも、これに劣らない痕跡が残されています。これについても『聖書
辞書』は次のように触れています：「ミカ書6章16節にある「オムリの定めた律法」という記述
は、このことを明瞭に物語っています。なお、彼の名前は、彼の息子のアハブの名前と一緒に
言及されています」。

ビト・フムリは、古代ヘブライ語のベト・オムリに相当しており、オムリ家を意味しますが、

アッシリア人は、すべてのイスラエル人にこの名前を当てはめています！

例えば、シャルマネセルの軍隊が数十万人のイスラエル人の捕虜を奴隷としてアッシリアの地に連れてきた時、この軍隊も現地の住民も、イスラエル人たちを指すのにビット・フムリ以外の名前は使用していません。ヘブライ人とかイスラエル人とか、或いはその他のイスラエルのユダヤ的な名称を用いて彼らを読んだことは一度もありません！

“h”を無音にする言語もあります。しかし、英語の“how”に見られるように、硬口蓋によって“h”を鋭く発音して堅い音声にする言語もあります。また、ドイツ語のように“h”を英語の“k”と殆ど同じように発音する言語もあります。

こうした理由により、ビット・フムリ、「クムリ」と発音する言語もあります。ギリシャ人は「キムリ」、「シムリ」、「ジムリ」などと発音しています。

ビット・フムリの人々は、歴史の中で「シメリアン」（キムメリオス人）と呼ばれていることもあります。

ギリシャ人にギンブリと呼ばれていたビット・フムリ、言い換えるとクムリの人々は、ケルト族の祖先であると言われています！

『ブリタニカ百科事典』（第11版）第20巻105頁には、次のような解説があります：「モアブ王メシャが残した石碑は彼のモアブ征服の解明に歓迎すべき光を当てています。オムリの息子アハブの治世におけるイスラエルの立場が、彼の父（オムリ）の成功を証明しています。そして、イスラエルの地がサルゴン2世（在位722-705 B.C.）の時代に至るまでアッシリア人に「オムリの家」と呼ばれ続けたという事実は、この一般的によく知られていない王が受けていた信望を物語っています」。

ギンブリ族は、紀元前110年ころにローマ史に始めて登場した「チュートン族」で、彼らは「何年

かにわたって戦^{いくさ}をしながらダニューブ川^{がわ}に沿^そってさまよって」いたことが、明^{あき}らかになっています。

『ブリタニカ百科事典^{ひゃっかじてん}』は次のように述べています:「キンブリ族^{ぞく}の故郷^{こきょう}については、多^{おほく}くの議論^{ぎろん}がなされてきました。アンキラの記念碑^{きねんひ}（アンキラ：トルコの首都^{しゅと}アンカラの古代名^{こだいめい}）には、ライン川^{がわ}の河口^{かこう}から東^{ひがし}に航行^{こうこう}するローマ軍^{ぐん}の艦隊^{かんたい}が（紀元^{きげん}5年頃^{ねんごろ}）...最^もも遠^{とお}くまで進^{すす}んだところで、キンブリと呼^よばれる人々^{ひとびと}の住^すむ地域^{ちいき}に到^{とう}達^{たつ}した。そして彼^{かれ}らは、ローマ皇帝^{こうてい}アウグストゥス（63B.C.-A.D.14）に大使^{たいし}を派遣^{はけん}した、と記^{しる}されています」。

昔^{むかし}の著述家^{ちよじゆつか}の何人^{なんにん}かは、ギンブリ族^{ぞく}がある半島^{はんとう}に居住^{きょじゆう}していて、プトレマイオス（西暦^{せいれき}2世紀^{せいき}のアレクサンドリアの天文^{てんもん}・地理^{ちり}・数学^{すうがく}者^{しゃ}; 天動説^{てんどうせつ}を唱^{とな}えた）の地図^{ちず}では、ユトランド半島^{はんとう}がキンブリ半島^{はんとう}だと思^{おも}われる、ということ^{こと}で考^{かんが}えが一^い致^ちしています。『ブリタニカ百科事典^{ひゃっかじてん}』の「キムメリオス人^{じん}」の項^{こう}を見^みると、彼^{かれ}らは「ホメロスによ^よって初^{はじ}めて紹^{しょう}介^{かい}されたヨーロッパの北^{ほつぽう}方^{ほう}または西^{せいほう}方に住^すんでいた古代人^{こだいじん}」であつたと記^{しる}されています。

有名^{ゆうめい}な歴史家^{れきしか}ヘロドトス（紀元^{きげん}前^{ぜん}484?-425?）は、彼^{かれ}らは「南^{みなみ}ロシア^{しよき}の初期^{じゅうめん}の住^す民^{みん}で、スキタイ人^{じん}に追^おわれてカフカス山脈^{さんみゃく}から小^{しょう}アジア（アナトリア半島^{はんとう}）に行^いき、そこで100年^{ねん}ほど暮^くらした」と述^のべています。この大^{たい}家^かはまた、「後^{のち}の時代^{じだい}の著述家^{ちよじゆつか}は、彼^{かれ}らをユトランド半島^{はんとう}のキンブリ族^{ぞく}と同一^{どういつし}視^ししているが、彼^{かれ}らは恐^{おそ}らくチュートン化^かされたケルト人^{じん}であると思^{おも}われる...」とも述^のべています(Herodotus IV. 11-13)。

『聖書^{せいしょ}百科事典^{ひゃっかじてん}』は、アッシリア人^{じん}によるオムリ^{かん}に関する言^{げん}及^{きやう}について次^{つぎ}のように記^{しる}しています:「シャルマネセル 3世^{せい}（854）の時代^{じだい}からサルゴン 2世^{せい}（720）の時代^{じだい}にかけての碑文^{ひぶん}では、北^{きた}の王国^{おうこく}はマト・ビト・フムリ（オムリ^いの家^{いえ}の土地^{とち}）または単^{たん}にマト・フムリ（オムリ^いの土地^{とち}）と呼^よばれており、イスラエル王^{おう}エヒウは「オムリ^いの息子^{むすこ}」と呼^よばれています（190頁^{ぺい}～）。当時^{とうじ}のアッシリア人^{じん}がこれら^{ことば}の言葉^{しやう}を使用^ししたという事^{こと}が、オムリ^いの外国^{がいこく}での偉大^{いだい}な名声^{めいせい}を物語^{ものがた}っています」。

『聖書^{せいしょ}百科事典^{ひゃっかじてん}』はまた、捕虜^{ほりよ}となつたイスラエル人^{ひと}々^{びと}が — 彼^{かれ}らは、彼^{かれ}ら^{かれ}の地^ちにいた頃^{ころ}

から既に墮落していたのですが — 移住する時にパールのつく様々な名前も持っていった可能性が大であるという考えを支持しています！そして、アイルランドに今日まで残っているパール神に由来する様々な名前について説明を加えています。

更に、『聖書百科事典』はこのように述べています：「[オムリ]が築いた王朝は半世紀にわたって続きましたが、預言者達の憎悪によって滅ぼされ、パール神信仰に向かいました」（3500）

スキタイ

古代スキタイ人は、「カルパチア山脈からドン川にかけてのステップ（大草原）地帯」に暮らしていた「遊牧」の民でした（『ブリタニカ百科事典』第25巻526頁）。

エジプトについて研究した歴史家・年代学者ヘロドトスは、スキタイ人について、彼らの言語の起源はペルシア（イランの旧称）にある事を証明しています（Herodotus IV. 1-42）。

ただ、ヘロドトスは幾つかのスキタイ語の言葉が黒海とカスピ海に挟まれた地域に起源があることを記録に残していますが、その他の言葉、特にスキタイ人の神々の名前については、インドヨーロッパ祖語の観点から見た満足すべき説明はありません。

歴史に記録されているスキタイ地方の最古の住民がシメリ人（キムメリオス人）であったというのは、興味深いことです。シメリ（キムメリオス）というのは、オムリ、即ちビト・フムリ（「オムリの家」）の人々を指す古代名称の若干訛った言い方以外の何物でもありません。こうした訛りは、言葉の歴史の中ではよくあることです。

「...この国の性質からすると、恐らく、彼ら[スキタイ人]の中には、遊牧民がいた一方で、河川の流域やクリミア半島で土地を耕作して暮らしていた人々もいたと考えられます。彼らは、渡

し舟の発着場、土塁、キムメリオス人のボスポラス（海峡）にその名を残しています。[黒海と地中海を結ぶ狭い水路は、ボスポラス＝ダータネルス（ダー・ダン・エルス）海峡と呼ばれています]。紀元前7世紀頃には既に、今日のイランの北の国境地方の一帯を困らせていた好戦的なサーカ族（サーカイ族）と呼ばれていた人々が存在していますが、サーカ族もスキタイ族も同じであると考える歴史家もいます」。

サクソン人とは誰なのでしょう？

プトレマイオスは、西暦2世紀の中ごろに「サクソン人」（サーカ人、サーカイ人、シシア人）が、キンブリ半島 — 「シミリ人」つまり「キンブリ人」が暮らしていた半島、現在のユトランド半島 — の首にあたる地方、および今日のデンマークの西海岸の沖に浮かぶ3つの島に住んでいたと述べています。

彼らは次に、西暦286年ころに北海で時おり行った探検に関係して歴史に再登場します。5世紀の初頭には既に、ゴール（今日のフランス）の北部沿岸と大ブリテン島の南東部沿岸はリトラ・サクソニカと呼ばれていました。これは、「サクソン族の沿岸地方」という意味のラテン語ですが、明らかに、サクソン人が入植地を確立していたことを示しています。

6世紀以降、サクソン人は事実上、歴史から姿を消します。大ブリテン島を侵略したサクソン人は船乗り民族である一方で、自発的または征服されて、ドイツ北西部のウェストファーレン地方の北部と西部の土地を占めていたフリジア王国に溶け込んでいったのだと、歴史家たちは考えています。

今日に至るまで、ドイツの州の1つは「サクソニー」（ザクセン州）と呼ばれています。大ブリテン島の初期の住民であったアングル人は、侵略者サクソン人と共に、英国人を意味する「アングロ＝サクソン」という現代語に彼らの名前を残しています。

「サクソン」と言う言葉は、古代ヘブライ語の名前である「イサク」に「誰その息子」を意味する接辞が付いたものから派生して出来たということは、今日では正しさが十分に証明されている事実です。トトン教授は、このように述べています：「東方の諸言語の大多数では、「誰その息子」はスニアと綴られています。これは、スコットランド語の「マック」や英語とアイルランド語の「フィッツ」に相当します。マクドナルドはドナルドの息子、フィッツヘンリーはヘンリーの息子という意味です。私たちの遠い祖先の故郷では、サク＝スニアはイサクの息子を意味していたのです。スタンブールはイスタンブールの接頭辞イが脱落して出来たものです。従って、サクソン人は、私たちの父イサクの直系の子孫になります」。W.ホルト博士は、このサクソンの名称の由来を肯定的に受け入れています。また、W.H.プール師（神学博士）は、これについてこう述べています：「このサクソンと言う言葉と関係する様々な形態の言葉を、古代の国家や石碑から拾い集めるのは、少し不思議な好奇心をそそられる事です。私もここで、古代史から収集したリストから少し紹介します。例えば、イサクの息子を意味する言葉として：サンズ・オブ・サク、サク・スニア、サク＝スナ、サク＝セナ、サク＝ペナ、エサクスカ、サーカイ＝アミルキ、ベス＝サカル（イサクの家）、スニアサカイ＝スナ、サーカ＝スナ、サーカイ＝スナエ、サキシナ、サッカ＝サシア、サーカ＝シーニ、サーカ＝スナ、サカス＝サニ、サカス＝シーニ、サクシ＝スナ、サク＝スニ、サキ、サチャ、サー＝カ、サー＝クス、サー＝カス、サ＝チョ、サクソ、サクソイ、サクソニア、サクス＝オンズ、サクシ、ザク＝セン、サク＝セン、サクス＝セン、サクソーン、サクソニー、サクソン」（「私たちの系図」『ユダの王権とヨセフの長子相続権』292頁）。

多くの古代史研究家は、「サクソン」（イサクの息子：サン・ノブ・イサク）の語源については意見が一致しています。サクソン人はスキタイ人（シシアン人）と血縁関係にあって、サカイ（サーカイ）と呼ばれていたが、彼らはメデス（列王記下17:6;18:11を参照）の地からやって来た、とプトレマイオスは言っています！

サクソン人に関して最も重要な歴史家の一人は、シャロン・ターナーですが、彼は次のように述べています：「サクソン人はスキタイ人の1つの民族国家を構成しており、サーカ（サカ）、サチ、サッキ、サク＝センなどと呼ばれていました」。プリニウス（A.D. 23-79）は、「サカイ族は、スキタイ族の中で最も卓越した存在で、彼らはアルメニア（アジア西部の古代国家；現在

のアルメニア^{きょうわこく}、トルコ、イランにまたがる地域^{ちいき}）に定住^{ていじゅう}して、サーカエ＝サニと呼ばれていた」と述べています。また、アルビナスは、「サクソン人は、古代アジアのサーカ族^{ぞく}の子孫^{しそん}である」と主張^{しゅちよう}しています。

もう一人の歴史家プリドー（1648－1724：英国の東洋学者で司祭^{しさい}）は、キンブリ族^{ぞく}は黒海（ユー^{ユー}クサン）とカスピ海^{かい}に挟まれた地帯^{はさ}の出身^{しゅっしん}で、彼らと一緒に^{かれ}アングリ人^{じん}もやって来た、と述べています。

ゴラーはその著書『私たちの祖先スキタイ人^{じん}』（*Our Scythian Ancestors*）において「サーカエという言葉^{ことば}は、想像力を精一杯働かせなくとも、イサク人を意味することは明瞭^{めいりよう}です」（6頁）と述べています。

今日^{こんにち}でさえ、ヘブライ語^ごの名前^{なまえ}の「イサク」は、イーツァークと発音^{はつおん}されています。この発音^{はつおん}を無理^{むり}して英語式^{えいごしき}に表記^{ひようき}しようとする、文字^{もじ}“i”を英語^{えいご}の“ee”の発音^{はつおん}になるようにするために、ヘブライ語^ごの名前^{なまえ}「イサク」を綴^{つづ}る時に英語^{えいご}を使う人々がするよに、“i”を“y”で表記^{ひようき}してイーツァーク（Ytsak）という綴^{つづ}りになります。

これらの「イサクの息子^{むすこ}たち」は、サーケア（族^{ぞく}）とかサカ（族^{ぞく}）と呼ばれるようになった訳^{わけ}です。彼ら^{かれ}の名前^{なまえ}は、ダン族^{ぞく}やピト - フムリ族^{ぞく}（オムリ^{むすこ}の息子^{むすこ}たち）と共通^{きようつう}の起源^{きげん}で結ばれていることが明らかにされています。彼らはすべて、古代^{こだい}のメディア^{げんざい}（現在のイラン北西部^{ほくせいぶ}で、カスピ海^{かい}の南西部^{なんせいぶ}にあった古代^{こだい}王国^{おうこく}）の地^ちを出身地^{しゅっしんち}にして、河川^{かせん}に沿って — 主として、ダニューブ川^{がわ}に沿って — 北西ヨーロッパ^{ほくせい}やイギリス諸島^{しよとう}にやってきたのです！

北西ヨーロッパ^{ほくせい}、北歐諸国^{ほくおうしよこく}、およびイギリス諸島^{しよとう}の最も古い古代^{こだい}の住民^{じゅうみん}の身元^{みもと}に関するこれらの僅かな手掛かりは、入手可能なすべての証拠^{しやうこ}ということでは決してありません！

古代イスラエル人^{じん}の探検家^{たんけんか}たち（ソロモン王^{おう}の時代^{じだい}にアフリカ^{しゅうこう}を周航^{しゅうかう}し、インドやイギリス諸島^{しよとう}まで航海^{かうかい}した人々^{ひとびと}だけでなく、後のダン族^{のちぞく}も含まれます）が交易^{こうぎ}のルートに沿って（食物^{しょくもつ}

や真水などの) 主要な食糧供給源に、彼らの名前を残していると言う事実は、明白です。

ここで、もう一度思い起こすことにしましょう。神は、北の10部族で構成されるイスラエルの人々を、彼らが最初に相続した土地から完全に追放されています！

常に自分たちの創造主を心に留め、誰が自分たち保護者であり、主であり、神であるのかということを思い起こして記念するための偉大な1つのしるしを拒絶したのですから、彼らは、精神的には失われた存在になっていたのです！

神は、彼らを捨てたのです。

パールという異教の名前を採り入れ、異教の偶像崇拝の儀式に — 幼児の生け贄さえ — 陥っていた彼らは、神にとって悪臭を放つ存在になっていたのです。

神は、次々と預言者を遣わされ、彼らの個人的・国家的な罪に対する罰は途方もなく大きいと言う告発を激しい言葉で警告されていました。

倒錯した邪悪な支配者たちは、聞き入れませんでした。異教の偶像は取り除かれませんでした。そして神は遂に、警告されていた罰を実行されました。何十万人もの巨大な数のイスラエル10部族の人々を難民として捕らわれの地へ追放されました！

時代が下って、アッシリア帝国が最終的に崩壊した時、これらの奴隷たちの子孫の生活は、実質的には「石器時代」とも言える未開で野蛮な水準にまで悪化していました。そして、この子孫たちは、彷徨える遊牧の民のようにして、肥沃な河川の流域に沿って進み、黒海とカスピ海との間に位置するカフカス山脈の丘陵地帯を中心とする一帯に広がって行き、更に、黒海を挟んで西に位置するカルパチア山脈の丘陵地帯へと進出していきました。彼らは、その道中で、特徴的な地形、河川、支流、山、峠などに彼らの名前を残しています。

彼らを捕えていた人たちは、彼らをビト・クムリアとかクムリと呼び、ローマ人たちは彼らのことをキムリと呼んでいました。従って、私たちがこれらの名前がヨーロッパ中に — イギリス諸島にまで — 散らばっているのを発見するのは、不思議なことではないのです！これは、ダン族と関係する様々な名前の場合と同様のことです。

1つの事は確実に言えます：神の言葉は、依然として有効なのです！アブラハム、イサク、そしてヤコブに対する神の約束は、完全に無条件だったのです！

何世代にも渡って国家の相続権は剥奪されてきましたが、イスラエルの10部族は遂に、彼らが永久に所有することになる土地 — 時代が過ぎるにつれて、すべての国々の中で最も偉大な国家（全盛期の大英帝国）、そして世界史において最も偉大な単一国家であるアメリカ合衆国の地に到着したのです！

七倍の罰

ここで、私たちはこの物語の魅力的な部分 — 神の約束の素晴らしい成就、つまり、アブラハム、イサク、ヤコブの子孫に与えられた約束が遅れたにも係わらず成就されるという部分 — にやってきました。

思い起こして下さい。神は神の律法や掟を守らなければ、7倍の国家的な罰が彼らを通り過ぎると、イスラエルの人々に警告されていました。神は、彼らの罪に対して**7倍の罰**を下されることになっていました！

7「倍」についてですが、預言における7年は360日の7倍の2520日の意味します。つまり、2520年という時の長さを意味します。

イスラエルの人々は、突然にして彼らの土地から追放された訳ではありません。神は、数人のイスラエル王の時代に、彼らにアッシリア人の軍隊を送って罰せられましたが、それは、繰り返し預言者たちが彼らに警告してきた神の行為であることを王たちが気付いて、嫌悪すべき異教の習慣を捨て、悔い改めて神に立ち返ることを、神が望んでおられたからです。

アッシリア王プル（在位744-727 B.C.:下記のティグラト・ピレセル[3世]と同一人物）がイスラエル王メナヘムに対抗してサマリアに侵攻し、重税を課したのですが、イスラエルの人々を奴隷として強制移住させたり、彼らの土地を占領したりすることはしませんでした（列王記下15:19）。それから何年か後に、ペカがイスラエル王になりましたが、彼は「...主の目に悪とされることを行い、イスラエルに罪を犯させたネパトの子ヤロブアムの罪を離れなかった。

「イスラエルの王ペカの時代に、アッシリアの王ティグラト・ピレセルが攻めて来て、イヨン、アベル・ベト・マアカ、ヤノア、ケデシュ、ハツオル、ギレアド、ガラリヤ、およびナフタリの全地方を占領し、その住民を捕囚としてアッシリアに連れ去った」（列王記下15:28-29）。

ティグラト・ピレセルはこう記しています：「私は、オムリの国の人々[アッシリア人は「ビト・クムリ」と呼んでいました]を彼らの財産と共にアッシリアに強制移住させた」。この強制移住については、アッシャー（1581-1656;アイルランドの大司教）編のユダヤ史年表は紀元前734年であったとしています。しかし、アッシャーの計算には1年のずれがあります。と言うのは、ノアの大洪水の1年間の継続期間を誤って省いているからです。2520から734（実際は735）を差し引くと、1785になります。しかし、紀元前の年数から西暦の年数を差し引く場合、“0”年は存在しないことに注意しなければなりません。「紀元前1年」から「西暦1年」になる訳で、その間に余分な数字の“0”は無いのです。従って、計算上は、1年をプラスする必要があります。正確に計算すると、7倍の2520から、イスラエル人の奴隷としての大きな（しかし、最大でも最後でもありません）強制移住の起きた紀元前735年を差し引くと、1786ということになります。そして、1786年には、合衆国の当時の5つの州を代表する議員たちがフィラデルフィアで特別会議を招集して、13州の実質的な憲法を起草するように議会に要請しています！

明らかに、この出来事 — 憲法を起草するという合図 — は、イスラエルの人々の何割か

が彼ら自身^{かれら じしん}の土地^{とち}に定着^{ていちゃく}したことを示^{しめ}す重要な道標^{じゅうよう どうひょう}になるでしょう。但し、ディグラト・ピレセルが北^{きた}のイスラエル王国^{おうこく}の主要部分^{しゅようぶぶん}を征服^{せいふく}した正確^{せいかく}な年^{とし}は、大いに議論^{おお}の余地^{ぎろん}があるところ^ちです。キッター（1804-54: 英国^{えいこく}の聖書研究家^{せいしょけんきゅうか}）は次のように述べています: 「彼の即位^{つぎ}の日付^{ひづけ}については、多大^{ただい}な不確実性^{ふかくじつせい}が存在^{そんざい}します。何故^{なぜ}ならば、彼の治世^{かれ ちせい}第8年^{だいに}にメナヘムから貢ぎ物^{みつもの}を受け取^うったと述べているからです。それならば、それ[彼の即位^{かれ すぐい}]は紀元前^{きげんぜん}767年または 768年^{ねん} [一般^{いっぱん}に認め^{みと}られている年表^{ねんひょう}]ということになります。しかし、一方では、彼の即位^{かれ すぐい}はナボナッサル（バビロニア^{おう}の王^{ざい}; 在位^{ざい}747-734 B.C.）の時代^{じだい}をもたらしたバビロンでの事態^{じたい}の変化^{へんか}（紀元前^{きげんぜん}747 年）に何らかの関係^{なん かんけい}がある可能性^{かのうせい}の方が大きいのです。

「但し、七十人聖書^{ななじゅうにんせいしょ}[LXX]がマナセ（697?-642? B.C.; ユダ^{おう}の王^{ちせい}）の治世^{ねん}を 55年ではなく 35年にしていることから、この 20年の減少^{ねん げんしょう ちようど}は調度^{ふい ちち}、この不一致^{かいしょう}を解消^{ある}してくれます。或いは、もしそうでなければ、前述^{ぜんじゆつ}の碑文^{ひぶん}の中で、メナヘムはペカと間違^{まちが}われている可能性^{かのうせい}もあります。何故ならば、彼は、聖書^{かれ せいしょ}が常にペカと結びつけて記述^{きじゆつ}しているレツィンと一緒に扱^{いっしょ あつか}われているからです」（『聖書文献百科事典』（A Cyclopaedia of Biblical Literature）第1巻 248-249頁）。

幾つかの年代は正確に決定^{いく ねんだい せいかく けつてい}することが出来ますが、年代の正確さはさておき、数十年^{すうじゅうねん}に及ぶ波状攻撃^{はじょうこうげき}によりアッシリア軍^{ぐん}が北^{きた}のイスラエル王国^{おうこく}に侵攻^{しんこう}しています。そしてその侵略^{しんりやく}の期間^{きかん}は、何人^{なんにん}かのアッシリア王^{おう}とイスラエル王^{おう}の治世^{ちせい}に及んでいます。

ハーバマンはこう述べています: 「ベト - サク — “イスラエルの家^{いえ}”を意味するフェニキア語 — の真^{しん}の捕囚^{ほしゅう}は、紀元前^{きげんぜん}745年に始まりましたが、その年^{ねん}に、列王記下^{れつおうきげ}15章 29節に記録^{しやう せつ きろく}されているように、ティグラト・ピレセルは、アセル族^{ぞく}、ゼブルン族^{ぞく}、イッサカル族^{ぞく}、ガド族^{ぞく}の人々^{ひとびと}の大部分^{だいぶぶん}をアッシリアに連れて行きました」。^{なお}、ハーバマンは、ここで、イスラエルの異教^{いきぎやう}の隣人^{りんじん}たちは靈感^{れいかん}に満ちた聖書^{せいしょ}にある名称^{めいしやう}を使用^{しやう}せずに、テル・エル・アマルナ（エジプト中部^{ちゆうぶ}ナイル川東岸^{がわとうがん}に位置^いする古代都市^{こだい とし}の遺跡^{いせき}）の銘板^{めいばん}に記されているようなハビル、ハビル、アビリ（これらは、明らかに古代ヘブライ語^{こだい}の訛^{なま}った言い方^{い かた}）と言う彼ら自身^{かれら じしん}の言葉^{ことば}を使用^{しやう}していた、そして、“ベト - サク”は“イサクの家^{いえ}”を意味し、後に使用^{のち}されることになった“サクソ

ン”という言葉は“サクの息子”（サンズ・オブ・サク）」を意味する、と正しく指摘しています]。

この年代については、他にも多くの人々が同意しています。預言における数字の2,520から745を差し引くと — 紀元前1年と西暦1年との間に“0”年は存在しないことから、忘れずに1年をプラスして — 1776という計算になります！この年に何らかの重要な出来事が起きたことに疑問を持つアメリカ人はいますか？ただし、念のために付け加えますが、ティグラト・ピレセルによって捕囚を強制された人々にはマナセ族は含まれていません。著しい人数ではありませんでしたが、捕虜になったのは他の部族の人々でした。

ヨーロッパの様々な国家の重要な出来事を2,520年もの昔のティグラト・ピレセルの時代の捕囚と結び付けて考えるには、多大な研究が必要になるでしょう。しかし、ここで私たちに関係があるのは主としてエフライム族とマナセ族、つまり英国とアメリカの人々です。何故ならば、死の床にあるヤコブ（イスラエル）が「私の名が彼らによって後世に伝えられますよう」と言っているからです。末期 — （「ヤコブの苦しみ」のときと呼ばれている）大きな苦難の前およびその間 — に関する聖書の預言で「イスラエルの家」と呼ばれている人々は、エフライム族とマナセ族の人々なのです！

ハーバマンはまた、デーヴィッドソン著『大英帝国とアメリカに関する大ピラミッド預言』（*The Great Pyramid Prophecy concerning the British and America*）から引用して、次のように主張しています：この大ピラミッド預言は、「...[その]年表が1776年1月10日をアメリカにおけるイスラエルの歴史の中で画期的な日付にしていることを示しています。トマス・ペイン（1737-1809）が論説『コモンセンス』（*Common Sense*）を発表したのが1776年1月10日で、彼はその中で、植民地の人々が母国に反旗を翻すように呼びかけています」（ハーバマン著『私たち白人の祖先を訪ねて』（*Tracing Our White Ancestors*）176頁）。

ここで、筆者は、ピラミッド説を信じるつもりはないことを明言しておきます。「ピラミッドインチ」は、預言的な真理を論理的に求めるために人為的に考案された不正確な年代の測定単位です。ピラミッドにはエジプトの墳墓以上の何らかの意味があるのかも知れない — 米国国璽

にピラミッドが描^{えが}かれているのも何^{なん}らかの意^い味^みがあるのかも知^しれない — それは至^し福^{ふく}千^{せん}年^{ねん}期^きの国^{こく}境^{きょう}の再^{さい}配^{はい}置^ちのた^ため^めの国^{こく}境^{きょう}の目^め印^{いん}とな^なるものかも知^しれない — とは思^{おも}いますが、出^で来^き事^{ごと}が起^おき^きてから長^{なが}い時^じ間^{かん}が経^たって^てから得^えた測^{そく}定^{てい}単^{たん}位^いに重^{じゅう}要^{よう}な出^で来^き事^{ごと}を当^あてはめ^めるこ^こに^には大^{おお}いに疑^ぎ問^{もん}が^のこ^こに残^{のこ}ること^{こと}から、こ^こう^{こう}した^した^{こと}の解^{かい}釈^{しゃく}は^はす^すべ^べて未^み来^{らい}に託^{たく}すこ^こに^にし^しま^ます。こ^これ^れは、預^よ言^{げん}で^では^はな^なく、解^{かい}釈^{しゃく}的^{てき}な考^{こう}古^こ学^{がく}で^であ^あり、解^{かい}釈^{しゃく}的^{てき}な歴^れ史^しにな^なり^りま^ます。ア^あメ^めリ^りカ^かと英^{えい}国^{こく}が^じっ^じっ^しに^に現^{げん}代^{だい}のマ^まナ^なセ^せとエ^えフ^ふラ^らイ^いム^むの^しそ^そん^んで^であ^ある^るとい^いう^う事^じ実^{じつ}を^を支^し持^じする^るの^に葉^はに^にす^すが^がる^る必^{ひつ}要^{よう}は^はあ^あり^りま^ませ^せん。

間^ま違^{ちが}い^いの無^ない^いよ^{よう}に注^{ちゅう}意^いして^て下^{くだ}さい！植^{しょく}民^{みん}地^ち移^い住^{じゅう}、そ^ごの^の後^ごの合^{がっ}衆^{しゅう}国^{こく}の独^{どく}立^{りつ}と漸^{ぜん}進^{しん}的^{てき}な^{かく}大^{だい}に^{いた}至^{いた}る何^{なん}十^{じゅう}年^{ねん}もの間^{あいだ}には、何^{なん}百^{ひゃく}もの出^で来^き事^{ごと}が起^おき^きて^てい^いま^ます。正^{せい}確^{かく}な日^ひ付^{つけ}を^を云^{うん}々^んする^る必^{ひつ}要^{よう}は^はあ^あり^りま^ませ^せん。何^な故^げな^らば、こ^こう^{こう}した^した^{こと}の合^{がっ}衆^{しゅう}国^{こく}の独^{どく}立^{りつ}と^{かく}大^{だい}が^{じつ}げん^{げん}した^{した}全^{ぜん}期^き間^{かん}が、2,520年^{ねん}の遠^とい^い昔^{むかし}に^おき^きた^{きた}北^{きた}の伊^{おう}ス^すラ^らエ^えル^る王^{おう}国^{こく}の10部^ぶ族^{ぞく}の征^{せい}服^{ふく}と強^{きやう}制^{せい}移^い住^{じゅう}の全^{ぜん}期^き間^{かん}に^みじ^じに^に一^{いっ}致^ちする^るか^から^らで^です。

私^{わたし}た^たち^ちの^{ほん}本^{だい}題^{だい}に^には、多^た数^{すう}の「興^{きやう}味^み深^みい二^に次^じ的^{てき}な^で出^で来^き事^{ごと}」が^{そん}存^{ざん}する^るこ^こを^を明^{あき}ら^らか^かに^にし^して^てお^おき^きま^まし^しょう。こ^これ^れら^らの^{きやう}興^{きやう}味^み深^みい^{こと}事^{ごと}柄^{がら}は、こ^ここ^この^{ぜん}全^{たい}体^{てき}的^{しん}な^{じつ}真^{せつ}実^{めい}を^を説^{こう}明^{けん}する^るの^に貢^{こう}献^{けん}して^てい^いま^ます。ま^また、こ^この^{しん}真^{じつ}実^きに^{きやう}興^{きやう}味^みや^{いろ}色^{いろ}づ^くけ^けや^{しん}信^{しん}憑^{びやう}性^{せい}を^を添^そえる^{はたら}働^{はたら}き^きを^をし^して^てい^いま^ます。し^しか^かし、木^きの^し主^{しゅ}幹^{かん}は、神^{かみ}の^あア^あブ^ぶラ^らハ^ハム^む、伊^いサ^さク^く、ヤ^やコ^こブ^ぶに^に対^{たい}する^る約^{やく}束^{そく} — ヤ^やコ^こブ^ぶの^ま孫^ごの^えエ^えフ^ふラ^らイ^いム^むと^まマ^まナ^なセ^せが^がや^やが^がて^ては「^こ家^か国^{こく}」お^およ^よび^い偉^{たい}大^{だい}な^{たん}単^{いつ}一^こ国^こ家^かにな^なり、こ^この^りり^{よう}し^やで^で世^せ界^{かい}の^{さい}最^{さう}高^{こう}の^ば場^{しやう}所^じを^を獲^{かく}得^{とく}し — 彼^{かれ}ら^らの^て敵^{てき}の^{じやう}城^{じやう}門^{もん}を^を勝^かち^と取^とり、「^{てん}天^{てん}の^{ほし}星^{せい}」や「^は浜^はの^ま真^ま砂^さ」の^{ごと}如^{ごと}く^く増^まえ^える^るとい^いう^う約^{やく}束^{そく}で^です。こ^この^だ約^{やく}束^{そく}に^につ^ついて^ては、誰^{だれ}も^も否^ひ定^{てい}する^るこ^こは^はで^でき^きま^ませ^せん。

こ^ここ^こで、否^ひ定^{てい}で^でき^きない^い日^ひ付^{つけ} — 議^ぎ論^{ろん}の^よ余^ち地^ちの^ひな^ない^い日^ひ付^{つけ} — に^に注^{ちゅう}目^{もく}し^しま^まし^しょう！

伊^いス^すラ^らエ^えル^るの^{ひと}人^{ひと}々^との^{だい}大^{だい}多^た数^{すう}は、紀^き元^{げん}前^{ぜん}718年^{ねん}に^にア^あッ^{ぐん}シ^しリ^りア^あ軍^{ぐん}に^によ^よつ^{きやう}て^せ強^{きやう}制^{せい}移^い住^{じゅう}さ^させ^せら^られ^れま^まし^した^た。こ^これ^れは、北^{きた}の10部^ぶ族^{ぞく}の伊^いス^すラ^らエ^えル^るの^{いえ}家^{たい}に^に対^{たい}する^るア^あッ^{ぐん}シ^しリ^りア^あ軍^{ぐん}の^は波^は状^{じやう}的^{てき}な^{しん}侵^{しん}略^{りやく}攻^{こう}撃^{げき}の^{なか}中^{ちゅう}で^で最^{さい}大^{だい}の^り領^{りやう}土^ど的^{てき}、人^{じん}的^{てき}、物^{ぶつ}質^{しつ}的^{てき}な^{そう}喪^{そう}失^{しつ}にな^なり^りま^まし^した^た。こ^これ^れに^には、エ^えフ^ふラ^らイ^いム^む族^{ぞく}と^{ぞく}マ^まナ^なセ^せ族^{ぞく}の^{ひと}す^すべ^べて^ての^{ひと}人^{ひと}々^とが^が含^{ふく}ま^まれ^れて^てい^いま^ます！紀^き元^{げん}前^{ぜん}718年^{ねん}か^から7倍^{ばい}の時^じ間^{かん}、即^{すなわ}ち、2,520年^{ねん}（紀^き元^{げん}前^{ぜん}1年^{ねん}と西^{せい}暦^{れき}1年^{ねん}の^{けい}計^{さん}算^{さん}）

のために 1 年をプラス) 経過すると、西暦 1803 年になります。

1803 年に起きた重要な出来事はなんですか？

1803 年には、フランス皇帝ナポレオンが、合衆国市民のフランスに対する 3,750,000 ドルの賠償請求の取り下げ、および合衆国の盟約の引き換えに、フランスが領有していたルイジアナのすべての遙か北のカナダの国境に至る領土をプラスして、独立して間もない合衆国に売却しています！

有名な「ルイジアナ購入」は、合衆国の領土を 2 倍以上にしました！一筆のサインで、2 倍以上の合衆国になったのです！驚くべきことに、この出来事は、イスラエルがその国家領土の大部分を失った時から調度 2,520 年後に起きています！

1700 年代後半から 1800 年前半にかけて、誰もご存知のように、合衆国は独立を達成し、合衆国憲法と人権規定（憲法修正第 1－10 条）を採択し、英国からの独立戦争を成功裏に終結し、主権国家として頭角を現すようになってきました。ルイジアナ購入の翌年、ジェファソン大統領は、ルイスとクラークに、セントルイスから北西の太平洋沿岸に至るまでの全地域を探検するように命じています。この結果、わなを仕掛けて獣を取る漁師、銃を使う漁師、商人、有名な山男たちが流れ込んでくる道が開けたのです。そして、彼らの後からは、開拓者、炭鉱業者、炭鉱労働者、更に果てしなく続く膨大な移民が、その後の 100 年にわたってアメリカ西部の未開の土地に流入してきました。

ルイジアナ購入およびルイスとクラークの探検隊は、西部の探査と開拓を促す触媒になりましたが、これらのことは、地続きの 48 州から成る連邦の誕生、そして更に世界の強国としての合衆国の台頭へと繋がっていった極めて重要な出来事です。

預言の成就に結びつくが歴史の中で消えてしまった個々の出来事は何十もあるでしょう。明白

な事実は、北の10部族が紀元前767年から718年にかけての数十年間に、パレスチナの地における彼らの国家相続権を奪われたという事です。彼らは、バビロニア帝国によって北方に追いやられながら逃亡するアッシリア人と混ざり合いました。神は、アブラハム、イサク、ヤコブに彼らの子孫は国外に広がること、パレスチナの地から四方八方に広がることを告げられていました！

どちらを向いても、極北の地から遥か南の地に至るまで、また東から西のあらゆる方向に、アブラハム、イサク、ヤコブの子孫を見出すことができます。ノルウェーおよびその他の北欧諸国の「北方人」（北欧人）は、恐らく、ダン族、イッサカル族、ナフタリ族の子孫でしょう。フランスは、少なくともその北方地方は、ルベン族の子孫ということになるでしょう。明白な証拠が、オランダとゼブロン族を結びつけています（参考文献を参照して下さい）。ヘブライ語の「ベリス」（割礼）は、「契約」を意味しています。「イシュ」（イッシュ）は、アダムのヘブライ名ですが、ただ単に「男」（マン）を意味しているだけです。イブのヘブライ名は、「イシュシャ」ですが、これは「男に属する」という意味です。「ベリト - イシュ」（即ち、契約の男という意味）が、「ブリティッシュ」 - 「ブリット」（この場合は、ベリスと同義）の人々 - になったのです。

ハーバマンはこう述べています：「ブリテン島にやって来た民族はアングル族で、アングロ - サクソン族ではありません。このアングロ - サクソンという言い方は、ノルマン人の征服（1066年）の後に大陸から持ち込まれたものです。この国に付けられた名前はイングランド、つまりアングルランドでした。教会は、アングリカン（英国国教会）と呼ばれています。イースト・サクソン・ウエスト・サクソン（ウェセックス）、等々の細分化が行われていますが、これらは、アングル族の人々がドイツから持ち込んだ領土的な区分を意味する名称に過ぎません。『ウェセックス（中世イングランドにあった七王国の一つ）の住民は、当然の事として自分たちをサクソン人と呼ぶことはありませんでした』とメジャー B. ドウ・ウエルドンはその著書『イギリス人の起源』（*Origin of the English*）の中で述べています。

「イングランドにある名前^{なまえ}でサクソン族^{ぞく ゆかり}に縁^{ゆかり}のある名前^{なまえ}は殆ど^{ほとん}ありません。サクソン族^{ぞく ゆかり}に縁^{ゆかり}のある名前^{なまえ}の大部分^{だいぶぶん}は、ドイツ、北フランス、スイス、北欧^{ほくおう}に留^{とど}まっています。これらの国々^{くにぐに}には、現在^{げんざい}もサクソン族^{ぞく}の子孫^{しそん}が暮^くらしています。サクソン族^{ぞく}という名称^{めいしやう}は、イスラエルの家全体^{いえぜんたい}に属^{ぞく}するものです。神^{かみ}は、創世記^{そうせいき}21章^{しょう}12節^{せつ}およびローマ人^{びと}への手紙^{てがみ}9章^{しょう}7節^{せつ}において、『あなたの子孫^{しそん}はイサクによって伝^{つた}えられる』とアブラハムに語^{かた}られています。彼ら^{かれ}は、「イサクの息子^{むすこ}」と呼ば^よばれることになっていました。そして、このことは幾世紀^{いくせいき}にもわたり続^{つづ}いています：ベト・サク、サキ、サカエ、サカサニ、サクソーン、サクセン（ザクセン）、サクソン。すべてのアングル族^{ぞく}の人々^{ひとびと}は、サクソン人^{じん}です。同様^{どうよう}に、ダン族^{ぞく}、カッティ族^{ぞく}、ゲタイ族^{ぞく}、ゴート族^{ぞく}、更にブリトン人^{じん}もサクソン人^{じん}です。ただ、イングランドの名称^{めいしやう}を用^{もち}いたのはアングル族^{ぞく}の人々^{ひとびと}です。同様^{どうよう}に、契約^{けいやく}の民族^{みんぞく}、即^{すなわ}ち、ブリット（バラット）がそれよりも前^{まえ}にブリテン島^{とう}の命名^{めいめい}をしています」（『私たち白人^{わたし はくじん}の祖先^{そせん}を訪^{たず}ねて』1934,143頁）。

イギリス諸島^{しよとう}、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、デンマーク、オランダ、ベルギー、フランス、スイス — これらの国^{くに}はすべて、ダン族^{ぞく}、ルベン族^{ぞく}、ガド族^{ぞく}、アセル族^{ぞく}、ナフタリ族^{ぞく}、ゼブロン族^{ぞく}、イッサカル族^{ぞく}、エフライ族^{ぞく}の主要^{しゅよう}な部分^{ぶぶん}を代表^{だいひやう}しています。そして、彼ら^{かれ}の中に、シメオン族^{ぞく}、レビ族^{ぞく}、ユダ族^{ぞく}の人々^{ひとびと}が散^まらばって混^あじり合^あっています。

余談^{よだん}ですが、「アングル」という言葉^{ことば}の起源^{きげん}を辿^{tado}るのも興味深^{きようみぶか}いことでしょう。既^{すで}にお話^{はな}したように、北^{きた}のイスラエル王国^{おうこく}は、天使^{てんし}ケルビムを象^{しょう}徴^{ちやう}する黄金^{おうごん}の子牛^{こうし}（雄^{おす}の子牛^{こうし}）を崇^{そう}拝^{はい}するという偶像^{ぐうざう}崇^{そう}拝^{はい}に陥^{おちい}っていました。モーゼが不在^{ふざい}の時^{とき}にアロン（モーゼの兄^{あに}）が律法^{りっぽう}を受け^うるためにしたのと調度^{ちやうどおな}同じように、ヤロブアムは、見慣^みれた「天使^{てんし}たち」の像^{ぞう}に似^そせた偶像^{ぐうざう}を立^たてたのです。

雄^{おす}の子牛^{こうし}は、周囲^{しゅうい}の多数^{たすう}の異教^{いきやう}の国々^{くにぐに}の「神^{かみ}」であることから、イスラエルの人々^{ひとびと}にも馴^な染^じみのある存在^{そんざい}でした。この露骨^{ろこつ}な偶像^{ぐうざう}崇^{そう}拝^{はい}がきっかけになって、神^{かみ}は絶^{よげん}えず、預言者^{よげんしや}を遣^{つか}わして、イスラエルの人々^{ひとびと}の偶像^{ぐうざう}崇^{そう}拝^{はい}、安息日^{あんそくび}の放棄^{ほうき}、年^{とし}ごと安息日^{あんそくび}の無視^{むし}を罪^{つみ}であると宣告^{せんこく}されてい^きました。ホセア（紀元前8世紀^{きげんぜん せいき}の預言者^{よげんしや}）はこう述^のべています：「サマリアよ、[北^{きた}の10部族^{ぶぞく}

のイスラエルの首都]、あなたがたの子牛を捨てよ。私の怒りは彼らに向かって燃えている。彼らは、いつまでこのような罪を続けるのか。イスラエルの人々はこのような物まで作った。職人がそれを作った。それは、神ではない。サマリアの子牛は必ず粉々に碎かれる」(ホセア書8:5-6)。

子牛を意味するヘブライ語は「エグル」または「エンゲル」です。ワッデル博士は、その著書『アーリア民族の起源』(Aryan Origin)の中で、ゴシック体ルーン文字の「A」は、エイサまたはエイストと発音され、「ただ一つ」または「最初の一つ」という意味であると、述べています。これは多分、トランプの最初のカードを「エイス」と言う理由を説明するものだと思われます。私たちの英語の文字「A」は、雄牛を意味するフェニキア文字アレフ(𐤀)に由来します。元来は、横向きに表記されて、雄牛の角を表現し、おうし座に位置する秋分点を指し示していました。天地創造は、この時に起きたのです。

英国人を「ジョンブル」と言うことには、何か重要な意味があるのでしょうか？それは、彼らが、最高の畜牛のブリーダー(畜産家)として世界的に有名になったからでしょうか？因みに、モーゼはエフライムのことを次のように預言しています：「彼は威光に満ちた雄牛の初子。彼の角は野牛の角。彼は、諸国の民を角で突き倒し、地の果てにまで進み行く。見よ、無数のエフライム族の人々を。見よ、無数のマナセ族の人々を」(申命記33:17)。

多くの場合、周囲の多数の異教の隣国人たちは、彼らのことを彼らの神々や宗教に因んで呼んでいました。従って、「エイジェルズ」とか「アングル」の崇拝者たちは、「アングルズ」になりましたが、その発音や綴りは、この契約の民が絶えず西方に向かって彷徨っていた広大な山岳地帯に暮らしていた諸部族の言語によって様々に異なっていました。

幾世紀にもわたり、神は、約束された人々を、四方八方、世界の隅々であると預言されていた最終的な地に確実に導かれました。

遙か南方には、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、そして英国が懸命に戦って — ごく最近ではフォークランド戦争 — 獲得した多くの領地があります！世界で最も新しい開拓地は、アメリカ西部です。このようにして、神が約束された正にその通りに、イスラエルの各部族の人々は遂に、東西南北の世界中に定住することになりました。神は、彼らの恐ろしい国家的・個人的な罪 — 取り分け、安息日の放棄と偶像崇拜 — のために約束の地の最初の相続者たちを滅ぼされました。

彼らのさまよえる子孫たちにとって、7倍の罰の時間が過ぎ去ったのです。

遂に、神のアブラハムへの約束 — 彼の子孫がパレスチナの地から四方八方の彼方に存在する土地を相続し、「浜の真砂」や「天の星」の如く無数になる約束 — が成就される神の時が来ていたのです。彼らは、「彼らを憎む者の城門を相続し」、「敵の城門を勝ち取る」ことになっていたのです(創世記22:17; 24:60 を参照)。

19世紀と20世紀に入ると、英国とアメリカは、世界史において最も偉大な強国になりました。この2国は、両者合わせて、世界貿易を支配する戦略的な城門 — 2つの世界大戦において戦略的に決定的な役割を果たした城門 — をすべて領有していました！

イスラエルの人々は、何人もの王の治世に及ぶ何十年もの間に、アッシリア軍の波状攻撃を受けて強制移住させられています。神は絶えず彼らの嫌悪すべき国家的・個人的な罪に対して預言的な警告を与えておられますが、すべては無駄になりました。王たちは次々と変わっても、ヤロブアムと同じ罪 — ケルビムを含む「天使」の象徴でもあるアシェラ像の崇拜、および第8の月に新しく設けた祝日のために神の祝日を捨てたこと — を繰り返していました。

鏡像の如くに、イスラエルは、何年かにわたって、国家的な恩恵を受けています。つまり、多くの重要な出来事において、大規模な征服や膨大な領土の拡張を達成していますが、これは、彼らが追放されてから正に7倍の聖書の時間が過ぎてからのことです。こうして、アブラハム

たい 無条件の約束が成就されたのです。

だれ さいしよ じん
誰が最初のヨーロッパ人だったのでしょうか？

ふしぎ 不思議なことに、ベルギー、フランス、オランダ、デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、ドイツ、イングランドの人々の起源を研究すると、これらの国々の最も初期の住民の中に同じ民族の人々が存在することを発見します。

いくせい 幾世紀にもわたり、ヨーロッパやイギリス諸島の河川の流域や平野に暮らす諸民族の間には政治的な違いもなければ、地理的に決まった分布も存在していませんでした。彼らは単に、「ケルトイ」（ケルト）、「チュートン」、「ゴール」、「サクソン」、或いは「ジムリ」や「シメリアン」と呼ばれていただけです。時代が下るにつれて、言語は著しく変化しました。新しい方言が生まれては、消えていきました。こうして新しい言語・言葉が徐々に発展しました。

しょみんぞく ひとびと げんご れきし かれ げいじゆつようしき とく しゆうきよう まな だいぶぶん ぼくせい
諸民族の人々や言語の歴史、彼らの芸術様式、そして特に宗教を学ぶと、大部分の北西ヨーロッパ人の起源に関する共通性について理解が深まります。

そんざい さいこ きろく ぼくせい
存在する最古の記録は、北西ヨーロッパとイギリス諸島に暮らす人々のことを「ケルト人」としています。

じん だれ
「ケルト人」とは、誰のことでしょうか？

『ブリタニカ百科事典』はこのような解説をしています：「ケルトと言うのは、古代の人々を総称した言い方で、その大多数の人々は、ヨーロッパの中央部と西部に居住していました。...古代の著述家たちは、彼らをアルプス山脈の北側に住む金髪をした特徴的に同質の人々であると見なしています。ギリシャ人は、彼らをケルトイと名付けています。身体的には、大雑把に言えば、彼らは2つのグループに分類されます — 尤も、それも互いにぼやけて1つになってし

まいですが。最初のグループは、その本拠地をスカンジナビア半島とする北西ヨーロッパに限定
することができます。…彼らは通常、現代の著述家たちにチュートン人と名付けられています。
もう一つの[ケルト族の]グループは、丸い頭、横長の顔、大抵は大きな鼻、灰色がかった薄茶色
の目、淡い栗色の髪、ずんぐりした中背であると書き記されています。多くの場合、この民族
は、「ケルト人」とか、或いは、フランスの西南部から南東部のサボイ地方、およびスイスにか
けて伸びる大山脈群に沿って広がっていたことから「アルプス人」と呼ばれていました。…[そ
して]彼らは一般的に、モンゴロイド人種がその起源で丸い頭骨をした人種の故郷であるアジア
から来ていると考えられています」（第5巻、611-612頁）。

いわゆる「ケルト族」の人々はアジア出身であること、そして彼らは僅か1つの民族を起源に
持つものではないことが認められていることに注目して下さい。思い起こしてください。バビ
ロニア帝国は、捕囚となっていたイスラエルの10部族と共に、アッシリア人たちを追放してい
るのです（アッシリア人たちの主たる部族群は「アルマンニ族」で、これが、「ドイツ人」を意味
するラテン語の語根「アルマン」の由来です）！この混ざり合った人々は、ロシアのステップ
（大草原）、クリミア（ジムリア、または「ビット・クムリ」から派生したクムリア）半島から、
ダニューブ川（「ダンの川」）流域に沿ってヨーロッパへと広がっていきました。

古代の歴史家たちは、ダニューブ川流域、スイスやババリア地方の山岳地帯、ドイツ北部の広大
な平野部、および北西部の沿岸地帯に暮らす人々のことを、「ケルトイ」と呼んで「同質」
つまり、民族的に同じ ー であると見なしています！

前述の通り、古代アッシリア人たちは、捕囚となったイスラエルの10部族の人々を彼らの有名
な王「オムリ」に因んで、アッシリア人の言葉で「クムリ」と呼んでいました。これらの10部族
は、黒海からカスピ海にかけての一帯、クリミア（キンブリア）半島、およびドン川／ウドン川
／ダニューブ川沿いの中央ヨーロッパから、北西ヨーロッパやイギリス諸島にかけて広く見か
けることができます！「K」音は、無音になることも、耳障りな「H」音として発音されること
もありました。今日のイングランド東海岸には、「ハンバー川」の大きな河口がありますが、
この河口には2つの重要な川が注いでいます。「ノーサンバーランド」（イングランド最北の州）

は単に、「ハンバー川」(または「クンブリ川」)の北の土地を意味するに過ぎません。「カンブリ」や「ケンブリッジ」を含め、このように語源を辿ることが出来る地名が英国各地に存在します。

「ゴール人」(ガリア人)たちは、フランス各地だけでなく、遠く小アジアの「ガラテヤ」(現在のトルコの首都アンカラを中心とする地域にあった古代ケルト人の国)にまで彼らの名前を残しています。使徒パウロは、古代都市のイコニウム、リストラ、デルベの教会に、その書簡の1つを送っています。今日でさえ、フランスは「ゴール」と呼ばれることがあります。フランスの有名な戦後の大統領のシャルル・ドゴール、即ちゴールのシャルルと言う名前を覚えていない人はいないでしょう。イスラエルの10部族が西方へ移住していった事は、幾世紀にもわたって絶え間なく西方に移動して行ったことを必ずしも意味するものではありません。時には、地域戦争や征服もありました。更に彼らの一部は、長い期間にわたり、南や東に逆戻りして北イタリアでローマ人と接触したり、ギリシャ人やマケドニア人と接触したりしています。

歴史の告白に注目しましょう:「古代の著述家たちは、これらのゴール人たちをすべてキンブリ(シンブリ)人[クンブリ、ジムリ、シメリア、シメリアン、等々]として語っており、その昔、ホメロス(紀元前10世紀ごろのギリシャの詩人)の時代に、冬は寒くて暗く夏は太陽が沈まない地方でライストリュエーン人たちと隣り合って海で暮らしていたシメリア人であるとしています」(前掲書 第5巻 612頁)。この地方とは、遥か北方のことで、ここでは夏は日が長く、冬は大変暗いのです。

『ブリタニカ百科事典』はまた、こう述べています:「彼らは、東方に向かってダニューブ川の河口、南ロシア、更にアゾフ海にまで進出し、ケルト・スキタイという言葉が証明するようにスキタイ人と混ざりました。...ケルト人たちは絶えず、西方にも移動しています。キンブリ族に起源をもつベルガエ族は、ライン川を越えて広がって行き、フランス北部とベルギーに彼らの名前を残しています。これらの部族の多くは、大ブリテン島の南東部に入植者を送り込んでいます。彼らは、シーザー(100-44 B.C.)がこの島を侵略した時には既に、約2世紀間[合衆国が独立してから今日までの年月と同じくらい]この地を支配していました」(第5巻 612頁)。

強調(きょうちよう ひつしゃ)は筆者(ひつしゃ)。

北西ヨーロッパ諸国(ほくせいヨーロッパしよこく)や北欧諸国(ほくおうしよこく)に定住(ていじゆう)した人々(ひとびと)の起源(きげん)に関する手掛(てが)かりは、他(た)にもあります。

ジュリアス・シーザーは、彼の時代(かれのじだい)のゴール人(じん)とブリトン人(じん)との間(あいだ)には言葉(ことば)の違い(ちがひ)は殆ど(ほとんど)ないと述べています。聖ヒエロニムス(.340?-420;キリスト教修道者(きようしゅうどうしゃ)・聖書学者(せいしよがくしゃ))は、小アジア(しょうあ)のガラテヤ人(じん)の言葉(ことば)はトリールの近辺(きんぺん)で彼(かれ)が耳(みみ)にした言葉(ことば)に極めて似て(に)いると話(はな)しています。トリールは、ドイツにあるヨーロッパ最古(さいこ)の都市(とし)のひとつで、コンスタンティヌスのお氣(き)に入(い)りの滞在(たいざいち)地(ち)でした。このトリールという名前(なまえ)は、「ベルガエ族(ぞく)」の中で最も勢力(せいりよく)のあった人々(ひとびと)に由来(ゆらい)しています。なお、このベルガエ族(ぞく)は、「ケルト族(ぞく)」 — 即ち紀元前(すなわ)数世紀(きせいき)ころからヨーロッパに暮(く)らしていた血(ち)の混ざり合(あ)った人々(ひとびと) — であることが証明(しょうめい)されています。ジュリアス・シーザーは、紀元前(きげんぜん)54年に「ベルガエ族(ぞく)」の1部族(ぶぞく)であった「トリベリ族(ぞく)」を征服(せいふく)しています。これらの「ベルガエ族(ぞく)」の起源(きげん)はゲルマン民族(みんぞく)であることを証明(しょうめい)しようとする人々(ひとびと)もいますが、『ブリタニカ百科事典(ひゃっかじてん)』はこう説明(せつめい)しています:「...彼ら(かれ)は明らかに、ゲルマン民族(みんぞく)の強い影響(えいきよう)を受けて(う)いますが、彼ら(かれ)はケルト語(ご)を話(はな)していました」(27巻(かん) 268頁(ぺい) : 強調(きょうちよう)は筆者(ひつしゃ))。長い間(ながあいだ)、ドイツで最も重要(もつとじゆうよう)な都市(とし)であったトリールは、ローマ皇帝(こうてい)ディオクレティアヌス(245-313)の治世(ちせい)には「ベルガ・プリーマ」の首都(しゅと)になっています。ディオクレティアヌスは、このトリールを「ゴールのすべての地(ち)」の教区(きょうく)の中心地(ちゅうしんち)に定(さだ)めています。その後(ご)、この教区(きょうく)には、「ゴール」(フランスとドイツの一部(いちぶ))、イングランド、スペインが含(ふく)まれることになります。

ヨーロッパ諸語(しよご)の起源(きげん)に関する最高(さいこう)の権威者(けんいしや)たちは、これらの言語(げんご) — 特に、北西ヨーロッパ(ほくせいヨーロッパ)を流(なが)れる河川(かせん)の流域(りゅういき)で話(はな)される言語(げんご) — には共通性(きようつうせい)が存在(そんざい)することを認(みと)めています。最も初期(しよき)の古代ローマ(こだい)の著述家(ちよじゆつか)たちは、ライン川(がわ)の西(にし)と南(みなみ)にいた幾つか(いく)の部族(ぶぞく)を発見(はっけん)していますが、彼ら(かれ)は「...非ゲルマン民族(みんぞく)に属(ぞく)し、ベルギー諸部族(しよぶぞく)(ベルガエ族(ぞく)、ゴート族(ぞく)、西ゴート族(ぞく))と密接(みつせつ)な関係(かんけい)があり、ケルト語群(ごぐん)に属(ぞく)する言語(げんご)を話(はな)していました。...私(わたし)たちは、彼ら(かれ)が侵入(しんにゆう)してきたゲルマン諸部族(しよぶぞく)と混(ま)ざり合(あ)ったのか、あるいは彼ら(かれ)に征服(せいふく)されたのか、という事(こと)については何も知(し)りません。私(わたし)たちは、推測(すいそく)することしか出来(で)ません」(『ブリタニカ百科事典(ひゃっかじてん)』第8巻(だい かん))

717頁^{ぺいじ}：（「オランダ語」の項^{こう}）。

大抵^{たいてい}のヨーロッパ諸国^{しよこく}では、真^{しん}の歴史書^{れきししょ}が書^かかれたのは8世紀^{せいき}または9世紀^{せいき}以降^{いこう}のことです。それ以前^{いぜん}の事^{こと}については、プリニウス（23－79）、ストラボン（63?B.C.-?A.D.21）、ヘロドトス（484?-425?CB.C.）、ジュリアス・シーザー^{など}等の古代^{こだい}の旅行家^{りょこうか}たちの著作物^{ちやくさくぶつ}が^{のこ}残^{のこ}されているだけです。デンマークの歴史^{れきし}については、プリニウスが最も^{もっと}古い寄稿家^{きこうか}であると認め^{みと}られています。「デンマークに関する^{かん}私^{わたし}たちの最も^{もっと}古い知識^{ちしき}は、プリニウスによるものです。彼は、「スカンディアイ」という名前^{なまえ}の3つの島^{しま}について語^{かた}っています。そして、この名前^{なまえ}はスウェーデンにも適用^{てきよう}されています。彼は、これらの島^{しま}の住民^{じゅうみん}については、何も語^{かた}っていませんが、ジュート半島^{はんとう}〔ジュート族^{ぞく}、即ち^{すなわ}セナケリブ王^{おう}の下で捕囚^{ぼしゅう}になった後に移住^{のちいじゅう}してきたユダ族^{ぞく}に因^{ちな}で名付^{なづ}けられています：列王記下18:13を参照^{さんしやう}〕、つまり彼^{かれ}が言^いうところのキンブロック・ケロネーズ^{など}については、「スカンディアイ」よりも多^{おほ}くを語^{かた}っています。彼は、サクソン族^{ぞく}をジュート半島^{はんとう}の首^{くび}にあたる地方^{ちほう}に位置^いづけています」（『ブリタニカ百科事典』第8巻 28頁^{だい かん ぺいじ}；「デンマーク」の項^{こう}）。

ここでもう一度^{いちど}、「キンブリック」（シンブリック）という名称^{めいしやう}は「オムリ^いの家^み」を意味^{こだい}する古代アッシリア語^ごの「ビト・クムリ」に由来^{ゆらい}することに注意^{ちゆうい}して下さい。古代^{こだい}の著述家^{ちやくしゆつか}たちは、北西ヨーロッパに居住^{きよじゆう}していた「ジュート族^{ぞく}」（ユダ族^{ぞく}）、「キンブリ族^{ぞく}」（10部族^{ふぞく}のイスラエルの王^{おう}オムリに由来^{ゆらい}）、「サクソン族^{ぞく}」（「サク^{むすこ}の息子^{むすこ}たち」つまりイサクの息子^{むすこ}たちに由来^{ゆらい}）^{など}、および「チュートン族^{ぞく}」（「槍兵士^{やりへいし}」を意味^{こだい}する古代ローマ語^ごに由来^{ゆらい}）と呼ば^よばれる人々^{ひとびと}が混ざりあっていたことを、繰^{かえ}り返^{かた}し語^{かた}っています。半数^{はんすう}が「船^{ふね}」で暮^くらしていたダン族^{しやうかん} — 土地^{とち}、河川^{かせん}、重要^{じゆうよう}な地形^{ちけい}、場所^{ばしよ}を彼^{かれ}らの祖先^{そせん}に因^{ちな}で名付^{なづ}けるという習慣^{しゆうかん} — のことを思い起^{おも}こして下さい。「デンマーク」（デンマーク人^{じん}たちは「ダンマーク」と綴^{つづ}り、発音^{はつおん}していました）の名前^{なまえ}の由来^{ゆらい}について、『ブリタニカ百科事典』（第11版）は次のように説明^{せつめい}しています：「ユトランド半島^{はんとう}は、デンマーク人^{じん}の名前^{なまえ}の由来^{ゆらい}となった彼^{かれ}らの祖先^{そせん}ダン族^{しやうかん}が領有^{りやうゆう}していました」（28頁^{ぺいじ}：強調^{きやうちやう}は筆者^{ひっしや}）。

最古^{さいこ}の北歐人^{ほくおうじん}については、多^{おほ}くの出鱈目^{でたらめ}な神話^{しんわ}が創^{つく}られてきました。「ヴァイキング人^{じん}」とは西ス勘ジナビア地方^{ちほう}の住民^{じゅうみん}でアイスランドやグリーンランドに定住^{ていじゆう}した戦士^{せんし}一族^{いちぞく}だったと、一般的^{いっぱんてき}に信^{しん}じられています。しかし、「ヴァイキング」と言う言葉^{ことば}は、民族的^{みんぞくてき}な意味^いをもつ言葉^{ことば}

ではありません。「^{ほくおうでんせつ}北欧伝説の時代^{じだい}（900-1050）、^{ほくおうぶんがく}北欧文学の初期^{しよき}には、ヴァイキングは、^{いか}如何なる階層^{かいそう}の人々^{ひとびと}をも名指^{なざ}しする物差し^{ものさし}ではありませんでした」（『ブリタニカ百科事典』第28巻^{べいじ} 62頁）。

ヴァイキングと呼ばれたのは、^{ていこく}フランク帝国の時代^{じだい}に、^{こっか}イングランド、^{こっか}スコットランド、^{こっか}アイランドといった「^{こっか}クリスチャン」国家^{こっか}に対する^{かいぞく}海賊による^{しんりやくこうい}侵略行為^{しんりやくこうい}のせいです。「^{ことば}ヴァイキング^{ことば}と言う言葉^{ことば}の今日的な意味^{いみ}は、単に^{たん}海賊^{かいぞく}を意味^{いみ}するに過ぎない^すアイスランド語^ご（古期ノルド語^ご）の“vikingr”に由来^{ゆらい}します。…ヴァイキングという言葉^{ことば}を古期ノルド語^ごの文学^{ぶんがく}で実際に使用^{じつき}されていた以上^{いじょう}に一般的な意味^{いっぱんてき}で使用^{しよう}する理由^{りゆう}は、9世紀^{せいき}と10世紀^{せいきしやう}初頭^{はつとう}の^{ほくおう}北欧^{かいぞく}の海賊^{さす}を指す言葉^{ことば}が他に存在^{そんざい}しないという事実^{じじつ}によるものです」（前掲書 62-63頁）。

^{ほくおうしよこく}北欧諸国^{ひとびと}の人々は多分^{たぶん}、^{ぞく}イッサカル族^{ぞく}、^{ぞく}ダン族^{ぞく}、^{ぞく}ナフタリ族^{しそん}の子孫^{しそん}になるでしょう。

ここで、「^{しよとう}ブリタニア^{しよとう}」と呼ばれたイギリス諸島^{しよとう}についてはどうだったでしょうか？この名称^{めいしやう}については、次のようなことが認められています：「^{つぎ}[ブリテン、ブリタニア、等々の]ギリシャ語^ごとラテン語^ごの語形^{ごけい}は明らかに、^{あき}ケルト語^ごの語源^{ごげん}を再現^{さいげん}しようとする試み^{しこ}ですが、正確^{せいかく}な語源^{ごげん}は依然^{いぜん}として定か^{さだ}ではありません。^{にし}西フランス^{にし}のブリタニー^{にし}〔フランス語^ごのブルターニュ^ご〕は、5世紀^{せいき}と6世紀^{せいき}におけるブリテン島^{とう}からの移住者^{いじゆうしや}に由来^{ゆらい}します。ブリタニア^{じよせいざう}の女性像^{じよせいざう}としての擬人化^{ぎじんか}は、ローマ皇帝^{こうてい}ハドリアヌス（76－138）のコインまで遡^{さかのぼ}ることが出来^でると考え^{かんが}られています」（『ブリタニカ百科事典』第4巻^{べいじ} 583頁）。

「^いブリティッシュ^{じつ}」と言うのは実のところ「^いベリト - イシュ^い以外の何物^{なにもの}でもないということ」が、いわゆる「^{せつ}アングロ・イスラエル説^{せつ}」（^{じん}アングロサクソン人^{うしな}は失われたイスラエルの10部族^{ぶぞく}の子孫^{しそん}であるとする説^{せつ}）の熱心な支持者^{ねっしん}によって提唱^{ていしょう}されてきました。「ベリト」とはヘブライ語^ごの「^{けいやく}契約^{いみ}」を意味^{いみ}し「^{ひと}イシュ^{ひと}」は人・男^{おとこ}を意味^{いみ}します。従^{したが}って、「ベリト - イシュ」は「^{けいやく}契約^{ごんなん}の人^{ひと}」ということになりますが、これについては、合理的^{ごうりてき}に疑問^{ぎもん}の余地^{よち}なく証明^{しょうめい}することは困難^{こんなん}であり、依然^{いぜん}として定か^{さだ}ではありません。神^{かみ}のアブラハム、イサク、ヤコブへの約束^{やくそく}の真実性^{しんじつせい}を証明^{しょうめい}するのに^{ねら}わら^{ひつよう}をつかむ必要^{ひつよう}はありません。また、^{わか}分かっている限り^{かぎ}最も初期^{もつと}の^{しよき}北西ヨーロッパ^{ほくせい}とイギリス諸島^{しよとう}の住民^{じゅうみん}の中に — ^{てき}敵^{りんじん}や隣人^{たしやう}による多少^{へんこう}の変更^{ばんごてき}、^{へんか}言語^{げんか}的な変化^{へんか}があったとしても — ^{こだい}古代^{こだい}のイスラエル10部族^{ぶぞく}とその祖先^{そせん}の名前^{なまえ}を持つ人々^もがいたことを^{かくじつ}確実に証明^{しょうめい}す

ることも^{こんなん}困難ではないでしょう。但し、^{ただ}現実的には、イングランドに^{きょじゅう}居住していた最も^{もつと}初期の^{しよき}人々に対する「ブリトン人」という言葉の語源について、^{けんいしや}権威者たちも分からないと認めています。従って、この一件については^{いっけん}推測の域を出ません。

ローマ帝国による^{ていこく}侵略以前の^{しんりやくいぜん}大ブリテン島について、^{ぜんけいしよ}前傾書はこう説明しています:「何時、誰が最初に大ブリテン島に住み着くようになったのかということについては、^{げんざい}現在のところ、^{ちしつ}地質学者たちの意見は一致していません」(583頁)。

大ブリテン島の最も初期の住民に関する^{ぶつてきしよこ}物的証拠は、2回にわたる^{ぞく}ケルト族の侵入 — つまり、^{ぞく}ベルガエ族と「^{じん}ブリソン人たち」の^{とうちやく}到着 — が最初のものであるということが認められています。これらの人々は、^{おうぞく}王族の^{くんしゅ}君主の^{しはい}支配による^{ぶぞくせいど}部族制度の下で暮らしており、^{おか}丘の上に^{うえ}砦を^{とりで}建てて土や石の壁で守られた都市に集まって暮らしていましたが、これは古代パレスチナ地方の習慣でもありました。

彼らの^{しゅうきよう}宗教はドルイド教ですが、この宗教は、^{しゅうきよう}人身御供も含め、^{ふく}野蛮な儀式を行う「祭司たち」の^{しんびてき}神秘的・^{まじゆつてき}魔術的な社会を形成していました。ドルイド祭司たちは、誰だったのでしょうか？何時、やって来たのでしょうか？彼らの宗教の起源は^{かれ}何処にあるのでしょうか？彼らの宗教から、大ブリテン島の最古の住民の起源について、何か具体的な手がかりを引き出すことが出来るのでしょうか？

ドルイド祭司=魔術師・占星術師

ドルイド祭司たちは、^{きよういぜん}キリスト教以前のヨーロッパおよびイングランドの人々から最高の才能と実力を備えた教師／医者／^{せんせいじゆつし}占星術師／^{さいばんかん}裁判官／^{うらな}占い師／^し魔術師であると考えられていた^{かんが}博学の知識人階級を構成していました。

彼らの起源は「ケルト族」にあることは、^{いっばんてき}一般的に認められていることです。彼らは、オークの木立の中で^{こだち}礼拝を行い、^{なか}石碑・^{れいはい}祭壇・^{おこな}天体観測所を建て(ストーンヘンジがそうであったと言

われています。ただし、ストーンヘンジは、ドルイド人の時代よりも前に建てられた可能性が指摘されています)、魔力を有すると主張し、人身御供を行っていました。

プリニウスの時代から、「ドルイド」という言葉は語源的には「オークの木」を意味するギリシャ語に由来すると言われていました。オークの木立が、彼らはの信仰に重要な役割は果たしていました。彼らは、こうした木立を神聖な場所として用い、魔術的な儀式や祈りを行っていました。

この名称のもう1つの語源として、これが、「大変な物知り」とか「賢明な」という意味の古代のゴール語とアイルランド語に由来するという説もあります。これは、アイルランド年代記の中で「マギ」として使用されています。

以下に、ジュリアス・シーザーの著書から長々しく引用しますが、その情報は、ドルイド史にあっては時代が最近のものであると考えられています。何故ならば、彼らは紀元前何百年もの前からゴール地方や大ブリテン島に存在したと言われていたからです。それでも、ジュリアス・シーザーの著書は重要であり、すべての歴史や百科事典に一次資料を提供しています。

シーザーはこのように記しています：「彼らは、礼拝を行い、公開・非公開で生け贄を捧げ、宗教的な事柄の解釈を行っています。多数の若者たちがドルイド祭司たちの下に集まり教育を受けています。彼らは、この国で最高の名声を享受しています。殆どすべての公的・私的なもめ事は彼らの裁きを受けています。何か犯罪が起きた時、殺人が行われた時、遺産や境界線のことで口論が発生した時、彼らは裁判官も務めます。彼らは、報酬や処罰を決定します。そして、もし私人または公人の誰かが彼らの法律としての命令に従わなければ、彼らはその人を生け贄の儀式から排除します。これは、彼らの間で最も厳しい処罰になります。こうして禁止令の下に置かれた人は、不敬で邪悪な人であると見なされます。...これらのドルイド祭司たちには、一人の最高責任者がいます。そして、その責任者は彼らの間で最高の権威を享受しています。...ドルイド祭司たちは、他の人々と異なり、戦に参加せず、税金も払いません。彼らは、兵役義務を含め公的な義務をすべて免除されています。...」(ジュリアス・シーザー;A.D.54頃)。

もめ事^{ごと}を仲裁^{ちゅうさい}し、預言^{よげん}能力^{のうりよく}を持つと主張^{しゅちよう}し、自分^{じぶん}たちの命令^{めいれい}に従^{したが}わない人を除名^{じょめい}する権限^{けんげん}を持つ強^{きやうりよく}力^{りよく}な指導^{しどう}者^{しゃ}階級^{かいきゅう}であった祭司^{さいし}職^{しよく}という考^{かん}えを、ドルイド祭司^{さいし}たちはどこで学^{まな}んだのでしょうか。これ^みから見ることにします。

「ドルイド祭司^{さいし}たちは、祭司^{さいし}兼教師^{けんきやうし}であることに加え、熟達^{じゆくたつ}した占星術師^{せんせいじゆつし}と魔術師^{まじゆつし}でもあり、動植物^{どうしよくぶつ}の神秘^{しんぴてき}な力^{ちから}に精通^{せいつう}していました。オークの木^き、オークの木^きに成長^{せいちよう}するヤドリギ、...彼^{かれ}らの神秘^{しんぴてき}的な儀式^{ぎしき}は通常^{つうじよう}、オークの木立^{こだち}の奥^{おく}で営^いまれました。...」(『ブリタニカ百科事典』第9巻^{かん} 350-351頁^{ぺいじ})。

それほど驚^{おどろ}くことではありませんが、ドルイド祭司^{さいし}たちは古代史^{こだいし}の「マギ族^{ぞく}」と関係^{かんけい}があります。注^{ちゆうもく}目^{もく}して下さい:「アイルランドのドルイド祭司^{さいし}たちは、独特^{どくとく}の剃髪^{ていはつ}をしていました。ラテン語^ごのマギと^いう言葉^{ことば}を翻訳^{ほんやく}する場合は必ず^{かならず}ドルイと^いう言葉^{ことば}が使用^{しよう}されていました。そして、聖コロンバ^{せい}(521-597;アイルランドの宣教師^{せんきやうし})は、ある文章^{ぶんしょう}の中でキリスト^なのことを彼^{かれ}のドルイドとして語^{かた}っています」(『ブリタニカ百科事典』第8巻^{だい} 598頁^{かん}: 強調^{べいじ}は筆者^{きやうちよう})。

『カトリック百科事典』(Catholic Encyclopedia)には、次^{つぎ}のような記述^{きじゆつ}があります:「この言葉^{ことば}[ドルイド]がギリシャ語^ごのオーク^{ゆらい}に由来^{よらい}するという語源^{ごげん}説明^{せつめい}は、プリニウス^{じだい}の時代^{この}から好まれ^{せつめい}ていた説明^{せつめい}です。この説明^{せつめい}によると、ドルイドは、オークの木^きと同一^{どういつし}視^しされる神^{かみ}または神々^{かみがみ}の祭司^{さいし}たちということになるでしょう」(第5巻^{だい} 162頁^{かん})。

どうしてオークの木^きなのでしょう？オークの木^きの下^{した}で礼拝^{れいはい}する祭司^{さいし}たちには、何^{なに}が重要^{じゆうよう}な意味^{いみ}を持^もっていたのでしょうか?「魔術師^{まじゆつし}」を意味^{いみ}する「賢者^{けんじゃ}」とか「マギ」であると主張^{しゅちよう}することについては、どのような意味^{いみ}があつたのでしょうか?前掲書^{ぜんけいしよ}は、このように説明^{せつめい}しています:「...アイルランドのドルイド祭司^{さいし}たちとゴール[フランス]のドルイド祭司^{さいし}たちとの間^{あいだ}には最高^{さいこう}に顕著^{けんちよう}な類似^{るいせい}性が存在^{そんざい}していたことは明瞭^{めいりよう}です。この両国^{りやうこく}において、彼^{かれ}らは魔術師^{まじゆつし}／易者^{えきしゃ}／医者^{いしや}／教師^{きやうし}であつて、ある宗教^{しゅうきやう}の代表者^{だいひやうしや}というわけではありませんでした。...アイルランド^{もつと}の最初^{しよき}のキリスト教^{きやう}文献^{ぶんけん}では、ドルイド祭司^{さいし}たちは、キリスト教^{きやう}の最も^{もつと}激烈^{げきれつ}な反対者^{はんたいしや}として描^{えが}かれていますが、当時^{とうじ}のクリスチャンでさえ、彼^{かれ}らの超人^{ちやうじんてき}的な預言^{よげん}能力^{のうりよく}や魔術^{まじゆつ}を信^{しん}じていたようです」(第5巻^{だい} 164頁^{かん})。

イングランドのケルト族^{ぞく}については、『ブリタニカ百科事典^{ひゃっかじてん}』は次のように記しています：
「宗教^{しゅうきょう}に関する一番^{かん}の特徴^{いちばん}は、ドルイド祭司^{とくちよう}たちの祭司制^{さいし}でした。彼らはここでも、ゴール^{さいしせい}における場合^{かれ}と同様に、魔術^{まじゆつ}や野蛮^{やばん}な人身御供^{ひとみごくう}の儀式^{ぎしき}を行い、秘密^{おこな}の伝承^{ひみつ}を教え、多大^{でんしよう}な影響^{おし}力^{ただい}を行使^{えいきようりよく}していました」（第4巻 583頁^{だい かん べいじ}）。

これらの人々^{ひとびと}、つまりヨーロッパ^{ひとびと}の西^{にし}と北西^{ほくせい}に位置^いする北欧^{ほくおう}とイギリス諸島^{しよとう}を徐々に占有^{じよじよ}するようになった古代^{こだい}のイスラエル王国^{おうこく}とアッシリア^{あしりあ}の人々^{ひとびと}の混血^{こんけつ}の子孫^{しそん}たちは、どのようにして、「司祭制度^{さいしせいど}」 — オークの木立^{こだち}で礼拝^{れいはい}し、魔術^{まじゆつ}や占い^{うらな}や預言^{よげん}を行い、納税^{おこな}や徴兵^{のうぜい}の義務^{ちようへい}を免除^{ぎむ}された祭司^{めんじよ}たちの制度^{さいし} — を持つようになったのでしょうか？

「祭司階級^{さいし しかいきゅう}」と言っても、彼らは生まれながらにして祭司^{さいし}になった訳^{わけ}ではありません。彼らは、その明らかな恩典^{あき おんてん} — 人々^{ひとびと}に対する、権力^{けんりき}や富^{とみ} — を得るために祭司職^{さいししよく}を志望^{しぼう}したのです。「...シーザーは、このように説明^{せつめい}しています：彼らの決定^{かれ けつてい}[彼らは裁判官^{はんかん}でした]に従^{したが}わない人々^{ひとびと}に対しては、彼らは厳罰^{げんばつ}を課^かす権限^{けんげん}を持っていました...彼らは、世襲^{せしゆうてき}的な階級制度^{かいきゅうせいど}に基づくものではなく、戦場^{せんじよう}[軍隊^{ぐんたい}]での任務^{にんむ}や納税義務^{のうぜい ぎむ}を免除^{めんじよ}されていたことから、ゴールの若者^{わかもの}たちはこの階級^{かいきゅう}の一員^{いちいん}になることを熱望^{ねつぼう}していました」（『ブリタニカ百科事典^{ひゃっかじてん}』第8巻 597頁^{だい かん べいじ}）。

既に見てきたことですが、ヤロブアムがソロモンの息子^{むすこ}レハベアム（彼の治世^{かれ ちせい}にイスラエルの12部族^{ふぞく}は南北^{なんぼく}に分裂^{ぶんれつ}）に対して反乱^{はんらん}を起こし、偶像崇拜^{ぐうざうすうはい}に走り、神^{かみ}の年ごと^{とし}の仮庵^{かりいお}の祭り^{まつ}を第8の月^{つき}に行^{おこな}う異なる祭り^{こと}に変更^{まづ}して、北^{きた}のイスラエル10部族^{ふぞく}の人々^{ひとびと}がエルサレムの神殿^{しんでん}に巡礼^{じゆんれい}をしないようにしたのです。子牛^{こぎう}の崇拜^{すうはい}は、彼らには自然^{しぜん}のことでした。何故^{なぜ}ならば、これは、「天軍^{てんぐん}」（天使^{てんし}たちや日月星辰^{にちげつせいしん}）を崇拜^{すうはい}する隣国^{りんこく}人^{ひと}たちの間^{あいだ}ではありふれた習慣^{しゅうかん}だったからです。イスラエルの人々^{ひとびと}が最初に建てた偶像^{せいしよ}は、子牛^{こぎう}の黄金像^{おうごんざう}ですが、それはアロンの時^{とき}のケルビム像^{ぞう ひようげん}を表現^{ひょうげん}していました。

神^{かみ}は、シナイ山^{さん}（ホレブ）で律法^{りっぽう}を授けられる時^{とき}、こう言^いわれています：「あなたたちは自らよく注意^{ちゆうい}しなさい。主^{しゆ}がホレブで火^ひの中から語^{かた}られた日^ひ、あなたたちは何^{なん}の姿^{すがた}も見^みなかったから

です。墮落して、自分たちのためにいかなる形の彫像も造らないようにしなさい。男の像も女の像も、地上のいかなる獣の像も...また天を見上げて、太陽、月、天使たちさえ見て、それらを拝み、それらに仕えてはいけません。...あなたたちは注意して、あなたたちの神である主があなたたちと結ばれた契約を忘れず、あなたたちの神である主が禁じられたいかなる形の彫像も造らないようにしなさい」(申命記4:15-23)。

聖書には、「天使軍」とも呼ばれる無数の「天使たち」が霊の世界に存在すると記されています。その中には、天の玉座の周りにはいる24人の「長老たち」だけでなく、ケルビム、セラピム、またエゼキエルが見た「生き物」(エゼキエル書1章、10章)を初め、無数の天使たちが含まれています。聖書の中で名前を付けて呼ばれているのは、僅かに3人の大天使たち — ミカエル、ガブリエル、ルシフェル — だけです。ルシフェルは、最初に高位に就いた大天使の一人ですが、墮落して、天使たちの三分之一を引き連れて神に反抗しています(黙示録12:4-9; イザヤ書14章; エゼキエル書28章)。彼は最初、「聖油を注がれた守護天使」(エゼキエル書28:14)と呼ばれていたのです。

エゼキエル書1章を初めとして聖書の中で私たちが学ぶように、ケルビムたちはそれぞれ、4つの異なる容貌に見える姿をしていました。彼らは人間、ライオン、ワシ、そして牛のように見える姿をしていました。古代のどの神話においても、祭壇、宗教的な碑文、彫刻、アイコンなどに、また中近東の異教の国々の文献にも、いたるところに、これらの4つの顔を持つケルビムに対する崇拝が見られます。この崇拝の起源は何処にあるのでしょうか？

思い起こして下さい。神は、アダムとイブが追放された後、エデンの園への道を守るために2人のケルビムを置かれました。人類の全歴史の約1/6の期間にわたり、これらの天使たちは、エデンの園へ通じる道に近寄り過ぎる者があれば、その者と闘うことさえして、その道を守っていました。イスラエルの人々が非常に古い幕屋に使用していた綴れ織りの掛け物を「ケルビムたち」で装飾するように命じられたとき、モーゼは、ケルビムたちの容貌については何の指示も説明も受けていません。彼は既に、彼らがどのような容貌をしているのか知っていたのです。アダムの時代から、1,000年という幾世代もの期間に、何回くらい、逗留者、旅行者、放浪者た

ちがエデンの園として守られている領域に入ろうとしたのでしょうか？いずれにしても、アダ
ムが追放された時に、神はそれを破壊せずに保護し、ケルビムたちに守られせたと、私たちは
教えられています！それは、ノアの洪水の時まで破壊されなかったと思われます！

忘れてはいけない重要な原則は、部族集団が方々に散らばって、広く分散するようになるにつ
れて、知識も被害を受けるということです。芸術、科学、文学、知識 — こうした分野は、
多数の人々が集中する文明化された集団の中にしか存在しません。古代の神話には明らかに、
真実の物語として始まり、各地に散らばった人々が夕方に火を囲んで何度も何度も語ったもの
もあります。遠い彼方の金銀財宝に満たされた断崖絶壁に建つ城を守る竜、怪獣、巨人などに
関する物語がどのくらい存在するのでしょうか？ジャックと豆の木、ジャックと悪魔の国、聖
ゲオルギウスのドラゴン退治、等々についてはどうでしょうか。これらは古代の神話の現代版で
はないでしょうか？これらの物語の幾つかは — 多数の容貌を持つ獣または火を噴くドラ
ゴンのように見えたと思われる — 大声で怒鳴るケルビムによってエデンの園の入り口から
追い返された旅人たちの物語に由来するのではないのでしょうか？

こうした生き物の描写は、古代の神話によく見られることです。エジプトのスフィンクスは、
人間の頭をしたライオンです。サルゴン2世（紀元前700年代のアッシリアの王）の宮殿の壁、
および古代のアッシリアとバビロニアの神殿や公共建築物の門を飾っていた有翼の雄牛は、ア
ッシリア王の頭、巨大な牛の身体、ワシの翼、ライオンのかぎ爪を特徴的に表現しています。
牛の全身が特徴的に表現されていることも、また、ライオンやワシや人間の全身が特徴的に
表現されていることもあります。人間は、この世の生き物の中で至高の存在です。ライオンは、
「野獣の王」と呼ばれ、人間以外には天敵はいません。ワシは、大空の絶対君主です。雄牛は、
最も巨大で、すべての畜牛の中で最も有益です。

古代エジプトの記念碑は、神話上の生き物の多数の特徴を示していますが、その中には、ケル
ビムの特徴も含まれています。イスラエルの人々が拝むためにアロンが黄金の子牛像を作った
時、彼はエジプト人たちの子牛崇拜 — ケルビムの4つの顔の1つである雄牛の崇拜 —
に熟知していたからそうしたのです。今日でさえ、牛の崇拜は、世界で最も人口の多い国の1

つであるインドに残っています。

ヤロブアムが反乱を起こした時、彼は「...心に思った。この王国は、再びダビデの家のものになるだろう。この民が生け贄を献げるためにエルサレムの主の神殿に上るなら、この民の心は再び彼らの主に、そしてユダの王レハブアムにさえ向かうだろう。そして彼らは、わたしを殺して、再びユダの王レハブアムのもとへ帰ってしまうだろう。

「彼はよく考えたうえで、二体の黄金の子牛像[雄牛！ケルビムの1つの特徴！]をつくり、人々に言った。『エルサレムに上ることは、あなたたちにとって余りにも大変なことだ。見よ、イスラエルの人々よ、これがあなたがたをエジプトから導き出したあなたたちの神々である』。彼は一体をベテルに、もう一体をダンに置いた。この事は罪となった。人々は、その一体の子牛を礼拝しに行きました。ダンにまで行きました。彼はまた、高台に神殿を設け、レビ族ではない最も資格の無い人々を祭司に任命した」（列王記上12:26-31）。

ヤロブアムの「祭司たち」は、志願者たちでした。「この出来事の後でも、ヤロブアムは悪の道を離れて立ち返ることがなく、引き続いて最も資格の無い人々を高台の祭司に任命した。志願する者は誰でも聖別して、高台の祭司の一人にした」（列王記上13:33）。

すべての社会的な事象の中で最も永続的なものの1つが宗教です！言語は変化するでしょう。習慣もそうです。人々は、ある場所から他の場所に移住することもあるでしょう。しかし、宗教には永続性があります。日本、中国、インドなどの古代の歴史を見て下さい！どのようにして彼らの宗教が何千年も持続してきたのか、学んで下さい。

紀元前の北西ヨーロッパやイギリス諸島の初期の住民の間では、特定の民族的・部族的な起源を持たない志願者で構成された、権力を有する祭司階級の人々が、雄牛の象徴（おうし座）を崇拝し、その首長が雄牛の角を身に付け（多数の考古学的発見が、このことを実証しています）— 「ヴァイキングたち」はこうした物を使っていました。そして、それは古代ケルト族の人々の間では一般的なことでした）、「木立」（アシェラを象徴）の中で礼拝を行い、古代バビロニアの秘境の謎めいた儀式を行っていた、古代の著述家たちが記していることは、少なからず驚くべきことです！

「^{したが}従って、オーディン、アサ、^{ある}或いは^{ぞく}アングル族^{ひとびと}の人々が、^{かれ}彼らの^{ほこく}母国であるアリアナ、アサランド（^{ほくおうしんわ}北欧神話でアジアのこと）、および^{きた}北ドイツで、^{あたまかざ}頭飾りとして^{おうし}雄牛の角を付けていた — オーディンおよび^{かれ}彼の^{しんぞく}アサ神族を描いた^{えが}絵が示すように、^{えが}雄牛の^{しめ}耳や角を付けた^{しんちゅう}真鍮のヘルメットをかぶるか、または^{じっさい}実際に^つ角をつけていた — ^{おどろ}ことは、驚くべきことではありません」（ハーバマン著『^{わたし}私たち白人の祖先を訪ねて』 135頁）。

どこで、「^{たかだい}高台」とは何だったのでしょうか？

^{かみ}神は、イスラエルの^{ぶぞく}12部族を^{やくそく}約束の^ち地に^{おく}送られた^{とき}時、^{かれ}彼らが^{じん}ペリジ人、^{じん}エブ人、^{じん}ヒビ人、^{じん}ヒッタイト人、^{じん}フェニキア人（^{じん}ペリシテ人）、^{じん}カナン人を^{はじめ}初めとする^{たすう}多数の^{いきよう}異教の^{しゅうだん}集団に^{そうぐう}遭遇することになることを^{りかい}理解しておられました。これらの^{いきよう}異教の人々は^{ひとびと}伝統的に、^{でんどうてき}季節の^{きせつ}しるし、^{せんせいじゆつ}占星術に基づく^{もと}事象、^{じしやう}動物、^{どうぶつ}鳥類、^{ちやうらい}ケルビムなどの「^{てんしぐん}天使軍」の^{しやうちやう}象徴、（特に）^{とく}男根の^{だんこん}象徴を^{はじめ}初めとする^{せい}性・^{ほうじやう}豊穰・^{せいしよく}生殖の^{しやうちやう}象徴、などを^{すうはい}崇拜していました。ヒッタイト人の間では^{じん}広く^{ひろ}見られたことです。

^{かみ}神は、イスラエルの^{ひとびと}人々に^{けいこく}警告しておられます：「あなたが^て手に^い入れようとしている^{くにぐに}国々の民が^{たか}高い山[「^{やま}高い山」]や^{おか}丘の上、^{うえ}あらゆる^{みどり}緑の木の下で[「^き木立」]の^{なか}中で^{あつ}集まることは^{かれ}彼らの^{しゅうかん}習慣でした]彼らの^{かみ}神々に^{つか}仕えてきた^{ばしょ}場所はすべて^{てっていき}徹底的に^{はかい}破壊しなさい。彼らの^{かみ}祭壇を^{ひつくり}くり返し、^{はしら}柱[^{いし}石や^き木の^{はしら}柱；^{とき}時には、^ね地中に^き根をはった^{えだ}ままの木の^{はら}枝を^{ちやうこく}切り払い^{ほどこ}彫刻を施した^{だんこんしやうちやう}男根象徴としての^{みき}幹であることもありました]を^{はかい}破壊し、^{かれ}彼らの^{もり}森を^や焼き^{かれ}彼らは^{こたち}オークの木立の中で^{なかに}礼拝していました]、[^き木の^{みき}幹を^き切り倒すように]彼らの^{かみ}神々の^{ちやうぞう}彫像を^{おの}斧で^き切り倒し、その^{ばしょ}場所に^{きざ}刻まれた^{かれ}彼らの^{なまえ}名前を^{はかい}破壊しなさい」（^{しんめいき}申命記12:2-3）。

ヤロブアムは、「^{たかだい}高台」を^た建てています。イスラエルの^{おほ}多くの^{くうぞうすうはいてき}偶像崇拜的な^{おう}王の^{ぜんちせい}全治世を通して、「^{たかだい}高台」の^{もんだい}問題は^た絶えず、^{かみ}神の^{よげんしゃ}預言者たちによって^{かれ}彼らの^{まえ}前に^{もちだ}持ち出されています。預言者たちは、その^{くうぞうすうはい}偶像崇拜、およびそれに^{ともな}伴う^よアシェラと呼ばれる^{こたち}木立の中での^{なかに}礼拝の^{れいはい}習慣を^{しゅうかん}非難しています。一つの^{ひと}直立した^{ちよくりつ}杭または^き木は、^{しやうちやう}アシェラを^{しんめいき}象徴していました。アシェラは、^アシュトレトに^{ゆらい}由来していますが、これは、^{じん}バビロニア人たちの「^{アシュタルテ}」（この^{ことば}言葉の

最後の「テ」は無音です)に相当します。性・豊穡・生殖を象徴する装飾は、古代の中東の人々の間ではごく一般的なもので、バビロニアの秘教の最初の女神のでシミラマス(セムラマツ)の象徴を特徴的に表現しています。このシミラマスは、古代バビロニアの諸都市の建設者であったニムロデの母-妻でした。彼女は、全領土の各部族の人々にとっての「イシュタル」(アシュタルテ、アシュトレト)ですが、彼らの間では、「イースター」と発音されていました。ユールログ(クリスマスの前夜祭に燃やす大燭)の起源については、倒木の幹に象徴されるニムロデの死と「復活」に関する異教の神話に包まれて定かではありません。異教の伝承によれば、この幹から一夜にして、復活したニムロデを象徴する小さな常緑樹が出現したとのことです。(「クリスマスツリー」を飾る十字架の付いた宝珠、ガラス球、卵型の装飾品のよな)卵を象徴する物が、生命の象徴として崇拝されていました。ユリは、生殖行為を表すものとして見られ、異教徒たちには生殖の象徴として崇められていました。

古代イスラエルに存在した多数の「高台」や「木立」(アシェラ像の象徴)について、キッターはこう語っています:「ヤロブアム」が作り上げた制度は、部分的には国家宗教の模倣であると同時に一方ではエジプトとカナンの偶像崇拝を採り入れたものでもありました。この時代以降、高台が依然として使用され、人々は依然として生け贄を捧げ、香をたいています。アサは高台を取り去ったと言われています。[歴代誌下14:4]が、この改革は、少なくとも彼が占領したイスラエルの都市(町)[歴代誌15:8; 17:2]では成功しなかったようです[歴代誌下15:17; 列王記上15:14]。ヨシャファトもまたユダから高台と木立を取り去ったと言われています[歴代誌下17:6; 同 19:3を参照]。しかし、彼も成功しなかったようです。何故ならば、高台は取り除かれなかった[列王記上22:43]と述べられているからです』『聖書文献百科事典』第2巻 301-302頁)。

では、「木立」とはなんでしょう?ヘブライ語の言葉は「アシェラ」です。キッターはこう述べています:「欽定訳聖書に訳されているアシェラという言葉およびその複数形は常に、高台と一緒に述べられています。欽定訳聖書に先立つ七十人訳聖書[セプトウアギンタ]も同様であることから、この言葉が、木立の下で礼拝する高台のおよびパレスチナで一般的であった自然崇拝と関係のあることが確かであると思われます。そして、さらに、詳細に検討すると、何か

特徴的な像が意図されていたに違いないという結論に達します」(前傾書第11巻302頁)。

更に、キッターはこう言っています:「木立は常にバール神と結びついていることを忘れてはいけません」(前傾書302頁)。

権威者たちは、アシュトレトと、アシェラ、つまり古代イスラエルの人々の木立との間には関係があるとしています。ソロモンは、老人になった時、真の神の信仰を捨てて、彼の多数の側室があるとしています。神はこう言われています:「ソロモンが老境に入った時、彼女たちは王の心を迷わせ、他の神々に向かわせた。彼の心は、父ダビデの心とは異なり、自分の神である主と一つではなかった。

「ソロモンの心は、シドン人の女神アシュトレト、憎むべきアンモン人の神ミルコムを求めた。...そのころ、ソロモンは憎むべきモアブ人の神ケモシュのために、エルサレムの東の山に高台を築いた。憎むべきアンモン人の神モレクのためにもそうした」(列王記上11:4-7)。この現場にいたのは誰でしょうか — 建築者、職人、石工、名工、鑄造者、伐採労働者などに指図をしていたのは誰でしょうか? ヤロブアム! ヤロブアムは、ソロモンに最も信頼されていた忠実な僕でした。北の10部族は、彼に与えられたのです! ヤロブアムが、高台、木立、アシェラを作り、周囲の異教の偶像崇拜の儀式を行う低級な祭司階級を設けたことは、何か驚くべきことだったのでしょうか?

古代バビロニアの謎に登場する祭司たちは、ペテロから使徒職をお金で手に入れようとした魔術師シモン(使徒行伝8章)のような「魔術師」たちがそうであったように、占星術師だったのです。アシュトレトは、エレミヤ書7章18節に述べられている「天の女王」でした。注目してください:「ユダの町々、エルサレムの巷で、彼らがどのようなことをしているか、あなたたちには見えないのか。子らは蒔を集め、父は火を燃やし、女たちは粉を練り、天の女王[セミーラミス、イシス]のためにケーキを作り、異教の神々に捧げ物のぶどう酒を注いで、わたしを怒らせている」(エレミヤ書7:17,18)。

彼らが作ったケーキには、コンスタンティヌスが礼拝した日輪のようなX型をした太陽の象徴が含まれていました。中世のチュートン人たちの間では、これらのケーキは、「おうし

座」の象徴に因んで「雄牛」を意味する「バウス」または「バウン」と呼ばれていました。「バウン」という言葉は、英語の「パン」(小さな丸いパン、ケーキ)の語源です。今日の「ホットクロスパン」(十字型の筋の入った菓子パン)は、ウサギ、卵、ユリなどの生殖行為の象徴である天の女王に敬意を表して「イシュタル」(当時と同じように今日も「イースター」と発音されます)の日に焼いて食べられています。ドルイド祭司たちは魂の不滅を信じていたので、ドルイド教からいわゆる「キリスト教」に改宗するのは容易な事でした。と言うのは、大ブリテン島や北フランスに到着した初期の「クリスチャンたち」は特に、異教徒であるバビロニア人、エジプト人、ギリシャ人、ローマ人の冬至(12月25日に行われていたローマ人たちの「冬至祭」やギリシャ人たちの「農神祭」)などの日を、ニムロデの「復活」を記念する彼らの伝統的な木、ユールログ、十字架付き宝珠、生殖や卵を象徴するガラス球、更にドルイド教の重要な特徴であったヤドリギなどを用いて祝っていたからです。また、これらのクリスチャンたちは、生まれ出る新しい生命を象徴する春分の日「イシュタル」を礼拝し、天の女王にケーキを焼き、おうし座の象徴やヘビで装飾した卵を用いていました。彼らは、あらゆる場合に、異教徒のドルイド祭司たちに馴染みのある習慣を祝っていました。

失われたイスラエルの10部族は、幾世紀にもわたり、彼らの祖先の異教の宗教を維持していたのです。それは、「志願者」による祭司職、木立の中や高台での礼拝、人身御供、占星術や魔術に関係した儀式、古代のアッシリアバビロニアの人々と結びつく年中行事などによって代表されます。

ドルイド祭司たちは、彼らの祖先たちと同じように、アシュトレトを崇拝していました！キートンは言っています:「アシュトレトは、シドン人の女神の名前であり(列王記上11:5,11:33)、ペリシテ人の女神の名前でもありました。(サムエル記上31:10)。その崇拝がイスラエルの人々に広まったのは、士師の時代で(士師記 2:13; サムエル記上7:)、ソロモン自身も崇拝していました(列王記上11:5)。そして、最終的には、ヨシヤが廃止させたのです(列王記下23:13) [ヨシヤは、北の10部族のイスラエルの人々が捕囚になった時からずっと後のユダの王です]。アシュトレトは、バール神に相当する女性の神としてしばしばバール神と共に言及されており

(士師記2:13)、また『そして、すべての天使軍』(列王記下23:4)という表現によっても付加的に言及されています(但し、ここに出てくるのはアシュトレトではなくアシェラです)...恐らく、彼女は天体の一つを代表していたのでしょう。また、エレミヤ書7章18節の『天の女王』が彼女を意味していたと信じる理由があります。その崇拜は、香をたき、神酒を注ぎ、ケーキを捧げることで荘厳な儀式として営まれました」(『聖書文献百科事典』第1巻 242-243頁:「アシュトレト」の項)。

この異教の女神と結びつく生殖(豊穡)の信仰について、キッターはこう述べています:「アシュトレトの名の下に崇拜されていた自然の力について、クロイツァーとムンターは、それは一超越した力によって受胎させられる従属的な力ではあるが、宇宙の万物の誕生をもたらす行為者である - 受胎と出産の原理であると主張しています。...アシュトレトは、月として崇拜されました。そして、月から惑星の金星(これについては、すぐ後で触れます)に移行したことは、明らかに後世が新しく採用したものです。月だけでは正しく天の女王とは呼べないことは明白です。月の太陽に対する従属的な関係が、それを女性の象徴として一層相応しいものになっています。すべての生き物における女性および母としてのその性の働きが、アシュトレト [パール神] に具現されていました。

「彼女を崇拜する儀式は...旧約聖書にある幾つかの指摘と一致すると同時に、旧約聖書の簡単な記述を矛盾することなく説明しています。エレミヤ書7章18節に言及されているケーキ - ヘブライ語でカッパニムと言います - は、ギリシャ人にも知られていました。...そして、彼らは新月と結びつけて鎌の形にして作っていました [今日に至るまで、最も庶民的なフランスパンの一つに「三日月」を意味する「クロワサン」がありますが、これはこの古代の習慣の現代版です]。...彼女の崇拜の最も際立った特徴は、好色的な乱飲乱舞の酒宴にあります。これについては、カルタゴで彼らのひどい姿を目撃したアウグスティヌスが、ひどく憤慨して説明しています。...カナン之地では、彼女は恐らく、雌牛として表現されていたと思われます。フェニキアでは、彼女は、コインに見られるように、雌牛または雄牛の頭をしていました。サンチョニアソン(古代フェニキアの歴史家)は、『アシュタルテは、彼女の権威の象徴として雄牛の頭を用いていた』と述べています。彼はまた、天体についても説明しています」(『聖書

それほど不思議な事ではありませんが、大ブリテン島のドルイド祭司たちは、古代のレビ族の祭司たちの慣習の幾つかを保持しています。例えば、彼らは、未加工の石で祭壇を作っています(これらは、大ブリテン島、アイルランド、北西ヨーロッパの各地に多く残されています)。と言うのは、ドルイド教では、生け贄を捧げる祭壇に使用する石には、斧が触れてはいけないことになっていたからです。どうしてでしょうか？この禁制の由来は、どこにあるのでしょうか？

注目して下さい:「しかし、もしわたしのために石の祭壇を造るなら、切り石で築いてはならない。のみを当てると、石が汚されるからである。あなたは、階段を用いてわたしの祭壇に登ってはならない…」(出エジプト記20:25-26)。

レビ族が最も長く続けた慣習は、贖罪の血を流す必要性から動物を生け贄にするという儀式でした。ドルイド祭司たちも、同じ事をしていたのです！思い起こして下さい。古代における過ぎ越しの祭には、パンとぶどう酒のごちそうに加えて、動物を生け贄にすることも含まれていました。古代のゴール(フランス)やイングランドのドルイド祭司たちがほぼ同じ儀式を行っていたことは、それほど不思議な事でしょうか？

北西ヨーロッパ諸国の歴史を学ぶと、「チュートン人」、「ブリトン人」、「ベルガエ人」、「ゴール人」、「ケルト人」などと呼ばれていた最も初期の入植者たちの本当の身元について、一流の権威者たちが無知であったことに、何度も気付きます。

注目して下さい! :「この民族[フランスの最も初期の住民]の起源については、私たちは再び完全な無知に直面します。アーリア民族の移住に関する多くの推測にだらだらと時間を費やしても、無駄なことでしょう」(『アメリカナ百科事典』第11巻718頁)。

しかし、宗教の共通性については何回も認めています!「ゴールの住民たちは、最も初期か

ら国民性や宗教に共通性がありました...」(前傾書718頁)。

この権威のある百科事典は、古代フランスのドルイド祭司たちの教義について、このように述べています:「これらの教義の中には...生け贄を必要とするものが[ありました]。そして恐らく普遍的な神...パンとぶどう酒の聖餐がこの宗派(カルト)を特徴づけています。そして、植物の中ではヤドリギに、場所としてはシャルトルの洞窟のような物体や聖堂に、儀式の聖性が付与されていました」(前傾書718頁:強調は筆者)。

次のことを忘れないように下さい。北西ヨーロッパ、イギリス諸島、イギリス連邦、および合衆国の国家としての身元に関する何か1つの手がかりについて、それだけを切り離して研究したとしても、それが決定的なものになることはまず無いでしょう。忘れないで下さい。本当の木々の幹は、神のアブラハム、イサク、ヤコブに対する絶対的な約束 — その子孫から間違いなく王座に就く一人が出る、そしてそれは再臨されるキリストであるという、神のダビデへの約束 — なのです。尤も、宗教史に基づく事実だけでなく、多数の歴史的事実 — 文献学、民俗学、考古学、歴史学に基づく事実 — が確実に同じ結論に達する否定しがたい観点を提供する場合、そうした事実についても、軽んじて棄て去るのではなく、注意深く研究する必要があります。

ドルイド祭司たちは、聖職服を着用していました。高位の祭司は、古代のレビ族の祭司たちとまったく同じように、胸当てを付けていました。要するに、ヤロブアムが選んだ志願者の祭司たちは、レビ族の祭司たちに取って代わる単なる模造品に過ぎなかったのです。

では、追放されたレビ族はどうなったのでしょうか? 彼らの中の誰かが新しい偽りの祭司職にありついくのに努力したと推論しても、論理的にまったく矛盾はないでしょう。真の神であるヤーウェ、ヤハウエ、エホバ(このように発音されていたでしょう)を崇拝すると言い張り、神が神の名前を置くことを選ばれたエルサレムで神の定めた祭礼に従って礼拝すると言い張るレビ族の祭司たちの職務を、ヤロブアムは禁止することを望んでいたのです。こうして信条を

捨てて祭司職の志願者に加わったレビ族の祭司たちは、間違いなくその職につくことを許可されたでしょう。

英国史の研究家たちは昔から、ドルイド教と古代イスラエルのレビ族の祭司職の儀式との間に存在する驚くべき類似性に強い印象を受けてきました。「他の多くの権威者たちが、ドルイド教と旧約聖書の宗教との間における類似性に注目しています。著名な英国の学者であるチャールズ・ハルバートはこう述べています：大ブリテン島のドルイド教とヘブライ人の族長制の宗教との間の類似性が余りにも接近しているので、それらの起源が同一だと公言しないことには躊躇を感じます」(E レイモンド・キャプト著『ストーンヘンジとドルイド教』(Stonehenge and Druidism), 75 頁)。

従って、ヤロブアムが定め、10部族のイスラエルの王たちのほぼすべてが引き継ぎ、最終的に彼らが自分たちの土地から追放される原因になった慣習や信条が、古代のブリトン人とアイルランド人の間にほぼ同じように見られることは、決して不思議なことではありません。また、後の北西ヨーロッパの異教の信仰にみられる追加や変更が古代のバビロニア人やアッシリア人の信仰と極めて類似していること — 彼らがイスラエルの隣国人たちと同じ異教の「神々」を崇拝して、「有翼の雄牛」(ケルビム)の前、オークの「木立」の中で礼拝していたこと — も決して不思議なことではありません。

思い起こして下さい。イスラエルとアッシリアの人々は、一緒に追放されたのです。従って、北西ヨーロッパの「チュートン」諸民族の間の密接な関係、「オランダ人」(ダッチ:「トイチュ」や「チュートン」からの派生語)とドイツ人との間の密接な関係は、当然の事なのです。

大ブリテン島の「暗黒時代」

歴史を学ぶ人なら、「暗黒時代」という言葉はよくご存知でしょう。暗黒時代と呼ばれるのは、ローマに征服される以前の幾世紀にもわたり北西ヨーロッパやイギリス諸島に住んでいた人々

の生活や習慣について、その詳細を伝える歴史書、記録、年代記、叙事詩、伝説、歴史物語などの文献情報が特に不足しているという理由によるものに過ぎません。

例えば、「何時、誰が最初に大ブリテン島に定住したのかという事について、地質学者たちの意見は一致していません」(『ブリタニカ百科事典』第4巻 583頁;「ブリテン」の項)。

権威者たちは次の点で意見が一致しています:「ブリソン人」「ベルガエ人」が知られている最も初期の住民であること、そして彼らが「ケルト族の諸文明や諸方言を持ち込みました。彼らが血族関係においてどれほどケルト的であったのか、また彼らの人数が大ブリテン島で遭遇した諸部族を吸収または抹殺するのにどれほど十分であったのか、という点については確実な事は言えません。しかし、彼らが単なる征服階級であったのではなく、また彼らがヨーロッパ大陸のケルト語圏の人々と同じ民族であったと考えても不合理なことではありません」(前傾書第4巻 538頁)。

「ブリテン」という言葉の語源については、この権威ある百科事典は、次のように認めています:この言葉は「イングランド、ウェールズ、およびスコットランドの古典的な名称を英語化したもので、イギリス諸島(ブリタニカ諸島)全体を指す意味に拡張して使用されることもあります。ギリシャ語とラテン語の語形は明らかに、語源のケルト語を再現しようとしたものですが、語源の正確な語形は依然として定かではありません」(前傾書583頁)。

前述の通り、ヘブライ語で「契約」を意味する「ベリト」と「人」を意味する「イッシュ」から派生して出来た言葉だと主張する人もいます。これは推測に過ぎないと思われるとしても、もう一度、ここで考えてみることにします。キリスト以前の大ブリテン島にいた「ケルト語をしゃべる人々」と接触した古代ローマ人たちは彼ら自身の言葉で、当時のブリトン人たちが自分たちのことを呼ぶのに使用していた名称に近似する言葉を文字化しようとしています!あれこれ議論しても、この一件には決着が付かないでしょう。しかし、これらの人々が「契約の民」と言うような表現を忘れずに保持していた可能性を推測することにもそれなりの合理性があるでしょう。思い起こして下さい。「クンブリ」とか「シメリアン」(キムメリオス人)と言う

名称は共に、「オムリ」および(同じ言葉では無いとしても)「サマリアン」が外国語風に訛ったものであることが、十分に証明されています。どちらの場合も、これらは、他人が使用した名称で、彼ら自身が自分たちに使用した名称ではないのです。一例を挙げれば、イタリアには「フローレンス」と言う都市は存在しません。これは英語化した言葉で、イギリス人やアメリカ人がそれを発音するのに作り出した音声は、イタリア人たちが「フィーア-エルン-ツェ」と発音する「フィレンツェ」にほんの少し似ているだけです。アメリカ人がイタリア人に「フローレンス」という言葉を使って質問しても、当惑した眼差しで見つめられることになるでしょう。イタリア人は、フローレンスという言葉を理解しないでしょう。

場所の名前に何か重要性があるのでしょうか？勿論あります！人間は、昔から都市、河川、重要な岬や山、港湾、入り江、河口、溪谷、などの地理的な場所を自分たちや祖先に因んで命名してきました。

「ヘベル」(ヒーバー)は、ヘブライ人の祖先です。多数の言語において、「H」は無音になり、「e」長音になります。従って、様々なラテン語方言では、「イーバー」と発音されています。フランスとスペインの最も初期の住民が「イベリアン」(イベリア人)と呼ばれていたのは不思議な事ではありません。今日でさえ、スペインとポルトガルの半島は、「イベリアン」(イベリア半島)と呼ばれています。これは、スペイン国営航空会社の名前になっています。スペインで最も重要な河川の一つは、「エブロ川」(「ヘブル」との類似性に注意して下さい)です。アラビア語(ムーア語)でワディは、川または乾いた川の道を意味します。ワディ-アル-ケビル(「ヘブライ人の川」という意味)が、スペインの主要河川の一つのグアダルキビル川になったのです。船乗りをしていたダン族は、スペインの河川を探検し、地名を残しています。

東欧の主要水系 — ドン川、ウドン川、ドニエスル川、ダニューブ川 — などの名称については既に言及しました。アレンは、「ドゥン」、「ドン」、「ディン」、「ダン」などの音を含む英語と北欧語の非常に多数の地名の一覧表を作成しています(完全に推測的と思われるものもあります)。このような比較に異議を唱える人は、勿論、他の国々に見られる類似の発音を発見しようとして努力しています。そして、これは大変な困難な作業でもないでしょう。しか

し、北西ヨーロッパやイングランドの地名が、古代イスラエルの人々と関係するもので、彼らの名前で呼ばれていたこと — そして、すべての場合に必ずしも当てはまる訳ではないにしても、彼らも自分たちをそれらの名前で呼んでいたこと — を示唆する証拠は、極めて優位です。

「ノーサンブリア」(アングロサクソン時代の7王国の1つ)と呼ばれていた古代イングランド東部の広大な地域は、間違いなく、アッシリアの征服者たちが「オムリの家」を訛って発音したのと同じように、クンプリやキムリなどに由来しています。この沿岸にある重要な河口域は「ハンバー川」と呼ばれています。「ウェセックス、サセックス、エセックス」は、単にウェスト(西)、サウス(南)、イースト(東)の「サクソン」ということに他なりません。

地名のことを嘲笑しても無益なことです。何故ならば、歴史家たちは、その重要性を認めているからです。「私たちがこの土地とその住民について知っている最も初期の情報は、地質学的、民族学的、考古学的な研究、英国に残る古墳(塚)や洞窟などの遺跡、古代ローマ時代の道路、防壁、荘園、硬貨、地名、碑文、などに基づくものです。シーザーやタキトゥス(55?-?120)の著作物、およびその他の古代ローマの著述家たちの数少ない散漫な記述が、これらの証拠を補足しています」(『ブリタニカ百科事典』第9巻 583頁):「イングランドの歴史」の項:強調は筆者)。

英語について分かっている最も初期のルーツを辿ろうとすると、次のような事実に行き着きます:「アングル人、サクソン人、および彼らの仲間たちは、チュートン民族の系統から出ており、インドヨーロッパ語のチュートン語派(ゲルマン語派)に属する言語を話していました。現代で言えば、オランダ、ドイツ、スカンジナビア半島、アイスランドおよび英国とその植民地の人々と彼らの言語で代表される同じ特徴を持つ民族と言語形態によって代表されます。その言語が印欧祖語であったいわゆる原始アーリア民族の出身地については、確実な事は何も分かっていません...」(前掲書588頁:強調は筆者)。

北西ヨーロッパやイギリス諸島の人々の祖先の出身地は「クリミア（半島）」（ジムリ、キンブリ、キメリアン、シメリアン、等々から派生）および南ロシアの大草原地帯 — 黒海とカスピ海の間に位置する地域、つまり、古代のアッシリア人および捕囚の身であったイスラエル10部族の人々がバビロニア帝国によって追いやられた正にその地域 — を含む「アジア」にあるという事が最も強く指摘されていることを、私たちは何度も何度も知らされます。

アングロサクソン人 — 彼らは誰だったのでしょうか？

偶像を崇拝する北のイスラエル王国の崩壊は、数日とか数週間、或いは数年間で完了したのではなく — 何十年もかかっています。

早くもアハブやエヒウ（いずれも紀元前9世紀のイスラエル王）といった悪王の時代に、マナセ族やルベン族に加えてガド族の多数の人々が、彼らの土地から追放されたり、虐殺されたりしています。比較的最近のことですが、考古学者たちが、イスラエル10部族の人々が継続的に彼らの土地から追放されたという聖書の記述の正しさを確認しています。アッシリアの王たちの記録が発見され解説されていますが、その中に10人のイスラエルの王たちの名前が残されています。彼らの名前は次の通りです：オムリ（「アッシリア語では「クムリ」と発音」、アハブ、エヒウ、メナヘム、ペカ、ホセア、ウジヤ、アハズ、ヒゼキヤ、マナセ。

重要な発見物の一つが「シャルマネセルの黒いオベリスク」がありますが、これは大英博物館に収蔵されており、筆者も見たいことがあります。これは、大変堅固な黒い石のオベリスクで、文字と絵がびっしりと覆っています。その四面の1つの一番上から2行目には、アッシリア王の前に跪く姿が描かれており、それについて次のような碑文が刻まれています：「オムリ（「クムリ」）の息子エヒウ[アッシリア語の表現から後継者であることが示唆されています]の貢ぎ物、銀、金の太杯、金の聖杯、金の盃、金の花瓶、鉛、金の王笏、槍、を私は受け取った」。

イスラエルの人々の最も初期の追放の1つは、紀元前800年よりも以前に起きています。注目して下さい：「このころから、主はイスラエルを衰退に向かわせられた。ハザエル[シリアの王]がイスラエルをその国境地帯の至るところで侵略したのである。侵略はヨルダン川の東側にあるギレアドの全域、ガド族、ルベン族、マナセ族の地で行われ、アルノン川の近くにあるアロエルから、ギレアドとバシャンにまで及んだ」（列王記下10:32-33）。

これは、紀元前800年より以前の事です。10部族のイスラエル王国の大部分の人々が最終的に追放されたのは、それから2,3世紀経った100年ほど後の紀元前720～718年の事です。この大昔に罪深いイスラエルから追放された数十万人もの人々はどうなったのでしょうか？

思い起こして下さい。神はこう言われています：「あなたの子孫はイサクによって伝えられる」（創世記21:12）。アモス書には、こう述べられています：「今、主の言葉を聞きなさい：あなたは、『イスラエルに対して預言をするな。イサクの家に対して反抗的な言葉を口にするな』と言う」（7:16）。これらの人々は、シリア - フェニキアではペト - サクという名前で呼ばれていました。

注意して下さい。捕囚の身にあった人々は、学問の中心地に集まり、高度な文明を築き、自分たちの国語、文学、芸術、科学を発展させられるような立場にはありませんでした。亡命者たちは、学問的な探求に従事する余裕はありません。追放された何十万人ものイスラエル10部族の人々についてはわたたちが得る痕跡は、必然的に、彼らの征服者たち、および彼らが絶えず西方へ、北方へ移動していた時に彼らが通過した土地の人々が残した（非常に断片的な）文献資料の中にしか存在しないのです。プリストーはその著書『世界最古の文献』（*The Oldest Letters in the World*）の中で、テル・エル・アマルナ（エジプト中部ナイル川東岸にある古代都市）の遺跡の粘土板、およびその粘土板の中で、ヨシュアの時代にパレスチナを征服した人々がハビル、ハビリ、アビリとして言及されていること（彼らは「サーガ」または「サーカ」とも呼ばれていました）について触れています。これには、明らかに、「ヘブル」や「サク」（即ち「イサク」）の訛りが見られます。

当時はベト - サクと呼ばれていたサーカ族の人々の最大の国外追放の1つは、ディグラト ピセル3世が紀元前745年ころにイスラエルを攻撃した時の事でした。「イスラエルの王ベカの時代に、アッシリアの王ティグラト・ピレセルが攻めて来て、イヨン、アベル・ベト・マアカ[マアカにあるアベルの家を意味]、ヤノア[ノアの神を意味]、ケデシュ、ハツオル、ギレアド、ガラリヤ[ここには、ガド族、ルベン族、マナセ族が住んでいた地域も含まれています]、およびナフタリの全地方を占領し、その住民を捕囚としてアッシリアに連れ去りました」(列王記下15:29)。

アモス書は語っています：「見よ、主なる神の目は罪に染まった王国に向けられている。わたしはこれを地の面[ヘブライ語ではエレッツ (ehrets) ですが、これは世界全体の土地ではなく区分的または共有的な土地を意味します]から滅ぼす。ただし、わたしはヤコブの家を全滅させることはしない、と主は言われる。

「見よ、私は命令を下す。わたしは、イスラエルの家を諸国民の間でふるいにかける。最も小さな粒さえも地に落とさず穀粒をふるいにかけるが如くに」(9:8-9)。

彷徨えるイスラエルの人々は、シリア - フェニキアやアッシリアの人々、および後にローマ人やギリシャ人などから付けられた名前と呼ばれることになる人々と混ざり合うことになりました。幾世紀にもわたり、これらの人々は、ヨーロッパの東部と中央部を流れる河川の流域に沿って放浪の旅を続け、北西ヨーロッパやイギリス諸島に到着するまでの間、事実上「諸国民の間でふるいにかけられた」のです。

合衆国が「マナセ族」である可能性については信じられない人もいるでしょう。このような人々は合衆国は多数の人種の「るつぽ」だということを指摘します。それは真実です。特に大規模な難民が海外から合衆国へ流入した20世紀後半はそうです。韓国、ベトナム、カンボジア、ラオス、エルサルバドル、キューバ、ニカラグア、メキシコ、コスタリカなどから、多様な民族や国籍の人々が、安全な避難所を求めて合衆国にやってきました。しかし、植民地開拓時代の最初の土地の相続者、およびその後のウィリアム・ペン(1644-1718; アメリカでペンシルヴ

エニア植民地を開いた英国のクエーカー教徒)などの指導下で大量に移住してきた人々は主としてイングランド、スコットランド、アイルランド、ウェールズなどの出身です。二番目としては、スコットランドの低地地方、北欧、そしてドイツからも移住者がやってきました。何百万人くらいのアメリカ人が、「スコットランド人、アイルランド人、オランダ人」を祖先にもつと主張するでしょうか？また、何百万人くらいのアメリカ人が大ブリテン島の人々が祖先であると主張するでしょうか？

重要な事は、神がエフライム族を「ふるいにかけて」イングランドや英連邦に選り分けられたということです。これについては、神は「...最も小さな粒さえも地に落さず」ということを約束さえしておられます。アメリカ人が、とりわけ、チュートン人、フランス人、オランダ人、イギリス人、アイルランド人の名前を持つことは、まったく不思議なことではありません。故アイゼンハワー大統領（1890－1969；米国の将軍・政治家）はドイツ系の名前を持っていましたが、彼は系図上のルーツにおいても人種的な気質においても「ドイツ人」ではありませんでした。ユダヤ人である何百万人ものユダ族出身の人々がドイツ人の名前を持っています。例えば、「ワイツ」、「ワイツマン」、「リーヴァーマン」、「リーバーマン」、「ローブ」、「ゲルト」、「バーンバーン」、「バウアー」等々、一杯あります。しかし、彼らはユダの家に属する人々であって、政治的・国家主義的な意味は別にして、決して「ドイツ人」ではありません。民族的には、中央ヨーロッパのゲルマン諸民族の中核が古代アッシリア人に起源を持つように、彼らのルーツがそこにある訳ではありません。

そうではなく、マナセ族は、他の諸部族の間に分散した「収容地」に集まり、そして神が言われた通り、彼らの同胞のガド族、アセル族、セブロン族、ルベン族、イッサカル族、シメオン族、レビ族、エフライム族と混ざり合ったのです。更に、彼らは、「ハルマンニ」と呼ばれていたアッシリアの昔の征服者たちとも混ざり合いました。ローマ人たちは、好戦的なこのアッシリア人たちを、「槍兵」（「トイト＝オン」（チュート＝オン；槍を使う人）と呼びましたが、これが後の「チュートン人」の語源になっています。

紀元前721年ころには、シャルマネセル 5世がイスラエルの家の 10部族の中で最後に残った

人々を連れ去っていましたが、この時よりもほぼ 100 年前に既に、彼らの同胞部族の何万人もの人々（すべて「イサクの息子たち」です。何故ならば、イサクはヤコブ[イスラエル]の父であるからです）が、東ヨーロッパと北西ヨーロッパにいた人々と混ざり合っていました。

シャルマネセル 5 世の後継者であったサルゴン 2 世は、残っていたイスラエルの人々の最終的に征服したことについて、彼の宮殿の壁面に次のように記しています：「私は、わたしの治世が始まった時に、神シャマシュ（古代アッシリアとバビロニアの太陽神）の加護を頂いて...サマリアの都市を包圍攻撃して奪った。2 万 7 千 2 百 8 拾人の住民を、私は連れ去った。...私は、彼らをアッシリアに連れて行き、私の両手で征服した人々を多数の場所に置いた。私は、彼らを支配する官吏たちと長官を任命し、アッシリア人たちと同じように彼らに租税を課した」。

この記述の正当性については、聖書が肯定しています：「アッシリアの王は、イスラエルの人々をアッシリアに連れて行き、ゴザン川の畔にあるヘラとハボルの町、およびメデスの町々に住まわせた」（列王記下 17:5-6; 18:11）。

ゴザン川は、古代メディア（現在のイラン北西部でカスピ海の南西部にあった古代王国）から北に流れてカスピ海に注ぐウゼン川であることが確認されています。イスラエルの人々は、古代アッシリアの最も奥地の 1 つに追放されたのです。「ハボル」は多分、「ハビリ」や「イベル」と同じように、アッシリア人たちが「ヘベル」を訛って付けた名前だと思われます。そして、このハボルの町は、メディア国の中で確立した町ではなく、みすばらしい捕囚の民が到着したことで名前が付いた広大な難民キャンプのようなものだったのでしょう。

サルゴン自身の承認により、彼らはアッシリア人の生活の本流には同化されることはなく、アッシリアの首都ニネヴェから 400 マイル以上も離れた辺鄙な国境地方に送られています。ここで、彼らは、土地を耕し、牛を飼い、様々な技能的な仕事や商売に勤しみ、ニネヴェに年貢を納めることが期待されていたのです。これは、アッシリアの慣習でした。征服された人々は常に、辺境地の「強制労働収容所」に移住させられました。

思い起こして下さい。台頭してきた強国のバビロニアが、最終的にアッシリアを征服し、アッシリアは歴史の中に消えていきました。イスラエルとアッシリアの人々は、幾世紀にもわたり、北へ西へと移住する家庭で互いに混ざり合いました。この時期について、ハーバマンはこう述べています：「ルーン文字がフェニキア文字から発展して出来たのはこの時期、つまり紀元前700～600年の頃です。私たちは、その文字で刻まれた文章を、遙か東方のマッサゲタイ族が住んでいたアラル海一帯から、ロシアを超えて来たドイツ、北欧、イングランド、アイルランドにかけて発見しています。これらのルーン文字で、サグ[「サク」]族やゴート族の英雄物語が書かれています。また、ゾロアスター教のガーサ（ゾロアスター自身が書いたものと思われる17の聖歌）および「エッタ」（古代北欧の神話・詩歌集）も、それよりも以前のインドアーリア民族のヴェーダ聖典から派生しているのです。これらすべての古代の英雄物語は、今日では架空の文学作品に過ぎないと考えられていますが、ゴート族やスキタイ族、トリキスタンのゲタイ族やグティ族、カフカス（コーカサス）山脈の南のサクランドのサク族の祖先であった古代の英雄について語り継がれてきた伝説が含まれているのです。そのカスピ海の南に位置する地域は、いわゆる北欧人種の揺籃の地であり、また古代イスラエルの共同墓地でもあったのです。イスラエルの人々が歴史の頁から消えた場所で、アングロサクソン族やゴート族が誕生したのです」。

『ブリタニカ百科事典』（第11版）は、次のように認めています：「この名称[アングロサクソン]の起源はよく分かりません」。

しかし、「アングロサクソン」の項で、更に続けて述べています：「これは一般的に、886年にアルフレッド（849－899；ウェセックス王）により多数の王国が最終的に統一されたことで、出来たものだとしんじられています。ビート（673-735；アングロサクソンの学者・歴史家・神学者）は、その著書『イギリス教会史』（*Ecclesiastical History of the English Nation*）の中で、北方の王国（イーストアングリア、マーシア、ノーサンブリア）の人々は、アングル族に属し、一方、エセックス、サセックス、ウェセックスの王国の人々はサクソン族（この項を参照）の出身で、ケント王国および南ハンプシャーの人々はジュート族の出身です、と述べています」（『ブリタニカ百科事典』第11版 第2巻38頁）。

「ジュート」という言葉は「ユダ」から派生したもので、紀元前からイギリス諸島にいた人々の間だけでなく、「ユトランド半島」の人々の間でも使用されていました。ちなみに、今日でも多くの地図で「デンマーク」を指す言葉としてユトランドが使用されています。

サクソン族について、前掲書はこう述べています：「...紀元2世紀の中ごろに初めてプトレマイオスによって言及されたチュートン族の人々。彼らは当時、キンブク[名前に注目して下さい：「クムリ」、「ギムリ」、「ギミリ」「キミリ」（シミリ）、「キメリアン」（シメリアン）]半島の付け根に住んでいたと言われています。この言及に基づいて、私たちは、その西海岸の沖にある3つの島々と合わせて現在のシュレースヴィヒ地方を理解しなければならないでしょう」（第24巻264頁）。

前掲書はまた「アングル族」との関係を認めたうえで、こう述べています：「大ブリテン島を侵略したサクソン族が実際にどれほどアングル族と異なっていたのかは疑問です。何故ならば、言語や習慣における彼らの類似点は、ヨーロッパ大陸のサクソン族（古期サクソン族）ではなくアングル族の言語や習慣と符合するからです」（第24巻265頁）。

ウェールズおよびウェールズ人

イギリス諸島に暮らす英国人の言語的な起源は、古代の人々が黒海とカスピ海に挟まれた地帯、つまり南ロシアの大草原地帯および現在のウクライナ、アフガニスタン、イランに相当する地域から集団で移住を始め、最終的にヨーロッパの最北西の地である北欧諸国やイギリス諸島に到着したという事実を物語っています！

ダン族の半数が、他の追放されたイスラエルの人々と共に、同じルートを辿って放浪の旅をしています。彼らの中には、エフライム族とマナセ族（この両部族は、他の部族よりも「イスラエル」の名を強く継承しています）、ゼブロン族、ナフタリ族、イッサカル族、ルベン族、ガド族、ベニヤミン族、シメオン族、および多数のレビ族の人々が含まれています。レビ族の人々は「ユダヤ人」と考えられていますが、彼らはすべての部族の土地に分散していたのです。

ここで、また思い起こして下さい。200,000人以上のユダヤ人が、ユダ王国が最終的に降伏するよりも前に、北のユダの家から捕囚として出発し、すべての部族の土地に分散して入っていたのです！

言語学は、学ぶ価値のある魅力的な学問です！言葉や言語の起源は、大変不確かで闇に包まれていることもあります。言語の歴史には、人々の習慣に従って奇妙な紆余曲折が伴います。大抵のアメリカ人たちは「アパッチ族」のインディアンのことをよく知っていますが、この名称は、南西部の砂漠地帯に住んでいた好戦的なアメリカ原住民の部族に対して他の原住部族が付けた名前に過ぎません。「アパッチ」という名前は、原住民の言語で「敵」を意味する言葉に過ぎませんでした。

実際、「ウェルシュ」（ウェールズ人）という言葉は、イギリスのウェールズ地方の名前の由来ですが、単に「異邦人」を意味するだけでした。これは、キムリック（キムリ）人に対して使われたチュートン語です。キムリック人は、ホメロスが語っていた「キンメリオ人」および北ドイツから来たキンブリ（キムリ）人の最後の生存者たちでした。

サビルは、次のように述べています：「このキムリと言う名称は、一般的に使用されているのですが、実際は、キム口の複数形で、ウェールズ人を意味します。キムリ（キムリック）人の国は、彼ら自身によってキムルと呼ばれています。よく知られているカンブリア（ウェールズの中世の名称）というのは、このキムルがラテン語化された言葉です。

「ウェールズ語の「V」の文字は、2つの力を持っています。この2つの力は共に、キムリという言葉に影響しています。この「V」の文字は、単語の最後の音節にくる場合を除き、「U」と同じ発音になります。そして、最後の音節にくる場合、この文字は、イタリア語の「i」あるいは英語の「ee」の音になります！従って、ウェールズの国 — つまり、キムリの土地 — の古代ウェールズ語の正確な発音は、クムリー、クummリー、或いはクムリという名前に可能な限りに近いものだったと思われます」。

ゴート族の人々は誰だったのでしょうか？

ヨーロッパ旅行をしたことのある人なら、「ゴシック様式」と呼ばれる古い教会や白、荘園領主の邸宅、公共建築物などの尖塔アーチ、聳え立つ尖塔、装飾物などについてよく知っておられることでしょう。しかし、歴史はこのゴシック様式という言葉が誤った名称であることを教えています。というのは、この言葉は、古代のエジプト、アッシリア、中東の建築様式と大して変わらない丸みのあるものよりもむしろ「尖塔アーチ」を特徴とする建築物すべてに適用されるようになったからです。

ゴート族は古代スウェーデンから来たと言われている人々で、ダニューブ川の北に位置する中央ヨーロッパ地域に流入し、最後にローマ帝国の北の国境地方に進出し、やがて小アジアやギリシャにまで到達し、ローマを征服し略奪し、彼らの王の一人がローマ帝国の王位に就いた、と歴史は私たちに教えています。確かに、他の人々から「ゴート族」と呼ばれた人々がスウェーデンやその周辺に存在していましたが、南に向かってヨーロッパ全土に広がり、遙か遠く北マケドニアまで進出する前に彼らの起源がそこにあったという主張については、大いに疑問の余地があります。デンマークの沖に位置する「ゴットランド島」は、彼らの名前を今日に伝えています。全盛期には、ゴート族は、ヨーロッパの広大な地域を支配していました。彼らの王の一人は、ローマ皇帝の王位に就いています。また、他の一人は、当時のゴールの地で最も豊かな地域であったスペインの王位に就いています。

しかし、ゴート族がヨーロッパで最強の人々であった時代からもう250年すると、彼らは歴史から姿を消します。彼らは、どうなったのでしょうか？彼らは誰だったのでしょうか？

一流の権威は次のように述べています：ゴート族は「...紀元1世紀にビステュラ川（ビスワ川；カルパチア山脈に発しバルト海に注ぐポーランド最大の川）流域の中心部に住んでいたと思われるチュートン族の人々...」でした（『ブリタニカ百科事典』第11版 第12巻272頁）。

「チュートン」という言葉は、「槍兵」を意味する古代ローマ語で、古代ローマ人たちが中央ヨーロッパのアルプス地域の北沿いの国境に築いていた有名な「国境の長城」――つまり防衛線――の北側で接触することになったこれらの野蛮で好戦的な人々に適用した名称です。時代が下ると、歴史家たちは異口同音に、様々な時代に文字通り何十という異なる部族集団

が領有していた地域から来た人々、あるいは同時代に多数の部族集団に領有されていた地域から来た人々、つまり中央ヨーロッパや北西ヨーロッパから来た人々をすべて、部族を明確にすることなく、「チュートン」として言及しています。チュートニックという言葉は、訛って「トイチ」になり、「d」音が「t」音に取って代わり「ドイツ」等の発音になった訳です。ローマ人が戦うことになった古代「チュートン人たち」は、「ドイツラント」 — つまり、今日の「チュートン人の土地」 — の人々と呼ばれていました。「ダッチ」（オランダ人）という言葉の起源も、明らかにこれと同じでしょう。

ゴート族を野蛮人と呼ぶ人もいます。しかし、彼らは十分に発達した言語を持っていました。そして、その文明の水準も優れていました。他の人々の記述は別にして、ゴート族は、恐らく野蛮ではなかったのでしょう。伝統的には、彼らは古代の北欧の出身ということになっています。そして、「ゴットランド島」は彼らが命名したのだろうと指摘されています。この点については、興味深い事があります。「ゴート」という名称には、語源的な意味は殆どありません。前掲書は、この名称に関して「ゴトーン人、つまり後のゴート人」という説明をしています。

しかし、ここで私たちの英語の「ゴッド」（神）という言葉の起源に注目しましょう。このドイツ語は「ゴット」です。そして、古代ゴート語は「グート」（guth）と言う綴りがウムラウトの場合のように「ゴエト」（goeth）と発音されていました。「ゴート族」は、彼らの概念としての「神」すなわち「ゴエト」を崇拝する人々でした。彼らはクリスチャンと言うよりも異教徒であったという評価が定着しています。しかし、ヤロブアムの統治下にあったイスラエルの人々が黄金の子牛を崇拝していたことを思い起こして下さい。ヤロブアムは、シナイ山でのアロンの言葉を借用して、「見よ、イスラエルの人々よ、これらは、あなた方をエジプトから導き出したあなた方の神々である」（列王記上12:28）と言っています。この「神々」とは、雄の子牛、つまりケルビムの4つの容貌の1つを表現している子牛像のことです。サタンは元来、神の玉座を「護衛する」ケルビムの一人でした（エゼキエル書28:14）。そして、イスラエルの人々は、真の神よりもむしろ「天使軍」を崇拝していたのです。

『ニュー・イングリッシュ・ディクショナリー』（New English Dictionary）は、英語の「神」という言葉の語源を、2つのアーリア語の語源にまで遡っています。共に「グエウ」（gueu）

という語形を持つもので、その1つは、「祈願する」という意味を持ち、もう1つは「流し込む」（注ぐ）という意味を持っています。『ブリタニカ百科事典』は、この言葉の起源について「この言葉は、「流し込む」という意味から「鑄像」を意味していた可能性も示唆されてきました」と述べています（前掲書 第12巻169頁：「神」の項）。

「グート」と言う言葉は「グート」または「ゴット」という彼らの概念 — この概念は牛（子牛）崇拝に込められています — を崇拝していた「ゴート族」の明白な語源なのでしょうか？この類似は、無視する訳にはいきません。例えば、アレキサンダー大王（356-323 b.c）は、ゲタイ人（黒海の西岸地域にいた古代民族）と呼ばれていた人々を北マケドニアからダニューブ川（ダンの川）を越えて、バルト海まで追いやっています。マルセイユにいたピュテアス（紀元前300年ころの航海者）は、彼らのことを「グトン」と呼んでいます。但し、彼ら自身は、自分たちのことを「グイタ - ティウダ」と呼んでいました。これは、「グートの人々」つまりゴートの人々という意味です。つまり、彼らは、雄牛の象徴のケルビムを崇拝していた人々です。北欧人の間ではケルビムは「おうし座」としても見られています。牛の角は、北西ヨーロッパ、とくに北欧人やヴァイキングの間では一般的なものです。

ゴート族の人々は、多数の垂族に分かれていました。そして、その区分はすべてが必ずしも明確である訳ではありません。一般的には、彼らの隣人や敵が彼らの名前を付けています。例えば、次のような名前があります：グレットウンギ、テルインギ、アウストロゴッティ（「東ゴート族」を意味するオストロゴート）、タイファリ（前掲書 第12巻272頁）。ゴート族の人々は、他のすべてのチュートン諸民族から歓迎されており、彼らの年代記や伝承に記録が残されています。アングロサクソン族（雄牛を崇拝する「サクス」即ちイサクの息子たちであるイングル - サクス族）の文献は、ゴート族の主権が遥か西方のデンマークおよびユトランド半島のすぐ下に位置するドイツのホルシュタイン地方にまで及んでいたと主張しています。

ゴート族の起源に関して知られているすべての文献を調べると、必然的に、ギリシャの植民都市マルセイユの旅行家の回想録に残されている彼らに関する最も古い記述に遭遇することになります。彼の名前はピュティアスです。彼は、紀元前300年ころに「グトン」と呼ばれる人々

（「グート」の人々）について記述しています。

最古の英語とゲルマン語から今日の私たちに伝えられてきた唯一の最も重要な文学作品は、あの有名な「ベオウルフ」（8世紀初期の古英語最大の叙事詩）です。西暦1,000年頃に書かれたその写本が一部だけ保存されています（大英博物館収蔵）。この叙事詩は、エッジセイオウの息子であり、イエーアト（ゲアト）族（つまり「ゴート族」）のヒュゲラーク王の甥でもあったベオウルフの偉業に関するものです。このイエーアト族という名称の語源について、『ブリタニカ百科事典』はこう述べています：「イエーアト（ゲアト）、或いは北欧に残る記録ではゴータルと呼ばれていた人々によって、南スウェーデンの一部が現在の名前のゴットランド（島）と名付けられたのです」（第3巻 758頁：「ベオウルフ」の項）。

叙事詩は、俗史と神話が結合したもので、「…ゴータル（ゴート）族やデーン人（ダン族）だけでなく、スウェーデン人、アングル人、オストロゴート（東ゴート）人、フリジア人、ヒーソバート人などの王家の歴史」（前掲書 759頁）の出来事を多数含んでいます。

では、ゴート族とは誰だったのでしょうか？彼らは、多数の部族で構成される人々で、長い歴史の期間にわたり、遥か東方の黒海とカスピ海に挟まれた地域、クリミア半島、北ギリシャの土地、遥か西方のスペインやノルマンディーの土地、遥か北方のスウェーデン、デンマーク、バルト海地方の土地、そして中央ヨーロッパと西ヨーロッパのすべての土地を領有していました！これらの人々があっさりと姿を消したのでしょうか？とんでもありません。幾世紀にもわたり、彼らの言語 — 英語自体も含むすべてのチュートン諸語（ゲルマン諸語）の源流である古代語の1つは、徐々に変化していったのです。それは、古ドイツ語、古英語、ゲール語、および死語になったその他の諸言語が変化していったのと同様です。

チュートン諸語の起源について、『ブリタニカ百科事典』は次のように説明しています：「（これは）幾つもの言語を包含する広義の用語で、その殆どの言語 — つまり、英語、フリジア語、オランダ語、フラマン語、ドイツ語（高地ドイツ語と低地ドイツ語の両方）、および多数の北

欧諸語（スウェーデン語、デンマーク語、アイスランド語、ノルウェー諸語）が、今日でも話されています。時の経過は、これらの諸言語の間の同族関係を極めて不明瞭にする方向に作用しました。そして何世紀も前から互に通じなくなってしまった言語もあります。しかし、こうした幾つかの言語も、知られている最古の形態においては、歴然とした共通の起源を示す痕跡を露呈しています。上記に列挙した諸言語に、現在は死語になっている言語のゴート語も加える必要があります。このゴート語は、5世紀と6世紀にはヨーロッパの広い範囲にわたって話されていました」（前掲書 第26巻 678頁）。

チュートン人とは誰だったのでしょうか？彼らは、「…北ヨーロッパにいた一つの部族で、紀元前103年に、ローマ人に知られるようになっていきます。リウィウス（59 B.C.-17 A.D.;ローマの歴史家）の『ローマ史』（概要）によれば、彼らは当時、アンブロン族と協力して、ケルトイペリア族によってスペインから撃退されたキンブリ族[ジミリ、ジムリ、クムリ、ビト・フムリ — 即ちオムリの家！]に援軍を送っています。（「ケルトイペリア」という名称に注意して下さい。ローマ人たちは、この言葉によって、ケルト人と「ハベリ人」即ち「ヘブライ人」を区別しながらも、両者を一つに結び付けています）。…彼らの名称は、語形の上ではケルト語です。そして、多数の著述家たちが、チュートン人[これは、ローマ人が彼らに付けた名称で、「槍兵」を意味しており、彼ら自身が自分たちに適用した名称ではありません]は、実のところケルト族に属する1部族だったと考えています。ユトランド半島[デンマーク]の北西端で最近までティラントまたはティトシッセルと呼ばれていた地域の名称の中に、彼らの名称が保持されていた可能性があります」（『ブリタニカ百科事典』第26巻 673頁）。

間違いなく、多数のイスラエルの人々が、他の多数の名称で知られていたにも係わらず、ローマ人たちに「チュートン人」と呼ばれていた一時期がありました。結局のところ、彼らは何百万人もいたのです。何万か何十万かの人々がそれぞれ10の異なる部族を代表していたのです。そして、彼らすべてが、創世記49章で明らかにされている古代における神の預言に従って、最終的には土地を相続することになっていたのです。

イサクの息子たちを意味する「サクの人々」は、捕囚として暮らしていた北アッシリアの人里はなれた荒地 — 黒海とカスピ海に挟まれた地域 — から出発して何世紀もかけて徐々に移動していた間に、多数の異なる名称で知られるようになりました。「スキタイ人」の歴史に関して多数の権威が様々な意見を述べています。それらに注目してみましょう。

エジプト史の研究者ヘロドトス（Herodotus IV. 142）は、「シサエ」（スキタイ人）が支配していた国を、カルパチア山脈からドン川に至るまでのステップ（大草原）地帯として書き記していますが、これは、移住するイスラエルの人々が旅したヨーロッパのルートの一部であり、この川は彼らの諸部族の1つの「ダン族」の名前を今に伝えています。

スキタイ人の起源については、少なくとも3つの異なる学説が存在します。いずれの説も、彼らがキムメリオス人たちを彼らの土地から追い出したという事、または彼らがキムメリオス人たちの土地に追いやられたという事を理由にして、「キムメリオス人」と結びついています。ヘロドトスは、スキタイ人たちがメディアの国を支配していたと述べています。思い起こして下さい。捕囚となったイスラエルの人々が連れて行かれたのは、ニネヴェから北東に400マイル以上も離れた川沿いのメディア（メデス）の地だったのです。

『ブリタニカ百科事典』はこう述べています：「[スキタイ人に関する]アッシリアについての証拠は主に、ヘロドトスの記述の追認です。尤も、大多数の著述家たちは、アジアを苦しめたスキタイ人たちはカスピ海の東から来たサーカ族であったと考えています（第24巻 527頁）。

スキタイ人たちは、「マッサゲタイ族」と呼ばれる人々によって「アラクセス川」（ギリシャ語では、「雄牛」（オックス）を意味する「オクサス川」）を超えたところに追いやられたと言われています。このマッサゲタイと言う言葉は、「マッサの人々」という意味に過ぎません。思い起こして下さい。イスラエルから追放された最大の部族の1つでヨルダン川の東と西に合わせて2倍の土地の分け前を所有していたのは、マナセ族でした！「マッサゲタイ族」とは、誰だったのでしょうか？ヘロドトスは、彼らはオックス川を超えたところに住む好戦的な古代の人々であったと述べています。「恐らく、この名前[マッサゲタイ]は、民族的な統一体を意味するものではなく、ペルシア人たちの北方の野蛮な隣人たち[黒海とカスピ海との中間にいた人々]す

べてを含んでいたのでしょう」（前掲書 第17巻 864頁：「マッサゲタイ」の項）。

興味深いことに、ヘロドトスによって「スキタイ人」として知られることになった人々の間には、彼が「スキタイ王族」と呼ぶ部族的な区分があり、この王族が他のスキタイ諸部族を支配していました！歴史家たちは、スキタイ人たちをその生活様式に従って多数の亜族に分類しています。『ブリタニカ百科事典』はこう述べています：「ヘロドトスは、スキタイ人たちを明確に、国の西方のアグリカルチュラリスト族（農業族）、キャルピダエ族、アラゾンヌ族、アロテレス族、ゲオルギ族、および東方の「スキタイ王族」をもつノマド（遊牧）族に分類しています。この王族は、他の諸部族を支配していました」。そして、次のことを認めています：「1つの民族に属する様々な文明状態の諸部族として扱うべきなのか、或いは支配部族に因んで外国人たちが呼んでいたころの民族の混成集団として扱うべきなのか、という問題が生じます」（第24巻 526頁：強調は筆者）。

重要な事は、ヨーロッパの多くの地域に住んでいて後に歴史家たちが記述することになる人々が常に、古代ペルシアの「インドアーリア」地方 — 古代のアッシリア地方とバビロニアの地方 — の出身であると言われていることです！ギリシャ人、エジプト人、ローマ人などから彼らに様々な名前を適用しているとは言え、彼らは歴史の中で身元が徐々に失われ、混同されたイスラエルの10部族の人々と一緒になったアッシリアの人々 — すべての人々の言語がそうであるように、時の経過と共に徐々に変化した言語を持っていた人々 — 他国の敵や隣人や歴史家たちから名前を付けられた人々 — 牛を崇拝して、その名前が彼らを捕らえた人たちが名付けた「ビト・クムリ」（オムリの家）と結びつく手がかり、彼らの祖先の一人の「ダン」と結びつく手がかり、「イサク」（サカ、サカエ、サキ、サクス、サクソン、サクソン）と結びつく手がかり、およびその他の名前（「サマリヤン人」の訛った「サルマチア人」など）と結びつく手がかりを持つ人々なのです。

ハーバマンはこう述べています：「クリミア半島とその近辺で発見されるヘブライ語・フェニキア語の碑文は、そこに碑文を残したサキ族の人々が異教徒ではなくイスラエルの家系から出

ていることを自覚^{じかく}していたことを示^{しめ}しています。一方、ゴート族^{ごうとぞく}の神話^{しんわ}は、彼^{かれ}らが異教徒^{いききょうと}であることを示^{しめ}しています。これまで皆様^{みなさま}にお話^{はな}ししてきたなぞは、ゴート族^{ごうとぞく}の英雄物語^{えいゆうものがたり}のほとんどはオーディン^{ほくおうしんわ}（北欧神話^{ほくおうしんわ}の最高神^{さいこうしん}）を中心^{ちゅうしん}に展開^{てんかい}しているという事実^{じじつ}によってのみ解^とき明^あかすことができます。オーディンは、後^{のち}に神^{かみ}にされていますが、一人^{ひとり}の男^{おとこ}でありアサ神族^{あさしんぞく}（アセン、アサ、またはエイシアの人々^{ひとびと}とも呼^よばれています）の指導者^{しどうしや}でした。彼^{かれ}らの首都^{しやうと}は、オーディンの城^{しろ}であるヴァルハラがあるアサハイムのアスガルドに置^おかれていました」（『私たち^{わたし}白人^{はくじん}の祖先^{そせん}を訪^{たず}ねて』133頁^{ぺいじ}）。

ハーバマンは、「アジア」という最終^{さいしゅうてき}的にはウラル山脈^{さんみやく}から日本列島^{にほんれつとう}までの大陸全体^{たいりくぜんたい}に当てはめられることになった言葉^{ことば}が、古代^{こだい}に黒海^{こっかい}とカスピ海^{こっかい}の間に位置^ちする一帯^{いつたい}に居住^{きゅうず}していた牛^{うし}を崇拝^{すうはい}するイスラエル人^{じん}たちに由来^{ゆらい}するという考^{かんが}え方を提^{てい}起^きしています。彼^{かれ}は、フェニキア語^{ふにきあご}のアルファベットの最初^{さいしよ}の文字^{もじ}がアーレフ^א（^ア；起源^{きげん}はヘブライ語^{へぶらいご}）で、これが雄牛^{おうれうし}の象^{しやう}徴^{ちやう}として描^{えが}かれていることを指摘^{してき}しています。後^{のち}に北欧神話^{ほくおうしんわ}で崇拝^{すうはい}されることになる一人^{ひとり}の男^{おとこ}オーディンの率^{ひき}いる人々^{ひとびと}は、「マイティー・アサ」（偉大^{いだい}なアサ族^{あさぞく}）または「プライマリー・ワンズ」（主神族^{しゅしんぞく}）または「ファースト・ワンズ」（一級^{いつきゅうしんぞく}神族^{しんぞく}）と呼ばれていました。古代^{こだい}ゴート族^{ごうとぞく}のルーン文字^{もじ}には文字^{もじ}「A」が含ま^{ふく}れていますが、これは「エイサ」または「エイス」と発音^{はつおん}されていました。現在^{げんざい}のトランプに第一^{だいいち}カードの「エイス」と呼^よばれるカードがある理由^{りゆう}は、多分^{たぶん}ここにあると思^{おも}われます。

ヘブライ語^{へぶらいご}の「エグル」または「エングル」（牛^{うし}）は「アーレフ」の記号^{きごう}（牛^{うし}の象^{しやう}徴^{ちやう}）と関係^{かんけい}していることから、ハーバマンは、「おうし座^{すなわ}」即^{すなわ}ち雄牛^{おうれうし}の象^{しやう}徴^{ちやう}を崇拝^{すうはい}するという異教^{いききょう}の習慣^{しゅうかん}を持^もっていた古代^{こだい}のイスラエル10部族^{ぶぞく}の結びつきがここにあると見ています。彼^{かれ}は、こう述^のべています：「従^{したが}って、オーディン、アサ、即^{すなわ}ちアングルの人々^{ひとびと}が、アリアナ、アサランド、および北^{きた}ドイツに位置^ちする彼^{かれ}らの母国^{ぼこく}で、オーディンと彼^{かれ}のアサ族^{あさぞく}（即^{すなわ}ち、アングリ族^{あぐりぞく}）の絵^えに描^{えが}かれているように、牛^{うし}の角^{つの}と耳^{みみ}を付^つけた真鍮^{しんちゆうせい}性^{せい}ヘルメットをかぶるか、または実物^{じつぶつ}の角^{つの}を付^つけることで、牛^{うし}の角^{つの}を頭飾^{あたまかざり}りに使用^{しやう}していたことは、驚^{おどろ}くことではありません」（前掲書^{ぜんげいしよ}135頁^{ぺいじ}）。

ドイツ人^{じんだれ}は誰^{だれ}だったのでしょか？

ドイツ人は誰だっただけでしょうか？現代のドイツの人々を、聖書のどこかに見出すことが出来るでしょうか？

ドイツの人々の身元は、必然的に、単なる国籍ではなく民族の問題を扱うことになります。

多数の国家が、複数の民族で構成されています：国家はたった1つの民族に属する人々で常に構成されている訳ではありません。

例えばユーゴスラビアの主要民族は、セルビア人とクロアチア人です。ベルギーの場合は、フラマン人（フランダース人）とワロン人です。スイスの場合は、ドイツ系、フランス系、イタリア系の人々で構成されています。ドイツの場合は、チューリングゲン地方の住民、ヘッセン（州）人、シュヴァーベン人、バイエルン（ババリア）人、オーストリア人、およびその他多数です。

現代人の身元を辿るには、最初に彼らがどのような名前で古代の歴史家たちに知られていたかということをはあくし、そして更に古代に遡って、聖書の歴史や預言の中で彼らに適用されていた名前を確認する必要があります。

幾つかの外国語に多少の知識があれば役立ちます。例えば、ラテン諸語（スペイン語、フランス語、イタリア語など）には、「ジャーマニー」（ドイツ）や「ジャーマン」（ドイツ人）に対応する言葉はありません。スペイン人にとっては、ドイツは「アレマニャ」であり、ドイツ人は「アレマン」です。実際、「ジャーマン」という言葉は、黒海とカスピ海に挟まれた地域から中央ヨーロッパに移住してきた好戦的な諸部族に付けられた名前で「好戦的」とか「戦争人」という意味でした。ローマ人たちがゲルマン（チュートン）民族の人々に付けた他の重要な部族名には、「ハッティ族」、「アレマニ族」（アルマンニ族）、「サウビ族」「カスアリ族」、「クワディ族」、等々があります。（『ブリタニカ百科事典』第11版：「ドイツ」の項を参照）。

古代ドイツの歴史については、驚くべき主張がなされています。ドイツ最古の都市はトリールですが、この都市は紀元前20世紀以上もの昔に築かれたと言われています。ドイツ語テキストの『ドイツ語に到着』（*Indeutschen Landen*）の中で、著者ヨーゼフ K.L.ビルはこう述べています：「トリールの住民たちは、彼らの都市が全ヨーロッパで最古であると主張しています」。また、こうも述べています：「トリールは、有名なアッシリア王ニノスの息子トレベタが建設したのです。ニノスとは、古代アッシリアの首都ニネヴェの建設者であるニムロドのことです。事実、トリールには『トリールは、ローマが再建された時には既に、1300年間も存在していた』と読める碑文が存在しています」。驚かれましたか？

でも驚くことでしょうか？ 思い起こして下さい。人類の足跡は、中東から出発しているのです！ 考古学者の発掘調査は常に、聖書の歴史および神聖な記録の正しさを確認しており、否定することは決してありません！

すべての偉大な現代国家は時に、ノアの3人の息子のセム、ハム、ヤフェトの子孫に当たる多人種部族で構成されていることがあります。

創世記10章には、「国家一覧」が記載されています。ここには、ノアの3人の息子のそれぞれの子孫が紹介されています。基本的には、現代人に消しがたく刻印されたまま今も残っていることの多い部族名と言うことになります！

ハムの息子の一人はクシ（クシュ）です（創世記10:6）。ここで、10章8節を読むことにします：「クシにはまた、ニムロドが生まれた。ニムロドは、主の前で[主に代わり]偉大な狩人に成長した。それ故に、『主の前で偉大なニムロドの如くに』という言い方がある。彼の王国の最初の中心地は、バベル、エレク（ウルク）、アッカド、カルネであり、それらはすべてシナルの地にあった」（「シナル」の地というのは、古代アッシリア人たちが支配していた黒海とカスピ海に挟まれた地に他なりません！）。

欽定訳聖書の11節の英語は少し紛らわしいのですが、オックスフォード版の注釈が、他の翻訳と同様に、この節の理解を可能にしています。ここは、次のように読むべきです：「その地から、彼[ニノス、即ちニムロド]は、アッシュール[アッシリア]に行き、ニネヴェ、レホボテの町およびカラを建設した」（創世記10:6-11）。

歴史の中では「ニノス王」として知られているニムロドは、バビロンとニネヴェの創設者です！ドイツの歴史家たちが最古の都市（古代ローマ時代以前！）はアッシリア王「ニノス」の息子によって建設されたと主張していることは重要な意味を持っています！

古代アッシリア人たちは、幾つかの顕著な民族性を備えていました。第一に、彼らは自分たちが「支配民族」であると信じており、戦による征服が最高に荣誉あることだと信じていました。アッシリアの王たちや英雄たちは常に、二輪戦車に乗っている姿、馬に跨っている姿、勝利した敵を足で踏みつけている姿で描かれています。王たちは、全軍隊を服従させること、独りでライオンなどの野獣を殺すこと、といった偉業を成し遂げる姿でも描かれています。

アッシリア人たちは、単なる商業目的だけでなく、軍隊の兵站支援という特定の目的を念頭において主要な舗装道路を建設した最初の人々でした！古代アッシリアの首都ニネヴェからは、舗装道路網が四方八方に広がっていました！

アッシリア人たちは、女性を崇拝していました。そして明らかに、二輪戦車（装甲戦車）に鉄を使用した本当に最初の人々でした。

ローマの歴史家プリニウスは、「アッシリアーニ」（アッシリア人たちが黒海の北に位置する地域に居住していたと主張しています（『博物志』IV第12章 183頁）。

中央ヨーロッパに居住していたアッシリア人たちは、台頭してきたローマ帝国と対決するようになり、その結果、ローマ人たちが彼らの好戦的な大軍隊の信仰を防ぐために、有名な「国境

の城壁」(防衛陣地および防壁)を建設して、北の国境沿いに軍隊を配置することになったのですが、ドイツの歴史家たちは、この敵意のある好戦的な人々に関する記述については一致しています。

ドイツの歴史は、これらの部族の記述については、常に意見が一致しているのです。

放浪の過程で歴史から消えたイスラエルの10部族の最も重要な名前の1つがビット・クムリ(「オムリの家」を意味する「ベト・オムリ」に由来)であったおと、そしてビット・クムリには、「フムリ」、「ジムリ」、「シミリ」、「ジブリ」、「キンブリ」などの多くの派生名があったことを忘れないで下さい。

私たちはこれらの様々な記述を英語で読むのですが、これらの記述の元の言語は、フランク族、ケルト族、アングル族、サクソン族、等々を含むビット・クムリの人々の話していた中央ヨーロッパ諸語になります。そして、「高地ドイツ語および低地ドイツ語」、オランダ語、古期英語、現代英語はすべて、同一のルーツ — 前述の諸部族の話していたインドヨーロッパ諸語のルーツ — から派生しています。

私たちは、様々な種族的・部族的な集団の身元を、彼らが接触することになった古代文明の中で最も教養のある人々が付けた名前を確認する傾向にあります。この事も忘れないで下さい。

私たちは、これらのさまよえる諸部族の記述に関しては、ローマの歴史家タキトゥスおよびその他の人々に負っているのです。

勢力を拡大していたバビロニア帝国の侵略軍によって黒海とカスピ海の間位置する彼らの土地から追い出されたアッシリア人たちが、彼らの放浪の旅、継続的な北方への広がりの中で、何十万人もの彼らの昔の奴隷たちと自由に混ざり合ったと言うことは、容易に理解できるでしょう。

したが、ローマ人たちが、中央ヨーロッパから侵略してきた諸部族のことを「キンブリ」および「チュートン」という2つの異なる集団の人々として語っていることは何ら不思議なことではありません。

サバイン・ベアリング - グールド (1834-1924) は、その著書『ドイツ』(Germany) の中で、「これらの侵略者たちは、自分たちのことをキンブリおよびチュートンと呼んでいた」と述べています (1 頁)。

サバイン・ベアリング - グールドはまた、現代のスイスの人々の二ヶ国語併用・二人種的な特質について、「これは、2つの異なる種族が、紀元前1300年の昔と同じように、今日のスイスで一緒に暮らしているからです。フランス語を話す人々はキンブリ族を、ドイツ語を話す人々はチュートン族を代表しています」(前掲書 2 頁) と説明しています。興味深いことに、「ドイツ」および「ドイツ人」という言葉は、ローマ人たちがこれらの好戦的な諸部族の人々に付けた名前に由来しているのです。ベアリング - グールドは更に述べています：「ドイツ人という名前は、彼らが携えていた槍が理由で付けられたもので、「槍兵」を意味する名前です」(強調は筆者)。ローマ人たちは慣れない耳で、これらの好戦的な「ゲルマン民族」の人々の名前を彼ら自身の言語に翻訳しようとして、「トイチェン」(ドイツ人) を「チュートン」としたのです。

実際、彼らの言語の「t」音の発音は、英語の「d」音の発音に大変似ているのです。

『アメリカナ百科事典』(Encyclopedia Americana) は、「ドイツ」の項で、次のように述べています：「紀元前113年、最初のゲルマン諸部族のキンブリ族とチュートン族がローマ帝国を侵略しようとした時、ローマ帝国の世界の安全保障の維持にとって、ドイツとの国境が重要な問題になりました」。黒海とカスピ海の間、位置する大草原から追放されたアッシリア人たちが、イスラエルの「失われた10部族」の残存者たちと共に、主要河川の流域に沿って放浪したのは、必然的な成り行きだったでしょう。

但し、何十年、何百年という時の流れの中で、いくら放浪をして、互いに混ざり合ったり、隣接した場所に定住したりする傾向があったとは言え、言語的、文化的、宗教的、社会的、人種的、経済的、思想的な違いに拠り、これらの人々は、彼らのそれぞれの最初の古い部族の行動・思考様式に従って個々に定住し、他の種族の行動・思考様式を避ける傾向にありました。

絶えず西方に向かって移住を続けるこれらの混ざり合った人々について、『アメリカナ百科事典』は次のように述べています：「…ゲルマン諸部族は、…北欧の諸部族を除き、ある期間、ライン川とビスワ川の間位置する土地に定住したのですが、更に西方や南方に移住して行きました。アングロサクソン族（「サク」の息子たち、即ち「イサクの息子たち」）はイングランドに、ゴート族とバンダル族は地中海諸国に、ランバル族は北イタリアに、ブルグント族はローヌ川地方に、フランク族はゴール（フランス）に進出して行きました」（「ドイツ」の項）。

ローマ人たちに「チュートン人」と呼ばれたこれらの彷徨えるアッシリア人たちの特徴の一つは、彼らの好戦的な性質です。キリストの死、埋葬、復活から僅か67年後の西暦98年、パプリアス・コーネリアス・タキトゥスは、『ゲルマニア』（*Germania*）を発表して、彼らが「好戦的な人々」で、「戦が彼らの主要な産業であった」と述べています。戦においては「族長が死亡して自分が生き残り、戦場から生きて帰還することは不名誉な事だと考えられていました。逆に、族長を防護、支援して、自己の勇敢な行動を族長に拠るものだとすることは、忠誠の模範であると考えられていました。つまり、部族の野心や目標が族長という一人の男の意志と一体化していると見なされていた訳です。ある部族が長期の平和の中に沈み込んでいても、その部族の若者たちは、戦をしている誰か他の部族長の下で軍務に就くことを求めるのでした」と、タキトゥスは述べています（強調は筆者）。

タキトゥスはまた、ゲルマン諸部族の軍歌についても言及して、戦の前後に「うるさい戦士たちのコーラス」が利用されていた事について語っています。

『アメリカナ百科事典』は、次のように述べています：「ゲルマン諸部族の歌の大部分は異教の祭司たちによって歌われていたもので、これらの歌は主として戦士の士気を鼓舞するためのコーラスだったと考えて間違いないでしょう」。

アッシリア人たちは偉大な建設者であったことを私たちは知っています。彼らの壮大な要塞都市、宮殿、記念碑、大彫刻、等々は、最高に素晴らしい古代遺物の実例です。彼らが無類の戦士であったこと、彼らが自国の産業や戦において当時としては最先端の工学技術を使用していたことも、記録に残されています。

ローリンソン（1810－95）は、その建築における記念碑的な業績から、次のように推論しています：「...アッシリア人たちは、力学的な知識において相当進歩しており、事実、ヨーロッパの文明国で重量物（滑車などで所定の位置に据える巨大な円柱、建築ブロック、石など）を移動して持ち上げるのに使用する装置の殆どに精通していました。（彼らは）...一般的な製造工程の大部分に精通してだけでなく、陶器やガラス器の製造、金属の鋳造やエンボス加工、硬石の沈み彫りの技術、...冶金、染色、エナメル加工、象嵌細工、ガラス吹き製法などの極意にも精通していました」（ローリンソン著『古代東方世界の七大君主国』（*The Seven Great Monarchies of the Ancient Eastern World*）第6章 240-241頁）。

ローリンソンはまた、アッシリア人たちは「...征服した国の熟練工のやり方」を採り入れていたと述べています（前掲書 第9章 507頁）。

現代のドイツ人の大多数が古代アッシリア人たちの子孫であるという推論は、ヒステリックな非難ではありません。今日のドイツの人々が「戦争を得意とする」とか、彼らが新たなヒットラーが現れて（破滅的行動をする）レミングのように、怒号を上げながら行進し、ヨーロッパを血に染めて再び恐ろしい大虐殺に向かう準備をして、それを待ち望んでいると言っているのではありません。

神の言葉は、アッシリアについて次のように語っています：征服を自論む計画については、「しかし、彼はそうするつもりはなく、そのように考えることもしなかった」。しかし、同じ預言

なかで、言葉は続きます：「...彼の心にあるのは、多くの国を滅ぼし消し去ることであった」
(イザヤ書10:7)。

現在のドイツ人は、再統一したドイツが将来のヨーロッパ合衆国の先頭に立ってアメリカ合衆国を征服する事を夢にも思っていないでしょう。しかし、多くのドイツ人が理解するように、現在の世界情勢がヨーロッパ史においてもアメリカ史においても最終章ではありません。将来の事は突然私たちに訪れるでしょう。

現代の各国の身元を聖書の言葉で理解すれば、これらの国々に将来起こることについての聖書の預言を理解することは比較的に容易なことです。

アメリカの誇りは砕けたのでしょうか？

神は、わたしたちの国民の意志の力が衰え、私たちの力に対する誇りが砕ける時が来ると預言されています！注目して下さい：「わたしは断固としてあなたたちを攻める。それゆえ、あなたたちは敵に滅ぼされ、あなたたちを憎む者に支配され、追撃する者もないのに逃げ去ることになる。このような目に遭ってもまだ、わたしの言葉を聞かないならば、あなたたちの罪に七倍の罪を加えて懲らしめる。わたしは、あなたたちの誇りとする力を砕き、...」(レビ記26:17-19)。

この預言の成就是、既に始まっているのです！

わたしたちは、何故わたしたちが存在しているのか知りません。アメリカは大義を持っています。わたしたちがそれに向かって団結して全身する偉大な目標が存在しません。わたしたちを一つにする大きな結合力、わたしたちがそれに向かって努力する共通の献身的精神、高遠な目的が存在しません。

第二次世界大戦では、抑圧的な独裁政権を打ち倒し、狂人たちが世界を支配しようとする企てを決定的に終わらせるという目標を持っていました。わたしたちの目標は、「世界を民主主義のために安全にする」だけでなく「すべての戦争を終わらせるために」戦争をするということでした。

わたしたちは戦争に勝利しました — しかし、平和を無くしました。

アメリカの誇りが砕かれる状況が段階的に発生しました！

冷戦、ベルリンの壁、軍拡競争、朝鮮、ゲリー・パワーズと U-2 (偵察機) 撃墜事件 (1960 年)、
プエブロ事件 (1968 年)、ベトナム戦争 (1960 - 75 年)、ウォーターゲート事件 (1972 - 74 年)、
イランでの人質の危機 (1980 - 81 年)、ニカラグア事件 (1986 年)、「コントラ」事件 (1986
年) の聴聞会 — こうした事がすべて、その役割を果たしました。

イランから人質が帰国した後、国民の注目は、マスメディアによって何十万ものベトナム
帰還兵の苦しい体験に向けられました。歴史の中で最も評判の悪い戦争から悲しい帰国をして
無関心な大衆に直面した帰還兵たちの心の傷は、各地の復員軍人病院に入院している患者の
肉体と同じように残酷なものだったことでしょう。

勲章で飾り、無力な麻痺患者として生涯を車椅子に委ねた復員軍人たちは、彼らが理解できな
い政府の政策に反対する唯一で最後の反抗として軽々しく彼らの勲章を返還することはして
いません。

わたしたちの愛国心が何処に行ってしまったのでしょうか？ 何かが、わたしたちの愛国心を殺
してしまったのでしょうか？ 徐々に死に絶えてしまったのでしょうか？ 愛国心とは、要するに、
母国に対する深い誇りに満ちた愛、恐ろしい代償を払った何十万人もの尊い犠牲によって与え
られた自由に対する心からの感謝の念の事です。愛国心とは、国を愛する心です。しかし、絆
の固い家族の愛と同じように、完全に国を愛するアメリカ人は、国内の風潮に大いに怒
りを覚えることもあるのです。子供を深く愛する両親は、子供が自分自身を傷つけることが分
かっている判断をしているのを目撃した時には大いに怒るものです。

愛国心は盲目的に国旗を振って誇示するものではありません。家族の苦境を旗で覆い隠して認
めることを拒否するものではありません。また、深い家族の病に努めて無知でいようとする
盲目的な決断でもありません。

ほとんどのアメリカ人が、自己犠牲の精神を忘れています。

私たちは、病んでいるのです。私たちの最大の病は、私たち自身の道徳的・精神的な貧しさを頑なに認めようとしないことです。私たちの多くの病を診断することは、増大する狂信的な愛国者たちから冷笑を招くことにもなります。彼らの常套手段は、「アメリカにとって何が正しいのか、話し合おうじゃないか」と言った大企業・商工会議所的な態度です。

結構じゃないですか。診断すれば良いでしょう。私たちは、世界史の中で最も偉大な単一の強国です。私たちは、技術開発や科学的偉業において目もくらむような高みに達しています。アメリカ人の足跡が、月面に点々と走っています。私たちの言語、文化、製品、産物が、地球を取り巻いています。私たちは、この世の大地の中でも最高に素晴らしい豊かな土地で祝福されています。私たちの生活水準は、過去の空想科学小説が想像もしなかった豊かさの高所に達しています。

しかし、私たちは自分たちの豊かさを何処で手に入れたのでしょうか？

アブラハム・リンカンに答えてもらいましょう：

「私たちは、天から最高の恵みを与えられています。私たちは、何年にもわたり、平和と繁栄の中で守られてきました。私たちは、人口、富、力において、他国が経験したことの無い成長を遂げました。しかし、私たちは神を忘れています。私たちは、私たちが平和の中で守り、その数を増やし、私たち豊かさに強くされた慈悲深い御手のことを忘れています。そして、私たちは、偽りの心の中で、こうした祝福はすべて私たち自身の何か優れた英知や美德によってもたらされたものであると、自惚れています。…」（大統領声明、1863年4月）。

これらの言葉は今日、今まで以上に真実です！

この有名な大統領は、私たちの素晴らしい豊かさが創造主である神によって直接私たちに与えられたものであることを認めています。これは、アブラハムの恭順に拠るものなのです！

私たち合衆国市民の素晴らしい土地、私たちの鉱物資源、私たちの森林、どこまでも広がる

私たちの牧草地や農地、私たちの海岸線、私たちの戦略的な海門、私たちの恵まれた気候 — これらすべては、神によって私たちに与えられたのです — 今の世代の私たちは、このことを忘れていません。

私たちに起こっている事を理解するには、1950年そして朝鮮について考える必要があります。私たちは、朝鮮で敗れました。その時から、私たちは、ゲリー・パワーズ事件、ピッグズ湾（キューバ南部の小湾；1961年4月米国に支援された反カストロ軍が侵攻に失敗）、ハンガリー革命（1956年）、プエブロ事件、長年続いたベルリンの壁、無益なベトナム戦争が招いた10年に及ぶ国外での憎悪および国内での熱狂的な反戦活動、イランでの人質事件、等々を経験してきました。

私たちは、8年間も、国の最高の行政府の恥知らずの露骨な偽善、道徳的な退廃を経験してきました。

アブラハム・リンカン大統領が言ったように、私たちは、私たちの自由を私たちに与えて下さった神を忘れています！私たちは、かつて地上を歩いた人々の誰よりも祝福され豊かにされた創造主を捨てたのです。

私たちの一般信徒たちは、貪欲な喜びをもって物質主義の中に飛び込んでしまいました。そして、私たちの聖職者たちは、神の十戒を破ることを「新たな道徳」と名付けて、物質主義に飛び込んだ彼らに祝福を与えました。

神は、私たちに語っておられます：「...このような目に遭ってもまだ、わたしの言葉を聞かないならば、あなたたちの罪に七倍の罰を加えて懲らしめる。

「わたしは、あなたたちの誇りとする力を砕く...」（レビ記26:18-19）。

私たちの誇りは砕かれました。私たちは、十戒を守っていません。良識をもってこの事を否定できるでしょうか？

「^{てん てつ}天を鉄のようにし、^{ち おうどう}地を黄銅のようにする。あなたたちの^{ちから なん やく た}力は何の役にも立たない…」（レビ記26:19-20）。

^{わたし}私たちは、^{わたし}私たちの^{ちから ろうひ}力を浪費してきました — ^{なん}何と^{ちから ろうひ}力を浪費してきたことでしょうか。^{わたし}私たちは、^{わたし}私たちのエネルギー、^{わたし}私たちの^{ぼうだい とみ}膨大な富、^{わたし}私たちの^{ちからづよいわかもの}力強い若者たちを浪費してきました — ^{わたし}私たちは、^{けたはず}桁外れなくらい^{ぼうだい ろうひ}莫大に浪費してきました。

そして、すべてが^{やく た}役に立たなかったのです。

^{わたし}私たちは、^{わたし}私たちの^{かてい かぞく}家庭や家族、^{わたし}私たちの^{のうじょう のうさんぶつ}農場や農産物、^{わたし}私たちの^{こうじょう せいひん ろうひ}工場や製品を浪費してきました。

すべて^{とろう}徒労でした。

^{なに}何か^{おそ}恐ろしいことがアメリカに起こったのです。^{くだ}碎かれているのは、^{けんぜん}健全で^{かつりよく}活力のある^{こくみん}国民の^{こんぽんげんり}根本原理です。アメリカを^{いだい}偉大にしたものは何か、という^{こと}事を^{にんしき}認識している^{しどうしゃ}指導者もいない^{わけ}訳ではありません。

はんえい ふはい 繁栄と腐敗

アイゼンハワー^{だいてりよう}大統領は 1960年1月7日、^{ねん がつなのか}年頭教書の中で次のように述べています：「アメリカは、^{よわごし}弱腰や^{ほうじゆう}放縦によって^{いだい}偉大になったのではありません。アメリカの^{きせきてき}奇跡的な^{しんぽ}進歩や^{ぎようせき}業績は、それよりも^{はる}遥かに^か価値のある^た他の^{ししつ}資質によって^{たつせい}達成されているのです。即ち、私たちの^{すなわ}宗教^{わたし}観と^{しゅうきよう}調和した^{かん}原則や^{ちようわ}方法の^{げんそく}固守、^{ほうほう}勤勉における^{こしゆ}満足感、^{きんべん}価値ある^{まんぞくかん}目的のために^か犠牲を^{もくてき}払う^{ぎせい}覚悟、^{はら}母国の^{かくご}進歩に対する^{ぼこく}挑戦に^{しんぽ}立ち向かう^{たい}勇氣、^{ちようせん}国益になる^た真の^む道を見^{ゆうき}分ける^{こくえき}知的な^{しん}誠実さと^{みち}能力^{みわ} — こうした^{ちてき}資質によって^{せいじつ}達成されているのです」。

今にして思えば預言的であったと思われる見事なスピーチが行われる僅か数日前に、エコノミストのロジャー・バブソン（1875 - 1967）は、こう述べています：「国家の試金石は、物質的・知的・精神的な国民の成長です。お金や、いわゆる「経済的な繁栄」は重要ではありません…。

「バビロニア、ペルシア、ギリシャ、ローマ、スペイン、フランスはすべて、世界一豊かな国になった経験があります。彼らのいわゆる繁栄は、彼らを救うのではなく、彼らを破滅させました。

「我が国は現在、最も豊かであると評価されています。しかし、二流国家になって、凋落することは簡単なことです。お金は、私たちを救ってはくれません。農産物や畜産物は、私たちを救ってはくれません。株式市場や銀行は、私たちを救ってはくれません。フォートノックス（米国連邦金塊貯蔵所）にある私たちの金は既に減少しています。私たち国民の願望を変える健全な精神的復興のみが、私たちを救ってくれるでしょう。私たちは、社会に貢献し、身の安全よりも精神的な力を求め、利益よりも人格を重視するという願いに満たされることが必要です。私たちの父祖がそのために戦い血を流した民主主義でさえ、私たちの破滅につながる可能性もあるのです」。

これらの預言的な声明に先立つ僅か2週間前にも、もう一人の有名なアメリカ人で歴史家のジョージ・ケナン（1904 - 2005）は、ワシントンで聴衆の前にして次のように述べています：「皆様が、私に — 歴史家としての私に — この国が今日置かれている状況 — 高度な国家の目的意識もなく、圧倒的に個人的な快楽を重視し、公共奉仕の精神が欠如し、消費財が氾濫し、無秩序な交通システムを持ち、主要産業が悲しむべき中断を伴うことなく機能し続けるのに必要な社会規律が不十分な状況 — にある国が、長い目で見て、ソビエト連邦のような目的意識を持ち真剣で規律のある社会と競争して勝ち目があるかと尋ねられるならば、私は、答えは「ノー」だと言わなければなりません」。

1960年代の初めに語られたこの言葉は、今では預言的であると思われます。

英国とアメリカの道徳的・精神的な退廃

1960年代の初頭から英国とアメリカの両国は、道徳的・精神的な退廃に向かって急降下を始めました。私たちの「文化」は、ますます快楽主義、物質主義、更には虚無主義にまで向かって漂い始めました。私たちは、戦時の確固たる愛国心を捨てて、自己満足と言う考え方を受け入れました。

私たちの社会のあらゆる局面が、私たちの道徳的・精神的退廃を反映しています。

1930年代、40年代、50年代の30年間と、60年代から20世紀の終わりにかけての数十年間との信じられないくらいの差異を考えてください。20世紀前半の当時、『風と共に去りぬ』は、クラーク・ゲーブル（1901 - 60）の不評を買った「ダァム」（くそつたれ）という大胆な俗語の使用のせいで、ボストンは上映禁止になっています。今日、猥褻な言葉や冒流的な言葉を下水道のような口から発する「ラップスターたち」の音楽を聴くために、何百万人もの人々が劇場に群れをなして出かけていきます。腰を旋回させ、どんよりとした目つきで、つばを飛び散らせながら金切り声をあげ、お巡りを殺せとか、母親をレイプしろとか叫んでいます。

こうした「スターたち」（淡やつば、嘔吐に対する信じがたい呼称）は、何百万ドルも儲けて、何百万人もの「ファン」の熱狂的な崇拜を獲得し、ハリウッドの無数の受賞セレモニー（アワードショー）で最高の「賞」を獲得しています。

こうしたことはすべてビートルズやエルビスと共に始まりました。しかし、彼らの時代には年長世代に常軌を逸したように思えた事も、振り返って見れば、穏健なものだったと思われます。

ビッグバンド（オーケストラの編成をもつジャズ[ダンス]バンド；1930年代から、50年代にかけて流行）および「スイング」（1930年代中期から1940年代中期に流行したジャズ音楽）から「ロックンロール」や「ヘビーメタル（ロック）」に至るドラマチックな変化の概略を見れ

ば、悪魔崇拝や死に神の首の世界に突入していった事が十分ご理解いただけるでしょう。

セックス／サディズム／暴力を代表する一つの怪物、空虚な「メロドラマ」などのテレビ番組が、道徳的・精神的なトボガンの急降下にこの上なく貢献しています。英国は、道徳的な防壁を大急ぎで取り壊し、1960年代には、オールヌードのテレビ放送を許可しました。アメリカも、義理堅く追随しました。やがて、映画界の大御所たちは、彼らが提供している果てしない洪水の如き多数の退廃映画に対する警告的な「格付け」（児童・未成年者の映画視聴のための目安）が必要であると確信するようになりました。そこで「G」、「PG」、「R」などの等級が作られました。一方、「X」（未成年者お断り）は、昔からポン引き、売春婦、麻薬密売人、ゲイたちに占領されている地域社会の中の崩壊地区にある低俗な映画館やドライブインで相変わらず使用されていました。

今日では、XやXXX（本格ポルノ映画）は、アメリカや英国の居間に進出しています。

今や、ソドミーからサドマゾヒズムまでの倒錯した性行為の最悪の描写が、宇宙から電波で無数の居間に送信され、ファミコンで10歳から12歳くらいの子供でも見ることができるのです。やりたい放題です。快楽主義の時代なのです。

どこのスーパーマーケットに行っても、マガジンラック（雑誌陳列棚）だけでなくレジの近くにも様々な雑誌類が置かれていて、表紙が見えるようになっています。その殆どすべてが、セックス、セックス、またセックスです。誰が誰と離婚したとか、誰が不倫をして誰の子供を身ごもっているとか、誰が「隠していた事を認めて」自分（彼または彼女）がゲイであることを公表したとか、或いは、最新の殺人事件のことが、妻への暴力、薬物依存、少年への男色、等々の事ばかりです。勿論、これらはすべて、劇場やテレビで崇拝されている「スターたち」について書かれていることです。

神は言われています：「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。あなた方の行いを正しな

さい。そうすれば、わたしは、あなた方をこの地に住ませる。

「偽りの言葉を信じていながら、主の神殿、主の神殿、主の神殿と言っ**て**はいけない[「私たちは神の民、これは神の国」と言っています]。

「真に律法を正し、互いに律法を守るならば、

「この地において、異国の民、父を失った人々、寡婦を苦しめず、また無実の人の血を流さず、異教の神々に従って災いを招くことをしなければ、

「そうすれば、わたしは、あなた方の祖先に与えたこの地において、あなた方とこしえに住ませる。

「しかし見よ、あなた方は、偽りの言葉を信じている。それはあなた方の利益にはならない[人工妊娠中絶や学校での礼拝からポルノに至るあらゆる事柄に関する最高裁判所の判決を見て下さい]。

「盗み、殺し、姦淫し、偽証し、バール神に香をたき、異教の神々に従いながら、

「わたしの名によって呼ばれるこの神殿に来てわたしの前に立ち、『これらのあらゆる忌むべきことをしても、私たちは救われています』と言うのか」（エレミヤ書7:3-10）。

今日、アメリカには、「ゲイ」（倒錯した男色・女色）教会があります！昔から最も格式ばった謹厳な宗派の中にも、ホモセクシュアルであることを公にしている牧師や祭司の聖職叙任を認めている宗派もあります。これだけではありません。公然と「ゲイ」だと認めている男性たちが、この世で最高の大聖堂の中にもいるのです。神の同性愛に対する態度については、創世記19章を読んで下さい。神は、「同性愛者」に反対する神の永遠の証言として、ミニチュアのゲヘナの火でソドムとゴモラを焼き滅ぼされたのです（ローマ人への手紙1:24-27を参照）。今日、アメリカのボーイスカウトのような団体や確固たる道徳律を持つ伝統主義の教師たちでさえ、アメリカの若者が同性愛者たちとキャンプ旅行に行くことを法的に強制しようとする動きに包囲されて悩んでいます！

我が国の若者たちは、若者らしい天真爛漫さを奪われているのです。反対に、彼らは、政府の司法機関や立法機関から押し付けられたポルノ的くだらない話、不名誉な事態、暴飲暴食、嘔吐な

どの汚水だめの中に投げ込まれているのです。1990年代に行政府が示した信じられないような模範例のことは、今さら言うまでもないでしょう。

何十年にもわたり、間の抜けた笑いをするすべて左翼系の弁明者たちは、映画やテレビ、そして今やビデオゲームに見られる果てしない暴力とフリーセックスと、凶悪犯罪との間には結びつきは無いと主張してきました。

近年では、青少年たちが、さらに悪魔的と言える「ダンジョンズ・アンド・ドラゴンズ」（米国 TSR社製の役割演技ゲームの1つ）等のビデオゲームを繰り返し見て反復練習することで、自分たちの学校を攻撃し、どうすることも出来ない級友たちを殺したりしていることが分かっている。悲嘆の念を大げさに表現する弁明者たちは、悲しそうに訴えるような声で、結びつきは無いと主張します。

彼らは、「他の多数の青少年たちも同じゲームをしており、彼らは暴力的になっていません」という事を指摘するのが好きです。従って、抑制するものは何もあります。最新のビデオゲームは、3D（立体的）で、プレーをする若者には迫真的に見えます。弾丸が模造の肉体に飛び込み、手足がばらばらに飛び散り、身体の一部がピクピク動き、血がだらだら流れ出してくるのを彼らは見えるのです。

取り乱した親たちは、諸手を上げて、世間知らずの振りをして「私には、分かりません。息子が欲しいと思うものはすべて与えました！息子はいつも善良でした！」と言います。そうです、親たちは息子が望むものをすべて与えるのです。しかし、彼らは、息子にしつけは与えませんでした。また、善悪の区別を教えることもしていません！

青少年の犯罪や自殺について、彼らのアルコール中毒症や薬物依存症について、彼らの心の中に投げ込まれる嘔吐物やゴミのような汚物のすべてについて、少し考えて下さい。そして次に、女性解放運動、女性の「伝道者」、公務員の女性、無数の女性投票者について考えてください。

創造主の神が今日の私たちの — 英国およびアメリカの — 社会について、イザヤ書を通して語っておられることを読みながら、考えて下さい：「わたしの民については、子供たちが抑圧者になり、女性たちが支配する。わたしの民よ、あなた方を導く者は、あなた方を誤らせ、行くべき道を迷わせる」（イザヤ書3:12）。

そうです、流行を作り出し、お手本を示し、英国やアメリカから道徳的抑制の最後の痕跡を消し去るために働いているのは、裁判官から国会議員、聖職者から教師に至る「あなた方を導く人々」なのです。無数の人々がお祭り騒ぎを望んでいるのです。そして、神はそれを与えられるでしょう！

エゼキエルは、神の靈感を受けて次のように記しています：「鎖を用意しなさい、この国は残酷な犯罪に満ち、この町は暴力に満ちているからだ。

「それ故、わたしは、異教の民の中で最も悪い者どもを連れて来て、彼らに家々を占領させる。わたしはまた、有力者たちの虚飾を終わらせ、彼らの聖なる場所を汚させよう。

「破滅がやって来る。彼らは平和を求めるが、平和はない。

「災難の上に災難が訪れ、うわさがうわさを生み、彼らは預言者の声を求めるようになる。しかし、律法の教えは祭司に無く、英知は老人たちに無い。

「王は喪に服し、王子は孤独につつまれ、その地の民の手はおののく。わたしは、彼らの行いに従って彼らを処遇し、彼らの功罪に従って、彼らを裁く。その時、わたしが主であることを彼らは知ることになる」（エゼキエル書7:23-27）。

私たちがアメリカ国民がこれらの神の力強い告発を受けるに値することを認めるのに、過去50年間の私たちの社会の傾向を深く検討する必要はないでしょう。

私たちが私たちの土地に住む価値が無くなる時、神の慈悲と加護に値しなくなる時、生存するのに相応しくなくなる時、神は、自由奔放で神に反抗的で、律法に従わない快樂主義の私たちの社会を罰せられるでしょう！

英国やアメリカ（靈感を受けた指導力、明確な目標、一致した目的、大義に対する献身、集団的な犠牲の行為）が、世界で最も偉大な単一国家を、平和の大道に — 輝かしい新たな明日に — 人間の一番大切な夢を実現するユートピアの時代に - 向かうように駆り立てるにはもう遅すぎるという事ではありません。アメリカが自国の膨大な富に気づくのに遅すぎるという事ではありません。アメリカが自国の膨大な富に気づくのに遅すぎるという事ではありません。私たちの最も深い心の問題に対して、精神的・霊的な解答がもう手遅れである事ではありません。

しかし、皆様が考えておられるよりも遥かに手遅れに近いのです！

国家の偉大さの尺度は、その生産力でも、天然資源でも、国民総生産（GNP）でもありません。それは、その国民の人格の質です。

アメリカは、その人格を失いつつあります。

精神力が残されているのでしょうか？犠牲的な精神が残されているのでしょうか？大義に対する献身的な精神が残されているのでしょうか。

私たちは、悔い改める方法を忘れてしまったのでしょうか？

国家的な悔悛が求められています

政府の指導者たちが神の前に跪いて、心底から悔悛し、私たちの恐ろしい国家的な問題から私たちを救って下さいと神に大声で懇願する姿を想像できますか？

「ばかばかしい！」と人は言うかもしれません。

このような国家的な悔悛の姿は想像するのも「ばかばかしい」くらいに、私たち国民は、いかなる国家がもかつて経験したことのない最大の国家的な罰に向かって突き進んでいるのです。

エゼキエル書の衝撃的な預言に注目して下さい。

「イスラエル[現代の私たち英語圏の諸国民]とユダの家の罪は余りにも大きい、この地は、流血に満ち[アメリカは、犯罪において世界一です]、この都は不正に満ちている[私たちの都市は犯罪、不道徳、麻薬の常習、官能的な快楽の追及のアスファルト・ジャングルになっています]。人々は『主はこの地を見捨てられた。主は顧みられない』と言っている」（エゼキエル書9:9）。

これは正に、今日、無数の人々が言っていることではありませんか：「神は存在しない」、「神はどこかに行ってしまった」、「神は隠遁された」。

しかし、神は隠遁されたものではありません。神は、本当に存在しておられます。そして神は神の言葉 — 聖書 — の中で、絶えず律法に背き、今日の私たちの周囲に見られるような恐ろしい数々の問題をもたらす人々を罰すると語っておられます。私たちがどのような生き方をするのかと言う事は、神にとって重要な問題なのです！

神は、こう語っておられます：「わたしは...あなたの行いによってあなたを裁き、あなたの忌まわしいことすべて[私たちの国家的な犯罪]に対して償いをさせる。わたしの目は、あなたを容赦しない。わたしは、あなたを憐れむこともしない。わたしは、あなたの行いに対する償いをさせる」（エゼキエル書7:3-4）。

これは少々漠然としていますか — 少々古風な感じがしますか — 「旧約の中の地獄の責め苦」的な印象をうけますか？

判断を誤らないで下さい！神は、私たちの国家的および個人的な罪に対して — 私たちが
本当に悔い改めて、神に立ち返らなければ — 私たちを厳しく罰せられでしょう。

私たち自身の行い

今までのところ、神は、私たち国民をまだ直接には罰しておられません。神は、私たちが自殺
行為を始めるのに任せておられるだけです。神は、私たち自身の行いの必然的な成り行きに私
たちが苦しむのに任せておられるだけです。私たちは、神が与えて下さった地球を虐待してい
ます。人間が考案した機械装置で作物を生産するすることに一所懸命になりながら、農薬など
の化学薬品で河川を汚染し、土壌の栄養素を駄目になっています。

神は言われています：「あなたの犯した罪が、あなたを懲らしめ、あなたの墮落が、あなたを
責めている。…」（エレミヤ書2-19）；「イスラエルよ、あなたは自分自身を滅ぼした。しか
し、わたしの中にあなたの救いがある」（ホセア書13:9）。

私たちの創造主は、英国とアメリカにとって遅すぎる事はないと言われています。私たちは今
でも悔い改めることが出来るでしょう — そして神は、私たちを助けて下さるでしょう。

その条件に注目しましょう：

「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。あなた方の行いを正しなさい。そうすれば、わ
たしは、あなた方をこの地に住ませる。…真に行いを正し、互いに律法を守るならば、異国
の民[マイノリティー・グループの人々]、父を失った人々、寡婦を苦しめず、また無実の人の血
を流さず[今日のアメリカでは、残酷な殺人事件が珍しくありません]、異教の神々に従って災
いを招くことをしなければ、そうすれば、わたしは、あなた方の祖先に与えたこの地において、
あなた方をとこしえに住ませる」（エレミヤ書7:3-7）。

そうしなければ、私^{わたし}たち国民^{こくみん}が捕^とらわれの身^みとなり四方^{しほう}八方^{はつぱう}に散^ちり散^じりになるという事^{こと}が、エゼキエル書^{しよしやう}5章^{せつ}11-12節^{よげん}に預言^{よげん}されています。

神^{かみ}は、私^{わたし}たちにその意志^{いし}があるのなら、喜^{よろこ}んで助^{たす}けると言^いわれています。神^{かみ}は、悪人^{あくにん}の死^しを喜^{よろこ}んではおられないのです（エゼキエル書^{しよしやう}33:11を参照^{さんしやう}）。

いの 祈りと断食

この国^{くに}は、アブラハム・リンカン^{れい}の例^{れい}に倣^{なら}うことが出来^でるでしょうか？上^{じやうき}記^{いんよう}で引用^かした彼の^{かれ}大^{だい}統^{とう}領^{りやう}声^{せい}明^{めい}の続^{つづ}きを紹^{しょう}介^{かい}します：「...洗^{せん}礼^{れい}の無^ない成^{せい}功^{こう}に酔^よいしれて、私^{わたし}たちは、余^{あま}りにも自^じ信^{しん}過^か剰^{じやう}になり、贖^{あがな}いと神^{かみ}への感^{かん}謝^{しゃ}の必^{ひつ}要^{やう}性^{せい}を感じ^{かん}ていませ

ん[明^{あき}らかに、アブラハム・リンカンは神^{かみ}の恵^{めぐ}みの真^{しん}の意^い味^みを理^り解^{かい}しています]。余^{あま}りにも傲^{ごう}慢^{まん}になり、私^{わたし}たちを創^{そう}造^{ぞう}された神^{かみ}に祈^{いの}ることをしません。

「従^{したが}って怒^{いか}れる神^{かみ}の前^{まえ}で、謙^{けん}虚^{きよ}になっ、私^{わたし}たちの国^こ家^{くわ}的^{てき}な罪^{つみ}を告^{こく}白^{はく}し、慈^じ悲^ひと許^{ゆる}しを求^{もと}めて祈^{いの}る必^{ひつ}要^{やう}があります。

「そこで、上^{じやう}院^{いん}の要^{よう}望^{ぼう}に従^{したが}って、また上^{じやう}院^{いん}の見^{けん}解^{かい}に賛^{さん}同^{どう}して、私^{わたし}はこの声^{せい}明^{めい}により、1863年^{ねん}4月^{がつ}30日^{にち}木^{もく}曜^{よう}日^びを、国^こ家^{くわ}の謙^{けん}讓^{じやう}・断^{だん}食^{じき}・祈^{いの}りの日^{にち}として指^{して}定^{てい}します。...これら^{こと}の事^じをすべ

て誠^{せい}実^{じつ}に真^{しん}実^{じつ}をもつて行^{おこな}ってから、神^{しん}聖^{せい}な教^{おし}えが約^{やく}束^{そく}する希^き望^{ぼう}を持^もちましよう — 国^{こく}民^{みん}一^{いつ}体^{たい}となつた叫^{さけ}び声^{こゑ}が天^{てん}に届^{とど}き、私^{わたし}たちの国^こ家^{くわ}的^{てき}な罪^{つみ}の許^{ゆる}しと共^{とも}にその許^{ゆる}しに劣^{おと}らない祝^{しゆ}福^{ふく}が私^{わたし}たちに授^{さづ}けられ、今^{いま}や分^{ぶん}裂^{れつ}して苦^{くる}しむ私^{わたし}たちの祖^そ国^{こく}が元^{もと}の幸^{こう}福^{ふく}な平^{へい}和^わと統^{とう}一^{いつ}に復^ふ帰^きするとい

に 逃げ道があります

しかし、国家が頑なに現在の路線を継続し — 悔い改めない — としても、皆様には個人的な逃げ道があります。個人としての皆様は、悔い改めて、全能の神による近い将来の懲罰を逃れることができます。

そうです、皆様には — この現代においても — 注意を傾ける心をお持ちなら — 神を求め心をお持ちなら — 逃げ道があります。

エゼキエル書33章をお読み下さい。神は、神の見張り番の声に真に心を留める者は将来の危険な時代から保護されると語っておられます！詩篇91章の神の約束をお読み下さい。

預言の通り — 私たちの力に対する誇りは砕かれました。私たちは悔い改めなければ、私たちの国家が減び、私たちの都市が破壊され、私たち国民は現在気づいていない強力な敵によって捕らわれの身にされるでしょう。

ヤコブの苦悩の時

反論することのできない証拠によって、英国と合衆国がいわゆるイスラエルの「失われた10部族」の一部であることが決定的に証明されています！北欧および北西ヨーロッパの人々の大多数は、10部族のイスラエルの人々の残りで構成されています。

聖書の預言について学ぶ人々の大多数は、私たちの身元に完全に無知で、将来の筋書きについては、乱暴な推測をするしか仕方ありません。彼らは、自出度いことに、大試練に関するキリストご自身の数々の預言が第一に合衆国と英国に、次に北西ヨーロッパおよび現在のパレスチナにあって「イスラエル」と呼ばれるユダヤ国家に向けられていることを知りません。

大試練は、無数の原因 — 旱魃、飢饉、病気、犯罪、汚染、人口過剰、戦争、等々 — によってもたらされる恐ろしい国家災難の時代、英国や合衆国の軍勢力が想像を絶した災害から

わたし すすく ことが で き ない じ だい として びやうしや
私 たち を 救 う こと が 出 来 ない 時 代 と して 描 写 さ れ て い ま す ！

だ い に じ せ か い たい せん 第二 次 世 界 大 戦 で は、なん びやく まんにん 何 百 万 人 も の イ ス ラ エ ル の ひ と び と ひと び と 人 々 が 殺 さ れ ま し た。イ ス ラ エ ル の ひ と び と ひと び と 人 々 の
た す う こ っ か 多 数 の 国 家 が、て き せん り ょ う 敵 の 占 領、き ょ う せ い たい き ょ 強 制 退 去、き ょ う せ い り ょ う どう 強 制 労 働、そ う ぞ う ぜ っ 想像 を 絶 す る 窮 乏 に 晒 さ れ ま し た。ノ ル ウ
ェー、デ ン マー ク、オ ラ ン ダ、ベ ル ギー、ル ク セ ン ブ ル ク、フ ラ ン ス ー こ れ ら の 国 は す べ て、
こ だ い 古 代 の イ ス ラ エ ル が き げ ん ぜ ん 紀 元 前 700 年 の 昔 に あ し り あ 人 の じ ん し ん り ゃ く 侵 略 の 前 に 降 伏 し た よ う に、ナ チ の
ぐ ん たい 軍 隊 の 前 に 降 伏 し ま し た。フ ィ ン ラ ン ド で は、ロ シ ア と の 戦 争 で 血 を 流 し ま し た。英 国 で は、
1939 年 か ら 「ブ リ テ ン の 戦 い」(1940 年 秋 に 英 国 軍 が ド イ ツ 空 軍 を 迎 え 撃 っ た 一 連 の 大 空 中 戦)
が お 終 わ る ま で お そ ろ し い 損 害 を 被 り、人 員 や 装 備 を 失 い 続 け、経 済 的 に も 大 変 深 く 傷 つ き ま し た。
え い こ く 英 国 は、だ い に じ せ か い たい せん 第二 次 世 界 大 戦 の 結 果 か ら 決 し て 完 全 に 回 復 し ない か も し れ ま せ ン。こ の 大 戦 争 の 後、
え い こ く 英 国 は 下 降 線 を 迎 り 始 め た の で す。か つ て は 誇 り に 満 ち た 大 英 帝 国 は、分 解 し ま し た。そ し て、
え い こ く 英 国 は ヨー ロ ッ パ の な か 中 の 経 済 的 な 「病 人」と して 知 ら れ る よ う に な り、最 終 的 に は、経 済 的 な
ひ つ ょ う せ い 必 要 性 か ら ヨー ロ ッ パ 共 同 市 場 に 参 入 し ま し た。

え い れ ん ぽ う 英 連 邦 に 属 す る オーストラリア、ニ ュー ジー ラ ン ド、み な み 南 ア フ リ カ、カ ナ ダ は、に ほ ん 日 本 に よ る ダー
ウ イ ン の 爆 撃 と ニ ュー ギ ニ ア の い ち ぶ 一 部 の 占 領 を 除 き、占 領 も 攻 撃 も 経 験 し て い ま せ ン が、彼 ら の
なん まんにん 何 万 人 も 息 子 や 父 を 異 国 の 地 や 海 底 で 朽 ち 果 て さ せ て い ま す。

が っ し ゅ う こ く 合 衆 国 に つ い て 言 え ば、1941 年 12 月 7 日 か ら 1946 年 12 月 31 日 ま で の 期 間 に、407,316 人 の 軍 人
が し ぼ う 死 亡 し、670,846 人 が 非 致 死 的 な 負 傷 を 被 っ て い ま す。経 済 的 な 損 失 は、3,600 億 ド ル に 達 し
ま し た。

だ い に じ せ か い たい せん 第二 次 世 界 大 戦 の 末 期 に は、が っ し ゅ う こ く 合 衆 国 は そ の 絶 頂 期 に あ り ま し た。り く ぐ ん 陸 軍 に、8,266,373 人、かい ぐ ん 海 軍 に
3,380,817 人、く う ぐ ん 空 軍 に、2,372,292 人 が 在 籍 し、り く かい ぐ ん 陸 海 空 を 合 わ せ る と 合 計 で 一 千 四 百 一 万
き ゅ う せ ん よ ん ひ ゃ く は ち じ ゅ う に ん 九 千 四 百 八 十 二 人 に 達 し て い ま す ！

し か し、1946 年 に な る 頃 に は 空 軍 は 僅 か に、455,515 人 に、ま た 1950 年 に な る 頃 に は 海 軍 は

381,538人、陸軍は 67,784人に縮小しています。

神は、昔、私たちが神の律法を守らなければ私たちの誇りとする力を打ち砕くと言われている(レビ記26:19を参照)。

今日、無数のアメリカ人たちがアメリカは「世界で唯一残っている超大国！」であるという作り話を鵜呑みにしています。彼らは、他の多数の国家、取り分けフランス、中国、パキスタン、イスラエルが原子爆弾を所有していることを忘れていますが、核兵器を所有しているか、または研究開発に取り組んでいる疑いのある国としては、ドイツ、ブラジル、イラク、北朝鮮、南アフリカ、イランなどがあります。

多数の国家が、最新の大陸間弾道弾(ICBM)や中距離弾道弾(IRBM)を所有しています。ロシアは依然として、何千ものミサイルや核弾頭に加えて、核武装した潜水艦を所有しています。ウクライナは、ソビエト社会主義共和国連邦(USSR)が解体した途端に、核兵器保有国になりました。中国はイージス艦タイプの新型巡洋艦やミサイル搭載潜水艦をロシアから購入しています。

多数の国家 — 取り分け、英国、フランス、中国、日本 — が衛星打ち上げ能力を備えています。何十もの国家が毎日、原子炉を運転していますが、その副産物は、核爆弾の製造に使用される原料になっています。

多数の国家が致死的な化学・生物兵器を保有しています。

今日、英国も合衆国も共に、更なる恐ろしいテロ攻撃に対して神経を尖らせています。1980年代のレバノンにおける海兵隊兵舎の爆弾事件、90年代のサウジアラビアにおける合衆国軍兵舎の爆破事件、そして、更に強烈な2000年の米海軍駆逐艦コールの爆破攻撃で、合衆国は、イスラム諸国の激しい憎悪に気づくことになります。私たちがイスラエルの良き助言者・擁護者

になったことから、イランやイラクのような国は他の多数のイスラム諸国と一緒に、私
たちを「大魔王」と名付けました。

真実は、私たちは「世界で唯一残された超大国」ではないということです。ヨーロッパには、私
が45年も前に予想した大きな勢力が形成されつつあります。この事は、ヨーロッパの建設者た
ちに衝撃を与えることでしょう！これはやがて、すべてのヨーロッパ陸軍・海軍を持つ完全に
核武装した「ヨーロッパ合衆国」になるでしょう。そして、やがて、中東を占領するよう
になるでしょう！

聖書の預言 — 警告！

聖書の三分の一は預言です。イエスキリストは、史上最大の預言者です。イエスの有名な「オ
ープ山の預言」は、最後の時 — 大きな試練の時、主の日、すべての国を統治するキリス
トの再臨 — に関するすべての預言のかなめ石です！

現代の合衆国およびヨーロッパ諸国の身元に関する知識で武装した皆様は、ついに、将来の
出来事についての全体像を理解されることになるでしょう。

これから見るように、預言されている大きな試練は、主としてヤコブに訪れることになって
います！それは、「ヤコブの苦しみの時」なのです。つまり、これは、英国、カナダ、オース
トラリア、南アフリカ、合衆国を初めとするイスラエル10部族の国々にとって大きな精神的
衝撃の時を意味します。思い起こして下さい。エフライムおよびマナセは、イスラエル
の名前の継承者でした！死の床にあるヤコブ（イスラエル）は言いました：「私の名が彼ら
によって後世に伝えられますように！」（創世記48:16を参照）。

ここでキリストご自身の預言に注目しましょう。

キリストの預言

失われた10部の身元について知識が無くても、聖書の預言を部分的に理解することはできません。例えば、黙示録13/17/18章およびキリストのオリーブ山の預言と合わせて、ダニエル書2/4/7章を注意深く学習すると、近未来に起こる世界の出来事についての概観が得られます。但し、獣、獣の像、偽りの預言者の身元、および反キリストについて、その真の意味を理解して武装している必要があります！それでも、預言の最も重要な鍵、つまり合衆国と英国の身元について理解していなければ、これらの預言がどのように合衆国に影響するのかということについては、依然として無知に留まることになります！

有名なネブカドネザル2世の像によって描かれている世界を支配する諸帝国の身元に関する証拠(ダニエル書2章を参照)は、余りにも多数でいちいち言及することは出来ません。バビロン(黄金の頭、ベルシア(銀の胸)、ギリシャマケドニア(真鍮の腹部と大腿部)、およびローマ(泥の粘土と鉄の足と足指)の各王国の身元を正しく識別している史料については、大抵の聖書の注釈に十分な言及があります。ダニエルが、同じ体制(ローマ帝国)の幾世紀にもわたる継続的な復興も含め、これらの諸王国すべての栄枯盛衰を見事に予言できたということは、靈感に満ちた聖書、即ち神の言葉の正確さを証明する偉大な証拠の1つです。

今日、無数の素人神学者たちが、「反キリストリスト」(獣)について思いを巡らし、奇妙な理論に基づいて信じられないような空想的な結論に飛びついています。反キリストが合衆国だと考える人もいます。それはカトリック教会だと主張する人もいます。それは巨大な陰謀に関与するユダヤ人の資金業者のグループだと考える人もいます。キリストが預言しておられるように、様々な意見や理論が流布しています。「わたしの名を名乗る者が大勢現れ、、『わたしがキリストだ』と言って「必ずしも、彼らがキリストだとは言わないでしょう。しかし、彼はキリスト！、『説教するキリスト！』だと言うでしょう」、多くの人を欺くだろう！」(マタイ書24:5; マルコ書13:6)。

しかし、獣の本性は決して変わっていません。古代の諸王国の頂点に立ったのはローマです。

歴史を通して何回も復興していることが、記録に残されています。第二次世界大戦中、アドルフ・ヒトラーとベニト・ムッソリーニは、オットー大帝(912-973)やハプスブルク家の時代にヨーロッパ中心部にいた同じ諸民族を一つにまとめた中央ヨーロッパ同盟を「神聖ローマ帝国」と宣言していますが、これは、「神聖ローマ帝国」(962-1806)の弱々しい復興です。

黙示録13章に述べられている二番目の獣は、「子羊のよう」に装っています。つまりキリストに似た生き物として変装しているのですが、「竜のように語った」悪魔サタンのような生き物だったのです！

ブリンガー著『コンパニオン・バイブル』(Companion Bible)には、キリストのオリーブ山の預言と黙示録の7つの封印との比較があります。「黙示録の4人の騎手」はマタイ書24章の中でキリストが預言されている漸進的に悪化していく人間の状態を描いているという事は、決定的に証明することが出来ます。白馬は、偽りのキリスト、偽りの預言者を暗示しています。奇跡を行う力を持つであろう最後の「偽りの預言者」(II テサロニケ人やへの手紙)が「自分は神であると言って神殿」にすわり、無数の人々が「獣とその像を拝む」ようにさせるのです。言い換えると、第一の封印の白馬は、大きな試練の直前に「獣の像」(バビロニアの秘教)の先頭に立つ偽りの預言者や反キリストリストの正体が明らかにされることを意味しています。

赤い馬は、キリストのオリーブ山の預言の中の「戦争と戦争のうわさ」と同じ意味を持っています。ブリンガーは、この2つの預言が意味することを正確に解説しています。つまり、灰色の馬は飢饉を、黒い馬は死を意味しているのです。

キリストは、ご自分の時代を超えて私たちの時代を見ておられました。未来、即ち私たちが生きている時代とその先の時代について預言しておられます！失われたイスラエルの10部族の身元を知ることがなくても、私たちは、すべての人間が情欲を追求し未来に横たわる破局のことを無視する「ノアの時代」のように、聖書に預言されている「最後の時」に生きていることを確信することができます。

違いは、イスラエルの身元を理解している人々は彼らの同胞がどのようなのか理解できるという事です。彼らは、間もなく訪れる恐ろしい国家的な罰を理解しています。そして、彼らは、手遅れになる前に、神の民に強力な証言と警告を与えるという任務に従事する身支度をしています！

そうです。無数の人々が、預言にある「大きな試練！」のことは知っています。しかし、この無数の人々は、この試練が最初にイスラエルの家の人々に降りかかると預言されている事を理解していません！

証拠を見ることにしましょう！

キリストは言われています：「そのときには、世界が始まってから今に至るで経験したことがなく、そして今後決してないほどの大きな試練〔恐ろしい苦難の時〕が訪れるからです」(マタイ書24:21)。歴史に先例の無い完全に無比の恐怖が訪れるでしょう！つまり、大きな試練とは、たった一度だけ起きる人類の苦しみの時なのです！このような時は二度とありません。たった一度だけです！そのことの意味に注意して下さい！。

聖書の中で最も長い預言であるダニエル書2章の最後において、大天使ガブリエルはダニエルにこのように言っています：「その時、あなたの国〔イスラエル！〕の人々を守る大いなる君主であるミカエルが立ち上がる。国が始まって以来、その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る。しかし、その時、あなたの民で、あの書に記されている者はすべて救われる」(2:1)。

明らかに、この大きな苦難の時は、キリストが預言されている大きな試練と同じです。このような時は、二度も有り得ないのです。1つの大きな苦難の時に帳消しにするような他の大きな苦難の時というのは無いのです。史上最大の苦難の時と言うのは、大きな試練である唯一の時を意味しています。

ここで、注目^{ちゅうもく}しましょう。

「イスラエルの神^{かみ しゅ}、主^{しゅ}はこう言^いわれる。わたしがあなたに語^{かた}る言^{こと}葉^はをひとつ残^{のこ}らず書^{しよ}物^{もつ}に書^かき記^{しる}しなさい。

「見^みよ、囚^{とら}われの身^みとなっているわたしの民^{たみ}、イスラエルとユダ^{ユダ}を再^{ふた}び連^つれて来^くる〔捕^{とら}われの民^{たみ}を連^つれ戻^{もど}す、彼^{かれ}らを捕^{とら}われの身^みから元^{もと}に戻^{もど}す〕、と主^{しゅ}は言^いわれる。

ふたつの異なるグループ^{ふた}の人々^{ひとびと}の事^{こと}に注意^{ちゅうい}して下さい！イスラエルとは、10部族^{ぶぞく}の「イスラエルの家^{いえ}」の事^{こと}で、「ユダ」はユダヤ人^{じん}の事^{こと}を意味^い味^みしています！

しかし、覚^{おぼ}えておられるでしょう。イスラエルは、歴^れ史^{きし}から消^きえたのです！彼^{かれ}らは、黒^こ海^{かい}とカスピ海^{かい}に挟^{はさ}まれた囚^{とら}われの地^ちから決^{けつ}して連^つれ戻^{もど}されることはなく、ヨーロッパ中^{じゅう}を彷徨^{さまよ}いながら何^{なん}世^{せい}紀^きも過^すぎていく過^か程^{てい}で歴^れ史^{きし}から消^きえたのです。今日^{こんにち}、ユダヤ人^{じん}たちは彼^{かれ}ら自^じ身^{しん}の国^こ家^かである「イスラエル」を持^もっています。これから見^みるように、考^{かんが}えるだけでも恐^{おそ}ろしいのですが、将^{しょう}来^{らい}のユダヤ人^{じん}の捕^ほ囚^{しゅう}が皆^{みな}様^{さま}の聖^{せい}書^{しょ}には預^よ言^{げん}されているのです！

ここでまたエレミヤ書^{しよ}に戻^{もど}りましょう。

「...わたしは、彼^{かれ}らの祖^そ先^{せん}に与^{あた}えた土^と地^ちに彼^{かれ}らが帰^{かえ}るようにさせる。そして、その土^と地^ちを彼^{かれ}らに所^{しよ}有^{ゆう}させる。

「次^{つぎ}の言^{こと}葉^はは、イスラエルとユダについ^{しゅ}て、主^{かた}が語^{こと}られた事^{こと}である。

「主^{しゅ}はこう言^いわれる。戦^{せん}慄^{りつ}の聲^{こえ}を我^{われ}々^{われ}は聞^きいた。恐^{きよう}怖^ふの聲^{こえ}で、安^{やす}らかな聲^{こえ}ではない。

「尋^{たず}ねてみなさい。男^{おとこ}の子^こを産^うめるかどうか？なぜ、男^{おとこ}がみな、産^{さん}婦^ぶのように、腰^{こし}に手^てを当^あてているのか。なぜ、みな顔^{かお}が青^{あお}くなっているのか？」。ここで、エレミヤは、人^{ひと}々^{びと}の目^めの当^あたりにした信^{しん}じられないような恐^{きよう}怖^ふのせい^{せい}で非^ひ常^{じょう}な衝^{しょう}撃^{げき}を受^うけて恐^{きよう}怖^ふに打^うちひしがれ、苦^{くる}しみ^の余^{あま}り身^{しん}体^{たい}を折^おり曲^まげている姿^{すがた}をありありと思^{おも}い浮^うかべています！

「ああ、その日は万事を決定する重大な日。そのような日はほかにない。...」。ここでよく注意して下さい！またしても、私たちは、同じ時について読んでいます。即ち、キリストが預言された「大きな試練」の時、ダニエルが記しているのと同じ時、完全に前代未聞非常に大きな苦難の時について読んでいます！では、誰の上に、その大きな国家的な試練の時が訪れるのでしょうか？

「それは、ヤコブの苦難の時である...」(エレミヤ書30:2-7)。

ああ！ヤコブの苦難の時！では、誰がヤコブだったのでしょうか？彼の名前は、イスラエルに変わっています！彼は、死の床に横たわっていた時、私たちが読んだように、両手を交差させて、右手を兄のマナセではなく、弟のエフライムの頭の上に、左手をマナセの頭の上において彼らを祝福して言いました：「私の名が彼らによって後世に伝えられますように！」(創世記48:16を参照)。イスラエルの全部族の中で、エフライム(英国)とマナセ(合衆国)だけが「ヤコブ」、即ち「イスラエルの家」と呼ばれる権利を有するのです！

従って、キリストが語られている大きな試練、この世に対するサタンの怒りである恐ろしい時は、主として英国と合衆国の人々に訪れ、そして付随的に、失われたイスラエルの10部族の残りの人々に訪れるのです。ここで、この注目すべきエレミヤ書30章の残りを読むことにします。

「...しかし、ヤコブはそこから救い出される[つまり、ヤコブの名を継承した合衆国と英国は、それを経験しなければならないのですが、完全に滅びるのではなく、そこから救い「出される」ことになるのです]。その日はこうなる、と万軍の主は言われる。あなたの首からくびきを碎き、あなたの束縛を解き放つ。異邦人たちが再びヤコブを奴隷にすることはない。...」(エレミヤ書30:7-8)。

ヤコブ(即ち、イスラエル)の家に対する差し迫った国家的な捕囚に関するこの預言の時間設定

は何時^{いつ}になっているのでしょうか？「彼^{かれ}らは、神^{かみ}である主^{しゅ}と、彼^{かれ}らの王^{おう}ダビデ^{つか}に仕えることになる。わたしは、ダビデ^{かれ}を彼^{かれ}らの上^{うえ}に蘇^{よみが}えらせる」(エレミヤ書30:9)。

合衆国^{がっしゅうこく}と英国^{えいこく}は今日^{こんにち}、神^{かみ}に仕えているのでしょうか？パレスチナにある「イスラエル」の国^{くに}は、「神^{かみ}に仕えている」のでしょうか？答えはノーです！この預言^{よげん}の時間設定^{じかんせつてい}は、マタイ書24章、黙示録6章、ダニエル書12章のそれと同じです。それはキリスト再臨^{さいりん}の直前^{ちよくぜん}なのです — 復活^{ふっかつ}の直前^{ちよくぜん}なのです。その時^{とき}、神^{かみ}は、神^{かみ}が正しいとされる聖人^{せいじん}たちやイスラエルの父祖^{ふそ}たちすべてと共に、ダビデ^{ちよくぜん}を復活^{ふっかつ}させ、キリスト^{むか}を迎えるようにさせます(1テサロニケ人^{ひと}への手紙^{てがみ}4:17)。その時^{とき}、キリストはこの世^よに戻^{もど}られて(黙示録1:7;使徒行伝1:11;黙示録19)、その日^ひに、エルサレムのオリーブ山^{さん}に立たれるのです(ゼカリヤ書14:4)。

ところで、誰^{だれ}のくびきが私^{わたし}たち諸国民^{しよこくみん}の上^{うえ}にかけられるのでしょうか？

けもの の じよせい 獣に乗った女性

ヨハネは、すごい遊女^{ゆうじょ}が多頭^{たとう}の獣^{けもの}に跨^{またが}っている姿^{すがた}を幻想^{げんそう}しています。キリストの預言^{よげん}は、ダニエル書^{しよ}や黙示録^{もくしろく}の預言^{よげん}と共に、この教会^{きょうかい}=国家制度^{こっかせいど}の本質^{ほんしつ}について明確^{めいかく}にしています。注目^{ちゅうもく}しましょう。

「さて、七^{なな}つの鉢^{はち}を持つ七人^もの天使^{しちにん}の一人^{てんし}が来^きて、私^{わたし}に話^{はな}してこう言^いいました。『ここへ来^きて下^{くだ}さい。大酒飲^{おおさけの}みの大淫婦^{だいいんふ}に対する裁^{さい}きを見せましょう。この世^よの王^{おう}たちは彼女^{かのじょ}と密通^{みつつう}をしました。この世^よの住民^{じゅうみん}たちは彼女^{かのじょ}との密通^{みつつう}に酔^よっています』。

「そして、天使^{てんし}は、霊^{れい}に満^みたされたわたしを荒れ野^あのつれで連れて行^いきました。わたしは、一人^{ひとり}の女性^{じよせい}が緋色^{ひいろ}の獣^{けもの}に乗^のっているのを見^みました。その獣^{けもの}は神^{かみ}をけがす名^なで満^みちており、七^{なな}つの頭^{あたま}と十本^{じゅうぽん}の角^{つの}を持^もっていました。

「この女性^{じよせい}は紫^{むらさきいろ}色^{いろ}と緋色^{ひいろ}の派手^{はで}な衣^{ころも}をまとい、黄金^{おうごん}と宝石^{ほうせき}と眞珠^{しんじゆ}で身^みを飾^{かざ}り、忌まわしい行^い為^{こうい}や密通^{みつつう}の汚^{けが}れで満^みちた黄金^{おうごん}の杯^{さかずき}を手に持^もっていました。

「彼女^{かのじょ}の額^{ひたい}には、『神秘^{しんぴ}、大バビロン^{だい}、この世^よの淫婦^{いんふ}たちと憎^{にく}むべきもの^{はは}の母^{はは}』という名^なまえ^{まえ}が記^{しる}されていました」(黙示録17:1-5)。

この女性は、大いなる偽りのユニバーサル教会のことで、彼女が「獣」に「乗っている」というのは、彼女が中央ヨーロッパの10カ国の連合体に強い影響力を持っていることを意味しています！彼女は、獣を支配しているのです！

間違いなく、この10カ国は、キリスト再臨の直前のこの世における人間による政治の最後の日々が存在しているでしょう！注目して下さい：「あなたが見た十本の角は、十人の王たちで、彼らはまだ王国を授けられていないのですが、獣と共に一時間[預言では、ごく短時間の意味]、王としての権力[完全な独裁的、権力]を授かります。

「彼らはある考え[彼らの意見が完全に一致している1つの方針、1つの目的]を持っています。そして、彼らの、権力をその獣に与えるのです[彼らは、彼らの国家の財政、原料、産業、軍事力を一つにまとめて蓄えるのです]。

「彼らは子羊と闘います[彼らは、再臨されるキリストと戦おうとします] — この預言の時間設定を無視することはできません]そして、子羊は、彼らに打ち勝ちます。何故ならば、子羊は主の主、王の王だからです。また子羊と共にいる人々は召された者、選ばれた者、忠実な者だからです」（黙示録17:12-14）。

ここで、極めて重要な地政学的な事実を思い起こしていただく必要があります。合衆国と英国の起源について今まで読んできた事がすべて単なる想像に過ぎないと仮定して下さい。すべての歴史が歪んでおり、ダン族、或いはエフライムやマナセに関するすべて事実が本当は当てはまらないのだと仮定して下さい。

それから、思い起こして下さい！主としてエルサレムに関するイエスキリストのオリーブ山の預言を！この預言は、当時の世界で最も有名なスカイラインがすべて見えるオリーブ山で語られています。そこからは、キリストの時代の神殿が完全に見えていたのです。キリストの預言は、後のローマ皇帝ティトゥス（39-81）の軍隊が西暦70年にエルサレムを破壊した時には、ほんの前触れとして「象徴的に」成就されたに過ぎません。

しかし、文字通りのこの世における最終的な成^{せい}就^{じゅう}は、まだ将来^{しょうらい}のことです！

ここで、考^{かんが}えて見^みましょう！もしイスラエルがアラブ連^{れん}合^{ごう}軍^{ぐん}に攻^{こう}撃^{げき}されたとすれば、もしスカッドミサイルやシルクウァームミサイルがテルアビブ、ハイファ、ロッドなどのユダヤ人の都市^{とし}に雨^{あめ}あられの如^{ごと}く降^ふり注^そぐとすれば、もし化学兵器^{かがくへいき}や生物兵器^{せいぶつへいき}が何^{なん}十^{じゅう}万^{まん}人^{にん}ものイスラエル人^{じん}を殺^{ころ}すとすれば、合衆国^{がっしゅうこく}や英国^{えいこく}は我^{われ}れ関^{かん}せずの態^{たい}度^どをとると信^{しん}じますか？

このような事^{こと}を信^{しん}じるのは愚^ぐの骨頂^{こつちやう}でしょう！

現代^{げんだい}の「イスラエル」にいるユダヤ人の大量殺^{じん}人^{たいりやうきつじん}という妖怪^{ようかい}が出現^{しゅつげん}することになれば、私^{わたし}たちは直^{ただ}ちに駆^かけつけることを、皆^{みな}様^{さま}はご存^{ぞん}知^じです！

ダニエル書^{しよ}11章^{しやう}は、獸^{けもの}の力^{ちから} — 合衆国^{がっしゅうこく}と英国^{えいこく}のことではありません — が、「つむじ風^{かぜ}」のように中東^{ちゆうとう}に素早^{すばや}く舞^まい降^おりて、イスラエルとエジプトを含^{ふく}めレバノンからサウジアラビアにかけてのすべての国々^{くにぐに}を占領^{せんりやう}すると記^{しる}しています！恐^{おそ}らく、これは、大戦争^{だいせんそう}が全世界^{ぜんせかい}を巻^まき込^こむのを防^{ふせ}ぐと同時^{どうじ}に、生存^{せいぞん}しているユダヤ人^{じん}たちを保護^{ほご}するための行^{こう}動^{どう}でしょう！

しかし、それも無駄^{むだ}になるでしょう！注^{ちゆう}目^{もく}して下^{くだ}さい。「北^{きた}の東^{ひがし}からの便^{たよ}り」がロシア^{ちゆうごく}と中国^{ちゆうぐわく}による大規模^{だいきぼ}な介^{かい}入^{にゅう}の知^しらせをもたらしめま^す！（ダニエル書^{しよ}11:40-44）。それは、天^{てん}のしるし、主^{しゅ}の目^ひをもたらし「ハルマゲドンの大決戦^{だいかっせん}」と呼ば^よばれる最後^{さいご}の大^{おお}きな戦^{たたか}いです！

思^{おも}い起^{おこ}して下^{くだ}さい。キリストが再臨^{さいりん}される時^{とき}、エルサレムに腰^{こし}をすえている獸^{けもの}の勢^{せい}力^{りよく}は、反^{はん}キリスト^{きりす}トである大^{おお}いなる「偽^{いつわ}りの預^よ言^{げん}者^{しや}」と共^{とも}に、キリストと戦^{たたか}うことを企^{くわだ}てるでしょう！

これはまさに、ダニエル書2章44節とその前の数節と同じことです。ここでは、神は、流星のように天から降りてくるのが見える象徴的な石(キリスト)が巨大な像の10本の足の指を打ち砕くと語っておられます。この像は、古代バビロニアから現代の私たちの時代までの世界を支配する異邦人の王国すべてを象徴しています。10本の足の指は、黙示録17章の10人の王たち(国々)を象徴しています。

中央政府と合流したこの大なる偽りの教会の身元については、イザヤ書47章でも明らかにされています。注目しましょう。

「カルディア人の娘よ、黙って座り、闇の中に入りなさい。あなたはもう諸王国の女王と呼ばれることがないからだ。

「わたしは、わたしが継承してきたわたしの民に怒り、彼らを汚し、彼らをあなたの手に渡したが、あなたは彼らを憐れまず、老人にも過酷な苦役を強いた。

「あなたは、私に永遠に女王だと言って、何事も心に留めず、これらの行いの結果について考へなかった。

「だから今、このことを聞きなさい。快樂にふけり、無事に暮らしている女性よ。わたしは存在する、私以外に誰もいない、わたしはやもめになることはなく、子供たちを失うこともない、心の中で言う者よ。

「しかし、これらの二つのことが一日のうちに瞬く間にあなたに起こる。子供たちを失い、やもめになることがあなたに起こる。いくら呪文を唱え、いくらまじないをしても、無駄だ。

「あなたは、自分の邪悪さに身をゆだね、『見ている者はいない』と言っていた。あなたの知恵と知識、それがあなたを誤らせた。だから、『わたしは存在する。私以外に誰もいない』と、あなたは心の中で言う。

「それ故に、災いがあなたを襲う。それを払いのけるまじないを、あなたは知らない。災いがあなたを襲うが、あなたはそれを避けることはできない。破滅は、あなたの知らないうちに、突然あなたを襲う」(イザヤ書47:5-11)。

わたし しょこくみん ばつ ための かこくれんごう しはい はん しょ によげんしゃ
私たちが諸国民を罰するための10カ国連合を支配しているのは、反キリストの偽りの預言者
に指導されている大いなる偽りの教会であることに注意して下さい！

そして、10カ国の1つの主要国とは、どこの国でしょうか？イザヤ書10章を読みましょう！
現代のアッシリア人の性質について語っている事に注目して下さい。

「その日になると、イスラエルの残りの者[十分の一ほどが生き残っているに過ぎません
(イザヤ書6:13)]およびヤコブの家[エフライム族とマナセ族]の逃れた者は、再び自分たちを
滅ぼした者に仕えることはなく、イスラエルの聖なる方、主に真実をもって仕えることにな
る！」(イザヤ書10:20)。これは、キリストが再臨される時に彼らが救われることを語って
います！

つづいて ちゅうもく くだ
続いて注目して下さい：「その日になると、あなたの肩からアッシリアの重荷が、あなたの首
からアッシリアのくびきを取り去られる。くびきは、聖油により砕かれる！」(イザヤ書10:27)。

ちゅうい くだ
注意して下さい。くびきは、隷属や捕囚を象徴するもので、ユニバーサル教会およびアッ

シリアの両方によって私たちが諸国民の上に置かれているもので、このくびきは、キリストが
さいりん とき わたし しょこくみん しゅ つか はじ とき せいゆ せいべつ
再臨される時まで、私たちが諸国民が「主に仕え」始める時まで、「聖油によって聖別される」
時まで、取り去られることはありません！

キリストが再臨された時の私たちが国民の状況に関する次の証拠に注目して下さい：「その日
が来れば、主は再び御手を下して、ご自分の民の残りの者を取り戻される。彼らは、アッシリ
ア、エジプト、上エジプト、エチオピア、エラム、シナル、ハマト、海の島々などに残されて
いた者である。

「主は、諸国の民に向かって旗印を掲げ、地の四方の果てから、イスラエルの追放されていた
者、ユダの散らされていた者を集められる。

「エフライムのねたみも去り、ユダの敵意は絶たれる。エフライムはユダをねたまず、ユダは
エフライムを苦しませることはしない」(イザヤ書11:11-13)。

「主は、エジプトの海の入り江を干上がらせ、御手の大河の上に振って、強風を起こし、それを打って七つの小川とし、足を濡らさずに渡れるようにされる。

「エジプトの地からイスラエルの民が登ってきた日と同じように、アッシリアに残されていたこの民の残りの者にも、広い道が整えられる」（イザヤ書11:15-16）。

「見よ、このような日が来る、と主は言われる。わたしはダビデの系図から正義の若枝を起こす。若枝である王は治め、栄える。王は、この世に律法と正義を執行する。

「彼の治世の下でユダは救われ、イスラエルや安らかに住む。彼は『主、私たちの正義』という名前で呼ばれる。

「それゆえ、見よ、このような日が来る。と主は言われる。人々はもはや、イスラエルの子孫をエジプトから導いて帰らせた主は生きておられる、とは言わず、

「イスラエルの家の子孫を、北の国や、彼らが追いやられていた国々から導いて帰らせた主は生きておられる、と言って、自分たちの土地に住むようになる」（エレミヤ書23:5-8）。

注目して下さい。来るべき北方の国々からの集団移住に比べると、モーゼに導かれた古代の出エジプトすら影が薄くなるでしょう！ここで、エレミヤ書3章17節およびその後の数節における時間設定を見ることにします。

「その時、エルサレムは主の御座と呼ばれ、諸国の民は皆、そこに向かい、主の御名のもとにエルサレムに集まる[ゼカリヤ書14:16-21を参照]。彼らは再び、悪しき妄想を追い求めることはしない。

「その日、ユダの家はイスラエルの家と共に歩む[2つの異なる家、2つの異なる

国民！]。彼らは共に、北方の土地から、わたしがあなた方の祖先に継がせた土地に帰ってく

る[これは、歴史上、決して起こらなかった事です！イスラエルの10部族の大部分は、バビロニア帝国がユダの家を略奪する遥か以前に姿を消していたのです！]。

最後に、次の預言に注目して下さい。

「...その日が来ると、大きな角笛が吹き鳴らされ[I コリント人への手紙15:50-52を参照]、**アッシリアの地**で死に果てようとした者も、エジプトの地に追放されていた者もやって来て、**エルサレムの聖なる山で、主に礼拝する**」(イザヤ書27:13)。

イスラエルとキリスト**再臨**に関する預言に接する度に、イスラエルは**捕囚**、**恐ろしい隷属**、**窮乏**、**苦難**、**飢餓**の**状態**に置かれていることが分かります！**時間設定は、明白で、無視することは不可能です！**

私たちが悔い改めて、神に頼ることをしなければ、パレスチナの地にある現代のイスラエル国家が再び恐ろしい大虐殺を経験することになるだけでなく — アメリカ合衆国および英国も同じようになるのです！

神は命じられています:「**主を探しもとめなさい — 見つけることができ出来る間に。主が近くにおられる間に、神を呼び求めなさい。悪を行う者はその道を捨て、不正を行う者はその思いを捨てなさい。主に帰りなさい。そうすれば、主は祝福して下さい。私たちの神に帰りなさい。神は、大いに許しを与えて下さるでしょう。**

「何故ならば、わたしの思いはあなた方の思いと異なり、わたしの道はあなた方の道とは異なるからです、と主は言われる」(イザヤ書55:6-8)。

イエスキリストは命じられています:「**悔い改めなさい。そして、福音を信じなさい！**」(マルコ書1:15)。**聖霊降臨の日**に、ペテロは叫んでいます:**悔い改めなさい。そして、洗礼を受けなさい。そうすれば、聖霊の賜物を受けるでしょう！**」(使徒行伝2:38を参照)。

神の命令を聞き入れ、イエスキリストの招待を受け入れた人々に対して、神はこう言われています:「**あなた方は私が忍耐するようと言った言葉を守りました。だから、私も、地上に住む**

ひとびと ^{ため} 試すために ^{ぜんせかい} 全世界に ^こ 来ようとしている ^{しれん} 試練 [^{おおきな} 大きな ^{しれん} 試練] の ^{とき} 時に、あなた ^{がた} 方を守り ^{まも} ます」 (黙示録3:10)。

ダビデは ^{さけ} 叫んでいます:「いと ^{たか} 高き ^{てん} 天の ^{しんぴ} 神秘の ^{ばしよ} 場所に ^す 住む方は、^{ぜんのう} 全能の ^{かみ} 神の ^か 加護の下に ^{もと} 宿り ^{やど} 給う。
『^{しゅ} 主よ、わたしの ^{ひなんじよ} 避難所、わたしの ^{とりで} 砦、わたしの ^{かみ} 神。わたしは、^{しゅ} 主を ^{かた} 堅く ^{しん} 信じます』と、^{わたし} 私は ^{しゅ} 主に ^{もう} 申し ^あ 上げます。^{しゅ} 主は、^{かりゆうど} 狩人の ^{わな} 罠から、そして ^{えきびょう} 疫病から、あなたを ^{すく} 救い ^だ 出してくださる。^{しゅ} 主は、^{しゅ} 主の ^{はね} 羽であなたを ^{まも} 守ってください。^{しゅ} 主の ^{つばさ} 翼の下で、あなたは ^{しゅ} 主を ^{しん} 信じる。^{しゅ} 主の ^{しんじつ} 真実は、あなたを ^{まも} 守る ^{たて} 盾になる。あなたは、^{よる} 夜の ^{きょうふ} 恐怖にも、^{ひる} 昼に ^と 飛び ^く 来る ^や 矢にも ^{おび} 怯えることは ^{ない} ない。^{くらやみ} 暗闇の中を ^{ある} 歩くような ^{えきびょう} 疫病にも、^ま 真 ^{おそ} 昼に ^{さいがい} 襲う ^{おび} 災害にも ^{おび} 怯えることは ^{ない} ない。あなたの ^{かたわ} 傍らに ^{いっせん} 一千人、あなたの ^{みぎで} 右手に ^{いちまんにん} 一万人の ^{ひとびと} 人々が ^{たお} 倒れるときすら、あなたは ^{あんぜん} 安全に ^{まも} 守られる。あなたは、^{じぶん} 自分の ^め 目で、^あ 悪 ^{ひとびと} しき ^う 人々が ^{むく} 受ける ^み 報いを見るのみ。^な 何 ^ぜ 故 ^な ならば、あなたの ^{やど} 宿るところとしたからです。あなたには、^{さいなん} 災難も ^{ふり} かかることがなく、あなたの ^す 住むところには ^{えきびょう} 疫病も ^{ちか} 近づかない。^{しゅ} 主は、^{てんし} 天使 ^{たち} たちに ^ほ あなたの ^{めい} 保護を ^{みち} 命じ、あなたの ^{まも} 道の ^{どこ} どこにおいても ^{くた} あなたを ^{まも} 守るように ^{して} 下さる」
(詩篇91:1-11)。

^{みなさま} 皆様は、^{どう} どう ^{しょう} しょう ^か でしょうか？^{みなさま} 皆様は、^{じんせい} 人生で ^{さいだい} 最大の ^{もんだい} 問題 — ^{しょうらい} 将来 ^{なに} 何が ^{おこ} 起こる ^か かどうかという ^{もんだい} 問題 — を ^{かいけつ} 解決 ^さ されますか？^{みなさま} 皆様は、^{かみ} 神の ^{うで} 腕の中、^{かみ} 神の ^{しんせい} 神聖な ^ほ 保護の下で、^{あんぜん} 安全に ^{まも} 守られていますか？
^{まちが} 間違 ^{くた} わないように ^{して} 下さい！^{みなさま} 皆様 ^が が、^こ ここで ^よ 読まれて ^{きた} きたことは ^{しんじつ} 真実 ^{です} です！^{さんこう} 参考文献の ^{ところ} ところで ^{しょうかい} 紹介 ^{して} います ^た 多数 ^{しよもつ} の ^よ 書物 ^を を ^よ お ^{くだ} 読み ^{くだ} 下さい！^{わたし} 私 ^{たち} たちの ^{こつかてき} 国家的な ^{みもと} 身元 ^を を ^{いちてん} 一点 ^{うたが} の ^{うたが} 疑い ^{もなく} もなく ^{しょうめい} 証明 ^{して} いる ^た 多数 ^{しよもつ} の ^よ 書物 ^を を ^よ お ^よ 読み ^よ 読み、^{こころ} 心に ^{めい} 銘 ^い 記 ^き して ^お お ^{くだ} いて ^{くだ} 下さい。わたしたち ^の の ^{みもと} 身元 ^{かん} に関する ^{しんじつ} 真実 ^を を ^{しん} 信じて ^{しん} 信 ^じ じ ^{なく} なく ^{ても} ても、^{おお} 大 ^い なる ^{しれん} 試練 ^{かなら} は ^{おとず} 必ず ^あ 訪 ^れ れ ^ま します！

^{つぎ} 次 ^{せかい} の ^{たいせん} 世界大戦 ^は は、^{かくへいき} 核兵器、^{どくそ} ボツリヌス ^{しんけい} 毒素 ^や や ^{せいぶつ} 神経 ^{へいき} ガス ^な などの ^{せいぶつ} 生物兵器、^{そうぞう} 想像 ^を を ^{ぜつ} 絶 ^{おそ} する ^{おそ} 恐 ^ろ ろ ^{しい} しい ^{へいき} 兵器 ^な などの ^{しよう} 使用 ^い を ^み 意味 ^{する} する ^で でしょう！^{なんぜん} 何 ^{まん} 千万 ^{にん} 人も ^{ひとびと} の ^し 人々が ^{おそ} 死ぬ ^で でしょう！^{おそ} それは、^{おそ} 恐 ^ろ ろ ^{しい} しい ^{せんそう} 戦争 ^が が ^{せかい} 世界 ^を を ^ゆ 揺 ^る る ^が が ^す ず ^か かどうか — ^{じんるい} 人類 ^{ぜんめつ} の ^{きようい} 全滅 ^を を ^{あた} 脅威 ^を を ^{あた} 与 ^え る ^か かどうか — という ^{もんだい} 問題 ^で で ^は は ^あ あり ^ま せ ^な せん。問題 ^な なのは、^い それが ^{いつ} 何時 ^か かどうかということです！

神の真実である預言を理解させて頂きましたことを神に感謝します。主の見張り人としての任務に参加し、罪に悩み、死にかけている世界に証言と警告を伝道するように召命して下さいましたことを神に感謝します。どうか、神が皆様に、ご自身の知識に基づいて行動する確信を与えて下さいますように。

—

End

—

参考文献

ハプスブルク帝国の歴史:1525-1918

アングロサクソン族；民族の遺産(チャート)

図解英国史

イスラエルの身元に関する用語索引および年表

パウロとアリマタヤのヨセフから異邦の民へ

先史時代のロンドン

イギリス諸島

レビ族のウェストミンスター寺院

アイルランド民族 — タラの丘にまつわる物語

『ユダの王権とヨセフの長子相続権』(アレン J.H. 著)

『預言の中の合衆国と英国』(ハーバート・アームストロング W. 著)

『アーサー王の発見』(アシュ G. 著)

『スコットランドの氏族とタータン』(ロバート・ベイン著)

『アーサー王伝説』(リチャード・バーバー著)

『私たちケルトサクソン族の象徴するもの』(W.ベネット著)

『英語の世界』(R.ブレイク著)

『神秘的な英国』(ジャネット=アンド=コーン・ボード夫妻著)

『アングロサクソン^{ぞく}族』(キャンベル^{ちよ}著)
 『アブラハムの^{けいやく}契約』(レイモンド・キャプト^{ちよ}著)
 『ヤコブの^{はしら}柱』(レイモンド・キャプト^{ちよ}著)
 『アッシリアの^{ひぶん}碑文に^{はっけん}発見された^{うしな}失われた^わ環』(レイモンド・キャプト^{ちよ}著)
 『^{わたし}私たちの^{こくじ}国璽(こくじ)－^{わたし}私たちの^{みんぞく}民族の^{しょうちよう}象徴(レイモンド・キャプト^{ちよ}著)
 『ストーンヘンジとドルイド^{きよう}教』(レイモンド・キャプト^{ちよ}著)
 『スコットランド^{どくりつせんげん}独立宣言』(レイモンド・キャプト^{ちよ}著)
 『グラストンベリーの^{でんとう}伝統』(レイモンド・キャプト^{ちよ}著)
 『^{とこしえ}古の^{しんぴ}神秘』(ライオネル・キャソン^{ちよ}著)
 『^{せんしじだい}先史時代のイングランド』(リチャード・キャベンディッシュ^{ちよ}著)
 『ケルト^{ぞく}族』(ノーラ・チャドウィック^{ちよ}著)
 『^{こうちちほう}高地地方の^{しよおう}諸王－^{ぞくそせん}サーサー王のケルト族祖先』(ジョイ・チャント^{ちよ}著)
 『あなたの^{そうぞくざいさん}相続財産』(バートランド・コンパレット^{ちよ}著)
 『^{えいこくおうしつ}英国王室の^{ものがたり}物語』(ダン・クーリカン^{ちよ}著)
 『^{こだいぶんめいひやつかじてん}古代文明百科事典』(アーサー・コトラル^{ちよ}著)
 『ストーンヘンジの^{みかた}見方』(ドナルド・シア^{ちよ}著)
 『ロイヤル・スコットランド』(デブレッツ^{ちよ}著)
 『^{こだい}古代ブリタニア^{さいほう}再訪』(アレックス・デルマール^{ちよ}著)
 『^{ひとり}一人の^{おとこ}男の^{うんめい}運命』(C.R.ディッキー)
 『ケルト^{ぞく}族－ドルイド^{きよう}教－クルデ』(イザベル・エルダー^{ちよ}著)
 『アーサー^{おうこく}王国』(N.フェアベアンズ^{ちよ}著)
 『アメリカ^{がっしゅうこく}合衆国の^{もんしやう}紋章』(I.M.ファーガソン^{ちよ}著)
 『^{しよこく}諸国に^{はた}旗を^{かか}掲げて』(I.M.ファーガソン^{ちよ}著)
 『^{せかい}世界で^{もつと}最も^{いだい}偉大な^{おうざ}王座』(J.フォックス^{ちよ}著)
 『ストーンヘンジ^{しやうさい}詳細』(B.ゴーント^{ちよ}著)
 『^{ぞく}ダン族－イスラエルの^{せんくしや}先駆者』(コル J. ゴーラー^{ちよ}著)
 『アーサー^{おう}王』(ノーマン・グドリチ^{ちよ}著)

- 『ヤーウェの諸部族』(N.K.ゴットウォルド著)
- 『ヨーロッパの諸王国』(ジーン・ガーニー著)
- 『私たちは白人の祖先を訪ねて』(F.ハーバマン著)
- 『民間伝承に見られる失われたイスラエルの物語』(ハガート著)
- 『イスラエルとその息子たち』(リチャード・ハンソン著)
- 『歴史の中のイスラエル』(レオ・ハリス著)
- 『様々な時代を経て — 紀元前2000年から現代に至るまで』(アルフ・ヘリドソン著)
- 『失われた10部族とは誰なのでしょう — 彼らは何処にいるのでしょうか』(ヘズリップ著)
- 『失われたイスラエルの10部族の身元』(H.ハインズ著)
- 『アメリカにおける古代スカンジナビア人の発見と探検』(H.R.ホランド著)
- 『北アイルランドの分裂』(K.ジェフリー著)
- 『ローマン・ブリテンの末期』(スティーブン・ジョンソン著)
- 『バイキングの歴史』(グウェン・ジョーンズ著)
- 『失われた使徒たちのドラマ — イギリス諸島における初期のイスラエルの人々』(ジョージ F.ジョウエット著)
- 『不思議な類似 — セブルン族とイスラエル・オランダ族』(ヘレン・コプジャン著)
- 『シュメール人』(S.N.クレイマー)
- 『アングロサクソン族のイングランド』(ロイド・レイン著)
- 『ケルト族の英国』(ロイド・レイン著)
- 『英国の起源』(ロイド・レイン著)
- 『緋色の糸の系譜 — グラストンベリーにおけるアリマタヤの聖ヨセフ(監督:ルイス)』(C.F.ローラー著)
- 『グラストンベリー — 星の神殿 — への案内』(K.E.モルトウッド著)
- 『大ブリテン島の魅力 — アーサー王の星の円卓』(K.E.モルトウッド著)
- 『英国王室 — 不朽の王朝』(W.ミルナー)
- 『英国における聖パウロ』(R.W.モーガン著)
- 『暗黒時代の野蛮人、戦士、戦争』(ティム・ニューアーク著)

『驚くべき北^{ほく}欧^{おう}人^{じん}種^{しゆ}の起^き源^{げん}』 (G.オルソン^{ちよ}著)

『ドルイド』 (スチュアート・ピゴット^{ちよ}著)

『ケルト^{ぞく}族』 (T.G.E.パウエル^{ちよ}著)

『契約^{けいやく}の民^{たみ}』 (ハワード・ランド^{ちよ}著)

『スコットランド、考^{こう}古^こ学^{がく}、初^{しよ}期^きの歴^れ史^{きし}』 (G.リッチー^{ちよ}著)

『失^{うしな}われた発^{はつ}見^{けん}物^{ぶつ}』 (C.ローマン^{ちよ}著)

『ケルト^{ぞく}族^{ぞく}の英^{えい}国^{こく}』 (アン・ローズ^{はかせ}博^せ士^{ちよ}著)

『英^{えい}国^{こく}の遺^い産^{さん}』 (R.ラウス^{ちよ}著)

『アングロサクソン^{ものがたり}物^{もの}語^ご』 (アン・サベッジ^{ちよ}著)

『アーサーのチェスターの遺^い産^{さん}』 (ストーカー^{ちよ}著)

『アーサー王^{おう}の系^{けい}図^ず』 (サー・イアン・スチュアート^{ちよ}著)

『忘れ^{わす}られた私^{わたし}たちの遺^い産^{さん}』 (グラディーズ・テイラー^{ちよ}著)

『星^{せい}条^{じょう}旗^き物^{もの}語^ご』 (A.L.トトン^{ちよ}著)

『エジプト文^{ぶん}明^{めい} — そのシュメール^{きげん}起^{しん}源^{げん}と真^{ねん}の年^だ代^き記^き』 (L.A.ワデル^{ちよ}著)

『ブリトン人、スコットランド人、アングロサクソン人のフェニキア起^{しん}源^{げん}』 (L. Aワデル^{ちよ}著)

『解^{かい}読^{どく}されたインド - シュメール^{もんしやう}の紋^{もん}章^{しやう}』 (L.A.ワデル^{ちよ}著)

『民族と歴史による文明創造者』 (L.A.ワデル^{ちよ}著)

『福^{ふく}音^{いん}は如何^{いか}にして大^{たい}ブリテン島^{とう}にもたらされたか』 (ウィリアムズ^{ちよ}著)

『英^{えい}国^{こく}の王^{おう}権^{けん}』 (ブライアン・ウィリアムズ^{ちよ}著)

『北^{ほく}方^{ぽう}の世^せ界^{かい}』 (ウィルソン^{ちよ}著)

『ヴァイキングとその起^き源^{げん}』 (デイビッド・ウィルソン^{ちよ}著)

『世界の歴^れ史^{きし} — 過^こ去^だ 500 年^{ねん}について』 (ライト^{ちよ}著)

『古^こ代^{だい}の石^{いし}は語^{かた}る』 (デイビッド D.ジンク^{ちよ}著)

The Garner Ted Armstrong Evangelistic Association

P.O.Box 747

Flint, TX 75762

Phone: (903)561-7070 • Fax:(903)561-4141

参^{さん}考^{こう}文^{ぶん}献^{けん}は、以^い下^かのウエブサイ^{むりやう}ト^{にゆうしゆ}から無^む料^{りやう}で入^{にゅう}手^{しゆ}で可^かい^います。

www.garnertedarmstrong.ws

「ガーナー・テッド・アームストロング福音伝道協会」の活動は、イエスキリストの福音を伝道
することに献身するクリスチャンや協力者の方々から自発的に頂く十一献金、寄付、一般の
献金で賄われています。